

博士論文

構文文法に基づく中国語結果構文の分析

崔 盼盼

2018 年

目次

第1章 序論.....	1
1.1 研究背景.....	1
1.1.1 英語・日本語・中国語における結果構文の形式.....	1
1.1.2 英語・日本語・中国語における結果構文の許容範囲.....	5
1.2 本研究の目的と意義.....	6
1.3 本論文の構成.....	7
第2章 本研究の理論的枠組.....	9
2.1 はじめに.....	9
2.2 構文文法理論.....	9
2.2.1 構文の定義と理論的アプローチ.....	9
2.2.2 構文の意味表示.....	11
2.2.3 構文拡張と構文の家族.....	14
2.3 語彙概念構造と事象構造テンプレート.....	16
第3章 中国語における結果構文の分類.....	18
3.1 はじめに.....	18
3.2 結果構文の分類に関する先行研究.....	18
3.2.1 太田（1958）と望月（1990）：「動詞語幹指向型」の検討.....	18
3.2.2 Cheng&Huang（1994）：「能格型」と「非能格型」の検討.....	21
3.2.3 石村（2011）：「受動型」の検討.....	24
3.3 結果構文の使役義獲得の仕組み.....	27
3.4 本研究における結果構文の分類.....	32
3.5 本章のまとめ.....	33
第4章 ＜目的語指向型＞結果構文.....	34
4.1 はじめに.....	34
4.2 プロトタイプの結果構文：典型的な＜目的語指向型＞.....	34
4.2.1 弱い結果構文と強い結果構文.....	36
4.2.2 使役構文における＜基礎行為＞と＜使役行為＞.....	38

4.2.3	使役構文における＜使役行為者＞の拡張	40
4.2.4	原因事象と結果事象の意図性	41
4.2.5	因果関係の意味要素	44
4.2.6	プロトタイプの結果構文の意味特徴	47
4.2.7	プロトタイプの結果構文における項構造の融合と構文表示	48
4.3	特殊なく目的語指向型＞Ⅰ：無生物主語タイプ	51
4.3.1	無生物主語タイプの意味特徴	51
4.3.2	無生物主語タイプにおける項構造の融合と構文表示	53
4.4	特殊なく目的語指向型＞Ⅱ：強い結果構文	54
4.4.1	意図しない結果を表すタイプ	54
4.4.2	目的とは逆の結果を表すタイプ	57
4.5	特殊なく目的語指向型＞Ⅲ：“洗湿”タイプ	59
4.5.1	“洗湿”タイプの意味特徴	60
4.5.2	“洗湿”タイプにおける項構造の融合と構文拡張	63
4.6	特殊なく目的語指向型＞Ⅳ：“哭走”タイプ	65
4.6.1	“哭走”タイプの意味特徴	65
4.6.2	“哭走”タイプの項構造の融合と構文拡張	67
4.7	＜目的語指向型＞における構文拡張	68
4.8	本章のまとめ	69
第5章	＜主語指向型＞結果構文	70
5.1	はじめに	70
5.2	二種類の＜主語指向型＞	71
5.3	非対格タイプ：“病倒”型	76
5.3.1	非対格タイプの意味特徴	77
5.3.2	非対格タイプの使役性	79
5.3.3	非対格タイプにおける使役主（Causer）	86
5.3.4	非対格タイプの項構造と構文意味	93
5.4	非能格・他動詞タイプ：“跑累”型	95
5.4.1	非能格・他動詞タイプの意味構造	96
5.4.2	非能格・他動詞タイプの項構造と構文拡張	101

5.4.3	非能格・他動詞タイプに現れる目的語の可能性	102
5.4.3.1	他動詞タイプにおける目的語の種類と生起条件	103
5.4.3.2	他動詞タイプにおける結果補語の種類と目的語との共起関係	110
5.4.4	真性の目的語を伴う他動詞タイプ：“读懂书”型	117
5.4.5	短い目的語を伴う他動詞タイプ：“吃饱饭”型	121
5.4.6	長い目的語を伴う他動詞タイプ	126
5.4.7	焦点からみた虚目的語出現の原因	132
5.5	本章のまとめ	136
第6章	＜原因型＞結果構文	137
6.1	はじめに	137
6.2	二種類の＜原因型＞	137
6.3	＜単純原因型＞に対する考察	140
6.3.1	＜単純原因型＞の意味特徴	142
6.3.2	＜単純原因型＞の項構造と構文意味	145
6.3.3	＜単純原因型＞の拡張メカニズム	148
6.4	＜倒置原因型＞に対する考察	149
6.4.1	＜倒置原因型＞の意味特徴	150
6.4.2	＜倒置原因型＞の項構造と構文意味	160
6.4.3	非能格・他動詞タイプから＜倒置原因型＞への拡張プロセス	163
6.4.4	目的語以外の原因項を持つ非能格＜原因型＞の拡張過程	166
6.5	本章のまとめ	169
第7章	二種類の動詞コピー構文	171
7.1	はじめに	171
7.2	結果を表す動詞コピー構文	171
7.2.1	結果を表す動詞コピー構文の意味特徴	172
7.2.2	結果を表す動詞コピー構文の項構造と拡張過程	174
7.2.3	動詞コピー構文における動詞不一致の可能性	176
7.2.4	結果構文が動詞コピー構文に拡張する条件	181
7.3	過分義を表す動詞コピー構文	184
7.3.1	過分義動補構造文の特徴	185

7.3.2 過分義動補構造文の構文意味および形成過程	190
7.3.2.1 形容詞比較文[S-A]	191
7.3.2.2 過分義形容詞文[S-A 了]	192
7.3.2.3 過分義動補構造文[VA 了]	195
7.3.3 過分義の動詞コピー構文の特徴及び拡張過程	197
7.4 本章のまとめ	200
第8章 結論.....	202
8.1 各章の概要.....	202
8.2 結果構文をめぐる構文ネットワーク	210
8.3 今後の課題.....	213
参考文献.....	215
謝辞.....	222

略号一覧

- ・ ? 許容度がやや低い文
- ・ ?? 許容度が極めて低い文
- ・ * 非文法的な文
- ・ 中国語の用例に付したグロスに、下記の略号を使用する。
 - ASP ASPECT (アスペクト)
 - PERF PERFECTIVE ASPECT (完了相)
 - CL Classifier (数量類別詞)
 - MOD Modifier (語気助詞)

本研究の第5章と第7章の一部は、以下の論文に基づいて加筆・修正を施したものである。

- 第5章 2016年5月 「中国語の主語指向型動補構造に関する一考察」
『国際文化研究』第22号. pp87-100. 東北大学国際文化学会.
- 第7章 2017年5月 「中国語結果構文と動詞コピー構文に関する構文文法的考察」
『日中言語対照研究論集』第19号. pp154-169. 白帝社.

第 1 章 序論

1.1 研究背景

本研究は、中国語における結果構文の特質を解明することを目的としている。本章では英語や日本語と比較することによって、中国語の結果構文の形式および特徴を概観したあと、1.2 節で本研究の目的と意義について、1.3 節で論文の構成について述べる。

1.1.1 英語・日本語・中国語における結果構文の形式

「結果構文」とは、小野（2007：3）の定義に従えば、単一の節内で原因と結果を表す文である。主語、動詞、目的語、結果述語（Resultative Predicate, RP）という 4 つの基本要素からなり、(1) のような基本形式を持つ。動詞は他動詞でも自動詞でもよい。典型的な例文として (2) (3) を挙げる。

(1) S V NP RP (小野 2007 : 3)

(2) Transitive resultatives (他動詞結果構文)

- a. The gardener watered the tulips flat.
- b. The grocer ground the coffee beans (in)to a fine powder.
- c. They painted their house a hideous shade of green.

(3) Intransitive resultatives (自動詞結果構文)

- a. The joggers ran their Nikes threadbare.
- b. The kids laughed themselves into a frenzy.
- c. He sneezed his handkerchief completely soggy

(Carrier&Randall 1992)

日本語にも (4) のように英語の結果構文に相当するものがある（影山 1996, Washio 1997, 小野 2007）。日英の語順の違いにより、日本語結果構文の基本形式は「S-NP-RP-V」となる。

- (4) a. 三人の庭師が白いバラを赤く塗っていた。
- b. 木陰でも身体がカラカラに乾いた。

(影山 1996 : 209)

しかし、(5) に示すように、英語と同じ意味を結果構文では表現できない場合も少ない。また、影山（1996：207-210）、小野（2009：8）などに指摘されるとおり、日本語には英語に対応する結果構文のほか、(6) のような結果を表す複合動詞を用いる表現も多く、これも日本語における結果構文の形態の一つとして認定される。

- (5) a. He pounded the metal flat.
 a' *金属を平らにたたいた。(平らにたたき延ばした)
 b. I felt knocked breathless.
 b' *フラフラにぶたれた。(フラフラにぶちのめされた)

(影山 1996：209)

- (6) a. ドアを押し開けた。
 b. ボクは彼を蹴り殺してやりたいくらいだ。

(影山 1996：208)

英語の結果構文における一つの重要な特徴として、Simpson（1983）で結果述語が叙述できる対象は直接目的語に限られるという制約が発見され、Levin & Rappaport（1995）で「直接目的語の制約（Direct Object Restriction）」と名付けられた。同じ制限は日本語結果構文にもみられる。例えば、他動詞文（7）において、下線部の結果述語は目的語の状態変化を表すことが可能であるが、(8) のように主語を修飾することはできない。

- (7) a. Mary painted her room white.
 b. メアリは部屋を 白く 塗った。
 (8) a. *Mary painted her room exhausted.
 b. *メアリは部屋の壁を へとへとに 塗った。

(影山 1996：27-28)

この制限は自動詞を用いる結果構文にも適用される。目的語をとらない (9) の文において、結果述語は動作主である主語を修飾することができない。(10) の文は一見反例となるのであるが、「非対格性の仮説（The unaccusativity hypothesis）」（Perlmutter 1978, Van Valin 1990, Levin & Rappaport 1995 など）によれば、(9) の *cry* 「泣く」は外項のみをとる非能格自動詞であるのに対し、(10) の *freeze* 「凍る」は内項のみをとる非対格自動詞である。そのため、主語の *the lake* 「湖」は深層構造上の目的語と考えられ、「直接目的語の制約」の反例にはならない。このことから、影山（1996：28）は直接目的語の制約を「結果述語は内項しか指さない」と修正している。

- (9) a. *The baby cried to sleep.
 b. *赤ん坊はクタクタに泣いた。
- (10) a. The lake froze solid.
 b. 湖がカチカチに凍った。

また、結果構文に直接目的語の制限があるのと同様に、日本語の結果複合動詞においても「他動性調和の原則」（影山 1993）や「主語（卓立項）一致の原則」（松本 1998）、「非対格優先の原則」（由本 2005 : 144）などが提案されている。これらの原則は、2 つの動詞を組み合わせて複合動詞を成すときの条件と制限を規定しており、複合動詞は外項をとる動詞（他動詞と非能格動詞）同士か、外項をとらない動詞（非対格動詞）同士によって作られる（影山 1993）ことを要求している。

中国語における結果構文は、日本語と似た複合動詞の一種である動補構造（前項動詞＋結果補語，[V-RP] で表す）が使われ、次に見られるように「S-[V-RP]-O」となることが多い（楊 2008）。結果補語 RP は非対格自動詞あるいは形容詞であるのが一般的である。前項動詞 V には特に自他性の制限がないものの、石村（2011 : 1）などに指摘されているように、典型的な結果構文は（11）のような「他動詞＋自動詞/形容詞」の組み合わせで何等かの働きかけが受け手の状態変化を引き起こすことを表現するタイプである。

- (11) 张三 砍-倒 了 树。
 zhāng sān kǎn-dǎo le shù
 張三 切る-倒れる PERF 木
 「張三は木を切り倒した。」

英語や日本語とは違い、中国語結果構文には制限が少なく、(12) に示すように、上述した「直接目的語の制約」は中国語に適用されず、「非能格自動詞＋非対格自動詞／形容詞」という組み合わせが可能であることから、「他動詞調和の原則」などに従う必要がないことは明らかである。

- (12) a. 张三 跑-累 了。
 zhāng sān pǎo-lèi le
 張三 走る-疲れる PERF
 「張さんは走り疲れた。」
 b. *張さんはクタクタに走った。
 c. John ran *(himself) tired.

（邱 2017 : 17）

また、中国結果構文は英語や日本語に比べて表される意味や構文形式が豊富である。

(11) のような典型的なタイプと (12) のような主語の状態変化に指向する文以外にも、少しずつ形式が異なる結果構文が多く存在する。例えば、文全体の目的語が前項動詞の項ではない文 (13a) や、意味上の主語と目的語が位置を交換しているように見える文 (13b)、さらに同じ動詞を 2 回繰り返す文 (14) まで、ほかの言語には見あたらない非常に特殊な結果構文が存在する。また、結果構文によく似た形式を持つが、意味の全く異なる文もある (15)。これらの構文形式はどのように扱うべきか、特殊な構文を結果構文の中でどのように位置付けるかが本論文の重要な課題である。例文 (13a) は第 4 章、(12a) は第 5 章、(13b) は第 6 章、(14,15) は第 7 章でそれぞれ考察する。

- (13) a. 他 哭-湿 了 手帕。
tā kū-shī le shǒupà
彼 泣く-濡れる PERF ハンカチ
「彼はハンカチを泣き濡らした。」 (Cheng & Huang 1994)
- b. 青草 吃-肥 了 羊儿。
qīngcǎo chī-féi le yáng-er
青草 食べる-肥える PERF 羊
「青草を食べた羊が肥えた。」 (沈 1999 : 215)
- (14) a. 小王 洗 衣服 洗-湿 了 袖子。
xiǎo wáng xǐ yī fu xǐ-shī le xiù zi
王さん 洗う 服 洗う-濡れる PERF 袖
「王さんは服を洗って袖を濡らしてしまった。」
- b. 老师 讲 故事 讲-哭 了。
lǎo shī jiǎng gù shi jiǎng-kū le
先生 語る 物語 語る-泣く PERF
「先生は物語を語って泣いてしまった。」 (王 2001, 訳文は筆者)
- (15) a. 这 房子 盖-小 了。
zhè fáng zi gài-xiǎo le
この 家 建てる-小さい PERF
「この家が小さすぎるサイズに建てられた。」 (彭 2011 : 51, 訳文は筆者)
- b. 他 挖 坑 挖-浅 了。
tā wā kēng wā-qiǎn le
彼 掘る 穴 掘る-浅い PERF
直訳「彼が穴を浅すぎる深さに掘った。」
意訳「彼が穴を掘ったが、浅すぎだった。」 (彭 2011 : 85, 訳文は筆者)

1.1.2 英語・日本語・中国語における結果構文の許容範囲

以上、英語・日本語・中国語における結果構文の概略を見た。影山（1996, 2001）と Washio（1997）は英語と日本語を比較し、結果構文を動詞の意味によって 2 種類に分けている。一つは、主動詞そのものに含意される変化状態を結果述語で具体的に表すタイプ（影山 2001:165）であり、影山（2001）は「本来的結果構文（inherent resultatives）」、Washio（1997）は「弱い結果構文（weak resultative）」と呼ぶ。もう一つは、動詞は変化結果を含意せず、行為のみを表し、後ろに何らかの変化結果を継ぎ足すタイプである（影山 2001:174）。影山（2001）はこれを「派生的結果構文（derived resultatives）」、Washio（1997）は「強い結果構文（strong resultative）」と呼ぶ。

Washio（1997）によれば、(16, 17) に示されるように、弱い結果構文は英語にも日本語にも存在するが、強い結果構文は英語では可能でも日本語では成立しない。ただし、(17a') のように、S-O-RP-V 型で言えない文も、結果複合動詞を用いれば言えるようになることがある。

(16) 本来の/弱い結果構文

- a. The child broke the vase into pieces.
- a'. 子供が花瓶をこなごなに割った。
- b. They painted their house yellow.
- b'. 彼らは家を黄色に塗った。

(小野 2007: 11)

(17) 派生的/強い結果構文

- a. He pounded the metal flat.
- a' *彼は金属を平らにたたいた。(平らにたたき延ばした)
- b. He worked himself to death.
- b' *彼は(自分を)ヘトヘトに働いた(過労死した)。(影山 2001: 164)

一方、(18, 19) から分かるように、中国語では英語と同じように弱い結果構文と強い結果構文のどちらも可能である。

- (18) a. He wiped the table clean.
- b. 彼はテーブルをきれいに拭いた。
- c. 他 擦干净 了 桌子。
tā cā-gānjìng le zhuōzi
彼 拭く-きれい PERF テーブル

- (19) a. The gardener watered the tulips flat. (Carrier&Randall1992)
 b. *庭師は、チューリップをぺしゃんこに水をかけた。 (高見 1997 : 28)
 c. 花匠 浇-扁 了 郁金香。
 huā jiàng jiāo-biǎn le yù jīn xiāng
 庭師 水をかける-ぺしゃんこ PERF チューリップ

さらに、(20) (21) のように、英語と日本語において結果構文として成立しない文も中国語では問題なく言える例が多いため、中国語の結果構文の許容範囲はすでに「強い結果構文」の範囲を超えて、この3つの言語の中で最も広く、かつ生産性がかなり高いことが明らかである。

- (20) a. *He wiped the table dirty.
 b. *彼はテーブルをきたなく拭いた。 (斉木 2004)
 c. 他 擦-脏 了 桌子。
 tā cā-zāng le zhuōzi
 彼 拭く-汚い PERF テーブル
- (21) a. *The grass ate the sheep fat.
 b. *青草は羊を太く食べた。
 c. 青草 吃-肥 了 羊儿。 (= (13b))
 qīngcǎo chī-féi le yáng-er
 青草 食べる-肥える PERF 羊
 「青草を食べた羊が肥えた。」

1.2 本研究の目的と意義

上述したように、中国語結果構文は構文形式が豊富なうえに特殊な事例が多く、従来から多くの議論が展開されている。統語的アプローチを採用する研究 (Sybesma 1999, Huang 2006, 邱 2017 など) や、意味構造に着目する分析 (Li 1990, 1995, Cheng & Huang 1994, 申 2009, 石村 2011 など)、さらに構文文法による分析 (Goldberg 1995, 2006, Goldberg & Jackendoff 2004, Boas 2003, 杨 2013 など) など、数多くの研究が幅広く行われている。しかし、中国語結果構文のいくつかの特殊な形式を個別的に取り上げて論じる研究は多いが、各種類を関連付ける視点から体系的に考察する研究は少なく、異なるタイプのつながりも十分に明らかにされていない。

Goldberg (1995) の構文文法の観点からみると、構文の意味というのは、動詞の具える具体的な意味と、ある一定の統語形式が持つ抽象的な意味との統合である。そして、構

文は「継承関係」によってネットワークを形成し、構文間にみられる一般性を捉えることができるとともに、準規則性や例外も認めることができる (Goldberg 1995 : 67)。そのため、各種の結果構文を、結果構文という家族 (family) の中の一員として分析し、ほかのタイプとのつながりを明らかにするとともに、特殊な構文タイプの性質および形成理由を正確にとらえることができる。

従って、本論文は構文文法の枠組で、英語の結果構文と対照させながら、中国語の動補構造を用いる結果構文およびそれに関連する動詞コピー構文を使役構文という視点から体系的に考察する。中国語結果構文を適切に分類したうえで、各タイプにおける個別の意味構造および形成過程を順に解明し、構文ネットワークを構築するとともに、最も典型的なプロトタイプの結果構文から最も特殊なく倒置原因型>を経て、さらに結果構文の延長線上に捉えられる動詞コピー構文までの構文拡張関係を明らかにすることを目的とする。

本論文の意義と新規性については、以下の4点が挙げられる。

1. 中国語結果構文の各分類および延長線上にある動詞コピー構文の意味・統語特徴および形成・拡張の理由を全面的に解析する。
2. <主語指向型>と<原因型>をそれぞれ二分することにより、2つの異なる拡張過程を明らかにする。
3. 結果構文に類似した形式を持つ過分義動補構造文の性質を形容詞文と分析し、過分義動補構造文と過分義動詞コピー構文の形成および拡張過程を解明する。
4. 継承関係による中国語結果構文の拡張関係を明確にする。

1.3 本論文の構成

本論文は、本章を含めて8章から構成される。

第1章では、英・日・中の結果構文に関する研究を概観し、本研究の目的・意義について説明した。

第2章では、本研究の理論的枠組を紹介する。本研究で用いる主たる理論である構文文法理論の概略を説明し、中国語の結果構文に適用する理由などについて説明する。

第3章では、中国語結果構文に関するいくつかの重要な先行研究を批判的に検討したうえで、構文文法の観点から結果構文の本質が使役構文であることを改めて検証し、結果構文の使役義の由来を明らかにする。それを踏まえ、中国語の結果構文を構文形式と意味構造から大まかに<目的語指向型><主語指向型><原因型>という三種類に分ける。

第4章では、<目的語指向型>について考察する。まずはプロトタイプの使役構文の意味スキーマからプロトタイプの結果構文を改めて定義し、その意味構造と構文構造を分析する。次に意味特徴および項役割と使役役割の対応関係を基準として4つの下位構文を提案して分析する。

第5章では、＜主語指向型＞について考察する。＜主語指向型＞を「非対格タイプ」と「非能格・他動詞タイプ」に分け、それぞれの意味構造・使役義の由来および形成過程を分析する。非対格タイプは使役行為者が暗黙の原因（implicit cause）として前項動詞の意味フレームに存在することにより、使役義を獲得し、概念構造に使役関係（CAUSE）を2つ持つ構造であることを示す。使役主の原因（Cause）を明示することにより、使役化のプロセスを経て次の段階の＜単純原因型＞結果構文へと拡張する。非能格・他動詞タイプについては、真性の目的語と長短二種類の虚目的語を伴う場合の意味構造および容認度を考察し、虚目的語は結果述語と叙述関係を持たないが、主題と焦点（Topic-Focus）の情報構造と関わるため出現可能となることを明らかにする。

第6章では、＜原因型＞を＜単純原因型＞と＜倒置原因型＞という2種類に分類し、それぞれ非対格タイプと非能格・他動詞タイプの＜主語指向型＞から拡張されたことを示す。特に形式的に最も特殊な＜倒置原因型＞について、因果事象の緊密性と原因項の制限を考察し、緩い因果関係で結ばれる動補構造の場合に逆に文の容認度が上がることを示し、その理由を情報構造から説明する。

第7章では、基本的な結果構文の延長線上にあるが、さらに特殊な構文形式である「動詞コピー構文」と、結果構文に類似した形式を持つ「過分義動補構文」およびそこから拡張される「過分義動詞コピー構文」を考察し、それぞれの形成過程を分析する。前者は実現していない前項動詞の項を改めて表出するために拡張される構文であり、後者は結果構文とは違って因果関係ではなく単純に静的状態を表す構文であることを説明する。

第8章では、第7章までの論考を総括し、中国語における様々な形式を持つ結果構文はすべてプロトタイプの結果構文から拡張されたことを明示した上で、継承関係によりすべての構文形式を結びつけ、一つの構文ネットワークで表現する。最後に、今後の展望と残された課題についても述べる。

第2章 本研究の理論的枠組

2.1 はじめに

本章では、次章以降で行う分析の理論的枠組を紹介する。本論文は、基本的に語彙概念構造を組み込んだ構文文法理論に基づいて分析を進める。5.2節では、Goldberg (1995, 2006)、Goldberg & Jackendoff (2004) の構文文法理論を概観した上で発展させ、中国語結果構文に適用する構文ボックスの表示法を定める。5.3節では、影山 (1996) と Rappaport Hovav & Levin (1998) の語彙概念構造および事象構造テンプレートを簡単に紹介し、本論文の考察とのつながりを説明する。

2.2 構文文法理論

2.2.1 構文の定義と理論的アプローチ

Lakoff (1987)、Fillmore, Kay & O'Connor (1988)、Goldberg (1995, 2003, 2006)、Croft (2001)、Boas (2003) などが提唱する構文文法 (the Construction Grammar) の基本的な考え方によれば、構文という形式と意味との対応物 (form and meaning pairings) が言語における基本単位であり、それ自体が意味を持つ。構文文法理論は、Fillmore, Kay & O'Connor (1988) が英語における *let alone* を分析したように、そもそもはイディオム現象を解釈するために提唱されたものである (Croft 2001 : 15)。その後、一般的な語彙や統語規則にまで適用範囲が広がり、すべての統語的カテゴリーに対応するようになっている。さらに、Goldberg (2006 : 5) は構文という概念を、形式と意味もしくは談話機能のペアであると改めて定義し、形態素から文型まで、形式を持つ言語単位はすべて構文と呼ぶ。

All levels of grammatical analysis involve constructions: learned pairings of form with semantic or discourse function, including morphemes or words, idioms, partially lexically filled and fully general phrasal patterns.

(Goldberg 2006 : 5)

構文文法理論に関して様々な研究が行われているが、観点と主張はそれぞれ異なる。ここでは、いくつかの代表的な理論的アプローチを簡単に見た上で、Goldberg の構文文法を理論枠組として採用する理由を述べる。

まずは、Croft（2001）が提唱するラディカル構文文法（Radical Construction Grammar、以下RCGと略す）について略述する。RCGは、類型論的観点から統語構造を分析し、一つの言語における統語事実の多様性、および異なる言語間の統語的多様性を捉えることを目的とする（Croft 2001：3）。構文文法のほかのアプローチに比べ、RCGを特徴づける提案は主に以下の3点である。

第一に、特に複雑な統語的ユニットからなる構文は統語表現の基本要素（primitive element）であり、名詞・動詞などのような文法カテゴリーはすべて構文から派生される（Croft 2005：276）。例えば、RCGのアプローチにおいて、ほかの文法理論のように動詞という品詞カテゴリーに基づいて動詞構文を定義するのではなく、「他動詞構文」には「他動詞」があり、「自動詞構文」には「自動詞」があるように、動詞のカテゴリーは構文に基づいて定義される（Croft 2005：284）。第二に、構文には統語関係（syntactic relations）が一切存在せず、構文の形式表現は構文とその組成部分のみからなる（Croft 2005：277）。言い換えれば、構文内部にある唯一の統語的構造は、構文の組成部分とそれが構文内に担う役割の間の部分-全体構造のみである（Croft 2001：5）。第三に、言語一般に共通する構文、例えば普遍的な受身文と言われるものは存在せず、すべての構文はその言語に特有のもの（language-specific）である。すなわち、形式を持つすべての文法的構造は言語的にも構文的にも個別性を持つ（language-specific and construction-specific）という（Croft 2005：277）。

こうしたように、RCGは言語の多様性を基本とし、個別言語を使う個別話者が持つ知識モデルによって言語の普遍性を捉えようとしている（Croft 2001：8）。しかし、RCGは言語および構文の多様性と個別性を主張する理論であり、異なる言語における同類構文の共通性を捉えることは目的としていない。確かに、言語内および言語間の文法的多様性は同じ普遍的な構造と原則によって支配され（Croft 2001：107）、統一的構造を持つ特定の種類の構文はないが、参加者が構文にコードされる方式などにおいて構造的な一般性はある（Croft 2005：308）。ことはCroftも認めているものの、それについて具体的には議論していない。言語にみられる多様性は個別言語の特徴を記述するためには重要であるが、異なる言語に共通する普遍性の存在も否定できない。したがって、RCGは、少なくとも、異なる言語における同類構文を対照して考察し、言語の細部にみられる構文普遍性を捉えようとする研究には不向きである。

ほかには、構文木（tree bank）に文法規則と語彙項目の表示を入れる Head-driven Phrase Structure Grammar（HPSG, Pollard & Sag 1987, 1994, Ginzburg & Sag 2000 など）、「素性構造（feature structures）」と「統一（unification）」を基本的概念としている Berkeley Construction Grammar（BCG, Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Fillmore & Kay 1993, Michaelis & Lambrecht 1996, Michaelis & Ruppenhofer 2001 など）、および構文ベース（construction-based）の HPSG と BCG に基づいて発展し、「語彙は統語-意味のイ

ンタフェースのモデルを提供する」(Michaelis 2013)と主張する Sign-Based Construction Grammar (SBCG, Boas & Sag 2012, Michaelis 2010, 2013 など)などの構文文法的なアプローチもある。しかし、これらのアプローチにおける構文の表記システムは、統語関係および語彙要素を解体して詳細に表現することを重視し、構文形式の特徴はあまり記述されていない。そのため、豊富な構文形式を持つ中国語結果構文の考察に対する解析力が限られている。また、構文ネットワークに関する分析はあまり見当たらないため、構文間のつながりを明らかにするための適切な方法論ではない。

そこで、本研究の目的を達成するために最も有効的な構文文法理論である Goldberg (1995, 2006) および Goldberg & Jackendoff (2004) に基づいて分析を展開する。以下、本論文に援用される 2 つの主な主張を紹介し、本研究との接点を述べる。

2.2.2 構文の意味表示

Goldberg (1995 : 3) は構文の特別な下位クラスとして「項構造構文」が存在し、それが言語において節表現を生産する基本的な手段であるとする。彼女によれば、単節の構文は人間の経験の基本をなす場面を反映する意味構造と直接結びつく (Goldberg 1995 : 5)。

Simple clause constructions are associated directly with semantic structures which reflect scenes basic to human experience. (Goldberg 1995 : 5)

Goldberg (1995) は英語の結果構文を項構造構文の一つとして扱い、結果構文における文の意味の形成過程および制約条件について分析を行っている。構文は構文を具体化する動詞とは関係なく独自の項構造配列を持ち、それを構文の意味 (constructional meaning) と呼び、動詞が持つ意味と融合 (fusion) し、一つの文の具体的な意味を決定するというのが基本的な観点である。

Goldberg (1995) は動詞の意味をフレーム意味論によって捉えている。動詞のフレームの意味には「参与者役割 (participant roles)」を設定することが可能である (Goldberg 1995 : 43)。彼女によれば、構文に結合する「項役割 (argument roles)」とは違い、動詞が結びつくのはフレームに特有の役割であるのに対して、構文が結びつくのは agent・patient・goal などの一般性のより高い役割である。参与者役割は一般性の高い項役割の具体例であり、特定の選択制限を受けている。さらに、動詞はそのフレーム意味論的知識の中で、どの側面をプロファイルすべきか、つまりどの側面が必要不可欠で特に卓越しているかを、語彙的に決める (Goldberg 1995 : 44)。プロファイルされる参与者役割は、必ず直接文法機能として実現された項役割と融合しなければならない (Goldberg 1995 : 45)。

たとえば、動詞 *rob* と *steal* が表す行為は、いずれも泥棒・ターゲット・貴重品という三つの参与者から成る。動詞 *rob* の場合、泥棒とターゲットがプロファイルされている。一方、動詞 *steal* の場合、泥棒と貴重品がプロファイルされている。プロファイルされた参与者を太字で示すと、2 つの動詞の相違は (1) のように表示できる。前述したとおり、プロファイルされる参与者役割は義務的に明示され、直接的文法機能として具現化された項役割と融合しなければならない。そのため、(2a) と (3a) の文は成立するが、(2b) と (3b) は容認されず、参与者役割と統語形式の結びつきは明らかである。

- (1) *rob* < **thief** **target** goods >
 steal < **thief** target **goods** > (Goldberg 1995 : 45)
- (2) a. Jesse robbed the rich (of all their money).
 b. *Jesse robbed a million dollars (from the rich).
- (3) a. Jesse stole money (from the rich).
 b. *Jesse stole the rich (of money). (Goldberg 1995 : 45)

語彙項目と同様に、句レベルの構文もプロファイルされるべき役割を指定する。動詞が参与者役割をプロファイルするのに対して、構文は、直接的文法関係 (SUBJ, OBJ など) に結びつく項が持つ役割、すなわち項役割 (argument role) をすべてプロファイルする (Goldberg 1995 : 48)。項役割のプロファイルも太字によって示すことにする。たとえば、結果構文には X CAUSES Y to BECOME Z という意味が結びついており、(4) のように表示できる。(5) から分かるように、Agent と Patient は直接的文法関係として表現されるため、義務的にプロファイルされるが、result-goal 項は斜格機能 (oblique function) と結びつくためプロファイルされない (Goldberg 1995 : 53)。

- (4) CAUSE-BECOME < **agt** **pat** result-goal > (Goldberg 1995 : 189)
- (5) a. He wiped the table clean.
 b. He wiped the table.
 c. *He wiped clean.

動詞が特定の構文に現れることにより、動詞の参与者役割と構文の項役割が融合される。結果構文と動詞 *wipe* が融合する場合は、(6) のように表示できる。Goldberg (1995 : 189) によれば、構文はそれ自体の項を持つことができる。動詞 *wipe* の参与者役割は 2 つしかないが、構文から result-goal という項役割が提供される。すなわち、結果述語の意味は、構文形式のみに付与されるものであると、Goldberg (1995) は主張する。

動詞が持つプロファイルされた参与者役割が構文の持つ項役割と融合する必要がある場合は、両者が実線で結ばれ、そうでない場合は破線で結ばれている。なお、(6) にみられるように、項構造 *pat* (*patient*) と参与者役割の融合を破線で示すのは、*They drank the pub dry* のような、動詞の目的語でない名詞句、いわゆる疑似目的語が目的語として現れる文が存在するからである。また、1 行目と 2 行目の間は、動詞の意味と構文の意味が担う関係のタイプを示す。動詞が構文の表す意味を直接に表さない場合、動詞はしばしば行為を遂行する際の「手段 (*means*)」を表す (Goldberg 1995 : 60)。

(6) 結果構文 + 動詞 *wipe*

Sem	CAUSE-BECOME	<	agt	pat	result-goal	>
	means			⋮	⋮	
	WIPE	<	wiper	wiped		>
	↓		↓	↓	↓	
Syn	V		SUBJ	OBJ	ADJ/PP	

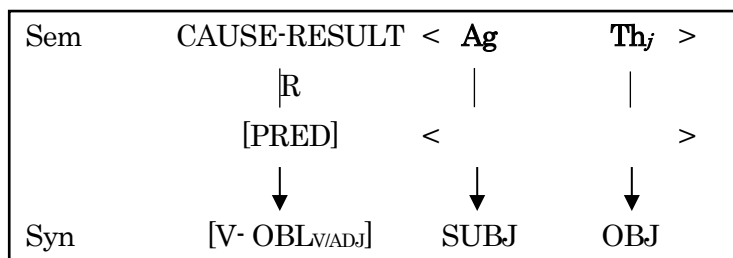
(Goldberg 1995 : 190)

Goldberg (1995) の理論は構文と動詞の相互作用の中で、構文の性質をうまく捉えている。しかし、Goldberg (1995) の動詞中心の構文意味システムを、結果構文に適用するのは果たして妥当であろうか。Snyder (2001)、Amberber et al (2010 : 1)、Williams (2015 : 307) などに指摘されるとおり、結果構文は一種の複雑述語であり、主動詞がもう 1 つの述語と結合し、1 つの単独の使役動詞のように振る舞うもので、主動詞も結果述語も単独では結果構文の意味を表すことができない。英語の結果構文においても、主動詞と結果述語は分離しているに見えるものの、決して 2 つの独立した述語ではなく、主動詞 (例えば *wipe*) の意味と結果述語 (*clean*) の意味と合わせて V-RP (*wipe clean*) になって初めて、因果関係を表すことができる。Goldberg (1995) のように、主動詞の意味をメインに据えて、結果述語を動詞の項にするのは不適切である。

特に、中国語の場合では、結果構文は動補構造という複合動詞の形式を用い、英語に比べて、動詞と結果述語はより緊密な関係で結ばれるため、1 つの構造として分析するほうが合理的である。

したがって、Goldberg (1995) の構文意味ボックスを改善し、[S-VR-O] 語順をとる中国語の動補構造を用いる結果構文が持つ基本的構文意味を、以下の形式によって表現する。動補構造全体が意味の中心として述語の位置にあり、動補構造全体がとる 2 つの項を名詞項の位置に示す。この抽象的な形式と具体的な動補構造と融合することにより、特定の結果構文の意味となる。

(7) 結果構文



2.2.3 構文拡張と構文の家族

Langacker (1991) が提唱する認知文法の観点に基づくと、新しい意味をすでに確立されたものに即して解釈することで、言語はプロトタイプを拡張していく。

Goldberg (1995 : 4)、Goldberg & Jackendoff (2004) によれば、統語上も意味上も多様性を見せる英語の結果構文は、異なっているが互いに関連し合う一種の「構文の家族 (a family of constructions)」として捉えられる。この一連の構文、つまり結果構文の下位構文 (subconstructions of the resultative) は、家族的類似性 (family resemblance) を見せながら、それぞれ異なる特性を持っており、構文タイプごとに生産性も異なる。

Goldberg & Jackendoff (2004) はまず構文的観点の全体像を (8) のように提案する。この観点によると、文法上最も一般的な現象から最も特殊な現象までは、連続的変異としてクライン (cline) が現れる。そのクラインの上にある個別の語彙から一般規則まで、あらゆるものが一定の形式に従い、語彙 (lexicon) と規則 (rules) の間に原則として断層がないという。また、習慣化された部分的に特殊な統語意味は「構文」として捉えられる。この構文の考え方は、結果構文の家族を組み立てる基礎となっている。

(8) The Constructional View

- a. There is a cline of grammatical phenomena from the totally general to the totally idiosyncratic.
- b. Everything on this cline is to be stated in a common format, from the most particular, such as individual words, to the most general, such as principles for verb position, with many subregularities in between. That is, there is no principled divide between 'lexicon' and 'rules'.
- c. At the level of phrasal syntax, pieces of syntax connected to meaning in a conventionalized and partially idiosyncratic way are captured by CONSTRUCTIONS.

(Goldberg & Jackendoff 2004)

彼らによれば、英語の結果構文には次の四つの下位構文の家族があり、さらに一般原理によって、構文の項構造は動詞の項構造から予測され、文のアスペクトは下位事象のアスペクト構造から決められると同時に、構文には特異性や下位クラスもあり、それは個別に習得する必要があるという。

- (9) a. Causative property resultative (e.g. *Bill watered the tulips flat*)
 Syntax: NP₁ V NP₂ AP/PP₃
 Semantics: X₁ CAUSE [Y₂ BECOME Z₃]
 MEANS: [VERBAL SUBEVENT]
- b. Noncausative property resultative (e.g. *The pond froze solid*)
 Syntax: NP₁ V AP/PP₂
 Semantics: X₁ BECOME Y₂
 MEANS: [VERBAL SUBEVENT]
- c. Noncausative path resultative (intransitive motion construction, e.g. *The ball rolled down the hill, The truck rumbled into the station*)
 Syntax: NP₁ V PP₂
 Semantics: X₁ GO Path₂
 i. MEANS: [VERBAL SUBEVENT]
 ii. RESULT: [VERBAL SUBEVENT: X₁ EMIT SOUND]
 iii. RESULT: [VERBAL SUBEVENT: X₁ DISAPPEAR]
- d. Causative path resultative (caused motion construction, e.g. *Bill rolled the ball down the hill*)
 Syntax: NP₁ V NP₂ PP₃
 Semantics: X₁ CAUSE [Y₂ GO Path₃]
 MEANS: [VERBAL SUBEVENT]

(Goldberg & Jackendoff 2004)

本論文は Goldberg & Jackendoff (2004) が提案する構文の家族の考え方を中国語に適用し、中国結果構文独自の家族体系を組み立てながら、一般から特殊までの全体像を記述したい。

なお、Goldberg & Jackendoff (2004) は結果構文を分類する際に、結果述語が特性 (property) を表すタイプと経路 (path) を表すタイプの両方を結果構文の範疇に入れているが、中国語において経路を表す動補構造を用いる文は結果構文とは別の構文と見なされるため、本論文は (10) のような経路を表す結果構文を除き、(11) のような特性を表す結果構文のみを論じる。

- (10) a. She followed the trail into the building.
 b. Robin danced out of the room.
- (11) a. They drank the pub dry.
 b. The pond froze solid.

(Goldberg & Jackendoff 2004)

2.3 語彙概念構造と事象構造テンプレート

結果構文の意味構造を捉えるに、影山（1996）が提案する語彙概念構造、および Rappaport Hovav & Levin（1998）が提案する事象構造テンプレートを補充的に援用する。

語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure、LCS）とは、動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造であり、基本的には意味構造というのと等しく、統語構造に反映されることが多い（影山 1996 : 47）。

影山（1996 : 48-49）によれば、LCS は言語と外界認知のインタフェースに位置するため、統語構造に直接反映される項構造は、一定の結びつけ規則（linking rules）によって、概念構造（Conceptual Structure）とも対応関係を持っている。その結びつけ規則は以下のとおりである（影山 1996 : 92）。

- (12) 概念構造と項構造の結び付け：
- a. 外項規則：上位事象の主語が外項になる。
- b. 内項規則：下位事象がある場合は BE の主語が、また、下位事象がない場合は ACT ON の対象が、内項になる。

この規則に基づいて、影山（1996 : 253）は結果構文において、事象合成を以下のように表示する。本論文の分析においては、この事象合成パターンを中国語に適用して考察を進める。

- (13) 上位事象と下位事象の合成

上位事象（ACT ONないしACT）と下位事象（BECOME [BE AT]）を使役関係（CAUSE）で結びつけよ。

[x ACT ON y] + [y BECOME[y BE AT-z]]
 → [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME[y BE AT-z]]

↓	↓	↓	↓
主語	主動詞	目的語	結果述語
John	kicked	the door	open

(影山 1996 : 253)

一方、Rappaport Hovav & Levin (1998) は、Vendler (1967) や Dowty (1979) が提案する語彙的アスペクトによる英語動詞の四分類に基づいて、以下のような事象構造テンプレート (event structure template) を提案する。達成動詞 (accomplishment) の使役主を活動的事象と個体に二分することは、本論文第 5 章で検討する〈主語指向型〉を二分する根拠となる。

- (14) a. [x ACT <MANNER>] (activity)
 b. [x <STATE>] (state)
 c. [BECOME [x <STATE>]] (achievement)
 d. [[x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment)
 e. [x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment)

以上、本論文の主要な理論的枠組となる構文文法理論及び語彙概念構造について説明した。先行研究を踏まえ、中国語結果構文の意味特徴に相応しい構文ボックスの表記法も定めた。

第3章 中国語における結果構文の分類

3.1 はじめに

本章では、先行文献を検討したうえで、中国語結果構文の使役義獲得の仕組みを分析し、構文拡張の観点から結果構文を改めて分類する。この分類に基づき、次章からは各種類の結果構文の性質や特徴、および構文間の拡張過程について考察を展開する。

3.2 節では、結果構文の分類に関する先行研究を4つ取り上げて批判的に紹介する。それを踏まえ、3.3 節で結果構文のもつ「使役義」の獲得および継承という問題に絞り、問題解決とともに結果構文を全体的に＜目的語指向型＞＜主語指向型＞＜原因型＞の3種類に分類する。

3.2 結果構文の分類に関する先行研究

結果構文とは、二つの出来事の因果関係によって状態変化使役を表す文、すなわち行為と結果からなる文を指す（石村 2011:1）。基本的に「原因事象＋結果事象」という、二つの下位事象が時間の流れに沿って構成される複合事象構造（complex event structure）を持ち、動詞と結果述語（Resultative Predicate, RP）で表わされる。

中国語の結果構文は複合動詞の一種である動補構造（前項動詞＋結果補語）を使い、S-[V-RP]-O となることが多い。結果補語 RP が非対格自動詞あるいは形容詞であるのが一般的であるが、前項動詞 V について自他性の制限はない。

Goldberg（1995）の構文理論の定義によれば、構文とは意味と形式の結合であり、構文が持つ形式的な意味に主要動詞のフレーム意味論の意味を足すと、一つ一つの具体的な文の意味になる。したがって、中国語の結果構文を分類する際には、構文形式が自ら持つ意味と主要動詞すなわち動補構造の意味という二つの側面から考える必要がある。

以下、先行研究からいくつかの代表的な分類方法を取りあげて検討した上で、使役構文としての結果構文の使役義獲得の仕組みを分析し、本研究における結果構文の分類方法を提案する。

3.2.1 太田（1958）と望月（1990）：「動詞語幹指向型」の検討

中国語結果構文の分類に言及する最初期の研究として、太田（1958）が挙げられる。太田（1958：204）は複合動詞には行為とその結果を同時に表現するものがあると指摘し、後項動詞が自動詞の場合と形容詞の場合により、中国語の複合動詞（本研究の動補構造に相当する）を「使成複合動詞」と「結果複合動詞」に分類している。使成複合動詞として“拉起（引き上げる）”“打死（打ち殺す）”“推倒（押し倒す）”などの例を挙げ、古代中

国語の他動詞から受け継がれた用法であると述べている。結果複合動詞には“写好（書き終わる）”“学好（勉強し終わる）”“说错（言い間違える）”のような例を挙げ、後者は前者からの類推によって生じたものであるという。太田（1958）はこの二分類の定義および区別を詳しく述べていないが、望月（1990）は、太田の「使成複合動詞」は動補構造の後項が動作主あるいは被動者（対象）について述べるタイプであるのに対し、「結果複合動詞」は動補構造の後項が前項動詞そのものについて述べるタイプであるとする。

しかし、太田（1958：206）は“弄干净（きれいにする）”のような後項動詞が形容詞であるにもかかわらず、被動者の状態変化を述べる例も結果複合動詞に含まれている。また、太田が挙げた“写好（書き終わる）”などの例において、後項の形容詞“好”はすでに本来の「良い」という意味を失い、文字通りの意味を持つ“干净（きれい）”とは明らかに違うため、同じタイプに分類するのは適切ではない。すなわち、太田（1958）の分類の基準は動補構造の性質とは関係なく、単純に表面的な品詞からの分類であり、あまりにも粗雑で、動補構造の特徴を正確に表現していない。

望月（1990）は太田（1958）に基づき、動補構造の後項が文中で何を指向するかにより、結果構文を「主語指向型」「目的語指向型」「動詞語幹指向型」「有標型」という4つのタイプに分ける。(1)の“累（疲れる）”は主語“我（私）”の状態について述べ、(2)の“哭（泣く）”は目的語“弟弟（弟）”の行為を表し、(3)の“完（～終わる）”は動詞“吃（食べる）”を修飾し、完了のアスペクトを表す。最後に、(4)の動補動詞“喝-醉”は二項動詞のように機能しているが、一般的なS-[V-R]-Oの形式をとらず、前項動詞と後項動詞の意味上の主語が目的語の位置にあるため、最も特殊なタイプとなる。

A. 主語指向型

- (1) 我 走-累 了。
wǒ zǒu-lèi le
私 歩く-疲れる PERF
「私は歩き疲れた。」

B. 目的語指向型

- (2) 哥哥 骂-哭 了 弟弟。
gēge mà-kū le dìdi
兄 罵る-泣く PERF 弟
「兄が弟を罵って泣かせた。」

C. 動詞語幹指向型

- (3) 我 吃-完 了 饭 了。
wǒ chī-wán le fàn le
私 食べる-終わる PERF ご飯 MOD
「私は御飯を食べ終わった。」

D. 有標型

- (4) 这种酒 喝-醉 过 不少人。
zhè-zhǒng-jiǔ hē-zuì guo bùshǎorén
この-CL-酒 飲む-酔う ASP 多くの人
「この酒を飲んで、多くの人が酔っ払った。」

(望月 1990)

望月 (1990) では、「C. 動詞語幹指向型」は太田 (1958) がいう類推によって生じた結果複合動詞に相当するものとして扱っていないが、本稿でも、このタイプの動補構造は因果関係を表す動補構造ではないため、(3) のような文は結果構文ではないと主張する。代表的な例を挙げて説明する。

- (5) a. 他 写-好 了 遗嘱。
tā xiě-hǎo le yízhǔ
彼 書く-終わる PERF 遺言書
「彼は遺言書を書き上げた。」
- b. 父亲 喝-多 了 酒 了。
fùqin hē-duō le jiǔ le
父 飲む-多い PERF 酒 MOD
「父は酒を飲みすぎた。」
- c. 饭 吃-晚 了。
fàn chī-wǎn le
ご飯 食べる-遅い PERF
「ご飯を食べるのが遅くなった。」
- d. 他 抓-紧 了 绳子。
tā zhuā-jǐn le shéngzi
彼 掴む-固い PERF ロープ
「彼はロープをしっかりと掴まった。」

望月 (1990)

彭 (2011:47)

(5a) は (3) と同じように、後項補語は動作の「完了」というアスペクトしか表さず、形容詞“好（良い）”の本来の意味はない。つまり「彼が遺言書を書いた結果、遺言書がよくなった」という意味ではなく、単に「彼が遺言書を書き終わった」という終点付きの動作事象を表している。(5b) の“多（多い）”と (5c) の“晚（遅い）”はそれぞれ動詞“喝（飲む）”“吃（食べる）”について、飲む程度あるいは食べる時間を指し、「飲んだ結果、酒が多くなった」あるいは「ご飯を食べた結果、ご飯が遅くなった」という意味はない。(5d) の“紧（固い）”は“抓（掴む）”という動作の様態を修飾する副詞であり、「しっかり掴まった」という状態を描写するに過ぎない。この4つの例文は形式的に動補構造を含む結果構文に見えるものの、いずれも「状態変化」という結果構文の中心的な意味を表していないため、結果構文とは本質的に異なる。

したがって、本研究では、このような動詞語幹指向型を結果構文の範疇から排除するが、(5b,c) のタイプについては「過分義」を表す動補構造として第7章で改めて取り上げて考察する。(5a) のアスペクト用法と (5d) の様態修飾用法は扱わない。

3.2.2 Cheng & Huang (1994) : 「能格型」と「非能格型」の検討

Cheng & Huang (1994) は前項動詞 V1 が結果複合動詞の主要部であると主張し、V1 のアスペクト特性（動作と状態、瞬間性と継続性、Vendler の動詞四分類などによって判断される事象タイプ）および他動性（共起する項の数）の違いに基づき、結果複合動詞を以下の4種類に分けている。

- (6) a. 张三 骑-累 了。 <非能格型 (unergative) >
zhāng sān qí-lèi le
張三 乗る-疲れる PERF
「張三は乗り疲れた。」
- b. 张三 骑-累 了 两匹马。 <他動型 (transitive) >
zhāng sān qí-lèi le liǎng pǐ mǎ
張三 乗る-疲れる PERF 2-CL-馬
「張三は2匹の馬に乗って、馬を疲れさせた。」
- c. 张三 气-死 了。 <能格型 (ergative) >
zhāng sān qì-sǐ le
張三 怒る-死ぬ PERF
「張三は死ぬほど怒った。」

- d. 这件事 真 气-死 张三 了。 <原因型 (causative) >
 zhè jiàn shì zhēn qì-sǐ zhāng sān le
 この-CL-事 本当に 怒る-死ぬ 張三 PERF
 「この事は本当に張三を死ぬほど怒らせた。」

(Cheng & Huang 1994)

Cheng & Huang (1994) によると、(6a,c) と (6b,d) の違いは文全体の自他性にあり、前者が自動的であるのに対して、後者は目的語を伴うため他動的である。一方、(6a,b) と (6c,d) の違いは前項動詞のアスペクト特性にあり、前者の前項動詞が活動 (active) を表す動詞であるのに対し、後者の前項動詞は状態 (state) あるいは状態変化 (changes of state) を表す動詞である。さらに、この 4 つのタイプにおいて二種類の自他交替がみられる。前項動詞が活動動詞の場合 (6a,b)、目的語となる内項 (Theme あるいは Patient) の有無によって<非能格型/他動型>の交替 (unergative-transitive alternation) が生じる。一方、前項動詞が非活動 (non-active) 動詞の場合 (6c,d)、文頭に原因項 (Causer) があるかないかによって<能格型/原因型>の交替 (ergative-causative alternation) が見られる。

こうして、Cheng & Huang (1994) は二つの自他交替の現象を通じて、異なる種類の結果複合動詞の相互関係を簡潔かつ明瞭にまとめている。そのほか、彼らが提案する<原因型 (causative) >は望月 (1990) の<有標型>に相当し、このタイプの本質および形成原因をより明らかにしている。さらに、多義性を持つ“他骑累了马了 (彼は馬に乗って疲れた)”タイプと“手帕哭湿了 ((誰かが) 泣いたせいでハンカチは濡れた)”のような英語の Middle construction (中間構文) に類似する中国語の受動的タイプについても詳細に分析し、数々の有益な指摘をしている。

しかし、Cheng & Huang (1994) が挙げる例文の一部は典型性に欠けるほか、主語の項役割の認定も曖昧であるため、複合動詞の分類方法に疑問を感じる点が少なくない。特に、彼らの考察における<能格型>と<非能格型>の区別はアドホックである。この点について第 5 章で取り上げて検討するため、ここでは詳しく論じないことにする。

なお、Cheng & Huang が挙げる<能格型/原因型>の交替の例文にも多くの問題がみられる。以下の 3 組の例文 (7) (8) (9) において、a の文はすべて外部の Causer が存在せず、V1 の主語が Agent であり、文全体が<非能格型>である。それに対して、b の文はすべて c の<原因型>と交替するため、主語が影響を受けた Causee であり、文全体が<能格型>であると述べる。しかし、b 文の主語がすべて Causee であるとは考えにくい。例えば、(7a) と (7b) の区別は変化対象ではない目的語「酒」があるか否かだけにあるのに、なぜ両者の主語の意味役割が異なるのか、かつ (7b) は (7c) と交替できて<非能格型>となるものの、なぜ (7a) はそれができないのか。また、(8a) の主語「彼の目」

は「彼」の身体部分であるため、明らかに Agent とはなれず、逆に (8b) の「彼」が活動を行う Agent として相応しいのに、なぜ分類が正反対になっているのか。さらに、(9b) は Cheng & Huang (1994) の訳文からみると<他動型>に属すべきであり、<能格型>に分類するのは誤りであろう。Cheng & Huang (1994) は目的語を伴う非能格自動詞結果構文の性質を正確に捉えることができず、かつ例文の扱いに精密さを欠くため、<能格型>と<非能格型>という分類には多くの疑問点が残る。

- (7) a. 张三 喝-醉 了。
zhāng sān hē-zuì le
張三 飲む-酔っ払う PERF
「張さんは(何かを)飲んで酔っ払った。」
- b. 张三 喝-醉 了 酒。
zhāng sān hē-zuì le jiǔ
張三 飲む-酔っ払う PERF 酒
「張さんは酒を飲んで酔っ払った。」
- c. 那杯酒 喝-醉 了 张三。
nà bēi jiǔ hē-zuì le zhāng sān
あの-CL-酒 飲む-酔っ払う PERF 張三
「あの酒を飲んで張さんは酔っ払った。」
- (8) a. 他的 眼睛 看-花 了。
tā de yǎn jīng kàn-huā le
彼の 目 読む-ぼやける PERF
「彼の目は(何かを)読んでぼやけた。」
- b. 他 看-花 了 眼睛。
tā kàn-huā le yǎn jīng
彼 読む-ぼやける PERF 目
「彼は(何かを)読んで目がぼやけた。」
- c. 报纸 看-花 了 他的 眼睛。
bào zhǐ kàn-huā le tā de yǎn jīng
新聞 読む-ぼやける PERF 彼の 目
「新聞を読んで彼の目はぼやけた。」

- (9) a. 小孩 骑-累 了。
 xiǎo hái qí-lèi le
 子ども 乗る-疲れる PERF
 「子どもは乗り疲れた。」
- b. 小孩 骑-累 了 三匹马。
 xiǎo hái qí-lèi le sān pǐ mǎ
 子ども 乗る-疲れる PERF 3-CL-馬
 「子どもは3匹の馬に乗って、馬を疲れさせた。」
- c. 那匹马 骑-累 了 三个小孩。
 nà pǐ mǎ qí-lèi le sān gè xiǎo hái
 あの-CL-馬 乗る-疲れる PERF 3-CL-子ども
 「あの馬は乗らせることによって三人の子どもを疲れさせた。」

石村（2011：43）も Cheng & Huang（1994）に反論し、＜能格型＞と＜非能格型＞という分類の仕方について疑問を投げかけている。彼は＜能格型＞と＜非能格型＞のどちらにも同じ再帰的意味構造を仮定するため、＜自動型＞という種類の一類型にしている（石村 2011：170）。ただし、この分類は二種類の＜自動型＞の相違を見逃し、＜自動型＞の性質を正確にとることができない。石村（2011）についても第5章で詳しく検討する。

本研究では、まずは望月（1990）が提案する結果補語の意味指向に基づいて、＜能格型＞と＜非能格型＞を統一して＜主語指向型＞に分類し、次に前項動詞の性質によって非対格タイプと非能格タイプに下位分類する。こうして、このタイプの結果構文の意味・統語特徴を精密に捉えることが可能となる。

3.2.3 石村（2011）：「受動型」の検討

石村（2011）は動詞連続構造の角度から中国語の結果構文を考察している。

彼の主な主張は以下の二つである。一つは、動補構造における使役義は「動詞＋目的語」構造のもつ統語的な型の力、すなわち語順によってもたらされるということである。もう一つは、中国語結果構文は結果を表す第二動詞を基点にして、前方に原因を表す動詞を継ぎ足して形成されるということである。この「結果（R）に原因（V）を継ぎ足す」という形成パターンを持つのは、VR 動詞の第二動詞が有する自動的な意味を他動的意味に用いるためである（石村 2011：71-84）。

上記の2点の主張に基づき、石村（2011）は中国語結果構文を自他交替の視点から以下の四種類に分類している。二つずつ語彙的ヴォイスを媒介とした派生関係を構築し、前者は「他動→自動」、後者は「自動→他動」の交替パターンを持つと主張する。自他交替の

動機づけとして、＜他動型＞は「動作主の降格」すなわち「脱使役化」によって＜受動型＞を派生する一方、再帰的な意味構造を持つ＜自動型＞は「原因主語の導入」によって＜原因型＞を派生するという。

I. ＜他動型/受動型＞の自他交替パターン

(10) 孩子 撕破 了 书皮儿。 <他動型 (transitive) >

子供 引き裂く-破れる ASP 本の表紙

(子供が本の表紙を引き裂いて破った。)

(11) 书皮儿 撕破 了。 <受動型 (passive) >

本の表紙 引き裂く-破れる ASP

(本の表紙が引き裂いて破れた。)

II. ＜自動型/原因型＞の自他交替パターン

(12) 张三 喝醉 了。 <自動型 (intransitive) >

張三 飲む-酔う ASP

(張三は飲んで酔っ払った。)

(13) 那瓶酒 喝醉 了 张三。 <原因型 (causative) >

その-CL-酒 飲む-酔う ASP 張三

(意識：張さんはその酒を飲んで酔っ払った。)

(石村 2011 : 5)

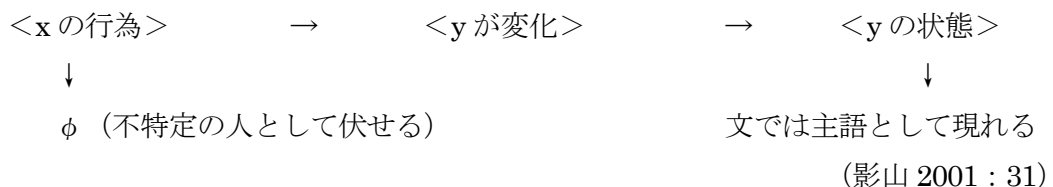
石村 (2011) は原因事象と結果事象が語順のつながりによって使役義を表すと主張するが、この使役義の形成メカニズムについては具体的に説明しておらず、「VR 動詞の第二動詞が有する自動的な意味を他動的意味に用いる」という叙述にも根拠に欠ける。典型的な結果構文では、「木を切って (V1)、木が倒れる (V2)」のように、V1 の作用対象は V2 が叙述する変化の起こる対象に一致するため、原因事象と結果事象の間の接点は明らかであり、因果関係あるいは使役関係の存在も認めやすい。しかし、下記の (14) のように、前項動詞 V1 が非能格 (14a) または非対格自動詞 (14b) の場合、V1 は作用対象を持たないか、V1 の作用対象が変化の起こる対象と異なることが多く、それでも二つの事象が因果関係で結ばれるのはなぜかなどの問題に対しては、単純に「語順の使役力」だけでは説得力に欠ける。

- (14) a. 张三 哭-湿 了 手帕。 (Sybesma1999 : 19)
zhāng sān kū-shī le shǒu pà
張三 泣く-濡れる PERF ハンカチ
「張三は泣いてハンカチが濡れた。」
- b. 老王 饿-坏 了 身体。 (石村 2011 : 88)
lǎo wáng è-huài le shēn tǐ
王さん 飢える-壊れる PERF 体
「王さんは飢えて体を壊した。」

また、石村（2011）の分類について、＜受動型＞を結果構文の独立した一つの構文タイプにするのは妥当ではないと考える。石村（2011 : 146）によれば、＜受動型＞というのは、動作主（Agent）と対象（Theme）という二つの項をとる＜目的語指向型＞結果構文が、状態変化の主体、つまり対象の方に焦点を当て、それを主語位置に据えることによって他動から自動に転換して形成する自動的結果構文である。

これは「脱使役化（de-causativization）」を経て自他交替するという形成過程を経たものである（石村 2011 : 147）。「脱使役化」とは、意味構造に存在する行為者を統語構造に表さないということである（影山 2001 : 31）。影山（2001）によると、脱使役化は下のような意味構造を持っている。（15）には、x が動詞の外項、y が動詞の内項を指す。

(15) 他動詞から自動詞への脱使役化



影山（2001 : 33）は「脱使役化動詞」を「他力の存在を陰に隠して、対象の変化のみを表す」と定義する。このような動詞は英語には存在せず、日本語では（16）の動詞を指す。右側が自動詞であるが、その場合、対象物が自発的に変化するとは考えられず、必ず動作主がいるはずであるという。

- (16) a. 彼は壁に絵をかけた。/壁に絵がかかった。
b. 彼が庭に桜の木を植えた。/庭に桜の木が植わった。
(影山 2001 : 31)

すなわち、脱使役化において、動作主は抑制されて統語上は表出しないが、削除されるわけではなく、意味要素として確実に残っている。この意味では、受動文は本当の自動の結果構文とは区別される。例えば、動作主がいる (17a) の文は脱使役化して受動文 (17b) となり、動作主の存在を明示するマーカー“被”と共起することが可能である。一方、動作主なしで変化対象のみが存在する自動詞結果構文 (18) は“被”との共起が許されない。

- (17) a. 慢跑者 跑-禿 了 人行道。
 màn pǎo zhě pǎo-tū le rén xíng dào
 ジョギングの人 走る-禿げる PERF 歩道
 「ジョギングの人は歩道を薄くなるほど走った。」 (楊 2013 : 41)
- b. 人行道 (被) 跑-禿 了。
 rén xíng dào bèi pǎo-tū le
 歩道 BEI 走る-禿げる PERF
 「(人が走ったせいで) 歩道が薄くなった」
- (18) 张三 (*被) 病-倒 了
 zhāng sān (*bèi) bìng -dǎo le
 張三 BEI 病気になる-倒れる PERF
 「張三は病気になって倒れた。」

また、石村 (2011 : 146) 自身も<他動型>と<受動型>の伝える事柄は客観的事実において等価的であると述べている。すなわち、受動化の過程において意味的な変化が起こらない上に新しい構文意味も生じておらず、統語的に動作主が現れないが、意味構造には存在する。そのため、<受動型>をプロトタイプの<他動型>から拡張された一つの独立した構文とは考えにくく、あくまで<他動型>結果構文を受動態にした形式に過ぎない。したがって、ここでは、石村 (2011) の<受動型>を結果構文の分類から外しておく。

3.3 結果構文の使役義獲得の仕組み

本研究は、結果構文を使役文と捉えて考察する。

多くの先行研究に言及されているとおり、結果構文は「使役」の意味を持つ。そのうち Cheng & Huang (1994) は結果構文の実質は使役構文の一種であることを明確に指摘し、‘...all resultatives are causatives by nature.’と述べている。中右・西村 (1998 : 178) も、使役構文の一種として結果構文の特性の多くを自然に位置付けることが可能であると述べる。しかし、彼らはそれ以上に詳しく説明していない。

ここでは、結果構文が使役構文である理由を構文文法の角度から説明しよう。その前に、使役構文としての結果構文における使役義の出どころをまず明らかにしなければならない。以下、使役義の由来の検討を経て、結果構文と使役構文の関係を考察していく。

石村（2011）は、中国語結果構文における原因事象と結果事象の間の使役義は「語順の使役力」からもたらされるものであると主張するが、前述したとおり、それだけではほとんど意味はない。一部の結果構文の使役関係は語順だけで説明できないほか、この語順に従えば必ず使役力を獲得するわけでもない。前者については前節で言及したので、ここでは後者について簡単に説明する。

中国語において、単純動詞を用いる動詞述語文は一般的に「動詞＋目的語」という語順をとる。ただし、その中に（19）のような文は、一見普通の動詞述語文と変わらないが、使役マーカー“使（～させる）”を用いて典型的な使役文に言い換えることが可能である（19'）。通常の「動詞＋目的語」文（20）（20'）と比べると、（20）の文は語順が（19）と同様であるにもかかわらず、（20'）に示すように使役文への転換ができず、使役の意味を持たないと言える。

- (19) a. 我 开 了 门。
wǒ kāi le mén
私 開ける PERF ドア
「私はドアを開けた。」
- b. 水手们 沉 了 船。
shuǐ shǒu men chén le chuán
船員たち 沈める PERF 船
「船員たちは船を沈めた。」
- c. 他 吓 了 我 一跳。
tā xià le wǒ yī tiào
彼 驚かす PERF 私 一跳び
「彼は私を驚かせて、私は跳び上がりそうになった。」 (何&王 2002)
- (19') a. 我 使 门 开 了。
wǒ shǐ mén kāi le
私 させる ドア 開ける PERF
「私が原因でドアは開いた。」

b. 水手们 使 船 沉 了。
 shuǐ shǒu men shǐ chuán chén le
 船員たち させる 船 沈める PERF
 「船員たちが原因で船が沈んだ。」

c. 他 使 我 吓 了 一跳。
 tā shǐ wǒ xià le yī tiào
 彼 させる 私 驚かす PERF 一飛び
 「彼が原因で私は跳び上がりそうになった。」

(20) a. 我 敲 了 门。
 wǒ qiāo le mén
 私 叩く PERF ドア
 「私はドアを叩いた。」

b. 水手们 修 了 船。
 shuǐ shǒu men xiū le chuán
 船員たち 修理する PERF 船
 「船員たちは船を修理した。」

c. 他 打 了 我 一下。
 tā dǎ le wǒ yī xià
 彼 打つ PERF 私 一度
 「彼はを私を一度打った。」

(何&王 2002)

(20') a. *我 使 门 敲 了。
 wǒ shǐ mén qiāo le
 私 させる ドア 叩く PERF
 「私が原因でドアが叩かれた。」

b. *水手们 使 船 修 了。
 shuǐ shǒu men shǐ chuán xiū le
 船員たち させる 船 修理する PERF
 「船員たちが原因で船が修理された。」

- c. *他 使 我 打 了 一下。
 tā shǐ wǒ dǎ le yī xià
 彼 させる 私 打つ PERF 一度
 「彼が原因で私は一度打たれた。」

では、なぜ一部の「動詞＋目的語」文のみが使役義を持つのか、使役義はいったいどこから生じたのであろうか。

Goldberg (1995 : 51,191) によると、構文の意味を構成するには主要動詞の意味と構文形式の意味の両方が必要不可欠である。構文は構文を具体化する動詞と関係なく独自の意味を持ち、動詞は構文が表す事態に具体的な情報を加えるという。中国語結果構文の場合も、「動詞＋目的語」という語順が構文意味の一部に対応すると考えられるが、語順だけでは使役義をもたらすことができず、結果構文の使役義は動詞にもかかわるはずである。そこで、使役構文に出現する動詞の特徴をまず見よう。

中右・西村 (1998) は英語と日本語における使役構文を考察し、使役構文を「使役動詞を述語動詞とする、すなわち「使役」の意味が述語動詞によって表現される構文」(中右・西村 1998 : 119) と定義する。使役動詞と呼ばれるのは英語の *causation* の意味を含むと考えられるある種の動詞であり、事態 X が原因となって事態 Y が生じるという因果関係を表す (中右・西村 1998 : 120)。使役構文の例として、彼らは以下の文を挙げる。

- (21) a. I opened the door. (cause to open)
 b. 私はドアを開けた。
 (22) a. Mary killed John. (cause to die)
 b. 花子は太郎を殺した。

例文 (21) を見ると、主語である「私」が行った「ドアを開く」という行為によって、目的語である「ドア」が本当に開いたという結果が生じる。この二つの事象は融合して *open* という 1 つの動詞によって結ばれている。ただし、ここで注意すべきは、結果「ドアが開いた」を起こす原因は主語のある行為であるが、それはいかなる行為なのか (蹴るか、押すか、または別の行為か) は文中に明示されず、結果だけにフォーカスに当たっている (中右・西村 1998 : 120)。(21) の文において、X、Y はそれぞれ以下の事象を表している。

- (23) X : I pushed/kicked/... the door. (動作は明示しない)
 Y : The door opened as a result.

そこで、結果の上に暗黙の原因（プロトタイプの場合では「手段」）を使役動詞ではない一般的な活動動詞で明示すれば、結果構文の形式となる（24c,25c）。すなわち、結果構文は元々使役動詞が担っている因果関係を、「動詞＋結果述語」で表す拡張構文である。結果構文は使役構文から使役の意味を受け継ぐが、形式的に[S V O]から[S V O R]に拡張され、新たな構文になっているため、結果構文の実質が使役構文であるとは言えるが、使役構文はすべて結果構文である必要はない。

- (24) a. The door is open.
 b. I pushed the door.
 c. I pushed the door open.
- (25) a. John is dead.
 b. Marry shoot John.
 c. Marry shoot John to death.

では、中国語の場合を見よう。(21)の文と比較してみると、中国語の“开（開ける）”“沉（沈める）”“吓（驚かす）”も、“open”“kill”「開ける」「殺す」と同様に、使役の意味を持つ動詞であると考えられる。Rappaport Hovav & Levin（1998）が提案する事象構造テンプレートによれば、“开（開ける）”“沉（沈める）”“吓（驚かす）”などは CAUSE と状態変化を含む達成動詞（accomplishment）で、(26)のように表示される。

- (26) [[x ACT <MANNER>/ x] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] (accomplishment)
 (Rappaport Hovav & Levin 1998 : 108)

このような原因と結果を自ら含意する達成動詞はごく一部であり、単純動詞の多くは原因ないし結果を表すしかない。ただし、動詞の組み合わせにより、達成動詞のように振る舞うことが可能である。中国語動補構造の前項動詞となるのは動作の継続だけを表し、結果がどうなるかを示さず、「完結性（telicity）」を持たない活動動詞が多い。活動動詞を「動詞＋目的語」の形式に入れると、使役の意味を持たない単純な動詞述語文となる。しかし、活動動詞は状態動詞（state）である結果補語と組み合わせることにより、変化の「終点（GOAL）」すなわち結果を獲得することが可能となる。二つの動詞はそれぞれ原因事象と結果事象を表し、影山（1996：253）に指摘されるように、両者は使役関係（CAUSE）で結びつけることが可能である（27）。典型的な使役構文（21）の場合、*open* のような使役動詞は自ら CAUSE の意味を持つ。それに対して、結果構文（28）の場合、“打死（殴り殺す）”のような動補構造は原因事象と結果事象の間に、統語上は表出

されていない使役関係 CAUSE を持つ。その使役関係は使役を意味する“导致”などで明示することが可能である。

(27) 上位事象と下位事象の合成

[x ACT ON y] + [y BECOME [y BE AT - z]]
 →[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT - z]]

(影山 1996 : 253)

(28) 武松 打-死 了 老虎。

wǔ sōng dǎ -sǐ le lǎo hǔ

武松 殴る-死ぬ PERF 虎

「武松は虎を殴り殺した。」

(石村 2011 : 76)

(29) [武松打老虎]CAUSE[老虎死了]

(石村 2011 : 77)

=[武松打老虎]导致[老虎死了]

したがって、典型的な使役動詞とは言えないが、動補構造は使役動詞と同じような使役性を持ち、動補構造を用いる結果構文も、使役構文の枠組の中で考察することが可能である。

また、英語の場合は結果補語が主動詞から離れて文末にあるため、使役構文とは形式的に異なる構文に見える。中国語の場合、原因を表す動詞と結果補語が結合して一つの複合動詞となるため、同じく S-V-O の語順をとる使役構文と形式的に一致する。

以上、結果構文の使役義は「動詞+目的語」という語順だけにもたらされるのではなく、使役動詞の位置にある動補構造が、使役動詞のように機能することから、結果構文は使役義を持つようになることを示した。中国語の結果構文は使役構文の一種であると見なし、結果構文の分類および考察もすべてこの前提に基づいて展開する。

3.4 本研究における結果構文の分類

先行研究を踏まえ、使役構文という前提から、中国語の結果構文を構文形式と意味構造の角度から (30) のように大まかに三種類に分類する。それぞれの典型的な例文を (31) に示す。各分類の下に、意味・統語特徴の違いによってさらに下位分類する。次章から三タイプごとに具体的に考察していく。

- (30) a. 目的語指向型：動作主と変化対象が異なる事物であり、前項動詞の働きだけが目的語に状態変化を引き起こす。

- b. 主語指向型： 動作主と変化対象が同一物であり、前項動詞の働きかけによって主語自身に状態変化が起こる。
- c. 原因型： 意味上の主語と目的語の位置が、それぞれ現れる位置と正反対になり、前項動詞の働きかけによって統語上の目的語に状態変化が起こる。

- (31) a. 张三 砍-倒 了 树。
 zhāng sān kǎn-dǎo le shù
 張三 切る-倒れる PERF 木
 「張三は木を切り倒した。」
- b. 李四 醉-倒 了。
 lǐ sì zuì-dǎo le
 李四 酔っ払う-倒れる PERF
 「李四は酔っ払って倒れてしまった。」
- c. 青草 吃-肥 了 羊儿。
 qīngcǎo chī-féi le yáng-er
 青草 食べる-肥える PERF 羊
 「青草を食べた羊が肥えた。」

(沈 1999 : 215)

3.5 本章のまとめ

本章では、太田 (1958)、望月 (1990)、Cheng & Huang (1994) および石村 (2011) という四つの主要な先行研究を検討し、中国語結果構文を<目的語指向型><主語指向型><原因型>という三種類に分類した。

本章の主たる主張は、構文文法の視点から結果構文の本質は使役構文であり、その使役義は「動詞+目的語」という語順および動補構造がもつ使役性からもたらされるということである。一般的に使役動詞になるのは *open*, *kill* のような動作の結果が含まれる達成動詞であるが、中国語では動作動詞と状態動詞の組み合わせによって形成される動補構造も達成動詞のように振る舞うことが可能であるため、使役動詞と同様に扱うことが可能となり、結果構文も使役構文として捉えられる。典型的な結果構文は動作主の働きかけによって受け手に状態変化をもたらすが、構文拡張により、動作主と変化対象が同じである<主語指向型>から、意味上の主語が目的語の位置に生起する<原因型>まで拡張される。

次章から、三タイプの結果構文それぞれの意味特徴および拡張過程を考察していく。

第4章 <目的語指向型>結果構文

4.1 はじめに

前章では構文形式と意味構造の角度から、結果構文を<目的語指向型><主語指向型><原因型>という三つの型に分類した。本章では、<目的語指向型>型をさらに使役性の観点から下位分類する。これらの分類に基づき、事象構造および項構造の面から各構文の意味的・形式的な特徴を考察するほか、構文間のつながりおよび相違を示したうえで、構文間の拡張過程を明らかにし、最終的に結果構文全般における構文ネットワークを構築する。その際、動補構造における動詞の組み合わせだけに注目するのではなく、事象の意図性など結果構文の成立に影響を与える要素も考慮に入れる。

本章ではまず、プロトタイプの結果構文すなわち典型的な<目的語指向型>と、その四つの下位分類を考察していく。

4.2 プロトタイプの結果構文：典型的な<目的語指向型>

石村（2011：1）によると、プロトタイプの結果構文は、前項動詞が他動詞であり、その目的語が結果補語の主語と一致し、何らかの働きかけが受け手の状態変化を引き起こす<他動型>（本論文でいう<目的語指向型>に相当する）というタイプである。例文として以下のものがある。

- (1) a. 小王 推-倒 了 大树。

xiǎo wáng tuī-dǎo le dàshù

王さん 押す-倒れる PERF 大木

「王さんは大木を押し倒した。」

- b. 他 锤-平 了 那块 金属。

tā chuí-píng le nà kuài jīn shǔ

彼 叩く-平に PERF あの-CL 金属

「彼が金属を平らに叩いた。」

（杨 2013：41）

- c. 武松 打-死 了 老虎。

wǔ sōng dǎ-sǐ le lǎo hǔ

武松 殴る-死ぬ PERF 虎

「武松は虎を殴り殺した。」

（石村 2011：76）

- d. 孩子 撕-破 了 书皮儿。
 hái zi sī-pò le shū pí er
 子供 引き裂く-破れる PERF 本の表紙

「子どもが本の表紙を引き裂いて破った。」 (石村 2011: 76)

前章で述べた通り、結果構文は同時に使役構文でもあるため、プロトタイプの結果構文はプロトタイプの使役構文の特徴を持つ。中右・西村 (1998: 121) によると、典型的な使役構文の表す因果関係は「手段・目的関係」でもある。すなわち、動作主が行う行為は、結果補語が表す状態変化を生じさせるためでなければならない。しかし、以下の文は構文形式からみると＜目的語指向型＞結果構文に属するものの、手段・目的の関係を持たず、予想外の結果状態を表す。

- (2) a. 花匠 浇-扁 了 郁金香。
 huā jiàng jiāo-biǎn le yù jīn xiāng
 庭師 水やりをする-平たい PERF チューリップ
 「庭師がチューリップに水をやって、ぺしゃんこにした。」
- b. 他 擦-脏 了 桌子。 (斉木 2004)
 tā cā-zāng le zhuōzi
 彼 拭く-汚い PERF テーブル
 「彼がテーブルを拭いた結果、テーブルが汚くなった。」
- c. 他 穿-破 了 那双鞋。
 tā chuānpò le nà shuāng xié
 彼 履く-破れる PERF あの-CL-靴
 「彼はその靴を履き、その靴が破れた。(→彼はその靴を履きつぶした。)」
 (申・望月 2007)

(2) の例文において、それぞれの結果“扁 (ぺしゃんこになる)”“脏 (汚くなる)”“破 (破れる)”は通常考えれば決して“浇 (水をかける)”“擦 (拭く)”“穿 (履く)”という行為の目的ではない。意図的に行った行為の結果として、意図されていない状態変化が起こる。このような文は中国語に数多くある。

また、(3) のように、形式的には同じく＜目的語指向型＞に見えるが、目的語の位置にある名詞句が前項動詞 V の目的語ではない結果構文もよく見られる。前項動詞は他動詞であることもあれば (3a,b,c)、非能格自動詞であることもある (3d)。

- (3) a. 小王 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは洗濯して袖を濡らしてしまった。」
- b. 小王 切-钝 了 菜刀。
 xiǎo wáng qiē-dùn le cài dāo
 王さん 切る-鈍い PERF 包丁
 「王さんは（何かを）切って、包丁の切れ味を鈍くした。」
- c. 他 骑-伤 了 腿。
 tā qí-shāng le tuǐ
 彼 乗る-怪我する PERF 足
 「彼は（何かに）乗って足を怪我した。」
- d. 他 跑-坏 了 两双鞋。
 tā pǎo-huài le liǎng shuāng xié
 彼 走る-壊れる PERF 二-CL-靴
 「彼は走って2足の靴がボロボロになってしまった。」

前章では“武松打死了老虎（武松は虎を殴り殺した）”のような結果構文をプロトタイプの結果構文として＜目的語指向型＞と名付けたが、上の例文から分かるように、＜目的語指向型＞の結果構文という分類の下に、異なった意味構造と項構造を持つタイプがいくつかあるため、中国語結果構文の「プロトタイプ」について厳密に定義する必要がある。

本論文では、一部の＜目的語指向型＞のみをプロトタイプの結果構文と定義し、＜目的語指向型＞をさらに細分化する。そして、プロトタイプおよびプロトタイプから拡張された四種類の＜目的語指向型＞の結果構文において、それぞれの意味特徴および項構造を考察し、各種類の間の構文拡張過程を解明していく。

4.2.1 弱い結果構文と強い結果構文

中国語におけるプロトタイプの結果構文を検討するには、まずは影山（1996, 2001）と Washio（1997）が提案する結果構文の二分類をもう一度考える必要がある。

動詞が結果述語の表す状態変化を含意するか否かによって、結果構文は本来の結果構文（あるいは弱い結果構文）と派生的結果構文（あるいは強い結果構文）に分けられる。影山（2001）によれば、本来の結果構文の結果述語は動詞に本来的に含意される変化状態を具体的に表現するアクセサリーのようなものであり、(4a) のように取り外しが自由である

(影山 2001:165,168)。その一方で (4b) が示すとおり、動詞が含意しない結果状態をとることはできない。一方、派生的結果構文の場合、(5a) の **drag** という行為が必ずしも状態変化を引き起こすとは限らないように、結果述語は動詞に語彙的に含意されず、また目的語と結果述語のどちらか一方を省略すると文は成立しなくなることもある (影山 2001:169) という特徴を持つ。

- (4) a. She wiped the counter (clean).
 b. *He wiped the table {dirty/wet}.
- (5) a. The horses dragged the logs smooth.
 b. I laughed *(myself) sick.

(Washio 1997)

本来の結果構文において、結果が動詞に語彙的に含意されるため、原因事象と結果事象は非常に緊密に結ばれている。それに対して、派生的結果構文の場合、動詞の表す行為がまずあって、それに動詞の意味からは必ずしも予想されない結果を付け加えるため、原因事象と結果事象が互いに独立性が高い。

言い換えれば、本来の結果構文の場合、結果述語はあくまで動詞に含まれる結果状態の更なる描写に過ぎず、原因と結果は分離不可能である。これに対して派生的結果構文の場合、実際に変化した結果より、「それほどまでに」という強調表現として用いられ (影山 2001:172)、原因事象の存在感が弱くなって情報的の重点は結果事象に置かれる。

続いて、中国語における結果構文を検討しよう。

影山 (1996, 2001)、Washio (1997) が指摘しているように、日本語には弱い結果構文しかないが、英語には強い結果構文もある。さらに中国語には弱い結果構文と強い結果構文があるというだけでなく、(9) に示すように、英語では不自然でも中国では問題なく容認される例もある。中国語は他の両言語より生産性が高く、許容範囲も英語や日本語に比べて広いのである。

[本来的/弱い結果構文]

- (6) a. He wiped the table clean. (Washio 1997)
 b. 彼はテーブルをきれいに拭いた。 (Washio 1997)
 c. 他 擦干净 了 桌子。
 tā cā-gān jìng le zhuō zi
 彼 拭く-きれい PERF テーブル

[派生的/強い結果構文]

- (7) a. John hammered the metal flat. (Washio 1997)
 b. ?? ジョンが金属をぺちゃんこに叩いた。 (Washio 1997)
 c. 他 锤-平 了 金属。
 tā chuí-píng le jīn shǔ
 彼 叩く-たいら PERF 金属
- (8) a. The joggers ran their Nikes threadbare. (Carrier & Randall 1992)
 b. *彼は靴をボロボロに走った。 (斉木 2004)
 c. 慢跑者 跑-坏 了 耐克鞋。
 màn pǎo zhě pǎo-huài le nài kè xié
 ジョギングの人 走る-破れる PERF ナイキシューズ
- (9) a. 他 擦-脏 了 桌子。(= (2b))
 tā cā-zāng le zhuō zi
 彼 拭く-汚い PERF テーブル
 b. *He wiped the table dirty. (Washio 1997)
 c. *彼はテーブルを汚く拭いた。 (斉木 2004)

例文 (7,8) を見ると、英語と中国語には派生的な強い結果構文があるが、日本語にはないことが分かる。しかしそれだけではない。例文 (9) はどう考えればよいだろうか。

影山は本来の結果構文において「変化状態が主動詞そのものから含意されなければならない」というが、この条件は中国語には明らかに当てはまらない。主語が何らかの意図を持ってある動作を行うとき、たとえば、きれいにしようとしてテーブルを拭くとき、その意図に沿った結果しか生じ得ないのが英語で、その必要はないのが中国語である。このように、同じ派生的結果構文であっても、「意図」と「結果」という観点から区別することが可能である。

以上、結果構文は「弱い」タイプ、「主語の意図に沿った強い」タイプ、さらに「主語の意図とは無関係な強い」タイプに分けられることを見た。以下では、中右・西村 (1998) が提案する使役構文の角度からこれらの分類を再検討し、結果構文のプロトタイプを探ることとする。

4.2.2 使役構文における<基礎行為>と<使役行為>

前章で述べたように、中右・西村 (1998: 119) は使役構文を「使役動詞を述語動詞とする構文」と定義した上で、結果構文を使役構文の一種として位置付けている。使役構文の典型的な用法として、彼らは以下の文を挙げる。

- (10) a. I opened the door.
 b. 私はドアを開けた。
- (11) a. Mary killed John.
 b. 花子は太郎を殺した。

(中右・西村 1998: 120)

例文 (10) を見ると、主語である「私」が行った「ドアを開く」という行為によって、目的語である「ドア」が本当に開いたという結果が生じている。この2つの事象は融合して *open* という一つの動詞によって結ばれている。中右・西村 (1998: 122) に従って、主語の行為を X で、結果として生じる事態を Y で表す。

しかし、中右・西村 (1998: 123) によると、主語の行為には二つの側面がある。

例えば主語の行為 X を「ドアを押す (*I pushed the door*)」にして、結果として「ドアが開く (*the door opened*)」という事態が起こったとしよう。このとき行為 X は「ドアを開ける (*I opened the door*)」という行為 Z に一致する。二つの行為 X と Z の関係は、「X と Y の間に (ある種の) 因果関係が成立すれば、その X は Z で (も) ある」ということになる。中右・西村 (1998: 123) は X を低次の行為 (lower-order action) あるいは基礎行為 (basic action) と呼び、Z を高次の行為 (higher-order action) あるいは使役行為 (causative action) と呼ぶ。使役構文は基礎行為によって実現される使役行為を表すとも言える (中右・西村 1998: 123)。

ただし、前章で述べたように、典型的な使役構文において、一つの使役動詞で原因と結果の両方が表せるため、結果を起こす動作主の具体的な行為 (例えば *push, shoot* など) は文中に明示されない。それに対して結果構文は、「動詞+結果述語」という形式を持ち、原因と結果のどちらも明示される。動詞が原因、すなわち<基礎行為>を表すこととなる。

例えば、改めて (1a) を見ると、動作主“小王 (王さん)”が行った行為は“推大树 (大木を押す)”であり、この行為が<基礎行為>となる。結果として起こった“大树倒了 (大木が倒れた)”という状態変化は“小王 (王さん)”のこの行為によって起こされるため、この行為すなわち“(小王) 推 (大树)”は<使役行為>でもある。

- (1) a. 小王 推-倒 了 大树。
 xiǎo wáng tuī-dǎo le dàshù
 王さん 押す-倒れる PERF 大木
 「王さんは大木を押し倒した。」

4.2.3 使役構文における＜使役行為者＞の拡張

中右・西村（1998:125）に従えば、プロトタイプの使役構文において、動詞が＜使役行為＞を、主語が＜使役行為者＞を、目的語が行為の＜対象＞をそれぞれ表している。そして、プロトタイプの使役構文から、典型的ではない使役構文へと拡張していく。ここではまず、使役構文における構文拡張の側面の一つとして、＜使役行為者＞のカテゴリーの拡張から見ていこう。

中右・西村（1998:136）によると、プロトタイプの＜使役行為者＞は、自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において用いることによって、＜対象＞の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する人間である。そして、文の主語が（抽象体を含む）無生物である場合、＜使役行為者＞のプロトタイプと同様に、特定の事態を引き起こす＜基礎行為＞に相当する振る舞いを示す主体として捉えることができるため、＜使役行為者＞に相当する（中右・西村 1998:143）という。つまり、無生物主語の使役構文は使役構文のプロトタイプの一つの方向への拡張として扱うことができる（中右・西村 1998:136）。

- (12) a. Cancer kills thousands of people every year. (中右・西村 1998:141)
b. The argument didn't convince her. (中右・西村 1998:143)

さらに、特定の結果をもたらす＜基礎行為＞に相当するもの自体が使役構文の主語になる（13）のような文がある。中右・西村（1998:144）によれば、＜基礎行為＞の遂行者と同じく、＜基礎行為＞自体もそれがなければ結果が生じないという意味で結果状態を生じさせる力を持つから、＜使役行為者＞のカテゴリーの拡張として考えられる。

- (13) a. His announcement produced a violent reaction among the crowd. (中右・西村 1998:143)
b. Excessive drinking killed Bill. (中右・西村 1998:143)

＜使役行為者＞のカテゴリーをさらに拡張すると、(14) のような＜基礎行為＞からは解釈できない「無生物主語」の使役構文の用法に辿り着く。これらの使役構文の主語は、「特定の種類の变化を引き起こす力を本来的に備えているとは考えにくい場合でも、特定の種類の状況においてはそのような力に相当するものを投影することが可能な対象である——臨時的なエネルギー源と見なされている」（中右・西村 1998:145）という。この「臨時的なエネルギー源」の働き方は中右・西村（1998）には詳しく説明されていないが、英語の＜使役行為者＞のカテゴリーはこのような共通性または類似性に基づいて、＜基礎行為＞の遂行者から＜原因＞一般へと拡張される傾向はある（中右・西村 1998:145）とする。

- (14) a. What makes you think so? (中右・西村 1998: 144)
 b. That explains it. (中右・西村 1998: 145)

本論文は、中右・西村(1998)に基づき、中国語結果構文においても英語のようなく使役行為者>の拡張が存在するとし、それを構文拡張の基準の一つとして考察を進めたい。

4.2.4 原因事象と結果事象の意図性

本節では、結果構文を使役構文の角度から分析する際に重要な役割を果たすもう一つの要素である意図性について考察する。

中右・西村(1998: 124)は(10, 11)のような典型的な使役構文の表す因果関係のプロトタイプを「直接操作」(direct manipulation)と呼び、以下のように特徴付けている。

- (15) A. 行為者(人間)は行為対象に(位置, 状態などにおける)何らかの変化を生じさせることを目標としている。
 B. 行為者はAの目標を達成するために何らかの身体的な動作を行為対象に対して行う。
 C. 行為者はその身体的動作をコントロールしている(他者等に強制されているわけではない)。
 D. Bの動作によって、行為者から行為対象にエネルギーが伝達された結果、後者にAの目標通りの変化が直ちに生じる。
 E. Bの動作の実行およびその結果行為対象に生じるDの変化の主たる責任は行為者に帰せられる。

つまり、プロトタイプの使役構文における行為者は、一定の結果を生じさせるために自発的かつ意図的に行為対象に向けてある動作を行った結果、予想される目標が実現される。

「意図」の意味について、<結果>(例えば「ドアが開く」)は動作の目標とされるから意図性があることは容易に想起されるが、それだけでなく、その<行為>(例えば「ドアを押す」)も行為者が意図的に行うのでなければならない(中右・西村 1998: 128)という。例えば、ドアを開けようとする人は、その意志と無関係なことをして偶然ドアが開いたという状況は「意図的に行う行為」とは呼ばない。

使役構文と同様に、本来の結果構文においても、原因事象である<基礎行為>と結果の出現の両方に意図性がなければならない。

結果構文における原因事象すなわち<基礎行為>の意図性というのは、動詞が表す動作は動作主が意図的に行った動作であるということを指す。動作主の意図性を判断する際に、語用的な読みによって異なる解釈ができる。中国語を例にとると、(16a)において蠟燭を

消そうとして蠟燭を吹いたということが容易に想起されるが、(16b)のように、不意に転んで蠟燭が消えたという出来事は、明らかに意図性とは無関係であり、非対格自動詞“跌(転ぶ)”の主語は主題(Theme)であって、意志性を持つ動作主ではない。典型的な結果構文に用いられる動詞は必ず行為対象に変化を生じさせる力を持つ他動詞である。したがって、主語は意志を持つ有生物、前項動詞は他動詞あるいは非能格自動詞であり、結果構文における原因事象すなわち<基礎行為>は一般的に意図性を帯びているのである。

- (16) a. 他 吹-熄 了 蜡烛。
 tā chuī -xī le là zhú
 彼 吹く-消える PERF 蠟燭
 「彼は蠟燭を吹き消した。」
- b. *他 跌-熄 了 蜡烛。
 tā diē -xī le là zhú
 彼 転ぶ-消える PERF 蠟燭
 「彼が転んだせいで蠟燭が消えた。」

しかし、主語に意図性がない例も確かに存在する。(17)の文において、主語の行為が不注意によるものなのか、故意なのかは文脈がなければ分からない。

- (17) a. 张三 (不小心 / 故意) 摔-坏 了 相机。
 zhāng sān (bù xiǎo xīn / gù yì) shuāi -huài le xiàng jī
 張三 (うっかり / 故意に) 落とす-壊れる PERF カメラ
 「張三は(うっかり)カメラを落として壊した。」
- b. 张三 (不小心 / 故意) 摔-坏 了 相机。
 zhāng sān (bù xiǎo xīn / gù yì) shuāi -huài le xiàng jī
 張三 (うっかり / 故意に) 投げる-壊れる PERF カメラ
 「張三は(わざと)カメラを(地面に)投げて壊した。」

したがって、主語の意図性とは動詞が含意するものであって、文脈によってキャンセル可能である。ただし、はじめから意図性を含意しない動詞では結果構文をとることができない、ということができる。

次に状態変化の意図性について考えよう。結果事象の意図的であるというのは、<基礎行為>を通じて生じる状態変化が、<基礎行為>の「目標通りの変化」であるということである。逆に言えば、生じた変化は動詞の表す動作から予想される一定の「変化の方向性」

(斉木 2004) に沿っている必要がある。その際、状態変化を起こすこと自体が意図的であるという場合と、変化自体はもちろんその結果状態も意図したものであるという二つの側面がある。

まず、何らかの状態変化を生じさせること自体の意図性について考えよう。本来的な弱い結果構文では、状態変化が動詞の語義に含まれているため、変化が生じなければならないが、逆に派生的な強い結果構文の動詞は状態変化を含意していない。すなわち、本来的な弱い結果構文は必ず文脈を作って状態変化の意図性を取り消すしかないのに対して、派生的な強い結果構文はそのままでも意図していない状態変化を表すことが可能である。例えば、大木に手を当てて休もうと思ったとき、すでにその木が枯れて腐っており、倒れてしまったという状況で、(18) の文が使える。また (19) は必ずしも庭師がいたずらをしたくてわざと水をチューリップにかけて花を潰して遊んでいる状況を表すわけではない。

- (18) a. 他 不小心 推-倒 了 大树。
 tā bú xiǎo xīn tuī-dǎo le dà shù
 彼 うっかり 押す-倒れる PERF 大木
 「彼はうっかり大木を押し倒した。」
 b. He accidentally pushed down a dead tree.
- (19) a. 花匠(故意) 浇-扁 了 郁金香。
 huā jiàng (gù yì) jiāo -biǎn le yù jīn xiāng
 庭師(故意に) 水をかける-ぺしゃんこ PERF チューリップ
 「庭師はチューリップに水をかけて (わざと) ペしゃんこにした。」
 b. The gardener watered the tulips flat. (Carrier & Randall 1992)

このように、状態変化を起こすことに意図があるという条件は、派生的結果構文に関してはキャンセル可能であるということになる。

次に、変化は生じるにしても、その結果状態が意図したものでなければならないかどうかを考えよう。日本語や英語の本来的な弱い結果構文ではこの条件が当てはまる。例文(6)において、英語の *wipe* と日本語の「拭く」などの表面接触動詞は「対象に付着している異物が除去される」という「変化の方向性」を含意するため、*clean* や「きれい」などのような方向性に矛盾しない形容詞が結果述語として生起できるが、変化の方向性に反する *dirty*、「汚い」などの表現は結果述語として生起することはできない。これに対して中国語の場合、動詞“擦”は *wipe* や「拭く」ほど「変化の方向性」は強くなく、(9c) も可能である。(20) は類例である。

(20) 他 把 地 扫干净 / -脏 了。

tā bǎ dì sǎo gàn jìng / -zāng le

彼 ACC 床 掃除-きれい / -汚い PERF

「彼は床をきれいに汚く掃除した。」

(斉木 2004)

一方、派生的な強い結果構文であれば、英語でも変化の方向性から外れる場合も許容される。(19b) を例にとると、*water* という動詞から想定される一般的な変化の方向性は *wet* などであるはずが、英語において、この方向性から完全に外れた *flat* も可能である。

(19) b. The gardener watered the tulips flat.

(Carrier & Randall 1992)

以上から、プロトタイプの結果構文における意図性と、そのキャンセルによる拡張について次のようにまとめることができる。

(21) a. 動作主の意図性

日本語・英語・中国語でキャンセル可能

b. 状態変化の意図性

英語・中国語の派生的な強い結果構文でキャンセル可能

c. 結果状態の意図性

中国語でのみキャンセル可能

4.2.5 因果関係の意味要素

本節では、中右・西村(1998: 124)が提案する(15)の「直接操作」の定義は、以下のよう分解できる。

- (22) a. (A) 結果状態の出現には行為者の意図性がある。(結果事象の意図性)
b. (B) 原因事象は対象に対して行う動作を表す。(前項動詞は他動詞)
c. (B、C) 行為者は意図的に動作を行う。(原因事象の意図性)
d. (C) 行為者は意志性を持つ有生物である。(有生物主語)
e. (D) 目標通りの結果が発生する。(結果事象の意図性)
f. (D) 原因と結果の間に時間的な間隔がない。(直接因果関係)
g. (E) 動作主が結果に対して責任を持つ。(使役行為者は動作主)

まとめて言うと、結果構文の因果関係に影響を与える主な要素は以下の五つである。

- (23) i. 原因事象と結果事象の意図性
 ii. 前項動詞の他動性
 iii. 主語の意志性
 iv. 因果関係の間の連続性
 v. 使役行為者

i, ii, iii, v はすでに上で検討したが、iv について少し説明を加えたい。Goldberg (1995: 193) は結果構文について以下の制約を提案している。

- (24) The action denoted by the verb must be interpreted as directly causing the change of state: no intermediary time intervals are possible.

この制約によると、例えば (25) の文では「食べる」という動作は必ず「彼」が気持ち悪くなるまでずっと続けなければならず、時間的に継続していない「彼は何かを食べて、その後しばらくたったら彼は気持ち悪くなった」という解釈はできない。(26) (27) に示す通り、この制約は動詞のアスペクトに関係なく結果構文一般に成り立つ基本的な性質であり、原則としてすべての結果構文はこれに従う。

- (25) He ate himself sick.

- (26) a. Harry shot Sam dead.

- b. Harry shot Sam *for an hour. [telic, except on repetitive reading]

- (27) a. Sam talked himself hoarse.

- b. Sam talked for an hour. [atelic]

(Goldberg 1995: 194)

では、中国語の結果構文にもこの制約が成立するであろうか。例文 (28) の“撕破 (引き裂いて破る)” の場合、「紙を引き裂く」という原因事象から直ちに「紙が破れる」という結果事象が生じる。また、“穿破 (履きつぶす)” において「靴がだめになる」という結果が発生するまでその靴を履き続けており、「履き続ける」ことは「靴がだめになる」ことの直接の原因といえる。

- (28) a. 他 撕-破 了 那张纸。
 tā sī-pò le nà zhāng zhǐ
 彼 引く-破れる PERF あの・CL・紙
 「彼はあの紙を引き裂いて破った。」

- b. 她 穿-破 了 耐克跑鞋。
 tā chuān-pò le nài kè pǎo xié
 彼女 履く-破れる PERF ナイキのランニングシューズ
 「彼女はナイキのランニングシューズを履き続けてシューズをだめにして
 しまった。」

しかし、(29a)において、孟姜女は長城が崩壊するまで泣き続けるのではなく、泣いてしばらくたったら長城が崩壊するという意味を表すため、二つの事象の間に明らかに時間的間隔が存在する。帥 (2009) はこのタイプにおいて動作「泣く」と結果「崩れる」は同時に発生するのではなく、二つの独立した事象であるとする。

また、Shibagaki (2013:38) は (29b) の文について、使役関係を持つ二つの事象の間に、一種の「内部事象 (internal event)」が存在すると主張する。先行事象は後続事象を直接に引き起こすのではなく、後続事象の主体 (Actor) は先行事象の発生に何かを感じ (feel) ており、その感情 (feelings) は Actor が後続事象を行う動機付けであるという。すなわち、「たくさんのお客さん」はまずその場所がうるさくてまたは居づらいと感じているからこそ、その場所から逃げ出すのである (Shibagaki 2013:38)。本論文はこの観点を支持する上で、この分析を“哭走”以外のタイプにも応用して分析していく。

- (29) a. 孟姜女 哭-倒 了 万里长城。 (Huang 2006)
 mèng jiāng nǚ kū-dǎo le wàn lǐ cháng chéng
 孟姜女 泣く-崩れる PERF 万里の長城
 「孟姜女が泣いて（その切なさが神様を感動させ）万里の長城が（神様の力によって）崩れてしまった。」
- b. 黛玉 哭-走 了 很多 客人。 (Li 1990)
 dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén
 黛玉 泣く-帰る PERF たくさんの 客
 「黛玉は泣いて、多くのお客さんが帰ってしまった。」

以上から、「原因事象は結果事象を直接引き起こすため、両事象間に連続性がなければならない」という制約は、中国では必ずしも成り立たないことが分かる。そこで、本論文は中国語結果構文のタイプごとに、原因事象と結果事象の結合の緊密性および使役行為者の拡張を考察することにする。その上で、構文文法の角度から動補構造における項構造の融合パターン of 拡張も加えて、結果構文の拡張過程を考察していく。

4.2.6 プロトタイプの結果構文の意味特徴

これまでの議論を踏まえ、本論文でいう中国語におけるプロトタイプの結果構文の意味特徴をまとめてみよう。プロトタイプの結果構文は典型的な因果関係を表すため、(22) の条件に完全に合致する。

- (30) a. 原因事象と結果事象のどちらにも意図性がある。
b. 前項動詞は他動詞である。
c. 主語は意志性を持つ有生物である。
d. 因果関係は直接的であり、時間間隔はない。
e. 使役行為者 (Causer) は<基礎行為>の遂行者 (Actor) である。

この意味条件からは、中国語においてプロトタイプの結果構文といえる文は“擦干净 (きれいに拭く)”のような手段・目的の関係を持つと考えられる一部の<目的語指向型>のみである。前文に挙げた (1) (5c) (16a) の文はプロトタイプに属する。ほかに以下の文もプロトタイプと考えられる。

- (31) a. 爸爸 点-亮 了 煤油灯。 (施 2005)
bà bà diǎn-liàng le méi yóu dēng
父 ともす-光る PERF ランプ
「父はランプをともした。」
- b. 连长 叫-醒 了 勤务员。 (施 2005)
lián zhǎng jiào-xǐng le qín wù yuán
中隊長 呼ぶ-目覚める PERF 用務員
「中隊長は用務員を呼んで起こした。」
- c. 他 擦-亮 了 杯子。 (石村 2011: 76)
tā cā-liàng le bēi zi
彼 磨く-ピカピカ PERF コップ
「彼はコップをピカピカに磨いた。」
- d. 她 染-红 了 头发。 (石村 2011: 76)
tā rǎn-hóng le tóu fa
彼女 染める-赤い PERF 髪の毛
「彼女は髪を赤く染めた。」

- e. 弟弟 踢倒 了 椅子。 (石村 2011: 76)
 dì dì tī-dǎo le yǐzi
 弟 蹴る-倒れる PERF 椅子
 「弟が椅子を蹴り倒した。」

(31a) を例文にとってプロトタイプの結果構文の意味特徴を説明する。

この文の原因事象は“爸爸点煤油灯(父がランプをともし)”という<基礎行為>であり、結果事象は“煤油灯亮了(ランプが光った)”という状態変化である。原因事象の意図性について、動作主“爸爸(父)”は意志性を持つ有生物であり、他動詞“点(火をつける)”が表す動作も「父」が自分の意志を持って意図的に行った動作である。

結果事象の意図性は①変化が生じたのは動作の目標通りの対象物か否か、②生じた変化は動詞から予想されるか否かという二つの方面から考えることができる。変化が生じた“煤油灯(ランプ)”は“点(ともし)”の通常の対象物であると同時に、生じた変化“亮(光る)”も“点(ともし)”という動詞に想定される変化方向に一致するため、目標通りの変化が生じたと言える。そして、ランプに火をつけることはランプが光るという状態の直接の原因であり、二つの事象の間に時間差がないことは容易に想定できる。以上を踏まえ、“爸爸点煤油灯(父がランプをともし)”という<基礎行為>の遂行によって、“煤油灯亮了(ランプが光った)”という目標が達成されるため<使役行為>が実現し、<基礎行為>の行為者と対象はそれぞれ<使役行為>の行為者と対象と見なされ、使役関係を表す結果構文のそれぞれの主語と目的語として表現される。

以上から明らかなように、プロトタイプの結果構文において、原因事象と結果事象は手段・目的関係で緊密に結ばれ、一体化して一つのまとまりとして働く。そして、意味制限がもっとも厳しいプロトタイプを起点として、因果関係の条件を一つずつ外していくと、「弱い」結果構文から次第に「強い」結果構文に拡張し、意味特徴を少しずつ変えながら様々なタイプの結果構文が順次形成され、結果構文という形式で表せる状況も段階的に広がっていく。

4.2.7 プロトタイプの結果構文における項構造の融合と構文表示

本節では、プロトタイプの結果構文を Goldberg(1995)の構文文法の視点から分析する。この考え方に従えば、まず動詞と結果補語はそれぞれが持つ項の意味役割を融合する。次に、動補構造全体に「使役役割」が別途付与される。これにより、動補構造の項の意味役割が決定される。そして、動補構造のもつ意味役割(Goldberg(1995)が言う参与者役割に相当する)は構文自体が有する項役割と融合し、結果構文として実現する実際の統語形式が決定される。

第 2 章で述べた通り、結果構文の意味は主動詞と結果述語の複合によって決まるため、構文の項役割となるのは二つの動詞それぞれの意味役割が融合したもの、すなわち動補構造の意味役割である。ただし、Li (1995) は、動詞の項が持つ意味役割がどの統語位置と結びつくかを決めるには意味階層 (thematic hierarchy) だけでは不十分であり、それ以外に「使役階層 (causative hierarchy)」も考慮に入れなければならないと主張する。意味階層において動作主 Agent は対象 Theme より卓越性が高いのに対して、使役階層では動補構造全体に結びつく二つの「使役役割 (causative roles)」、すなわち使役主 Cause と被使役主 Affectee が存在し、Cause は Affectee より卓越性が高い。さらに、使役階層は意味階層との相互作用によって動詞の項の統語上の位置を決める。Li (1995) は使役役割の指定条件として (32) の三つを提案する。以下、動補構造における意味役割の融合過程を分析してから、使役役割と結びつけつつ、動補構造の形成過程および構文の意味を考察する。

(32) The descriptive conditions for c-role assignment:

- a. The argument in the subject position receives the c-role Cause from a resultative compound only if it does not receive a theta role from V_{res} .
- b. The argument in the object position receives the c-role Affectee from a resultative compound if it receives a theta role at least from V_{res} .
- c. Theta roles can be assigned contrary to the thematic hierarchy if the arguments receiving them are assigned c-roles in ways compatible with the causative hierarchy.

例文 (1a) をもう一度取り上げ、典型的な結果構文における動詞と結果補語の項構造の融合をまず見てみよう。

(33) 小王 推-倒 了 大树。(= (1a))

xiǎo wáng tuī-dǎo le dàshù

王さん 押す-倒れる PERF 大木

「王さんは大木を押し倒した。」

(33) では、動詞述語文 “小王推大树 (王さんが大木を押す)” が原因事象であり、“大树倒了 (大木が倒れる)” という結果事象が引き起こされている。前項動詞 “推 (押す)” は他動詞であり、動作主 Agent “小王” (Ag) と主題 Theme “大树” (Th_i) という 2 つの項をとる。一方、結果補語 “倒 (倒れる)” は非対格自動詞であり、主題項 “大树” (Th_i) のみをとる。Goldberg (1992) によると、結果構文は項を最大 2 つしか取れないが、中国語の場合は結果構文に相当する動補構造も同じく 2 つの項しかとれない。主動詞と結果補

語が融合するとき、Agent はそのまま受け継がれるが、Th_iと Th_jは同一であるため、1つの位置しか取れない。ただし、Th_iと Th_jの両者が融合して実現するのか、どちらか一方が抑制されて出現していないのか、抑制されるとすれば Th_iと Th_jのどちらが抑制されるのか、このままでは判断できない。この点は後でまた取り上げることにする。

次に、卓越性の階層により、意味階層の中でより際立つ Agent 項は、使役階層の中で卓越する Cause と融合して主語位置をとり、卓越性の低い Th_i項または Th_j項が Affectee と融合して目的語となる。この過程を (34) に示す。

(34) V 推<Ag Th_i> + V 倒<Th_j> → V_{caus} 推・V_{res} 倒<Ag[Cau] Th_i/Th_j[Aff]>
 (小王推大树) (大树倒了) (小王推倒了大树)

構文ボックスによる表示を (35) に示す。Goldberg (1995 : 64) によると、同じ構文であっても、動詞の意味と構文の意味の間にある関係、つまり R 関係 (R-relation) は異なる可能性がある。中国語のプロトタイプの結果構文において、動補構造が表す原因事象と結果事象は緊密に結ばれて一つの典型的な使役動詞のように振る舞うため、使役という構文意味を具体化する「事例 (instance)」の一つであると言える。また、プロトタイプの場合、原因事象と結果事象の両方に意図性があり、またその因果関係は手段・目的の関係でもあるため、構文に現れる動補構造に「+intended」という意味制約があると考えられる。ここで注意すべきは、Li (1995) がいう Cause という使役役割は本論文において使役構文の意味特徴として議論される「使役動作主 Causer」とは別の概念であり、完全に対応するわけではない。

(35) 結果構文 + “推倒”

Sem	CAUSE-RES	<	Ag=Cause	Th _i /Th _j =Affectee	>
R : instance	R [推・倒]	<	小王	大树	>
	+intended				
Syn	[Vt-V/ADJ]		SUBJ	OBJ	

次節から、<目的語指向型>結果構文の中で、プロトタイプから意味的ないし形式的に拡張されるタイプを見ていく。

4.3 特殊なく目的語指向型> I : 無生物主語タイプ

4.3.1 無生物主語タイプの意味特徴

まず、「主語は意志性を持つ有生物である」という制限を外すと、以下のような無生物主語の<目的語指向型>となる。

(36) a. 大风 吹-折 了 树枝。 (施 2005)

dà fēng chuī-shé le shù zhī

大風 吹く-折れる PERF 木の枝

「大風が木の枝を吹き折った。」

b. 大雪 压-塌 了 房顶。

dà xuě yā-tā le fáng dǐng

大雪 押し付ける-崩れる PERF 屋根

「雪が屋根に積もって屋根を押しつぶした。」

c. 大雨 冲-垮 了 河堤。

dà yǔ chōng-kuǎ le hé dī

大雨 押し流す-崩れる PERF 土手

「大雨が土手を押し流した。」

d. 希望 点-亮 了 孩子们的眼睛。

xī wàng diǎn-liàng le hái zǐ men de yǎn jīng

希望 ともす-明るい PERF 子供たちの目

「希望が子供たちの目をキラキラさせている。」

e. 困难 压-垮 了 我们的意志。

kùn nán yā-kuǎ le wǒ men de yì zhì

困難 押し付ける-崩れる PERF 我々の意志

「困難が我々の精神を押し潰した。」

これらの文において、主語は人や動物などの意志性を持つ有生物ではなく、自然現象や抽象的な概念などを表す無生物である。前項動詞は動作を表す他動詞であり、主語の動作は目的語に特定の変化をもたらすという使役関係を持つことでプロトタイプの結果構文と共通している。また、原因となる動作が行われてから結果となる状態変化が発生するまで、時間のかかる場合（“压塌”“冲垮”“压垮”）と、時間はかからず一瞬で起こる場合（“点亮”）、あるいは時間の長さが判断しかねる場合（“吹折”）があるが、主語の動作は目的語に直接

作用して結果を引き起こし、その間に時間的間隔はないため、直接因果関係であると認められる。

(36a) の例であれば、原因事象“大风吹树枝（風が木の枝を吹く）”において、＜基礎行為＞の主体“大风”が自然現象であるため、“吹”という動作は動作主が意図的に行う行動ではないが、動詞“吹”は(16a)に示したように他動詞として機能でき、原因事象の動作は意図的に行うことは可能である。

- (16) a. 他 吹-熄 了 蜡烛。
tā chuī-xī le là zhú
彼 吹く-消える PERF 蠟燭
「彼は蠟燭を吹き消した。」

結果事象“树枝折（枝が折れる）”において、大風は枝を折りたくて吹くわけではないので、結果事象にも意図性がなく、二つの事象の間に手段・目的の関係も当然存在しない。ただし状態変化は動詞から予想されるという点からいうと、二つの事象は完全に独立しているとは言えず、(37)のように動詞の表す動作によって意図的にその結果を生じることが可能である。

- (37) 妖怪 吹-折 了 树枝。
yāo guài chuī-shé le shù zhī
妖怪 吹く-折れる PERF 木の枝
「妖怪が木の枝を吹き折った。」

中右・西村(1998: 136)によると、プロトタイプの使役行為者は、自らの力ないしエネルギーを意図的にかつ自らの責任において用いることによって、対象の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する人間である。この定義を見ると、無生物の自然現象などが主語となる場合、無生物主語は力を「意図的にかつ自らの責任において」用いるという点と、「達成すべき目標を持つ」という点で、プロトタイプの使役行為者と異なる。(36)の例文に即していえば、“大风”“大雨”は勢いよく吹く/降ることによって、自らのパワーで木の枝や土手に影響を与え、後者に「折る」や「流される」のような状態に導く。“大雪”は短時間内に大量に降って屋根に積ってくるせいで、屋根が潰れるという結果を招く。さらに、抽象的なもの“希望”は人を励まし、人の目をキラキラ輝かせる。“困难”は人に精神的なプレッシャーをかけ、人の意志を潰してしまう。すべての例において、無生物の自然現象ないし抽象的な概念は、自らの力ないしエネルギーを用いて活動し、目的語にとある一定の変化を起こす力を持つ。そのため、＜使役行為＞の動作主と

対象はそれぞれ＜基礎行為＞の動作主と対象に対応するといえるが、そこに意思や意図は存在しない。

中右・西村（1998：140）は（38）のような英語の無生物主語の使役構文かつ結果構文において、このような自然現象を「擬人化」（personification）の一種であると主張する。

- (38) a. In Brevard Country, wind whipped the fire into a forty-foot wall of flames.
b. An outdoor heater somehow toppled over and knocked me unconscious.

（中右・西村 1998：191）

しかし、(36) すべての場合で無生物にあたかも意図があるかのように扱っていると思われない。使役行為者は有生物から、擬人化を通じて、自らに変化を起こす力やエネルギーを持つ無生物へと拡張されて、構文として結果構文の範囲が広がったと考えられる。

形式的にプロトタイプの結果構文とは変わらないが、使役行為者すなわち＜基礎行為＞の主体は無生物に広がるため、この構文はプロトタイプから拡張された結果構文である。結果状態は動詞に含意される変化方向に一致するので、原因事象と結果事象はまだ一つのまとまりとして働くことは可能であるが、プロトタイプにみられる手段・目的関係は消失し、原因事象と結果事象の結合の緊密性は少し下がることになる。

- (39) a. 原因事象と結果事象のどちらにも意図性はないが、結果述語の表す状態変化は前項動詞の変化方向に一致する。
b. 前項動詞は他動詞である。
c. 主語は意志性を持たない自然現象や抽象的な概念などの無生物である。
d. 因果関係は直接的であり、時間間隔はない。
e. 使役行為者（Causer）は＜基礎行為＞の遂行者（Actor）である。

4.3.2 無生物主語タイプにおける項構造の融合と構文表示

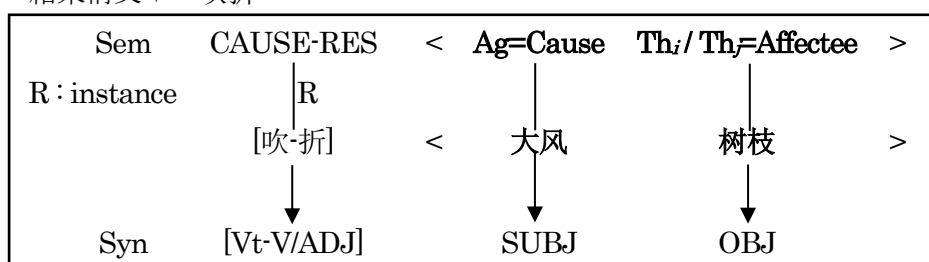
(36) のタイプは主語が無生物であること以外に、プロトタイプの結果構文とはあまり変わらないため、後者と同様の項構造の融合過程はみられる。(36a)では、前項動詞“吹（吹く）”は Agent “大风”と Theme “树枝”（Th_i）という 2 つの項をとり、結果補語“折（折れる）”は Theme “树枝”（Th_j）のみをとる。両者の融合により、Agent はそのまま受け継がれるが、Th_iと Th_jが同一であるため融合または抑制によって 1 つの位置しか取れない。そして、Agent 項は使役階層の Cause と融合して主語位置をとり、Th_i項または Th_j項は Affectee と融合して目的語となる。この過程を（40）に示す。

- (36) a. 大风 吹-折 了 树枝。 (施 2005)
 dà fēng chuī -shé le shù zhī
 大風 吹く-折れる PERF 木の枝
 「大風が木の枝を吹き折った。」

- (40) V 吹<Ag Th_i>+V 折<Th_j> → V_{caus}吹-V_{res}折<Ag[Cau] Th_i/Th_j[Aff]>
 (大风吹树枝) (树枝折了) (大风吹折了树枝)

構文ボックスによる表示もプロトタイプの結果構文とほぼ同じであるが、動補構造が表す原因事象と結果事象の結合の緊密さから、動補構造の意味は結果構文の意味の一事例 (instance) と言えるものの、使役行為の意図性は失われたため、[+intended] という意味制約はなくなる。また、主語位置をとる Agent 項に対する有生性制限もない。

- (41) 結果構文+“吹折”



4.4 特殊なく目的語指向型Ⅱ：強い結果構文

本節では、主語が意図的に行った行為が主語の意図しない結果を引き起こす場合の結果構文を見る。4.4.1 節では意図とは無関係な結果が生じる結果構文を、4.4.2 節では意図とは逆の結果が生じてしまう結果構文を分析する。中国語と英語のどちらにもある (7,8) が前者に、中国語のみで可能な (9) が後者に相当する。

4.4.1 意図しない結果を表すタイプ

ここで意図とは無関係な結果が生じる結果構文とは次のようなものである。以下の文では主語はすべて意志性を持つ有生物であり、他動詞である前項動詞の表す<基礎行為>も動作主が意図的に行う行動であるため、原因事象には意図性があるといえる。一方、変化が生じた目的語は<基礎行為>の通常の対象であり目標通りの対象と言えるが、結果補語の表す状態変化は動作主の予期していない変化であり、動詞の意味からも一般的に想定される動作主の目標ではない。

- (42) a. 花匠 浇-扁 了 郁金香。(= (2a))
 huā jiàng jiāo-biǎn le yù jīn xiāng
 庭師 水やりをする-ぺしゃんこ PERF チューリップ
 「庭師はチューリップに水をかけて、ぺちゃんこにした。」
- b. 他 穿-破 了 那双鞋。(= (2c))
 tā chuān-pò le nà shuāng xié
 彼 履く-破れる PERF あの-CL-靴
 「彼はその靴を履き、その靴が破れた。(→彼はその靴を履きつぶした。)」
 (申・望月2007)
- c. 小王 养-死 了 金鱼。
 xiǎo wáng yǎng-sǐ le jīn yú
 王さん 飼う-死ぬ PERF 金魚
 「王さんは金魚を飼って、金魚が死んだ。」

(42) の例文において、補語の表す状態変化は動詞の変化の方向性からは外れている。「チューリップに水をやる」という行為の目的は、チューリップに水分を与えることであり、花自体に水が当たって倒してしまうことは、一般的に想定しうる変化の方向ではない。「靴を履く」のはそれを履いて歩いたり走ったりするためであり、使えなくすることは一般的な目的とは言いがたい。金魚を「飼う」ことによって、“小王养肥了金鱼(王さんは金魚を飼って金魚が大きくなる)”のように金魚を大きくするという変化は自然であるが、金魚が死ぬという結果は動詞の意味から予想されない。すなわち、(42) の文の結果状態はすべて動詞が含意する変化の方向から外れており、動作主の目標通りの変化を表すとは考えにくく、結果事象には意図性がない。

使役行為者について、このタイプの結果構文において、動作主は結果自体を意図していないにもかかわらず、結果の出現に責任を問われる点でプロトタイプの結果構文と共通し、主語の意図的に遂行する行為は目的語に起こった状態変化の直接な原因となるという典型的な因果関係のスキーマに合致している。そのため、使役行為者もプロトタイプの結果構文と同じく、＜基礎行為＞を意図的に行って一定の結果を引き起こす動作主であることが分かる。プロトタイプとの相違は、結果事象には意図性がないという一点である。

日本語では、いわゆる結果構文ではこのような拡張は許されないが、少なくとも一部の複合動詞では可能である。この点については、将来の研究に委ねたい。

- (43) a. タロウは空き缶を踏み潰した。
 b. *タロウは空き缶をぺちゃんこに踏んだ。

- (44) a. ハナコはスニーカーを履きつぶした。
 b. *ハナコはスニーカーをボロボロに履いた。

なお、英語の結果構文においても、(44) に示すように、結果述語が表す状態変化が動詞に含意される変化方向から外れる場合はあるが、影山 (2001: 172) に指摘されるように、実際に変化した結果より程度を表す一種の誇張表現として使われることが多い。それに対して、中国語におけるこれらの文は事実を叙述するだけであり、何らかの修辭的な機能を担う必要はない。派生的結果構文において、中国語における結果構文は拡張程度も英語より高いと言えよう。

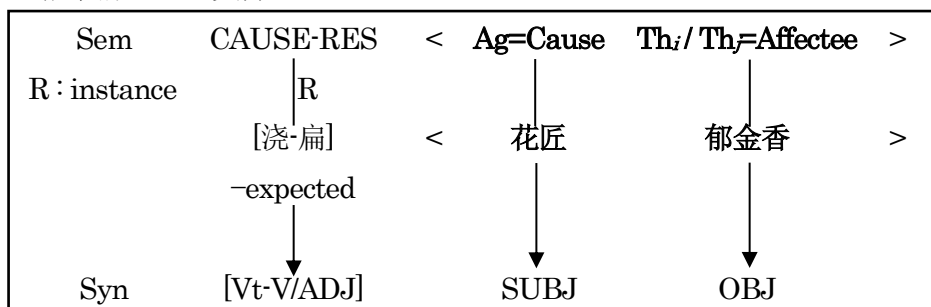
- (45) a. The gardener watered the tulips flat. (Carrier & Randall 1992)
 b. The horses dragged the logs smooth. (Washio 1997)

このタイプは形式的にはプロトタイプとは同一のため、項構造の融合過程も基本的に同じである。原因事象“花匠浇郁金香（庭師はチューリップに水をかける）”の動詞“浇”は Agent “花匠”と Theme “郁金香” (Th_i) という 2 つの項をとり、結果事象“郁金香扁了(チューリップがぺしゃんこになる)”の補語“扁(ぺしゃんこ)”は“郁金香” (Th_j) のみをとる。融合して使役役割にそれぞれ対応し、(46) のようになる。

- (46) V 浇<Ag Th_i> + V 扁<Th_j> → V_{caus} 浇-V_{res} 扁<Ag[Cau] Th_i/ Th_j[Aff]>
 (花匠浇郁金香) (郁金香扁了) (花匠浇扁了郁金香)

構文ボックスは以下のように表示される。結果事象は予想されていないため、プロトタイプおよび後文で議論する“哭走”タイプの場合と区別するために [-expected] で示す。また、原因事象と結果事象の間に時間差はないが、片方に意図性がないので典型的な因果関係すなわち使役関係からは外れている。そこで、動補構造と構文の間の R 関係に means はなく、単なる事例 (instance) となる。

- (47) 結果構文+ “浇扁”



結論として、このタイプの結果構文はプロトタイプと形式的に一致するが、動作主は意図していない結果を引き起こすという意味を表すため、原因事象と結果事象の間に手段・目的の関係はない。ただし、原因事象における動作の対象と結果事象における変化の主体は同一物であるため、動作を受けることと変化が起こることが同時進行であり、時間的な間隔はない。意味特徴は以下のようにまとめられる。

- (48) a. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意される変化方向から外れている。
 b. 前項動詞は他動詞である。
 c. 主語は意志性を持つ有生物である。
 d. 因果関係の間に時間間隔はない。
 e. 使役行為者 (Causer) は<基礎行為>の遂行者 (Actor) である。

4.4.2 目的とは逆の結果を表すタイプ

前節では行為者が全く意図していない結果を伴う結果構文であったが、中国語には行為者の意図とは逆の結果が生じてしまう結果構文もある。

- (49) a. 他 擦-脏 了 桌子。(= (2b)) (斉木 2004)
 tā cā-zāng le zhuōzi
 彼 拭く-汚い PERF テーブル
 「彼はテーブルを拭いた結果、テーブルが汚くなった。」
- b. 他 扫-脏 了 地板。 (斉木 2004)
 tā sǎo-zāng le dì bǎn
 彼 掃除-汚い PERF 床
 「彼は床を掃除した結果、床が汚くなった。」

テーブルを「拭く」および床を「掃除する」という動作は、テーブルや床の表面にあるほこりや汚れを取り除いてきれいにするという方向性が前提となるため、結果としてテーブルや床は汚くなってしまつては、明らかに変化の方向性は逆である。

このタイプの結果構文は、日本語はもちろん英語でも容認度が非常に低い、中国語でも必ずしも容認されるわけではない。“撕 (引き裂く)” という動詞の意味には動作主の力によって物をばらばらにするという変化方向を強く含意するため、(50b) のように本の表紙を引き裂いて表紙が完璧な状態になったという状況は想定できない。

- (50) a. 孩子 撕-破 了 书皮儿。(= (1d))
 hái zi sī-pò le shū pí er
 子供 引き裂く-破れる PERF 本の表紙
 「子供が本の表紙を引き裂いて破った。」 (石村 2011 : 76)
- b. *孩子 撕-完好 了 书皮儿。
 hái zi sī-wán hǎo le shū pí er
 子供 引き裂く-無傷 PERF 本の表紙
 「*子供が本の表紙を引き裂いて表紙が無傷の状態になった。」
- c. *He wiped the table dirty. (Washio 1997)

(49) のような例を見ると、中国語の動詞語義には結果が含まれていないようにみえるが、(50b) のように必ずしもそうとは限らない。また動詞“杀(殺す)”も多くの母語話者にとって、殺される対象は死んでいるが、死んでいなくてもよいという判断をする話者も少なくない。このように、中国語の動詞に結果状態が含まれるかどうかは個別の動詞や話者による違いがあり、idiosyncratic な側面が大きい。したがって、個人の語彙の中で、結果状態が任意である限り、前項動詞が含意する変化の方向とは逆の結果が生じてもよいということになる。

言い換えると、個人差はあるものの、中国語の動詞語義は結果状態を含んでも含まなくてもよいことが多い。含まれていればプロトタイプと同じであり、含まれていなければ意図しない結果を表す結果構文と変わらない。つまり、(49) の特殊性は構文の拡張ではなく、中国語の動詞語義の特殊性にあると考えられる。

ただし、結果状態が含意(entail)されていなくても、形式的にはプロトタイプと同一である。そのため、項構造の融合過程も基本的に同じである。原因事象“他擦桌子(彼がテーブルを拭く)”の動詞“擦”は Agent “他”と Theme “桌子”(Th_i) という 2 つの項をとり、結果事象“桌子脏了(テーブルが汚くなる)”の補語“脏(汚い)”は“桌子”(Th_j)のみをとる。融合して使役役割にそれぞれ対応し、(51) のようになる。

- (51) V 擦<Ag Th_i> + V 脏<Th_j> → V_{caus} 擦-V_{res} 脏<Ag[Cau] Th_i/Th_j[Aff]>
 (他擦桌子) (桌子脏了) (他擦脏了桌子)

(49) の構文ボックスによる表示も、(47) と変わるところはない。

(52) 結果構文+“擦脏”

Sem	CAUSE-RES	<	Ag=Cause	Th _i /Th _j =Affectee	>
R: instance	R [擦-脏]	<	他	桌子	>
	-expected				
Syn	[Vt-V/ADJ]		SUBJ	OBJ	

4.5 特殊なく目的語指向型>Ⅲ：“洗湿”タイプ

この節で考察するのは、結果が主語・動作主の意図とは異なり、かつ、前項動詞の表す行為を受ける対象と変化が起こる対象が一致しない構文である。

(53) a. 小王 洗-湿 了 袖子。(= (3a))

xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi

王先生 洗う-濡れる PERF 袖

「王先生は洗濯して袖を濡らしてしまった。」

b. 小王 切-钝 了 菜刀。(= (3b))

xiǎo wáng qiē-dùn le cài dāo

王先生 切る-鈍い PERF 包丁

「王先生は（何かを）切って、包丁の切れ味を鈍くした。」

c. 女朋友 吃-空 了 他的钱包。

nǚ péngyǒu chī-kōng le tā de qián bāo

ガールフレンド 食べる-空っぽ PERF 彼の財布

「恋人が（高価なものを大量に）食べて、彼の財布を空っぽにした。」

d. 孩子 尿-湿 了 裤子。

hái zǐ niào-shī le kù zi

子供 小便をする-濡れる PERF ズボン

「子供はおもらしをしてズボンをぬらした。」

e. 他 跑-烂 了 两双运动鞋。

tā pǎo-làn le liǎng shuāng yùn dòng xié

彼 走る-ボロボロ PERF 二-CL-運動靴

「彼が走るせいで二足の運動靴がボロボロになった。」

f. 小丑 跳-烦 了 我。 (Li 1990)
 xiǎo chǒu tiào-fán le wǒ
 ピエロ 跳ねる-飽きる PERF 私
 「ピエロが（長時間）跳ねるせいで私は飽きた。」

以下ではこのような例もプロトタイプからの自然な拡張であることを見ていく。

4.5.1 “洗湿”タイプの意味特徴

(53) の前項動詞は他動詞 (53a,b,c) ないし非能格自動詞 (53d,e,f) である。また、主語はすべて意志性を持つ有生物となっており、原因事象には意図性がある。

これまでに考察したタイプとの最も大きな違いは、この構文の目的語位置にある名詞句は前項動詞の意味上の目的語ではない点である。(53a,b,c) において、動詞「洗う」「切る」「食べる」の対象となる目的語は、それぞれ「洗濯物」「料理の材料」「食べ物」であるはずだが、実際に目的語の位置に現れて状態が変化しているのは、「(着ている服の) 袖」「包丁」「財布」である。

動詞に含意される変化の方向性を考えてみると、「洗う」という動詞から予測されるのは「濡れる」ではなく、「きれいになる」という変化であろう。「切る」という動詞は通常対象物に形や大きさの変化をもたらすことは想定されるが、切る道具の切れ味が鈍くなることは想定されていない。「食べる」という動詞からは「満腹」のような動作主に関する変化方向や食べ物が「なくなる」のような変化は一般的に予想されるが、食べ物ではない「財布」が「空っぽ」という状況は明らかに予期されていない。結果事象を目的としていない以上、結果事象の意図性もないと言える。

使役の角度から言い換えると、前節の“擦脏”タイプと同じように、動作主は結果自体を意図していないにもかかわらず、意図的に動作を行い、かつ結果の出現に責任を問われる点でプロトタイプの結果構文と共通するため、使役行為者は<基礎行為>を意図的に行って状態変化を引き起こす動作主である。ただし、このタイプにおいて、<基礎行為>の主体(Actor)は<使役行為>の動作主(Causer)に一致するとはいえ、前者の対象(Undergoer)は後者の対象(Affectee)に対応していない。前項動詞は他動詞の場合、動作を受ける対象は変化が起こる対象とは異なり、前項動詞は非能格自動詞の場合、動作を直接に受ける対象すら存在しない。この意味からいうと、このタイプにおける<使役行為>はプロトタイプからさらに離れている。

このタイプにおいて、原因事象と結果事象の間に時間差はないが、両者を結びつけるのは動作主の意図ではなく、偶然性によるところが大きい。例えば(53a)では「服を洗っている最中に、偶然袖が濡れた」という意味を表し、「木を押して倒す」に比べると二つの事

象は独立性が高い。そのため、原因事象と結果事象の間に何らかの一つの独立した内部事象 (Shibagaki (2013) が言う “internal event”) が出現していると考えられる。

(54)	原因事象	(内部事象)	結果事象
	[小王洗 (衣服)]	→ [小王的袖子沾到水]	→ [袖子湿了]
	王さんが (服を) 洗う	王さんの袖が水につかる	袖が濡れる

事象表示から分かるように、原因事象“小王洗 (衣服)”と結果事象“袖子湿了”の間に共通する項はない。ここで無関係に見える両事象を結び付け、原因事象からの影響を示唆しながら結果事象を引き起こす引き金を表す存在が内部事象である。(15) の「直接操作」の定義にかなり反しているにも関わらず、これらの文において使役関係が成立するのは、このような内部事象が存在するからであると考ええる。

内部事象のもつ両事象を繋ぐ力は、フレーム意味論によって説明することが可能である。Goldberg (1995 : 44) によると、動詞は語彙的にそのフレーム意味論的な知識の中でプロファイルすべき側面を決定し、プロファイルされる役割は動詞フレームの中で義務的にアクセスされ、その場面の焦点として機能する。また、Li (1995) の使役役割の指定条件を発展させた楊 (2013 : 97) の使役役割の融合原則によると、被使役主役割と融合可能なのは、結果述語のフレームでプロファイルされる変化主体でなければならず、かつ、それは前項述語の意味フレームに結びつく参与者でなければならない。

改めて (53a) の文を用いて説明すると、“洗 (洗う)” という前項動詞のフレームの中で、「洗う人」と「洗濯物」という参与者役割は最も基礎的な要素として一般的にプロファイルされるはずである。ただし、この文において「洗濯物」という役割は情報上の卓越性を失い、背景化されてそのまま伏せられる。その代わりに、「洗う人」という最も卓越している参与者役割の所有物である「袖」が、主要役割との従属関係によって動詞のフレームにおいて一つの役割として認められ、楊 (2013 : 97) のいう被使役主役割 (Affectee) に結びつく資格を持つと考えられる。

一方、結果補語“湿 (濡れる)” という状態動詞のフレームで「濡れたもの」という役割がプロファイルされるほか、「水」という要素も背景知識として「濡れる」の背景役割の一つとして動詞フレームに含まれる。もちろん、「水」や「濡れる」というのは前項動詞“洗 (洗う)” のフレームにも含まれている。こうして主要役割との従属関係によって動詞のフレーム内に現れた「袖」は、フレームにある「水」によって「濡れる」という結果状態を生じることが可能となる。

図式化すれば、以下のような関連付けによって、二つの事象を一体化させることができるのである。

- (55) a. 洗う－水－濡れる
 b. 動作主（洗う人）－動作主の一部（袖）

動作主の一部である「袖」が前景化されてプロファイルされ、結果補語のフレームでプロファイルされる役割「濡れたもの」と融合して文の目的語となる。こうして、共有項のない原因事象と結果事象が結ばれて結果構文という単文で表すことが可能となる。

前項動詞が非能格自動詞の場合も、原因事象と結果事象の間に内部事象が確認できる。(53e)の原因事象“他跑（彼が走る）”において、走る人が靴を履いていることは一般的常識あるいは百科知識であるため、“跑（走る）”という動詞の意味フレームの動作主「走る人」から、所有物「靴」が抽出できる。また、「走る」という動詞は動作動詞であり、ある程度の時間この動作が続くことは語義の中に含まれている。つまり、動作の継続時間が長くなればなるほど、靴の使用時間も長くなり、すり減っていくことが語用論的に推論される。この靴がすり減るという事象が次に、結果事象“两双运动鞋烂了（二足の運動靴がボロボロになる）”と結びつく。よって、“跑（走る）”の意味フレームでプロファイルされる役割として認められた「靴」が、“烂(ボロボロ)”の意味フレームでプロファイルされる変化が起こる主体と融合して目的語となる。なお、原因事象・内部事象・結果事象は同時進行であり、時間差はない。

(56)	原因事象		(内部事象)		結果事象
	[他跑]	→	[他穿的鞋长时间磨损]	→	[两双运动鞋烂了]
	彼が走る		履いている靴がすり減る		二足の運動靴がボロボロになる

状態変化を被る対象は、＜基礎行為＞の直接の対象ではなく、前項動詞の意味フレームに含まれていたものである。それがプロファイルされることによって参与者役割を付与され、目的語となって構文に現れる。また、原因事象と結果事象の間に内部事象が想定される点で、原因事象と結果事象は間接的となる。意味特徴は以下のように表示される。

- (57) a. i. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されていない。
 iii. 状態変化が起こる対象は、前項動詞の項ではないが意味フレームには含まれる。
 b. 前項動詞は他動詞ないし非能格自動詞である。
 c. 主語は意志性を持つ有生物である。
 d. 原因事象と結果事象の間に内部事象があり間接的だが、時間差はない。
 e. 使役行為者（Causer）は＜基礎行為＞の遂行者（Actor）である。

4.5.2 “洗湿”タイプにおける項構造の融合と構文拡張

ここでは、意味フレームによる項構造の融合過程を見ていくことにする。

前項動詞が他動詞の場合、主動詞に選択されているはずの内項が現れないのがこのタイプの特徴である。例文 (53a) では、前項動詞“洗”は Agent “小王”と Theme_iとして例えば“衣服” (Th_i) という 2 つの項をとり、結果補語“湿”は Theme “袖子” (Th_j) のみをとる。ただし、前述したいずれのタイプとも違い、Th_iと Th_jが同一ではなく、主動詞と結果補語の項構造には共通する項がない。結果として、“洗”の真の目的語“衣服”が現れず、“湿”の唯一の項“袖子”が目的語となっているため、抑制されるのは Th_iであることが分かる。抑制される Th_iは<使役行為>の対象ではないが<基礎行為>の対象であるため、Undergoer と表示する。Her (2007) によれば、項の抑制は意味的に削除されるわけではなく、構文の項として実現することがブロックされるだけである。したがって、前項動詞の内項も抑制はされても、動補構造の意味構造には存在していると考えられる。

Agent 項は使役役割の Cause と融合して主語位置をとり、Th_j項は抑制された Th_i項に代わって Affectee と融合して目的語になる。この過程を (58) に示す。

(53) a. 小王 洗-湿 了 袖子。(= (3a))

xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi

王先生 洗う-濡れる PERF 袖

「王先生は洗濯して袖を濡らしてしまった。」

(58) V 洗<Ag Th_i> + V 湿<Th_j>

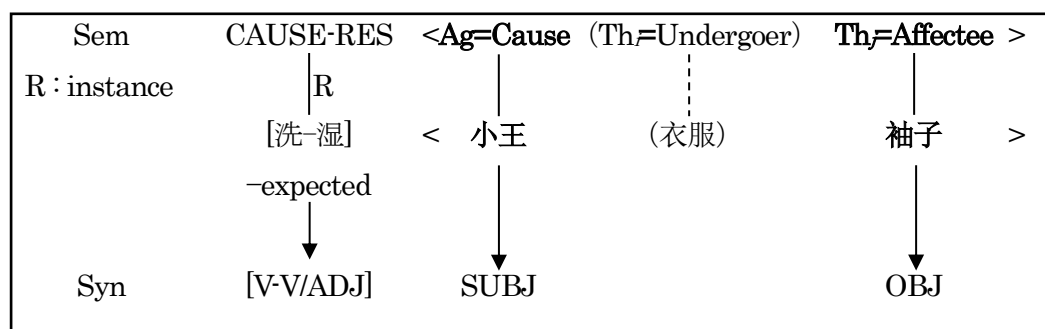
(小王洗衣服) (袖子湿了)

→ V_{caus} 洗-V_{res} 湿<Ag[Cau] Th_i[Und] Th_j[Aff]>

(小王洗湿了袖子)

構文上の表示について、“擦脏”タイプと同じく結果事象に意図性がないため[-expected]で示す。また動補構造と構文の間の R 関係は instance とする。

(59) 動補構造+ “洗湿”



なお、結果構文では Th_i が現れないにもかかわらず、(60) に示すように、前項動詞 “洗” 単独では Th_i は表出しなければならない。これは “洗” だけではなく、ほかの同種類の動詞でも同じであることが (61) から分かる。英語でも (62) のとおり、*cut* の目的語の抑制は許されないが、これは結果構文でも同じである。中国語の結果構文では項の抑制が許されることから、 Th_i の抑制は原因事象よりも結果事象を優先する中国語の結果構文の特徴であると言える。

(60) 小王 洗 了 *(衣服)。

xiǎo wáng xǐ le *(yī fu)

王さん 洗う PERF 服

「王さんは (服を) 洗った。」

(61) a. 小王 切-鈍 了 菜刀。(= (3b))

xiǎo wáng qiē-dùn le cài dāo

王さん 切る-鈍い PERF 包丁

「王さんは (何かを) 切って、包丁の切れ味を鈍くした。」

b. 小王 切 了 *(南瓜)。

xiǎo wáng qiē le *(nán guā)

王さん 切る PERF かぼちゃ

「王さんは (かぼちゃを) 切った。」

(62) a. *Lee cut.

b. *Lee cut the knife dull. (Williams 2014)

続いては (53e) を例にとって前項動詞が非能格自動詞の場合を見てみる。前項動詞 “跑 (走る)” は Agent 項のみをとり、結果補語 “烂 (ぼろぼろの)” も Theme 項のみをとる。共通する項はないが、融合するとそれぞれが動補構造の外項と内項の位置をそのままとり、動補構造は二項動詞として振る舞う。前項動詞は内項をとらないため、背景化される Undergoer は存在しないが、統語上の表示は “洗湿” タイプとは同じである。2 つの意味役割は使役役割と融合する際、卓越性の階層に沿って Agent 項と Cause、Theme 項と Affectee がそれぞれ対応する。

(53) e. 他 跑-烂 了 两双运动鞋。

tā pǎo-làn le liǎng shuāng yùndòng xié

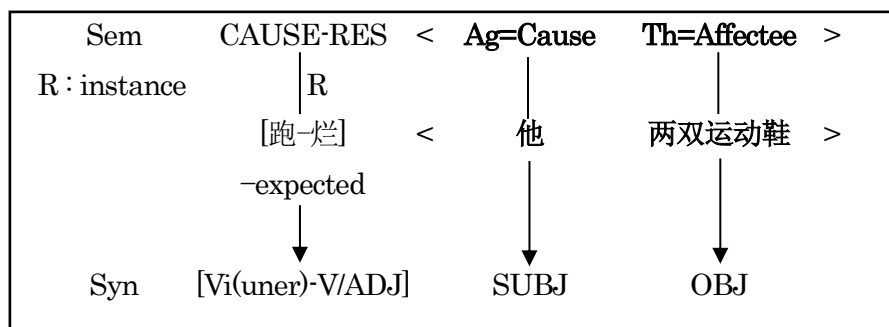
彼 走る-ボロボロ PERF 二-CL-運動靴

「彼が走って、二足の運動靴がボロボロになった。」

- (63) V 跑<Ag> + V 烂<Th> → V_{causvv} 跑-V_{res} 烂<Ag[Cau] Th[Aff]>
 (他跑) (两双运动鞋烂) (他跑烂了两双运动鞋)

構文上の表示も以下に示すように、他動詞との違いは前項動詞が（非能格）自動詞で、抑制される Undergoer 項が存在しない点のみである。

- (64) 結果構文+“跑烂”



なお、(62) の文は英語では非文であるが、動詞の目的語ではない名詞句が目的語の位置に生起する結果構文がある。

- (65) a. They drank the pub dry. (Goldberg 2004)
 b. The professor talked us into a stupor. (Goldberg 2004)
 c. They ran their shoes threadbare. (Rothstein 1992)

これらは結果というよりも程度の修辭的表現と見るべきである。またイディオム的な用法であり、生産性は中国語より低いと考えられる。いずれにせよ、Goldberg (1995: 191) が主張するように、動詞が固有の意味を保持しつつ、独自の項構造配列を持つのは構文の力による。

4.6 特殊なく目的語指向型>IV：“哭走”タイプ

この節では、原因事象にも結果事象にも意図性がない結果構文を扱う。

4.6.1 “哭走”タイプの意味特徴

以下の文において、前項動詞は人の心理現象または生理現象を表すため、主語は人間であるものの動詞の表す行為がコントロールできず、原因事象には意図性がない。同時に、これらの動詞はすべて非能格自動詞であり、行為の主体という項を一つとるだけで、状態変化をする内項をとらない。したがって原因事象と結果事象のどちらにも意図性がない。

- (66) a. 黛玉 哭-走 了 很多 客人。 (= (29b)) (Li 1990)
 dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén
 黛玉 泣く-帰る PERF たくさんの 客
 「黛玉が泣いたために、多くのお客さんが帰ってしまった。」
- b. 孟姜女 哭-倒 了 万里长城。 (= (29a)) (Huang 2006)
 mèng jiāng nǚ kū-dǎo le wàn lǐ cháng chéng
 孟姜女 泣く-崩れる PERF 万里の長城
 「孟姜女が泣いて（その切なさが神を感動させ）万里の長城が（神の力によって）崩れてしまった。」
- c. 小孩 哭-醒 了 邻居。 (杨 2013 : 41)
 xiǎo hái kū-xǐng le lín jū
 子供 泣く-目覚める PERF 隣人
 「子どもが泣いたせいで隣人は目覚めた。」
- d. 黛玉 笑-恼 了 宝玉。
 dài yù xiào-nǎo le bǎo yù
 黛玉 笑う-怒る PERF 宝玉
 「黛玉が笑ったことが原因で宝玉は怒った。」
- e. 妈妈 咳-醒 了 宝宝。
 mā ma ké-xǐng le bǎo bao
 母 咳をする-目覚める PERF 赤ちゃん
 「母が咳をしたせいで赤ちゃんは目をさました。」

主語が無意識的に行う行為ではあるが、自らの力またはエネルギーによって目的語に変化を生じさせ、かつ、その結果に責任を持つという点ではプロトタイプの＜使役行為者＞に共通する。なお、目的語に対する被影響性 (affectedness) を表す“把”構文で書き換えられることから、目的語は「変化主体」であるといえる。

- (67) 黛玉 把 很多 客人 哭-走 了。
 dài yù bǎ hěn duō kè rén kū-zǒu le
 黛玉 BA たくさんの 客 泣く-帰る PERF
 「黛玉が泣いたために、多くのお客さんが帰ってしまった。」

前節で述べた“洗湿”タイプと同じく、このタイプにも時間差はないが、原因事象と結果事象の間に内部事象が想定できる。(66a) を例にとると、前項動詞“哭(泣く)”の意味フレームでは「泣く人」という役割をプロファイルするほか、様々な場面を想起させる。「周囲の人を困らせる」という状況もその一つである。その状況は結果述語“走(帰る)”と結びつき、「泣く」という行為が、“走(帰る)”の意味フレームでプロファイルされる「帰る人」という参与者役割に対して被影響性を与える。

(68) 原因事象	(内部事象)	結果事象
[黛玉哭]	→ [在場的客人忍受不了]	→ [客人走了]
黛玉が泣く	その場の客が耐えられなくなる	客が逃げ帰る

<基礎行為>に意図性がないのは無生物主語の<目的語指向型>に似ているが、無生物主語タイプの場合、結果状態は前項動詞の変化方向に一致し、かつ、両事象の間に内部事象がないため、因果関係はより緊密であり、一つのまとまりとして扱うことが可能である。一方、このタイプは語用論的に推論される状況を用いて両事象の関係を捉えるしかなく、いわば一回きりの臨時的な因果関係で結ばれるので、結果構文として原因事象と結果事象の関係はかなり緩いと考えられる。

よって、このタイプの意味特徴は以下のように表される。

- (69) a. i. 原因事象と結果事象のいずれも意図性を持たない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されない
 iii. 状態変化が起こる対象は前項動詞の項ではない。
 b. 前項動詞は主語にコントロールできない行為を表す非能格自動詞である。
 c. 主語は意志性を持たない。
 d. 原因事象と結果事象の間に内部事象があり間接的だが、時間差はない。
 e. 使役行為者 (Causer) は<基礎行為>の遂行者 (Actor) である。

なお、このタイプの文は (70) のように英語でもまれにはあるが存在することから、この拡張は英語でも可能であることが分かる。

(70) Jack sneezed the napkin off the table. (Fauconnier & Turner 1996)

4.6.2 “哭走”タイプの項構造の融合と構文拡張

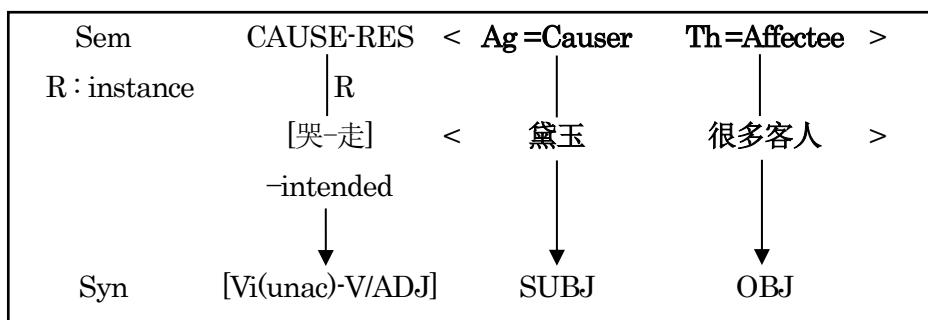
改めて (66a) を取り上げて項構造の融合と構文拡張を見よう。前項動詞“哭(泣く)”は外項“黛玉”のみをとり、結果述語がとるのも Theme “很多客人” (Th) という内項一

っただけである。二つの項はそのまま動補構造の二つの項として受け継がれる。使役役割と融合する際には、“哭（泣く）”の外項がそのまま結果複合動詞の外項となり、Causeの役割を付与される。Th（“很多客人”）はAffecteeの役割を与えられて動補構造の内項になる。項構造の融合過程を（71）に示す。

- (71) V 哭<Ag> + V 走<Th> → V_{caus} 哭-V_{res} 走<Ag [Cau] Th [Aff]>
 (黛玉哭) (很多客人走) (黛玉哭走了很多客人)

また、原因事象と結果事象のいずれにも意図性がないため、[-intended] で示す。

- (72) 結果構文+ “哭走”



4.7 <目的語指向型>における構文拡張

以上、<目的語指向型>の結果構文において、事象の意図性と使役行為者の拡張および項構造の融合過程という観点で、結果構文のプロトタイプから最も特殊な“哭走”タイプまで5つのタイプを考察した。この5つのタイプの意味特徴にはそれぞれ相違点はあるが、前項動詞の表す動作が結果補語の表す状態変化を生じさせるという点で共通している。

各タイプにおける中心的な考察要素および考察の結果は表1のようにまとめられる。プロトタイプの結果構文は意味上も形式上も最も厳しい制限がかかっているが、その制限を一つずつ外していくと、意味のないし形式的に新しい構文タイプに拡張され、結果構文という形式で表せる状況も自然に広がっていく。ただし、それぞれの条件の重要性は同等ではないようである。まず、使役行為者の存在は必須である。また前項動詞の含意や因果関係の直接性があるほうがプロトタイプに近く、意図性はプロトタイプ以外ではそれほど重要ではない。

表1 <目的語指向型>のまとめ

	Prototype	無生物主語	“浇扁”型	“洗湿”型	“哭走”型
前項動詞	他動詞	他動詞	他動詞	他動詞 or 非能格自動詞	非能格自動詞
前項動詞の 結果の含意	○	○	×	フレーム 意味論的	語用論的推論
因果関係の 直接性	○	○	○	×	×
原因事象 の意図性	○	×	○	○	×
結果事象の 意図性	○	×	×	×	×
動補構造の 項構造	<Ag, Th _j >	<Ag, Th _j >	<Ag, Th _j >	<Ag, (Th _j), Th _j >	<Ag, Th _j >
使役行為者	Actor	Actor (無生物)	Actor	Actor	Actor

なお、英語では、結果構文の生産性や拡張の程度は中国語ほど高くはないが、構文拡張の過程はここまでは大きな違いが見当たらない。

4.8 本章のまとめ

本章では、<目的語指向型>型の結果構文を使役性の観点から下位分類し、意味構造および項構造の面から各構文の意味的・形式的な特徴を考察した。

その結果、プロトタイプから条件を一つずつ外して行くことにより、構文が拡張される過程が説明できた。

第5章 <主語指向型>結果構文

5.1 はじめに

本章で扱う<主語指向型>とは、変化が生じるのは主語であり、結果補語は主語の結果状態を表す構文である。すなわち、動補構造の結果補語が表す状態変化が主語を指向する構文である。

ここでは<主語指向型>を前項動詞の性質によって「非対格タイプ」と「非能格・他動詞タイプ」に分けて考察する。「非対格タイプ」の主語は内項であるから、<目的語指向型>と同じように考えることができる。それに対して「非能格・他動詞タイプ」は英語や日本語には例外的にしか見られないタイプであり、慎重に検討する必要がある。以下では次の問題点を中心に見ていく。

1. <主語指向型>の意味特徴
2. 使役構造としての非対格タイプと非能格・他動詞タイプ
3. 次の<原因型>への拡張プロセス

主な結論は以下の通りである。

1. 非対格タイプ

- i. 使役主は前項動詞の意味フレームの暗黙項 (implicit argument) として存在する原因 (Cause) である。
- ii. 使役主の原因 (Cause) を明示することにより、使役化のプロセスを経て次の段階の<単純原因型>結果構文へと拡張する。
- iii. 非対格タイプ<主語指向型>も<単純原因型>も概念構造に二つの使役関係 (CAUSE) を持つ。

2. 非能格・他動詞タイプ

- i. 使役主は、プロトタイプの使役行為者からメトニミックな拡張を経て<基礎行為>自体となる。
- ii. 目的語を取らない非能格・他動詞タイプが多いが、真性の目的語をとる場合と、長短二種類の目的語を伴う場合がある。これらの目的語は結果述語と叙述関係を持たないが、主題と焦点 (Topic-Focus) の情報構造と関わる。
- iii. 非能格・他動詞タイプ<主語指向型>は概念構造に一つだけの使役関係 (CAUSE) を持つ。

5.2 二種類の＜主語指向型＞

望月（1990）は結果構文の一類として、動補構造の後項が文中で主語を指向するタイプを＜主語指向型＞と名付け、以下の例文を挙げている。二つの文において結果補語“累（疲れる）”“倒（倒れる）”はそれぞれ主語“我（私）”“她（彼女）”の状態について述べている。

- (1) a. 我 走-累 了。
wǒ zǒu-lèi le
私 歩く-疲れる PERF
「私は歩き疲れた。」
- b. 她 病-倒 了。
tā bìng-dǎo le
彼女 病む-倒れる PERF
「彼女は病に倒れた。」

石村（2011：166）も同様の分類を提案している。彼は（2）の文を、使役者（動作主）と変化対象を同一視する使役構造を具えており、「自分で自分のある状態にする」という再帰的な意味構造を持つ再帰構造を持つとする。

- (2) a. 张三 跑-累 了。
zhāng sān pǎo-lèi le
張三 走る-疲れている PERF
「張三は走り疲れた。」
- b. 李四 醉-倒 了。
lǐ sì zuì-dǎo le
李四 酔う-倒れる PERF
「李四は酔っ払って倒れた。」
- c. 我的肚子 吃-坏 了。
wǒ de dù zi chī-huài le
私の腹 食べる-壊れる PERF
「私のお腹は食べて壊れた。」

（石村 2011：166）

望月（1990）と石村（2011）は以上の文を同一の文型として扱っているが、前項動詞の自他性からみると、これらの例文は二種類の異なるタイプに分けるべきである。

「非対格性の仮説（Unaccusative Hypothesis）」によると、自動詞は非対格自動詞（unaccusative verbs）と非能格自動詞（unergative verbs）の二種類に分けられる。非能格自動詞は外項のみを持つのに対して、非対格自動詞は内項のみを持つ。影山（1996：21）は意味構造を統語構造に写像する仕組みである項構造（argument structure）を用いて、他動詞、非能格自動詞および非対格自動詞の区別を（3）のように示す。

(3)		外項	内項
a.	他動詞：	(x	<y>)
b.	非能格自動詞：	(x	< >)
c.	非対格自動詞：	(<y>)

（1a）（2a, c）の動補構造において、前項動詞は非能格自動詞“走（歩く）”“跑（走る）”または非能格自動詞として使われる他動詞“吃（食べる）”であり、主語となるのは前項動詞が表す行為の動作主すなわち外項である。それに対して、（1b）（2b）の文では、前項動詞は状態を表す非対格自動詞“病（病む）”“醉（酔う）”であり、主語となるのは前項動詞の対象すなわち内項である。

石村（2011：190）は（1,2）の文について、動補構造（VR）全体が非対格化していると主張するが、なぜそのようなことが可能となるかは不明であるし、「使役者（動作主）と変化対象を同一視する使役構造を具えており、「自分で自分のある状態にする」という再帰的な意味を持つ」という主張との整合性も明らかではない。また、前項動詞を繰り返す動詞コピー構文（4b, 5b）では、コピーされた動詞が目的語をとることができることがある。このコピーされた他動詞と「非対格化された VR 構造」がどのような関係を持つのか、明らかではない。

- (4) a. 他 看-倦 了。
tā kàn-juàn le
彼 読む-疲れる PERF
「彼は（何かを）読み疲れた。」
- b. 他 看 书 看-倦 了。
tā kàn shū kàn-juàn le
彼 読む 本 読む-疲れる PERF
「彼は本を読み疲れた。」

- (5) a. 他 走-累 了。
 tā zǒu-lèi le
 彼 歩く-疲れる PERF
 「彼は歩き疲れた。」
- b. 他 走 路 走-累 了。
 tā zǒu lù zǒu-lèi le
 彼 歩く 路 歩く-疲れる PERF
 「彼は道を歩いて疲れた。」

さらに、5.4 節で詳しく見るが、主語指向型でもある条件の下では目的語をとることができる。これは動補構造 (VR) 全体が非対格化しているという仮説に矛盾する。

- (6) a. 他 看-倦 了 那 一摞 书。
 tā kàn-juàn le nà yī luò shū
 彼 読む-倦む PERF あの 一重ね 本
 「彼は一重ねの本を読んで疲れた。」
- b. 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。
 tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
 「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」

なお、すでに多くの研究に指摘される通り (Simpson 1983、Hoekstra 1992、Goldberg 1995、Levin & Rappaport Hovav 1995、Huang 2006 など)、英語における自動詞結果構文は前項動詞が非対格自動詞の場合のみ成立し、非能格自動詞を使う場合は基本的に認められず、擬似再帰目的語 (fake reflexive) を用いる (9) の構文で表すしかない (Simpson 1983)。この事実は、中国語でも非能格・他動詞タイプは非対格タイプと区別すべきであり、それぞれの形成原因および拡張の程度が異なることを示唆している。

- (7) 前項動詞が非対格自動詞の場合
- a. The butter melted to a liquid. (Simpson 1983)
- b. The river froze solid. (Goldberg 1995 : 181)
- c. The prisoners froze to death. (Levin & Rappaport Hovav 1995 : 39)
- d. The gate swung shut. (Levin & Rappaport Hovav 1995 : 39)
- e. The garage door rumbles open. (Huang 2006)

- (8) 前項動詞が非能格自動詞の場合
- a. * I danced tired. (Hoekstra 1992)
 - b. * He talked hoarse. (Goldberg 1995 : 181)
 - c. * He coughed sick. (Goldberg 1995 : 181)
 - d. * The officers laugh helpless. (Levin & Rappaport Hovav 1995 : 36)
 - e. * Bill cried sad. (Huang 2006)
- (9)
- a. I danced myself tired.
 - b. He talked himself hoarse.
 - c. He coughed himself sick.
 - d. The officers laugh themselves helpless.
 - e. Bill cried himself sad.

なお、本論文の主張に最も近い分類を提案するのは Cheng & Huang (1994) である。彼らはまず「非能格型/他動型交替 (unergative / transitive alternation)」と「能格型/原因型交替 (ergative / causative alternation)」という二種類の自他交替を提案する (10)。さらに中国語結果構文を前項動詞のアスペクト特性および他動詞性によって以下の四種類に分類される。彼らが言う「非能格型」と「能格型」は統語特徴として本論文が言う「非能格・他動詞タイプ」と「非対格タイプ」の<主語指向型>にほぼ対応するほか、原因項が動詞の項であるか否かによって二種類の原因型の存在も提示している (11, 12)。

- (10) a. 张三 骑-累 了。 (非能格型 (unergative))
zhāng sān qí-lèi le
张三 乗る-疲れる PERF
「張三は乗り疲れた。」
- b. 张三 骑-累 了 两匹马。 (他動型 (transitive))
zhāng sān qí-lèi le liǎng pǐ mǎ
张三 乗る-疲れる PERF 2-CL-馬
「張三は2匹の馬に乗って、馬を疲れさせた。」
- c. 张三 气-死 了。 (能格型 (ergative))
zhāng sān qì-sǐ le
张三 怒る-死ぬ PERF
「張三は死ぬほど怒った。」

- d. 这件事 真 气-死 张三 了。 (原因型 (causative))
 zhè jiàn shì zhēn qì-sǐ zhāng sān le
 この-CL-事 本当に 怒る-死ぬ 張三 PERF
 「この事は本当に張三を死ぬほど怒らせた。」

(11) 原因項がいずれの動詞の項でもない (pure causatives) :

- a. 张三 累-死 了 李四。
 zhāng sān lèi-sǐ le lǐ sì
 張三 疲れる-死ぬ PERF 李四
 「張三は李四を疲れさせて死なせた。」
- b. 那杯酒 醉-倒 了 张三。
 nà bēi jiǔ zuì-dǎo le zhāng sān
 あの-CL-酒 酔う-倒れる PERF 張三
 「あの一杯の酒が張三を酔わせて倒れさせた。」

(12) 意味上の主語と目的語が逆になる :

- a. 报纸 看-花 了 他的眼睛。
 bào zhǐ kàn-huā le tā de yǎn jīng
 新聞 読む-かすむ PERF 彼の目
 「彼が新聞を読んで目がかすんで見えにくくなった。」
- b. 那匹马 骑-累 了 三个小孩。
 nà pǐ mǎ qí-lèi le sān gè xiǎo hái
 あの-CL-馬 乗る-疲れる PERF 三つ-CL-子供
 「三人の子供があの馬に乗って疲れてしまった。」

ただし、Cheng & Huang (1994) はタイプごとの分析にアドホックなところがある。例えば、非能格型/他動型交替が可能な結果構文において、前項動詞は活動 (activity) を表すため主語は動作主 (Agent) である一方、能格型/原因型交替が可能な結果構文では、前項動詞は状態 (state) または状態変化 (a change of state) を表すため、主語は対象 (Theme) または経験者 (Experiencer) であるという。しかし、能格型/原因型交替の可能な結果構文に (13) のような活動動詞が前項動詞として現れる、非能格型の用法と考えられる例も少なくないことも認めている。(13a) において主語“他”は“写”の動作主 (Agent) とは考えられるが、原因型 (13b) において、前項動詞の主語“李四”は純粹な動作主 (Agent) ではなく被使役者 (Causee) であるため、動作や事象を引き起こす

主体 (initiator) ではなく、経験者 (Experiencer) とは同じように振る舞う。したがって、(13) の例文も実際に非能格型/原因型交替ではなく能格型/原因型交替であるという。

- (13) a. 他 写-累 了。
tā xiě-lèi le
彼 書く-疲れる PERF
「彼は (何かを) 書き疲れた。」
- b. 那本书 写-累 了 李四。
nà běn shū xiě-lèi le lǐ sì
あの・CL-本 書く-疲れる PERF 李四
「李四はあの本を書いて疲れてしまった。」

しかし、そうすると、非能格型にも能格型と同じように能格型/原因型交替が起こることになってしまうばかりか、構文の分類と自他交替の分類が区別されず、結果構文自体の特性も見えなくなる。

本論文の視点からみると、Cheng & Huang (1994) の能格型/原因型交替は非常に有意義な指摘であるが、交替できる結果構文の類型的特性についての考察が十分ではない。本論文は前項動詞の性質によって非能格・他動詞タイプと非対格タイプに下位分類し、分別に＜原因型＞への拡張メカニズムを考察する。それにより、能格型/原因型交替をより精密に捉えることが可能であると考ええる。

次節では非対格タイプを、5.4 節では非能格・他動詞タイプを考察する。

5.3 非対格タイプ：“病倒”型

Goldberg (1995 : 181) が挙げる (14) の結果構文に対応する中国語の非対格タイプ＜主語指向型＞は、(15) のように「1 項述語+1 項述語」の組合せからなる。前項動詞は主語を内項としてとる非対格自動詞であり、結果補語も変化した主語の結果状態について述べている。

- (14) a. The river froze solid.
b. It broke apart.
- (15) a. 池塘 冻-硬 了。
chí táng dòng-yìng le
池 凍る-カチカチ PERF
「池がカチカチに凍った。」

- b. 窗户 破-碎 了。
chuānghù pò-suì le
窓 割れる-こなごな PERF
「窓が粉々に割れた。」
- c. 张三 病-倒 了。
zhāng sān bìng-dǎo le
張三 病気にかかる-倒れる PERF
「張三は病気にかかって倒れた。」
- d. 小宝宝 惊-醒 了。
xiǎo bǎo bao jīng-xǐng le
赤ちゃん 驚く-目覚める PERF
「赤ちゃんが驚いて目覚めた。」
- e. 小李 吓-傻 了。
xiǎo lǐ xià-shǎ le
李さん 恐がる-ぼんやり PERF
「小李は恐がってぼかんとした。」
- f. 很多人 饿-死 了。
hěn duō rén è-sǐ le
多くの人 飢える-死ぬ PERF
「多くの人が飢え死にした。」

5.3.1 非対格タイプの意味特徴

まずは前章のように、事象の意図性、因果関係の緊密性および使役行為者（causer）の認定などの方面からこのタイプの意味特徴を分析しよう。プロトタイプの結果構文が表す典型的な因果関係の意味特徴を以下に再掲する。

- (16) a. 原因事象と結果事象のどちらにも意図性がある。
b. 前項動詞は他動詞である。
c. 主語は意志性を持つ有生物である。
d. 因果関係は直接的であり、時間間隔はない。
e. 使役行為者（Causer）は<基礎行為>の遂行者（Actor）である。

前項動詞が表す＜基礎行為＞が原因事象となり、後項動詞が表す状態すなわち結果事象を引き起こす。両事象の間に因果関係が確認できれば、＜基礎行為＞は特定の結果に責任を持つ＜使役行為＞ともなり、＜基礎行為＞の遂行者も使役行為者（Causer）となる。

しかし、非対格タイプにおいて、原因事象と考えられる＜基礎行為＞には動作主（Actor）は存在せず、内項と思われる被動者（Patient）もしくは経験者（Experiencer）のみが存在し、動作主が意図的に行うという原因事象の意図性は当然考えられない。また、動作主すら存在しないため、経験者自身に起こった変化は「目標通り」の対象物に意図的に起こった状態変化とも言えず、結果事象にも意図性がない。

ただし、例えば“硬（硬い）”という結果状態は“凍（凍る）”の語彙意味から想定される一般的な変化方向に沿うと考えられ、前項動詞に含意されるといえる。また、二つの事象は同時進行か連続しており、時間差もない。そのため、非対格タイプにおいても、互いに独立しておらず、直接因果関係で結ばれている。

中右・西村（1998：136）によると、プロトタイプの＜使役行為者＞（Causer）は、自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において用いることによって、＜対象＞の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する人間である。前章で示したように、＜目的語指向型＞の場合はすべて＜基礎行為＞の遂行者（Actor）である。しかしながら、非対格タイプ＜主語指向型＞の場合、＜基礎行為＞は状態変化を表すため、遂行者（Actor）が存在しない。

中右・西村（1998：143）は使役行為者カテゴリーの拡張の一つの方向として、＜基礎行為＞に相当するもの自体が使役行為者となることを提案し、(17)の使役構文の例を挙げている。ただし、＜使役行為＞のプロトタイプにおける＜基礎行為＞は、＜対象＞に特定の変化を生じさせるために行い、その結果＜対象＞が即座にそのような変化を被るような身体的な動作に限定されている（中右・西村 1998：130）。(17)の文からも、Causerとなった＜基礎行為＞自体は「彼が行った発表」「酒を飲みすぎたこと」のような何らかの活動であることが分かる。それに対して、非対格タイプの＜基礎行為＞例えば“张三病了（张三が病気にかかった）”は活動や身体的な動作とは考えられないため、＜基礎行為＞自体が Causer となることも難しい。

- (17) a. His announcement produced a violent reaction among the crows.
b. Excessive drinking killed Bill.

このように、非対格タイプ＜主語指向型＞は＜目的語指向型＞とは共通点もあるが、相違も大きく、プロトタイプの結果構文の意味構造を非対格タイプに当てはめようとする相違が齟齬が生じる。以下では、英語の自動詞結果構文と対照しながら、結果構文の最も核心的な性質として、非対格タイプにおける使役性を分析していく。

5.3.2 非対格タイプの使役性

結果構文の一般的な構文意味から考えると、英語の自動詞結果構文と中国語の非対格タイプが表す因果関係は、前項動詞の表す状態変化が原因で、後項補語の表す状態変化を生じさせるという事象関係のはずである。

前章で検討した前項動詞の表す動作や行為が目的語に特定の変化を引き起こす＜目的語指向型＞とは異なり、(15)の文は＜基礎行為＞の遂行者 (Actor) で使役行為者 (Causer) が存在しないように見える。しかし、母語話者の直感からいうと、“张三病倒了”と聞くと、“因为什么病倒了？（どうして病気になって倒れたの？）”という疑問が思い浮かぶ。つまり原因理由を問うことができる。それに対して＜目的語指向型＞結果構文、例えば“花匠浇扁了郁金香（庭師はチューリップに水をかけた結果、チューリップがぺしゃんこになった）”のような文を聞いても、“因为什么浇扁了郁金香？（なぜチューリップに水をかけてぺしゃんこにしたの？）”とは思わず、原因理由を尋ねる質問は浮かばない。このことから、(15)の文には、原因となるべき Causer が隠れているのではないか。

なお、石村（2011：166）は本論文が言う非能格・他動詞タイプを含め、＜主語指向型＞結果構文は「自分で自分のある状態にする」という再帰的な意味構造を有すると提案する。この場合、Causer は自分と言うことになる。しかし、非能格・他動詞タイプにも非対格タイプにも再帰代名詞の“自己（自分）”をつけることができないこと、それは英語の自動詞結果構文でも同様であることから、＜主語指向型＞が再帰構造を持つとは考えられない。

- (18) a. ?? 他 病-倒 了 自己。 (非対格タイプ)

tā bìng-dǎo le zì jǐ
 彼 病気にかかる-倒れる PERF 自分
 「彼は自分自身を病気にかかって倒れさせた。」

- b. * 他 跑-累 了 自己。 (非能格・他動詞タイプ)

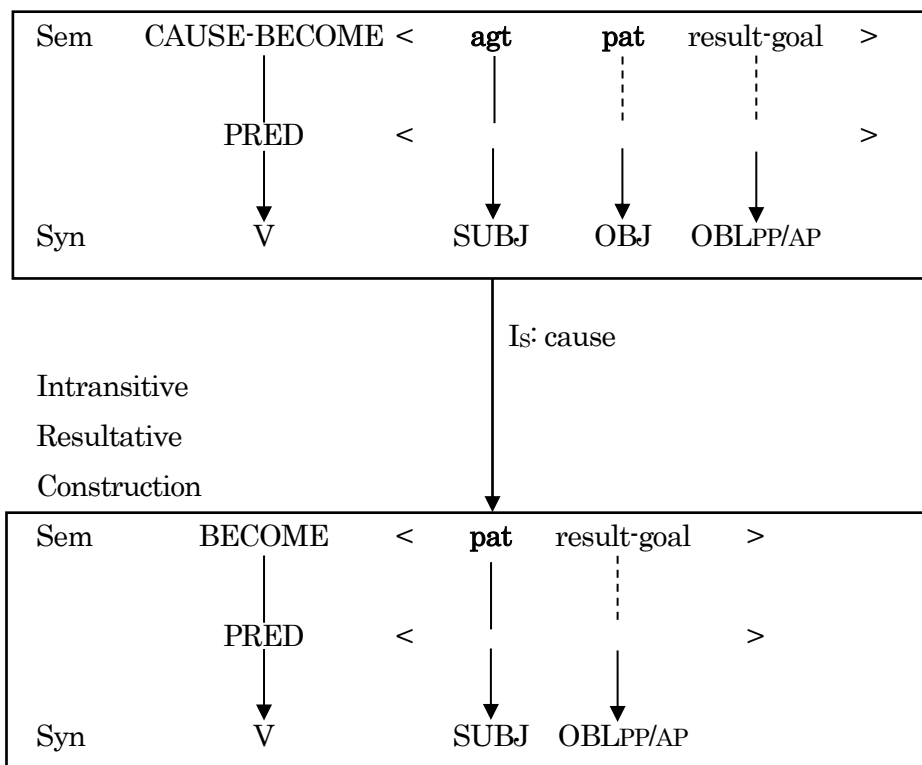
tā pǎo-lèi le zì jǐ
 彼 走る-疲れる PERF 自分
 「彼は自分自身を走り疲れさせた。」

- (19) a. The statues broke (*themselves) into pieces.
 b. The pond froze (*itself) solid.
 c. The chocolate melted (*itself) into a gooey mess.
 d. The sweater stretched (*itself) out of shape.
 e. The toast burned (*itself) black.

(Randall 2010 : 78)

英語の (14) のような自動詞結果構文を典型的な結果構文と区別して扱う研究は少ない。Goldberg (1995 : 190) は典型的な結果構文と自動詞結果構文は若干異なる構文であるが、継承リンクで結ばれ、かつ、被動作主性 (patient-hood) に関する一般的な制約を共有していると主張する。

(20) Resultative-Construction



Goldberg (1995) と同様に、中右・西村 (1998 : 180) はこのような文を「自動詞派生」の結果構文とし、結果構文が表す変化または状態は因果関連を持たずに単純に変化または状態そのものであると述べ、<使役行為>を表すほかの結果構文とは明らかに対立すると述べる (中右・西村 1998 : 182)。

では、非対格タイプの<主語指向型>や自動詞結果構文は本当に単純変化のみを表して、使役性を持たないのであろうか。

Huang (2006) などによると、非対格自動詞を用いる結果構文において、外部の **Causer** 項を入れることによって非対格-使役交替 (unaccusative-causative alternation) ができる。このような自他交替は英語にも中国語¹にも観察できる。

¹ 実際中国語の非能格・他動詞タイプ<主語指向型>にも類似する自他交替がみられるが、それについては次節で見る。

- (21) a. The river froze solid.
 b. The change in weather the last few weeks froze the river solid.
 c. The garage door rumbles open.
 d. A few bulldozers passing by rumbled the garage door open.

(Huang 2006)

- (22) a. 张三 累-死 了。
 zhāng sān lèi-sǐ le
 張三 疲れる-死ぬ PERF
 「張三は疲れて死んだ。」
- b. 这件事 累-死 了 张三。
 zhè jiàn shì lèi-sǐ le zhāng sān
 この-CL-事 疲れる-死ぬ PERF 張三
 「この事は張三を疲れさせて死なせた。」
- c. 李四 醉-倒 了。
 lǐ sì zuì-dǎo le
 李四 酔う-倒れる PERF
 「李四は酔っ払って倒れた。」
- d. 这杯伏特加 醉-倒 了 李四。
 zhè bēi fú tè jiā zuì-dǎo le lǐ sì
 この-CL-ヴォッカ 酔う-倒れる PERF 李四
 「この一杯のヴォッカは李四を酔わせて倒らせた。」

(Huang 2006)

このように、非対格タイプの結果構文と他動詞による結果構文には交替が見られる。しかしこれは結果構文だけではなく、一般に生じうることである。

影山 (1996 : 141) は従来統語的に非対格自動詞と言われる動詞を意味構造の違いによって open, break のような「能格動詞」と occur, happen のような「非対格動詞」の二種類に分類し、前者は同形態で他動詞と交替する自動詞であり、後者是对応する他動詞を欠くという。それぞれの動詞例を (23) に、対応する例文は (24) (25) に示す。

- (23) a. 能格動詞
break, crack, crash, crush, shatter, split, tear, abate, alter, burn, dry, sink,
change, close, decrease, diminish, explode, expand, increase, inflate, freeze,
multiply, bounce, drift, drop, float, move, roll
- b. 非対格動詞
be, appear, arise, occur, happen, disappear, vanish, emerge, elapse, exist,
remain, erupt, ensue, arrive, thrive, flourish

(影山 1996 : 141-142)

- (24) 能格動詞
- a. The door opened. / He opened the door.
- b. The explosion broke the window. / The window broke. (Vendler 1984)

- (25) 非対格動詞
- a. A big fire occurred. /*They occurred a big fire.
- b. The pigeon disappeared. /*The magician disappeared the pigeon.
- c. A package arrived. /*The mailman arrived a package.

(影山 1996 : 142)

影山 (1996 : 143) によると、*open* タイプ動詞の自動詞用法、例えば *The door opened*. という自動詞文の場合、統語構造あるいは項構造では対象物のみが存在し、事態を引き起こす外的な使役主は欠如しているが、「語彙概念構造」のレベルでは、*open* や *break* などの自動詞が使役主 (causer) を持つ、つまり、*open* 類の能格動詞は意味的に使役主の存在を示唆すると解釈することが可能であるという。それに対して *happen* 類の純粋な非対格動詞は完全に自然発生の出来事を表すため、意味的に使役性を帯びないとする。

影山 (1996 : 143-144) は二種類の自動詞それぞれが持つ概念構造を (26) のように表示している。*happen* 類動詞は自然発生の事象を描写するため、[BECOME [BE]] のように使役主を持たずに状態変化だけを表すのに対して、*open* 類の動詞は使役主を仮定することが可能であって使役構造を持つと考えられる。次節で改めて検討するが、影山 (1996 : 144-145) は能格動詞において、使役主 (x) と変化対象 (y) が別物の場合は他動詞になるが、使役主 (x=y) が変化対象 (y) と同定する場合、「反使役化」という操作を経て自動詞になるという。

- (26) a. happen : [BECOME [x BE AT-z]]
- b. open : [x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]
→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

(影山 1996 : 143-145)

ここで (26b) の CONTROL について少し説明をしておきたい。影山 (1996 : 85-86) は英語と日本語の相違の一つとして、使役構造が結果の成立を含意するか否かにあると主張する。英語の場合、(27a) の文の前半部分 *John turned on the light.* の概念構造は CAUSE を用いて [John CAUSE [BECOME [the light BE ON]]] のように表記することが可能であり、その際、CAUSE (使役) は結果が成立することを含意する。それに対して日本語の場合、「つける」という動詞も使役の概念構造を含むと想定されるが、(27b) のように、「つける」動作を行っても予想される結果が生じない可能性があるため、CAUSE で表記するは妥当ではない。そこで、影山 (1996 : 86) は行為の実行という予備段階と結果の間を CAUSE の代わりに (28) のように CONTROL という概念で規定する。CONTROL は必ずしも Y の成立を含意するわけではなく、Y の成立が含意されれば CAUSE と等価になり、Y の成立が含意されなければ Y は「目標」に過ぎない。(26b) に CAUSE ではなく CONTROL が使われるのは、日本語を考慮した結果である。

- (27) a. *John turned on the light, but the light didn't come on.
b. 電気をつけたけれど、つかなかった。

- (28) X CONTROL Y
=X が Y の成立を直接に左右する。

一方、中国語の場合、(27b) のような行為の結果の取り消しを表す文 (29) も一部の地域 (台湾など) によって容認可能とされるが、本論文では行為の結果は動詞自身に含意されるのではなく、会話的含意 (conversational implicature) であるからキャンセル可能 (cancellable) であると主張する。以下では筆者の分析に関しては CAUSE を使い続けるが、結果の含意には関与しないことに注意されたい。

- (29) 张三 杀 了 李四 两次, 李四 都 没 死。 (Tai 1984)
zhāng sān shā le lǐ sì liǎng cì lǐ sì dōu méi sǐ
張三 殺す PERF 李四 二回 李四 いずれも ない 死ぬ
「張三は李四に二回殺す行為をしたが、李四はいずれも死ななかった。」

以上をまとめると、(21) のような自動詞結果構文に用いられる非対格-使役交替のできる動詞は影山 (1996) が言う能格動詞であり、(30) に示すように、使役主 (Causer) の存在を示唆していることになる。

- (30) a. freeze : [x CONTROL [y BECOME [y BE SOLID]]]
 (x= the change in weather the last few weeks, y= the river)
 [x=y CONTROL [y BECOME [y BE SOLID]]]
 (x=y=the river)
- b. rumble : [x CONTROL [y BECOME [y BE OPEN]]]
 (x= a few bulldozers passing by, y= the garage door)
 [x=y CONTROL [y BECOME [y BE OPEN]]]
 (x=y=the garage door)

影山 (1996) に従えば、非対格動詞の統語構造や項構造に Agent 項がなくとも、概念構造 (あるいは動詞の意味フレーム) には、Agent 項に対応する何らかの状態変化を引き起こす力を持つ原因 (Cause) という参与者役割があり、自他交替の可能性があるのである。(21) に観察される自動詞結果構文と他動詞構文に交替するという現象も、この Cause が存在するからこそ成立するのである。

要するに、自動詞結果構文を、使役性をもつほかの結果構文と独立した別個の構文とするのではなく、プロトタイプの結果構文と同じ枠組の中で捉えられるのである。

最後に、中国語動詞の自他交替について、付言しておきたい。望月 (2003) に指摘される通り、単音節動詞の使役交替は “开 (開ける/開く)” “关 (閉める/閉まる)” “倒 (順序が逆である/順序を逆にする)” “转 (回る/回す)” などごく一部の動詞に限られるが、複合動詞化すると自他交替はとても起こりやすい。つまり、中国語では使役交替を起こす動詞の大部分は「Action+Resultative States」というスキーマによって構成された複合動詞でなければならないという特徴がある。そのため、単純に自他交替の可能性だけで、非対格動詞と能格動詞の区別をすることは難しい。下の例文 (31,32) は単独動詞で自他交替を許さない。それに対して (33) は複合動詞で、自他交替が可能である。

- (31) a. 他 脸 变 白 了。 (Yin 2011)
 tā liǎn biàn bái le
 彼 顔 -になる 白い PERF
 「彼の顔が白くなった。」
- b. *那件事 变 白 了 他的脸。
 nà jiàn shì biàn bái le tā de liǎn
 その事 -になる 白い PERF 彼の顔
 「そのことが彼の顔を白くした。」

- (32) a. 花瓶 碎 了
 huā píng suì le
 花瓶 壊れる PERF
 「花瓶が壊れた。」
- b. *他 碎 了 花瓶。
 tā suì le huā píng
 彼 壊れる PERF 花瓶
 「彼が花瓶を壊した。」
- (33) a. 他 打-碎 了 花瓶。
 tā dǎ-suì le huā píng
 彼 打ち壊す PERF 花瓶
 「彼が花瓶を壊した。」
- b. 花瓶 打-碎 了。
 huā píng dǎ-suì le
 花瓶 打ち壊す PERF
 「花瓶が壊れた。」

結果構文の場合、複合動詞であるから、能格動詞であれば自他交替を許す。

- (34) a. 他 快 冻-僵 了。
 tā kuài dòng-jiāng le
 彼 もうすぐ 冷える-かじかむ PERF
 「彼は冷えてかじかみそうだ。」
- b. 寒冷的天气 冻-僵 了 他。
 hán lěng de tiān qì dòng-jiāng le tā
 寒い天候 冷える-かじかむ PERF 彼
 「寒い天候が彼を冷えさせてかじかませた。」

これに対して、影山（1996）のいう非対格動詞に対応する中国語動詞が前項動詞の場合、確かに自他交替ができないようである。

- (35) a. *他 发生-倒 了。
 tā fā shēng-dǎo le
 彼 起こる-倒れる PERF

- b. *他 出現-病 了。
 tā chū xiàn-bìng le
 彼 現れる-病気にかかる PERF

まとめると、本節の主な主張は以下の2点である。

- (36) A. 英語の自動詞結果構文と中国語の非対格タイプ<主語指向型>は能格動詞の性質を帯びるため、概念構造において使役主の存在を仮定することが可能であり、結果構文と同じ枠組の中で捉えられる。
 B. 非対格タイプ<主語指向型>において、動補構造のみならず、前項動詞も能格動詞の性質を帯びる非対格自動詞でなければならない。

5.3.3 非対格タイプにおける使役主 (Causer)

つづいて、英語の自動詞結果構文と中国語の非対格タイプにおける可能な使役行為者 (Causer) について検討しよう。

影山 (1996 : 144-145) は英語の能格動詞における使役主 (本論文がいう使役行為者に対応する) になれるものの可能性を論じる。(26b) の他動詞構文の概念構造において、使役主 (x) は (37) のように意図的な動作主 (Agent) のほか、対象物の変化を直接に引き起こす様々な名詞句となることも可能である。能格動詞を用いる結果構文にもこの二種類の使役主の存在が観察される (38)。

(37) [x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

- a. I opened the door.
 b. The expansion of the gases raised the roof. (Vendler 1984)
 c. The explosion broke the window. (Vendler 1984)
 d. The (force of the) wind felled the tree. (Vendler 1984)
 (38) a. I froze the ice cream solid. (Simpson 1983)
 b. I melted the butter into a liquid. (Simpson 1983)
 c. The change in weather the last few weeks froze the river solid. (= (21b))
 d. A few bulldozers passing by rumbled the garage door open. (= (21d))

ここで、(38a,b) において、主語は (37a) と同じように意図的な有生物であるため動作主 (Agent) として考えられがちであるが、そうではない。人間はドアに対して押したり蹴ったりするなどの動作によって直接に力を与えることが可能であるが、アイスクリームやバターに対しては直接に作用することができず、あくまでアイスクリームを冷蔵庫に

入れて凍らせたり、バターをフライパンに入れて加熱したりというように、間接的な影響を与えるしかない。したがって、意味役割からいうと、主語の *I* は典型的な Agent ではなく、状態変化を起こさせる原因 (Cause) と考えるのが妥当である。

影山 (1996 : 144) はこのように様々な事物が使役主になれるということから、変化対象 (y) そのものが使役主になることが可能で、その場合、他動詞構文ではなく、自動詞構文が得られるという。(39) であれば、擬人化されたドアや自動ドアが自らの力で開く場合だけでなく、人間が押したり風が吹いたりという (40,41) のような外的な力によってドアが開くという普通の場合も含まれる。影山 (1996) によれば、(41) のような外的な力は副詞的に表現することが可能であるが、その場合には文法的には付加詞であって項ではないため、意味構造では CONTROL を補助する修飾語として捉えられる。

(39) The door opened. (影山 1996 : 144)

(40) a. The wind opened the door. (丸田 1998 : 100)

b. Dan/the key/the pressure opened the door. (Preminger 2008)

(41) a. The door opened from pressure. (圧力で)

b. The door opened because of a high wind. (強風で)

c. The door opened at a touch. (さわっただけで)

(影山 1996 : 145)

影山 (1996 : 145) は、このように対象物が同時に使役主であるという考え方を「反使役化 (anti-causativization)」として定式化する (42)。使役主 ($x=y$) は変化対象 (y) と同定されるため、意味構造で保証されて統語構造において抑制 (suppression) された結果、(43) に示すように内項 y だけが項構造に出現するという。そこで、能格自動詞は少なくとも項構造上では内項のみを持つ「非対格動詞」になる。影山 (1996 : 146) はこうして英語の能格動詞の基本を使役構造とし、そこから反使役化を経て自動詞を生み出す、すなわち他動詞から自動詞を派生するという自他交替の経路を提案する。

(42) 概念構造における反使役化 (影山 1996 : 145)

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

(43) (<y>) (影山 1996 : 145)

一方、仮に自らの力で変化を起こすといっても、その内部に何らかの原因 (Cause) を想定することが可能である。例えば、ドア自体が古くてきちんと閉まらず、勝手にあいてしまうというような、内在的な原因がある。つまり、能格動詞を用いる自動詞構文におい

でも、常に何らかの原因が使役主 (Causer) として動詞の概念構造に存在すると仮定することが可能である。すべての能格動詞において、その原因 (Cause) が統語上に実現できるというわけではないが、実現可能な場合に限り、他動詞構文が拡張される。

まとめると、能格動詞には概念構造には使役主 (Causer) が想定される。他動詞から自動詞を派生する反使役化、もしくは自動詞構文から他動詞構文を派生する使役化により、自他交替が可能となる。

では、英語と対照しながら、中国語の非対格タイプにおける使役行為者について分析しよう。影山 (1996) の指摘に沿って、使役主 (Causer) として動作主 (Agent)、動作主以外の名詞句、および変化対象自身という三つの可能性を使役交替の中で検討する。

前述したように、非対格タイプに用いられる動補構造は、前項動詞も結果補語も非対格自動詞であり、全体としても一つの非対格自動詞に相当する振る舞いを見せる。他動詞化した場合、その主語には原因 (Cause) が現れうる。

- (44) a. 池塘 冻-硬 了。 (= (15a))
 chí táng dòng-yìng le
 池 凍る-カチカチ PERF
 「池がカチカチに凍った。」
- b. 一场寒流 冻-硬 了 池塘。
 yī chǎng hán liú dòng-yìng le chí táng
 一・CL-寒波 凍る—カチカチ PERF 池
 「寒波が池をカチカチに凍らせた。」
- c. 张三 病-倒 了。 (= (15c))
 zhāng sān bìng-dǎo le
 張三 病気にかかる-倒れる PERF
 「張三は病気にかかって倒れた。」
- d. 连续熬夜 病-倒 了 张三。
 lián xù áo yè bìng-dǎo le zhāng sān
 連続で徹夜 病気になる-倒れる PERF 張三
 「連続で徹夜することが張三を病気にさせて倒らせた。」
- e. 小宝宝 惊-醒 了。 (= (15d))
 xiǎo bǎo bao jīng-xǐng le
 赤ちゃん 驚く-目覚める PERF
 「赤ちゃんが驚いて目覚めた。」

- f. 噩梦 惊-醒 了 小宝宝。
 è mèng jīng-xǐng le xiǎo bǎo bao
 悪夢 驚く-目覚める PERF 赤ちゃん
 「悪夢が赤ちゃんを驚かせて目覚めさせた。」

このように、他動詞の主語に原因 (Cause) は可能であるが、意図的に行為を行う動作主 (Agent) 項は現れず、Agent としか解釈されない名詞句を使役主の位置に置くことはできない (45)。しかし、(46) に示すように、英語と同じく、主語の人間は直接に作用する動作主ではなく、「凍る」という状態変化を引き起こす原因 (Cause) として解釈されることが可能な場合、主語は意図性を持つ人間でもかまわない。同様の例文は (47) に示す。つまり、前項動詞が表す状態変化の原因と解釈される名詞句であれば、意図性を持つ人間もその使役主として主語位置に生起しうる。

- (45) *李四 病-倒 了 张三。
 lǐ sì bìng-dǎo le zhāng sān
 李四 病気になる-倒れる PERF 張三
 「李四が張三を病気にさせて倒させてしまった。」

- (46) a. 冰淇淋 冻-硬 了。
 bīng qí lín dòng-yìng le
 アイスクリーム 凍る-カチカチ PERF
 「アイスクリームがカチカチに凍った。」
 b. 我们 冻-硬 了 冰淇淋。
 wǒ men dòng-yìng le bīng qí lín
 私たち 凍る-カチカチ PERF アイスクリーム
 「私たちはアイスクリームをカチカチに凍らせた。」

- (47) a. 妈妈 惊-醒 了 小宝宝。
 mā ma jīng-xǐng le xiǎo bǎo bao
 母 驚く-目覚める PERF 赤ちゃん
 「母が赤ちゃんを驚かせて目覚めさせてしまった。」
 b. 张三 累-死 了 李四。 (= (11a))
 zhāng sān lèi-sǐ le lǐ sì
 張三 疲れる-死ぬ PERF 李四
 「張三は李四を疲れさせて死なせた。」

次に使役者が変化対象自身である可能性を見てみる。すでにみたように、非対格動詞が目的語をとることはできないため、主語の使役者と対象の目的語が別々に実現することはできない。つまり、(18) に示したように、対象の目的語が再帰代名詞“自己（自分）”として現れることはできない。

(18) a. ??他 病-倒 了 自己。 (非対格タイプ)

tā bìng-dǎo le zìjǐ

彼 病気にかかる-倒れる PERF 自分

「彼は自分自身を病気にして倒れさせた。」

b. * 他 跑-累 了 自己。 (非能格・他動詞タイプ)

tā pǎo-lèi le zìjǐ

彼 走る-疲れる PERF 自分

「彼は自分自身を走り疲れさせた。」

しかし、変化主体の内在的な原因も使役主 (Causer) として設定することは可能である。中国語において、例えば自動ドアが自ら開くという場合、(48) のようにそれ自身の内部機構が主語位置に生起することができる。“病倒（病気になって倒れる）”であれば、変化対象“张三”自身の行為、例えば“连续熬夜”が状態変化に対して責任を持つ場合、その行為が使役主 (Causer) として実現できる。

(48) 声控装置 打开 了 自动门。

shēng kòng zhuāng zhì dǎ-kāi le zì dòng mén

音声作動装置 開ける PERF 自動ドア

「音声作動装置が自動ドアを開けた。」

(49) 连续熬夜 病-倒 了 张三。 (= (44d))

lián xù áo yè bìng-dǎo le zhāng sān

連続で徹夜 病気になる-倒れる PERF 张三

「連続で徹夜することが张三を病気にして倒れさせた。」

さらに、動作主や変化対象以外に、特定の状態変化を生じさせる原因として考えられるものは、かなり自由に使役主として主語位置に現れる。“病倒（病気になって倒れる）”

の場合、前項動詞“病（病気になる）”という状態変化を引き起こす原因（50a）や、さらに抽象的な背景（50b）も使役主となれる²。

- (50) a. 流行性感冒 病-倒 了 张三。
 liú xíng xìng gǎn mào bìng-dǎo le zhāng sān
 インフルエンザ 病気になる-倒れる PERF 張三
 「インフルエンザが張三を病気にさせて倒れさせた。」
- b. 艰苦的环境 病-倒 了 张三。
 jiān kǔ de huán jìng bìng-dǎo le zhāng sān
 厳しい環境 病気になる-倒れる PERF 張三
 「厳しい環境が張三を病気にさせて倒れさせた。」

ただし、この原因は必ず前項動詞が表す状態変化を生じさせる十分な使役力を持たなければならない。張さんが病気になるという事象と張さんが倒れるという事象は、病気になって倒れるという状態変化の連続に見えるため、使役主すなわちこの一連の状態を引き起こす原因は必ずこの二つの状態変化といずれも因果関係を持つ。さらに、動補構造の前項動詞が表すいわゆる<基礎行為>となる状態変化と結果補語が表す二次状態変化の間に、時間的な前後関係が想定されるため、使役主はまず<基礎行為>の原因でなければならず、前項動詞“病”の概念構造にあると考えられる。“病”とは因果関係を持たずに“倒”だけの原因であるものは使役主にならない（51）。

- (51) * 八百米长跑 病-倒 了 张三。
 bā bǎi mǐ cháng pǎo bìng-dǎo le zhāng sān
 八百メートルの競走 病気になる-倒れる PERF 張三
 「八百メートルの競走が張三を病気にさせて倒れさせた。」

そこで、(44c, d) の文の概念構造は以下のように表示できる。非対格タイプ<主語指向型>では、使役主（Causer）は前項動詞の概念構造に存在するが、項役割が付与され

² (50a, b) は張翼（2013）が挙げる以下の例文を参考して作った文である。

- (i) a. 最近流行性感冒病倒了一大批人。
 「最近インフルエンザのせいで多くの人が病気にかかって倒れた。」
- b. 艰苦的环境病倒了一大批人。
 「厳しい環境で多くの人が病気にかかって倒れた。」

ていないため実現しない。状態変化だけを表すはずの“病”という事象は、この暗黙の使役主（implicit cause）の存在によって一つの原因事象として成立し、結果事象の“倒”とは CAUSE₁ という使役関係で結ばれる。一方、原因事象の内部にある使役関係 CAUSE₂ に焦点を当てられると、使役主（Causer）は動補構造が表す二つの状態変化両方の使役主となって項構造も統語上も実現し、他動詞構文の性質を持つ＜原因型＞に拡張される。この二つの構文においてプロファイルされる使役関係 CAUSE を太字で示す。

- (52) a. 张三病-倒了。(= (44c))
「張三は病気にかかって倒れた。」
[[EVENT1 (x CAUSE₂) [y BECOME [y BE 病]]]
CAUSE₁ [EVENT2 y BECOME [y BE 倒]]]
(x= implicit cause, y=张三)
- b. 连续熬夜病-倒了张三。(= (44d))
「連続で徹夜することが張三を病気にして倒れさせた。」
[x CAUSE₂ [[EVENT1 y BECOME [y BE 病]]]
CAUSE₁ [EVENT2 y BECOME [y BE 倒]]]
(x=连续熬夜, y=张三)

言葉を変えると、非対格動詞が他動詞と自他交替するように、非対格タイプ＜主語指向型＞が原因を主語とする＜原因型＞と交替する。どちらの概念構造にも使役主（Causer）が常に存在するが、一方は暗黙のままで、他方では実現するという違いがある。実現した項は構文から原因の意味役割を付与される。

中右・西村（1998：145）、石村（2011：189）などは原因項を「臨時的なエネルギー源」として取り扱うが、原因項は外から付加されるものではなく、最初から前項動詞の概念構造または意味フレームに存在して意味的に働いている原因（Cause）を構文の力によって統語上に実現させたものなのである。すなわち、動詞の項構造にある外項（Agent）が主語で使役行為者の（53a）から、動詞の概念構造にある項を原因へと拡張すれば（53b）になると捉えることができる。

- (53) a. 小王 推-倒 了 大树。
xiǎo wáng tuī-dǎo le dàshù
王先生 押す-倒れる PERF 大木
「王先生は大木を押し倒した。」

- b. 连续熬夜 病-倒 了 张三。 (= (44d))
 lián xù áo yè bìng-dǎo le zhāng sān
 連続で徹夜 病気になる-倒れる PERF 張三
 「連続で徹夜することが張三を病気にして倒れさせた。」

以上、非対格タイプ<主語指向型>の意味構造を以下のようにまとめられる。

- (54) a. i. 原因事象と結果事象のいずれにも意図性がない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されている。
 b. 前項動詞は非対格自動詞である。
 c. 主語は意志性を問わず意味上の変化対象である。
 d. 原因事象と結果事象の間に因果関係が直接的であり、時間間隔はない。
 e. 使役行為者 (Causer) は<基礎行為>暗黙の原因 (implicit cause) であり、前項動詞の項ではないが意味フレームには含まれる。

5.3.4 非対格タイプの項構造と構文意味

つづいては、(44c) をもう一度取り上げて非対格タイプ<主語指向型>における項構造の融合と構文拡張を考察する。

- (55) 张三 病-倒 了。 (= (44c))
 zhāng sān bìng-dǎo le
 張三 病気にかかる-倒れる PERF
 「張三は病気にかかって倒れた。」

この文において、表面上の原因事象は“张三病了 (張三が病気にかかる)”という状態変化であり、“张三倒了 (張三が倒れる)”という2次的状態変化を引き起こす。前文の分析によると、前項動詞“病”の概念構造には表出していない使役主が存在する。つまり、動詞“病”の意味フレームに病気にかかった原因として何らかの Cause という参加者が存在する。Goldberg (1995 : 48) によると、Agent、Patient のような一般的カテゴリーの具体例である参加者はプロファイルの地位を与えられる最も有力な候補である。動詞“病”の場合、動作主 Agent は存在せず、変化対象 Theme_i の具体例“张三”が最も卓越性の高い参加者となり、自然にプロファイルされる。一方、ここでの Cause は語彙的にプロファイルされず、暗黙のままである。そして、結果述語“倒”の意味フレームにおいて唯一プロファイルされる Theme_j 項“张三”と動詞“病”の唯一の Theme_i 項“张三”が同定のため融合し、一つの項として実現する。

“张三”は Theme 役割を受けるため、Cause という使役役割を指定されることができず、結果述語“倒”のフレームでプロファイルされる変化主体であるかつ前項動詞“病”の意味フレームに結びつく参与者であるため、被使役主役割 Affectee を指定される。結果構文のテンプレートと融合するとき、使役主 Cause は存在しないため、Affectee が唯一の名詞句として主語位置を占める。項構造の融合過程と構文表示はそれぞれ (58) と (59) に示す。これは Li (1995) や楊 (2013) の主張と矛盾しない。

(56) The descriptive conditions for c-role assignment:

- a. The argument in the subject position receives the c-role Cause from a resultative compound only if it does not receive a theta role from V_{res} .

(Li 1995)

(57) 使役役割融合二原則：

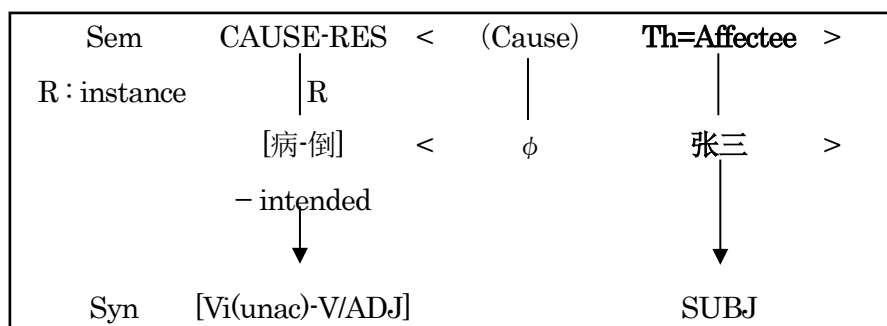
- I. 被使役主役割と融合可能なのは、結果述語のフレームでプロファイルされる変化主体でなければならない、かつ、それは前項述語の意味フレームに結びつく参与者でなければならない。

(楊 2013 : 97)

(58) $V_{病} <Th_i> + V_{倒} <Th_j> \rightarrow V_{caus} 病 \cdot V_{res} 倒 <\phi[Caus] Th_i = Th_j [Aff]>$
 (张三病) (张三倒) (张三病倒了)

動補構造と構文の間の R 関係は instance とする。プロファイルされるべき参与者役割と項役割は太字で示し、二者の融合が義務的な場合、実線で結んで表示する。また、原因事象と結果事象のいずれにも意図性がないため、[-intended] で示す。

(59) 結果構文 + “病倒”



5.4 非能格・他動詞タイプ：“跑累”型

非能格・他動詞タイプ<主語指向型>とは、以下のような文を指す。前項動詞は非能格自動詞（60a, b, c）または非能格自動詞として使われる他動詞（60d, e）であり、主語が何らかの活動や行為を行った結果、主語自身に状態変化が起こるという意味関係を表す。

(60) a. 张三 跑-累 了。 (=2a)

zhāng sān pǎo-lèi le

張三 走る-疲れている PERF

「張三は走り疲れた。」

b. 李四 从 梦中 笑-醒 了。

lǐ sì cóng mèng zhōng xiào-xǐng le

李四 から 夢の中 笑う-目覚める PERF

「李四は笑って夢の中から目覚めた。」

c. 小朋友 哭-岔气 了。

xiǎo péng yǒu kū-chà qì le

子供 泣く-わき腹が痛む PERF

「子どもは泣きすぎてわき腹が痛くなった。」

d. 他 吃-胖 了。

tā chī-pàng le

彼 食べる-太る PERF

「彼は食べて太った。」

e. 我 看-哭 了。

wǒ kàn-kū le

私 見る-泣く PERF

「私は見て泣いた。」

形式的に非対格タイプに類似していると同時に、自他交替がみられる点が共通しているものの、前者とは違ってこのタイプは一部において目的語を伴うことが可能である。

(61) a. 他 吃-饱 了 饭。

tā chī-bǎo le fàn

彼 食べる-満腹である PERF ご飯

「彼はご飯を食べて満腹になった。」

b. 他 喝-醉 了 酒。
 tā hē-zuì le jiǔ
 彼 飲む-酔っ払う PERF 酒
 「彼は酒を飲んで酔っ払った。」

c. 老师 讲-烦 了 课。
 lǎo shījiǎng-fán le kè
 先生 教える-うんざりする PERF 授業
 「先生は授業をしすぎてうんざりした。」 (任鷹 2001)

d. 我 看-倦 了 风景, 走-累 了 路。
 wǒ kàn-juàn le fēng jǐng zǒu-lèi le lù
 私 見る-疲れる PERF 風景 歩く-疲れる PERF 道
 「私は風景を見るのに疲れたし、道も歩き疲れてしまった。」
 (简嬪《胭脂盆地》)

以下、5.4.1 節と 5.4.2 節では目的語を伴わないタイプの分析と定式化を行い、5.4.3 節からは目的語を伴うタイプの考察をする。

5.4.1 非能格・他動詞タイプの意味構造

ここでは (60) のような目的語を伴わない文について考えたい。

前述のように、このタイプの前項動詞は非能格自動詞ないし非能格自動詞として振る舞う事が可能な他動詞であり、意志性を持つ有生物が主語となって前項動詞の表す行為や活動を行うため、原因事象には意図性がある。

一方、結果補語が表す状態変化は動作主自身に起こるが、動作主自身は前項動詞が表す動作の対象とは考えられない。そもそも動作主が自分に対して行為を行うわけではない以上、「目標通り」の対象物に意図的な状態変化を引き起こすとは言えず、結果事象には意図性がない。

また、結果補語が表す状態変化が前項動詞の語彙に含意されているとも言えない。(60) の“走累 (走って疲れる)”の場合、走れば疲れるのは自然ではあっても必然ではない。

“吃胖 (食って太る)”と“哭岔气 (泣いてわき腹が痛む)”は、語用論的には十分あり得る変化ではあっても、動詞の語義に含まれているわけではない。“看哭 (見て泣く)”“笑醒 (笑って目覚める)”に至っては、状態変化を動詞の意味から直接に予測することは不可能である。

原因事象と結果事象の間の因果関係については、時間間隔もなく直接因果関係で結ばれると考えられる。“看哭 (見て泣く)”の場合、切ない本を読んで、あるいは悲しい映画

を見て、その内容に感動して泣いてしまうという意味を表すため、「内容に感動する」という内部事象 (internal event) を想定することも可能ではあるが、見て (読んで) しばらくしてから泣くわけではないので、時間差はない。なお、“吃胖 (食べて太る)” の場合は、「食べる」と「太る」が連続して起こるというよりは、同時進行で累積的な (cumulative) 事象であるが、直接因果関係であることに違いはない。

まとめると、結果事象は動作主の意図によるものではなく、前項動詞の語彙的な含意には含まれないが、原因事象からの自然な結果であり、直接因果関係を持つ。

次は非能格・他動詞タイプにおける使役行為者を考察する。＜基礎行為＞の遂行者は同時に変化対象であり、前述したように主語に起こる状態変化も意図的かつ目標通りの結果とは言えないため、主語は使役行為者として使役力を充分備えるとは言いがたい。(60) の文において、「張三が疲れる」「彼が太る」という状態変化に対して責任があるのは、動作主自身より、「張三が走る」「彼が食べる」のような動作主が行う行動自体である。

したがって、ここでは非能格・他動詞タイプにおいて、使役行為者 (Causer) は＜基礎行為＞の遂行者から＜基礎行為＞自体へと拡張されたと考えられる。一種のメトニミック (換喩的) な拡張といえるが、中右・西村 (1998 : 143) が提案する＜基礎行為＞に相当するもの自体が使役行為者となるという使役行為者カテゴリー拡張の一つの方向に一致する。前述したように、中右・西村 (1998 : 143) が挙げる (17) の例文において使役行為者となる＜基礎行為＞自体は「彼が行った発表」「酒を飲みすぎたこと」のような何らかの活動であるが、それも (60) の主語の動作を表す＜基礎行為＞に適用される。

- (17) a. His announcement produced a violent reaction among the crows.
b. Excessive drinking killed Bill.

では、(60a) の文における概念構造を考えよう。前項動詞は動作や活動を表す非能格自動詞であり、動作主 x の行為自体が使役行為者となり、状態変化を表す結果事象“累”との間に CAUSE という使役関係で結ばれる。CAUSE を二つ持つ非対格タイプとは違い、非能格・他動詞タイプには暗黙の使役主 (implicit cause) が存在しないので、使役関係は動作主の行為と動作主に起こる状態変化の間にあるのみである。ただし、ここで注意すべきは、前項動詞は非能格自動詞であっても、通常の Theme や Patient 以外の意味役割を持つ目的語をとることが可能である。その目的語は非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞において抑制されて現れにくくても、(62b, c) に示すように、動詞コピー構文や＜原因型＞結果構文への拡張によって改めて表出することが可能である。したがって、(60a) の概念構造は (63) のように表現できる。

- (62) a. ? 张三 跑-累 了 马拉松。
zhāng sān pǎo-lèi le mǎ lā sōng
张三 走る-疲れる PERF マラソン
「張三はマラソンを走って疲れた。」
- b. 张三 跑 马拉松 跑-累 了。
zhāng sān pǎo mǎ lā sōng pǎo-lèi le
张三 走る マラソン 走る-疲れる PERF
「張三はマラソンを走って疲れた。」
- c. 马拉松 跑-累 了 张三。
mǎ lā sōng pǎo-lèi le zhāng sān
マラソン 走る-疲れる PERF 張三
「マラソンを走ることが張三を疲れさせた。」

(63) 张三跑-累了。(= (60a))

「張三は走り疲れた。」

[[_{EVENT1} x ACT(跑) (PATH)] CAUSE [_{EVENT2} y BECOME [y BE 累]]]

(x=y=张三, PATH=马拉松)

なお (64) のように、主語が意志性を持つ人間だけではなく、人間の体の一部となることがある。非対格タイプの結果構文にも見えるが、これは元々目的語位置にある身体部分が主語になったとみることができる。実際、結果構文がなければ成り立たず (65)、身体部位の所有者が主語として実現し、身体部位が目的語となる (66) のような構文が可能である。この分析が正しければ、(64) は非能格・他動詞タイプとは区別しなければならない。

- (64) a. 他的腿 站-酸 了。
tā de tuǐ zhàn-suān le
彼の足 立つ-だるい PERF
「彼の足が立ち疲れてだるくなった。」
- b. 我的肚子 吃-坏 了。
wǒ de dù zi chī-huài le
私の腹 食べる-壊れる PERF
「私のお腹は食べて壊れた。」

(石村 2011 : 166)

- (65) a. * 他的腿 站 了。
 tā de tuǐ zhàn le
 彼の足 立つ PERF
 「彼の足が立った。」
- b. * 我的肚子 吃 了。
 wǒ de dù zi chī le
 私の腹 食べる PERF
 「私のお腹は食べた。」
- (66) a. 他 站-酸 了 腿。
 tā zhàn-suān le tuǐ
 彼 立つ-だるい PERF 足
 「彼が立ち疲れたせいで足がだるくなった。」
- b. 我 吃-坏 了 肚子。
 wǒ chī-huài le dù zi
 私 食べる-壊す PERF お腹
 「私は（何かを食べて）お腹を壊した。」
- c. 小王 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi
 王先生 洗う-濡れる PERF 袖
 「王先生は洗濯して袖を濡らしてしまった。」
- d. 小王的袖子 洗-湿 了。
 xiǎo wáng de xiù zi xǐ-shī le
 王さんの袖 洗う-濡れる PERF
 「王さんの袖は（洗濯するときに）濡れてしまった。」
- e. 他 跑-烂 了 两双运动鞋。
 tā pǎo-làn le liǎng shuāng yùn dòng xié
 彼 走る-ボロボロ PERF 二-CL-運動靴
 「彼が走るせいで二足の運動靴がボロボロになった。」
- f. 两双运动鞋 跑-烂 了。
 liǎng shuāng yùn dòng xié pǎo-làn le
 二-CL-運動靴 走る-ボロボロ PERF
 「二足の運動靴が走ってボロボロになった。」

この構文は＜目的語指向型＞の“洗湿”タイプ（66c,e）における目的語が主語の所有物である場合にも類似しており、＜目的語指向型＞の受動態（Cheng&Huang 1994 が言う pseudo-passive resultatives）なのか、それとも全く別の構文なのか、判断するのは難しい。ここではこれ以上詳しく考察せず、今後の課題としたい。

ここまで中国語の非能格・他動詞タイプを見てきたが、英語では（8）のような非能格自動詞を用いる結果構文を許さず、必ず再帰代名詞を用いて他動詞文の形式で表現する。

(8) 前項動詞が非能格自動詞の場合

- a. * I danced tired. (Hoekstra 1992)
- b. * He talked hoarse. (Goldberg 1995 : 181)
- c. * He coughed sick. (Goldberg 1995 : 181)
- d. * The officers laugh helpless. (Levin & Rappaport Hovav 1995 : 36)
- e. * Bill cried sad. (Huang 2006)

- (9) a. I danced myself tired.
- b. He talked himself hoarse.
- c. He coughed himself sick.
- d. The officers laugh themselves helpless.
- e. Bill cried himself sad.

英語の場合、各イベントに項が必要とされ（Rappaport Hovav&Levin 2001 : 779 ; 影山 2001 : 70）、結果述語の項は内項すなわち直接目的語でなければならないという制限がある（Simpson 1983 ; Huang 2006）。そのため、非能格動詞の結果構文では、「擬似再帰的目的語（fake reflexive object）」をつけて他動詞結果構文と同じ形式を作るしかないのである。

(67) ARGUMENT-PER-SUBEVENT CONDITION:

There must be at least one argument XP in the syntax per subevent in the event structure. (Rappaport Hovav&Levin 2001 : 779)

- (68) In a resultative construction, the result is predicated on an object, not the subject. (Huang 2006)

中国語の非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞にはそのような制約がない。これは次節で見る項の融合により、擬似再帰的目的語が不要なためである。言い換えれば、構文の拡張の仕方の違いによって、このような相違が生じたと考えられる。

5.4.2 非能格・他動詞タイプの項構造と構文拡張

次に目的語を伴わない場合の非能格・他動詞タイプの項構造と構文拡張を考察する。
例文として (60a) を改めて取り上げる。

- (60) a. 张三 跑-累 了。 (=2a)
zhāng sān pǎo-lèi le
張三 走る-疲れている PERF
「張三は走り疲れた。」

前項動詞“跑”は非能格自動詞として、通常はAgent項“张三”のみをとる。結果述語“累”は非対格自動詞として同じく“张三”というTheme項をとる。英語において、先に見たように、意味役割が異なる項は融合することができず、必ず再帰代名詞を用いて目的語位置を埋める。中国語の場合は英語と違い、二つの項が持つ意味役割は異なるものの、同一指示であるため融合することが可能となり、一つの項として実現する。

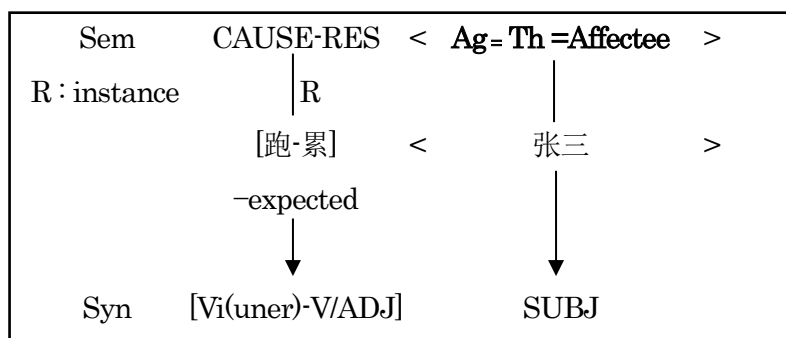
結果として、非対格タイプと同じように、結果構文のテンプレートと融合するとき、存在しない使役主Causeの代わりに、Agent/Affecteeが唯一の名詞句として主語位置を占める。非対格タイプの場合、主語が完全に変化対象であるのに対して、非能格・他動詞タイプでは主語は外項（動作主）でもあり、暗黙のCauseはない。

ここでは改めて注意してほしいのは、使役役割の使役主Causeと構文の使役行為者Causerが必ず一致する必要がないことである。非能格・他動詞タイプの場合、使役行為者Causerは<基礎行為>自体であり、使役主Causeのメトニミックな拡張となるため、構文上に明示する必要はない。項構造の融合過程は以下の通りである。

- (69) V 跑<Ag> + V 累<Th> → V_{caus} 跑-V_{res} 累<Ag=Th[Aff]>
(张三跑) (张三累) (张三跑累了)

構文表示を (70) に示す。動補構造と構文の間のR関係はinstanceである。また、原因事象には意図性があるものの結果事象には意図性がないため、第4章に倣って [-expected] で示す。

(70) 結果構文+ “跑累”



5.4.3 非能格・他動詞タイプに現れる目的語の可能性

ここまで目的語を伴わない場合の非能格・他動詞タイプについて考察した。しかし前述した通り、非能格・他動詞タイプの特徴の一つは目的語を伴うことが可能であるという点である。一つ注意してほしいのは、すべての非能格・他動詞タイプは目的語なしで成立するが、目的語をとることができるのは一部にすぎないうえに、目的語の種類がかなり限られ、出現条件も厳しいということである。この現象に言及する先行研究は少なくないが (Cheng&Huang1994、石 2000、任 2001、施 2005、彭 2011、石村 2011 など)、考察は主に (61a, b) のような“酒 (酒)” “飯 (ご飯)” 類の単音節であり意味のない、いわゆる虚目的語および (61c) (72a) のような“烦 (うんざりする)” “膩 (飽きる)” “懂 (分かる)” “会 (できる)” 類の結果補語と共に起する目的語に集中している。

しかし、実際の言語使用には、(61d) (72b, c, d) のように、“酒” “飯” 以外に「虚目的語」とは考えられない名詞句も出現し、かつ結果補語の種類もある程度多様であり、従来指摘されるように生産性が極端的に低いわけではない。そこで、本節では目的語を伴う場合を特に他動詞タイプと呼び、＜主語指向型＞他動詞タイプに出現する目的語について考察し、目的語の種類および出現の条件を明らかにしたい。

- (61) a. 他 吃-饱 了 饭。
 tā chī-bǎo le fàn
 彼 食べる-満腹である PERF ご飯
 「彼はご飯を食べて満腹になった。」
- b. 他 喝-醉 了 酒。
 tā hē-zuì le jiǔ
 彼 飲む-酔っ払う PERF 酒
 「彼は酒を飲んで酔っ払った。」

- c. 老师 讲-烦 了 课。
lǎo shī jiǎng-fán le kè
先生 教える-うんざりする PERF 授業
「先生は授業をしすぎてうんざりした。」

(任鷹 2001)

- d. 我 看-倦 了 风景, 走-累 了 路。
wǒ kàn-juàn le fēng jǐng zǒu-lèi le lù
私 見る-疲れる PERF 風景 歩く-疲れる PERF 道
「私は風景を見るのに疲れたし、道も歩き疲れてしまった。」

(简嬪《胭脂盆地》)

- (71) a. 他 听-懂 了 那个笑话。
tā tīng-dǒng le nà gè xiào huà
彼 聞く-分かる PERF あの-CL-ジョーク
「彼はあのジョークを聞いて意味が分かった。」
- b. 牲口 吃-饱 了 草料。
shēng kǒu chī-bǎo le cǎo liào
家畜 食べる-満腹である PERF まぐさ
「家畜はまぐさを食べて満腹になった。」
- c. 那群人 喝-高 了 茅台酒。
nà qún rén hē-gāo le máo tái jiǔ
あの連中 飲む-酔っ払う PERF 茅台酒
「あの連中は茅台酒を飲んで酔っ払った。」
- d. ? 我 又 看-哭 了 一集电视剧。
wǒ yòu kàn-kū le yī jí diàn shì jù
私 また 見る-泣く PERF 一-CL-テレビドラマ
「私はまた一話のテレビドラマを見て泣いた。」

以下、目的語の種類と生起条件と、結果補語の種類と目的語との共起関係について、順に検討していく。

5.4.3.1 他動詞タイプにおける目的語の種類と生起条件

彭 (2011 : 43) は本論文が言う非能格・他動詞タイプを、前項動詞の他動性と目的語との共起能力によって三つに分類している。

A 類：前項動詞が自動詞であり、動補構造全体も目的語をとらない。

- (72) 小孩子 哭-累 了。
xiǎo hái zi kū-lèi le
子ども 泣く-疲れる PERF
「子どもは泣き疲れた。」

B 類：前項動詞は他動詞であるものの、動補構造全体は目的語をとらない。

- (73) a. 他 吃-胖 了 (*中餐)。
tā chī-pàng le (*zhōng cān)
彼 食べる-太る PERF (中華料理)
「彼は(中華料理を)食べて太った。」
- b. 我 看-哭 了 (*电影)。
wǒ kàn-kū le (*diàn yǐng)
私 見る-泣く PERF (映画)
「私は(映画を)見て泣いた。」

C 類：前項動詞が他動詞であり、動補構造全体も目的語をとれる。

- (74) a. 他 吃-够 了 (红烧肉)。
tā chī-gòu le (hóng shāo ròu)
彼 食べる-飽きる PERF (豚の角煮)
「彼は(豚の角煮を)食べ飽きた。」
- b. 他 听-腻 了 (软绵绵的歌儿)。
tā tīng-nì le (ruǎn mián mián de gē ér)
彼 聞く-飽きる PERF (軟弱な曲)
「彼は軟弱な曲を聞き飽きた。」

(彭 2011 : 43)

本節は、前項動詞が目的語をとる能力を持つB類とC類動補構造を考察対象とする。彭(2011)は前項動詞が他動詞の場合だけを論じるが、ここでは目的語と共起する事が可能な非能格自動詞(例えば(61d)の“走(歩く)”)も考慮に入れる。

まずは、動補構造がどのような目的語をとれるのかという点について考えよう。

他動詞タイプにおける最も典型的な目的語は、(61)の“飯(ご飯)”“酒(酒)”“課(授業)”“路(道)”のように、上位概念を表す単音節語であり、しばしば省略されてしまう「虚目的語」(石村 2011 : 172)と呼ばれるものである。(75)に見られるように、具体性・指示性を持つ名詞句は目的語として許されない。このように、目的語として共起で

きるものに制限があるため、李（1986）、施（2005）、石村（2011）などは、このような目的語を生産性の低い特別な例外として扱っている。

- (75) a. *他 吃-饱 了 这碗饭。
 tā chī-bǎo le zhè wǎn fàn
 彼 食べる-満腹である PERF この-CL-ご飯
 「彼はこのご飯を食べて満腹になった。」
- b. *张三 喝-醉 了 那杯酒。
 zhāng sān hē-zuì le nà bēi jiǔ
 張三 飲む-酔っ払う PERF あの-CL-酒
 「張三はあの酒を飲んで酔っ払った。」

しかし斉木（2004）は、主語指向型動補構造が取る目的語の判断には個人差があることを指摘している。たとえば（76）の例で、目的語として食事を表す総称的な名詞“飯”のみを許す話者と、“面包（パン）”や“饺子（餃子）”であってもよいとする話者がいるという。

- (76) 他 吃-饱 了 {饭/面包/饺子}。
 tā chī-bǎo le {fàn/miàn bāo/jiǎo zǐ}
 彼 食べる-満腹である PERF {ご飯/パン/餃子}
 「彼は {ご飯/パン/餃子} を食べて満腹になった。」

（斉木 2004）

さらに、（77）に示すように、現代中国語コーパスや中国語のウェブサイトを検索すると、“飯”“酒”以外の目的語をとる主語指向型動補構造の例文が少なからず見つかる。中には“觉（眠り）”のような上位概念を表す単音節語もあれば、“萨勒亲手烹调的可口饭菜（サーラーの美味しい手作り料理）”のような複雑な名詞句もある。これらの例文から、主語指向型動補構造が目的語をとるのはそれほど珍しい現象でも、「生産性の低い特別な例外」でもないことがわかる。

- (77) a. 他们 听-厌 了 官话, 看-够 了 现实。
 tā men tīng-yàn le guān huà, kàn-gòu le xiàn shí
 彼ら 聞く-飽きる PERF お世辞 見る-十分である PERF 現実
 「彼らはお世辞を聞き飽きたし、現実も見飽きた。」

（黄裳《书之归去来》）

- b. 我 听-懂 了 他说的话。
 wǒ tīng-dǒng le tā shuō de huà
 私 聞く-分かる PERF 彼の話
 「私は彼の話を理解した。」
- c. 他 睡-醒 了 觉。
 tā shuì-xǐng le jiào
 彼 眠る-目覚める PERF 眠り
 「彼は眠りから目覚めた。」
- d. 他 喝-晕 了 酒。
 tā hē-yūn le jiǔ
 彼 飲む-くらくらする PERF 酒
 「彼は酒を飲んで（頭が）くらくらした。」
- e. 刚 在 利苑 喝-爽 了 杨枝甘露。
 gāng zài lì yuàn hē-shuǎng le yáng zhī gān lù
 先ほど で 利苑（店名） 飲む-気持ちいい PERF 楊枝甘露（飲み物）
 「先ほど利苑で楊枝甘露（飲み物の一種）を飲んで気持ちよくなった。」
 (<http://www.dianping.com/review/5069278>)
- f. 而现在， 能够 吃-饱 萨勒 亲手 烹调的
 ér xiàn zài néng gòu chī-bǎo sà lè qīn shǒu pēng tiáo de
 しかし今 できる 食べる-満腹である サーラー 手掛ける 作った
 可口 饭菜， 他 看起来 健壮 多 了。
 kě kǒu fàn cài tā kàn qǐ lái jiàn zhuàng duō le
 美味しい 料理 彼 に見える たくましい より PERF
 「しかし今、サーラーの美味しい手作り料理を食べて満腹になれるから、
 彼はたくましくなったようだ。」

（东平《林肯和他的继母》）

どのような名詞句が主語指向型動補構造の目的語になれるのかをはっきりさせるため、代名詞・指示詞など、さまざまな名詞句を目的語の位置に挿入して例文を作り、11 人の中国語母語話者を対象としてインフォーマント調査を行った。容認度の個人差は確かにあるが、その結果はおおよそ次のようにまとめられる。表 1 に目的語のタイプごとに容認度を考察した結果を記述する。ここでは目的語を、修飾語が一切付かない「単独名詞」、代名詞・疑問詞・固有名詞・指示詞または数量詞付き名詞からなる「単純名詞句」、修飾語

句がいくつも現れる「複雑名詞句」という、三種類に分類する。(78) は考察に使った例文の一部である。

表 1 目的語のタイプと容認度			指示性	容認度
高	↑			低
*/?	単純名詞句	<ul style="list-style-type: none"> ・代名詞：他（彼） etc. ・疑問詞：谁（誰），哪个（どれ） etc. ・固有名詞：悠悠（人名），法国（地名） etc. ・指示詞＋N：那碗飯（あのご飯） etc. ・数量詞＋N：三个小偷（三人の泥棒） etc. 		
??/?	複雑名詞句	那杯度数很高的葡萄酒 （あのアルコール度数の高いワイン）， 这条泥泞不堪的路（このドロまみれの道） etc.		
?/OK	単独名詞	<ul style="list-style-type: none"> ・複音節：面包（パン），茅台酒（茅台酒） etc. ・単音節：飯（ご飯），酒（お酒），馬（馬） etc. 	低	高
↓				

- (78) a. 他 吃-饱 了 {飯/?面包/?餃子/??什么/*那碗飯/*几碗飯}。
 tā chī-bǎo le {fàn/?miàn bāo/?jiǎo zi/?? shén me/*nà wǎn fàn/*jǐ wǎn fàn}
 彼 食べる-満腹の PERF {ご飯/?パン/?餃子/??何/*あのご飯/*何杯のごはん}
 「彼は{ご飯/パン/餃子/何/あのご飯/何杯のごはん}を食べて満腹になった。」
- b. 他 走-累 了 {路/?石子路/?这条路/*哪条路}。
 tā zǒu-lèi le {lù/?shí zǐ lù/?zhè tiáo lù/*nǎ tiáo lù}
 彼 歩く-疲れる PERF {道/?砂利道/?この道/*どの道}
 「彼は{道/?砂利道/?この道/*どの道}を歩き疲れた。」

まず容認度の高い単独名詞から見ていこう。ここでの単独名詞には、先行研究で示された単音節（“飯（ご飯）” “酒（酒）” など）または 2 音節（“面包（パン）” “餃子（餃子）” など）の名詞にとどまらず、それ以上の音節を持つ名詞（“高尔夫（ゴルフ）” “自行车（自転車）” など）も含む。表 1 から明らかなように、単独名詞は目的語としてもっとも容認されやすい。

それに対して、単純名詞句が目的語になる場合には、被調査者の抵抗感が非常に大きく、容認度が明らかに低い。(78) でも、指示性が高くなるにしたがって、容認度が低下

している。言い換えると、「タイプ」解釈を許す指示性の低い名詞句のほうが、個別性のある「トークン」解釈の名詞句より、目的語になりやすいようである。

しかし、複雑名詞句はこの傾向に反している。複雑名詞句内では名詞または形容詞、指示詞、数量詞などが単独あるいは組み合わさって名詞を修飾している。(79)のように、目的語に修飾語句をつけてさらに長くすると、逆に容認度が上がるのである。ほとんどの調査対象者が、(79)の文は「完全に自然」あるいは「少々不自然だが十分に容認可能」と判断している。

(79) 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。 (= (6b))

tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù

彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道

「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」

ここまでの議論をまとめると、目的語をとる主語指向型動補構造には以下のような特徴がみられる。

(80) a. 前項動詞は目的語を取れる

b. 三種類の目的語は以下の順で容認度が下がる

I 類：単独名詞（修飾語句が一切付かない一つの名詞）

II 類：複雑名詞句（複数の修飾語句が付く名詞句）

III 類：単純名詞句（代名詞、疑問詞、固有名詞、指示詞・数量詞付きの名詞句）

長く複雑であればあるほど良いこの II 類の名詞句の特徴を確認するために、目的語を構成する修飾要素を一つずつ減らして、その容認度の違いを観察した。述語は、コーパスにおいてもっとも検索結果が多い“吃饱”を用いた。まず、非常に長い目的語 (81a,b,c,e) は、修飾語句の数と種類は多少異なるが、容認度はほぼ同様に高い。(81e) から形容詞による修飾語を指示詞と交替させた (81d) の容認度がそれに続く。名詞による修飾語と同時に数量詞も持つ (81f) は名詞修飾語を一つしか持たない (81j) より容認度が低い、数量詞だけの (81h) より高い。指示詞と名詞修飾語を持つ (81g) は指示詞だけの (81i) と同様に容認不可能である。指示詞のある (81d,g,i) と指示詞のない (81e,f,h,j) を比べると、指示詞は容認度を下げるようである。容認度の違いは (82) にまとめる。

(81) 吃-饱了

- a. 这 满满 一大碗 香喷喷的 白米 饭。
 zhè mǎnmǎn yīdàwǎn xiāngpēnpēnde báimǐ fàn
 この いっぱいの 一つ大きな碗 よい香りの 白米 ご飯
 <指示> <形容詞> <数量+形容詞> <形容詞> <名詞>
- b. 满满 一大碗 香喷喷的 白米 饭。
 <形容詞> <数量+形容詞> <形容詞> <名詞>
- c. 这 一大碗 香喷喷的 白米 饭。
 <指示> <数量+形容詞> <形容詞> <名詞>
- d. 这 一大碗 白米 饭。
 <指示> <数量+形容詞> <名詞>
- e. 一大碗 香喷喷的 白米 饭。
 <数量+形容詞> <形容詞> <名詞>
- f. 一碗 白米 饭。
 <数量> <名詞>
- g. 这碗 白米 饭。
 <指示> <名詞>
- h. 一碗 饭。
 <数量>
- i. 这碗 饭。
 <指示>
- j. 白米 饭。
 <名詞>
- k. 饭。

(82) $k > a \approx b \approx c > e > d > j > f > h > g = i$
 $\underbrace{\hspace{1.5cm}}_{\text{Ok}} \quad \underbrace{\hspace{1.5cm}}_{?} \quad \underbrace{\hspace{1.5cm}}_{??} \quad \underbrace{\hspace{1.5cm}}_{*}$

まとめると、容認度は単独名詞が最も高く (k)、様々な修飾要素を具える複雑で長い目的語がそれに続く (a, b, c)。指示詞や数量詞などの限定要素だけを持つ単純名詞句は、明らかに容認度が下がる。また修飾語句は容認度を上昇させるが、形容詞修飾語のほうが名詞修飾語より容認度を上げる力が強い ($c > d$, $e > f > h$)。一方、指示詞は容認度を下げる効果がある (d, g, i)。

このように、主語指向型動補構造の目的語には、修飾語句に関する制約があることが明らかになった。さらに、(83) に示すように、目的語の制限だけではなく、結果補語の影響も考慮しなければならない。

- (83) 他 {吃-飽 / *吃-胖} 了 飯。
 tā {chī-bǎo / *chī-pàng} le fàn
 彼 {食べる-満腹である / 食べる-太る} PERF ご飯
 「彼はご飯を食べて {満腹になった／太った}。」

次節では、(80b) の目的語の三分類に基づき、どのような結果補語が目的語と共起できるのかについて考察する。

5.4.3.2 他動詞タイプにおける結果補語の種類と目的語との共起関係

彭 (2011 : 43) は、主語指向型動補構造において、その補語動詞は一般的に人の感覚・気持ち・心理状態を表すと指摘し、代表的な補語の例をいくつか挙げている。ここでは、結果補語 R を次の三つに分類することを提案する。これは、以下で見るとおり、三種類の目的語と共起する可能性がそれぞれ異なるからである。

(84) 結果補語 R のタイプ :

- i. 心理状態タイプ
 烦 (うんざりする)、膩 (飽きる)、烦膩 (飽き飽きする)、够 (十分である)、怵 (恐れる)、怕 (怖がる)、慣 (慣れる)、厌 (飽きる)、懂 (理解する)、会 (通曉する) etc.
- ii. 身体状態タイプ
 饱 (満腹になる)、醉 (酔っ払う)、累 (疲れる)、倦 (倦む)、晕 (くらくらする)、醒 (目覚める) etc.
- iii. 感情表出タイプ
 哭 (泣く)、笑 (笑う)、乐 (面白がる) etc.

この分類によれば、心理状態タイプの結果補語は、主に「限界」あるいは「認知」などの意味を持つ述語である。身体状態タイプの結果補語は、体の状態変化を表す述語からなる。感情表出タイプの補語は「泣く」「笑う」のような、外に現れた心の動きを表す述語である。

では、三つのタイプの結果補語と、前述した三種類の目的語との共起を考察してみよう。現代中国語コーパスでの出現頻度とインフォーマント調査の結果および筆者自身の容

認度の判断は、以下のようにまとめられる。まずは「i. 心理状態タイプ」の結果補語を用いる動補構造を中心として、共起可能な目的語について検討する。

(85) I 類：単独名詞

- a. 他 听-烦 了 歌。
 tā tīng-fán le gē
 彼 聞く-うんざりする PERF 歌
 「彼は歌を聴きすぎてうんざりした。」
- b. 我 住-习惯 了 大连。
 wǒ zhù-guàn le dà lián
 私 住む-なれる PERF 大連
 「私は大連に住み慣れた。」
- c. 他们 听-厌 了 官话, 看-够 了 现实。(=78a)
 tā men tīng-yàn le guān huà, kàn-gòu le xiàn shí
 彼ら 聞く-飽きる PERF お世辞 見る-十分である PERF 現実
 「彼らはお世辞を聞き飽きたし、現実も見飽きた。」
- d. 他 学-会 了 高尔夫。
 tā xué-huì le gāo ěr fū
 彼 学ぶ-通曉する PERF ゴルフ
 「彼はゴルフを学んで、できるようになった。」

(86) II 類：複雑名詞句

- a. 他 吃-膩 了 法国厨子 精心 烹制的 饭菜。
 tā chī-nì le fǎ guó chú zi jīng xīn pēng zhì de fàn cài
 彼 食べる-飽きる PERF フランス料理人 心を込めて 作った 料理
 「彼はフランス料理人が心を込めて作った料理を食べ飽きた。」
- b. 他 听-懂 了 我的 不知道 合不合 语法,
 tā tīng-dǒng le wǒ de bú zhī dào hé bú hé yǔ fǎ
 彼 聞く-理解する PERF 私の 知らない 合うかどうか 文法
 又 夹带 广西口音 的 英语。
 yòu jiá dài guǎng xī kǒu yīn de yīng yǔ
 また ある 広西のなまり の 英語
 「彼は文法が正しいかどうか怪しい、広西のなまりがある私の英語を聞いて理解した。」
 (藍直榮《乔治老人》)

(87) III 類：単純名詞句

- a. 它（小狗） 一鸣， 老狗 便 听-懂 了 它。
tā (xiǎo gǒu) yī wū, lǎo gǒu biàn tīng-dǒng le tā
それ（子犬） 鳴くと 親犬 すぐに 聞く-理解する PERF それ
「子犬が鳴き出した途端、親犬はその意味をすぐ理解した。」
(严歌苓《爱犬颖韧》)
- b. 无论 你 看-膩 了 什么，
wú lùn nǐ kàn-nì le shí me,
たとえ あなた 読む-飽きる PERF 何
阿七 总会 给你 带来 不一样的 感觉。
ā qī zǒng huì gěi nǐ dài lái bú yī yàng de gǎn jiào
七ちゃん きっと あなたに もたらす 異なった 感覚
「たとえ何を読み飽きたとしても、七ちゃんはず新鮮な感じを与えてくれる。」
(<http://tieba.baidu.com/p/3016417159>)
- c. 您 现在 一定 住-慣 了 法国，
nín xiàn zài yī dìng zhù -guàn le fǎ guó,
あなた 現在 きっと 住む-慣れる PERF フランス
几乎 把它 当作 你的 祖国 了 吧。
jǐ hū bǎ tā dāng zuò nǐ de zǔ guó le ba
すでに それを 見なす あなたの 祖国 PERF でしょう
「あなたはきっとフランスに住むことに慣れていて、もうすでに自分の母国だと思っているのでしょう。」
(蒋学模译《基督山伯爵》)

以上の例文から分かるように、心理状態タイプの結果補語は三つのタイプすべての目的語と共起できる。ここで注意すべきは、認知能力を表す(85d)の“会”および(86b, 87a)の“懂”は単独で目的語をとることができるため、後ろの目的語は虚目的語ではなく、すべて新しい情報を持つ真性の目的語であるという点である。このことについては後で改めて検討する。

次に「ii. 身体状態タイプ」の結果補語と目的語の共起関係を考察する。

(88) I 類：単独名詞

- a. 我 看-倦 了 书。
wǒ kàn-juàn le shū
私 読む-倦む PERF 本
「私は本を読み疲れた。」
- b. 张三 喝-晕 了 酒。
zhāng sān hē-yūn le jiǔ
張三 飲む-くらくらする PERF 酒
「張三は酒を飲んで頭がくらくらしている。」
- c. 妈妈 睡-醒 了 午觉。
mā ma shuì-xǐng le wǔ jiào
母 寝る-目覚める PERF 昼寝
「母は昼寝から目覚めた。」

(89) II 類：複雑名詞句

- a. 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。(=(6b))
tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù
彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」
- b. 他 看-倦 了 那 厚厚 一摞 泛黄的 史书文献。
tā kàn-juàn le nà hòu hòu yī luò fān huáng de shǐ shū wén xiàn
彼 読む-倦む PERF あの 厚い 一重ね 古い 史書と文献
「彼は一重ねの古い史書と文献を読んで疲れた。」
- c. 他 嗅-晕 了 那 女子 身上 浓烈的 香水味。
tā xiù-yūn le nà nǚ zǐ shēn shàng nóng liè de xiāng shuǐ wèi
彼 嗅ぐ-くらくらする PERF あの 女子 体の 濃密な 香水の香り
「彼はあの女性がつけている香水の濃密な香りを嗅いでくらくらした。」
- d. ? 他 睡-醒 了 一个 美美的 下午觉。
tā shuì-xǐng le yī gè měi měi de xià wǔ jiào
彼 眠る-目覚める PERF 一-CL 気持ちいい 昼寝
「彼は甘い昼寝から目覚めた。」

(90) III 類：単純名詞句

- a. *他 吃-饱 了 那碗饭。
tā chī-bǎo le nà wǎn fàn
彼 食べる-満腹である PERF あの-CL-ご飯
「彼はあのご飯を食べて満腹になった。」
- b. *他 喝-晕 了 一杯伏特加。
tā hē-yūn le yī bēi fú tè jiā
彼 飲む-くらくらする PERF 一-CL-ヴォッカ
「彼はヴォッカを一杯飲んでくらくらした。」
- c. *他 看-倦 了 那个。
tā kàn-juàn le nà gè
彼 読む-倦む PERF あれ
「彼はあれを読んで疲れた。」

上に示したように、身体状態補語は単独名詞または複雑名詞句の目的語とは自然に共起できるが、単純名詞句とは共起しにくい。複雑名詞句の場合は、(89d) が (89a, b, c) と比べて容認度が少し下がることから分かるように、名詞句が長くかつ詳しくなればなるほど、目的語として適切になる。

最後に、「iii. 感情表出タイプ」を考察しよう。

(91) I 類：単独名詞

- a. *妈妈 看-哭 了 书。
mā ma kàn-kū le shū
母 読む-泣く PERF 本
「母は本を読んで泣いた。」
- b. *小明 看-笑 了 电影。
xiǎo míng kàn-xiào le diàn yǐng
明くん 見る-笑う PERF 映画
「明くんは映画を見て笑った。」
- c. ?? 孩子们 听-乐 了 故事。
hái zi men tīng-lè le gù shì
子どもたち 聞く-面白がる PERF 物語
「子どもたちは物語を聞いて面白がった。」

(92) II 類：複雑名詞句

- a. ?妈妈 看-哭 了 那本 俄罗斯作家 写的 悲剧小说。
mā ma kàn-kū le nà běn é luó sī zuò jiā xiě de bēi jù xiǎo shuō
母 読む-泣く PERF あの-CL ロシア作家 書いた 悲劇の小説
「母はあのロシア作家が書いた悲劇小説を読んで泣いた。」
- b. ?老师 看-笑 了 小明写的 那篇 关于外星人的 作文。
lǎo shī kàn-xiào le xiǎo míng xiě de nà piān guān yú wài xīng rén de zuò wén
先生 読む-笑う PERF 明くんが書いた あの-CL 宇宙人に関する 作文
「先生は明ちゃんが書いたあの宇宙人についての作文を読んで笑った。」
- c. ?爸爸 听-乐 了 两个小孩 一本正经的 对白。
bà ba tīng-lè le liǎng gè xiǎo hái yī běn zhèng jīng de duì bái
父 聞く-面白がる PERF 二人の子ども 大真面目な 対話
「父は二人の子どもの大真面目な対話を聞いて面白がった。」

(93) III 類：単純名詞句

- a. *妈妈 看-哭 了 那本 《红楼梦》。
mā ma kàn-kū le nà běn 《hóng lóu mèng》
母 読む-泣く PERF あの-CL 『紅樓夢』
「母はあの『紅樓夢』を読んで泣いた。」
- b. *老师 看-笑 了 两篇作文。
lǎo shī kàn-xiào le liǎng piān zuò wén
先生 読む-笑う PERF 二-CL-作文
「先生は二編の作文を読んで笑った。」
- c. *爸爸 听-乐 了 它。
bà ba tīng-lè le tā
父 聞く-面白がる PERF それ
「父はそれを聞いて面白がった。」

(91) と (93) から明らかなように、感情表出タイプの結果補語は短い単独名詞や単純名詞句の目的語と共起することはかなり難しい。それに比べると、目的語が複雑名詞句である (92) の場合は、完全に自然な文とは言いかねるものの、容認度は明確に高くなっている。

ここで注意すべきは、動補構造の結果補語は通常非対格自動詞あるいは形容詞が担うはずであるため、“哭 (泣く)” “笑 (笑う)” のような動作主の活動を表す非能格自動詞は

明らかに例外だという事実である。原因事象となる他動詞または非能格自動詞は状態変化を表す結果補語をある程度含意することが可能であるが、同じく活動を表す非能格自動詞を含意することは通常ありえない。よって、“哭（泣く）”“笑（笑う）”を結果補語とする動補構造は因果関係が非常に緩く、二つの出来事を無理やり連続させたように見える。その結果、ほかの例文に比べると、(71d) (93a, b) のような文は比較的容認度が低い。

- (71) d. ?我 又 看-哭 了 一集电视剧。
 wǒ yòu kàn-kū le yī jí diàn shì jù
 私 また 見る-泣く PERF 一-CL-テレビドラマ
 「私はまた一話のテレビドラマを見て泣いた。」

以上の結果は表 2 および (94) のようにまとめられる。

表 2 結果補語と目的語との共起関係

結果補語 のタイプ \ 目的語 の種類	I 類：単独名詞	II 類：複雑名詞句	III 類：単純名詞句
心理状態タイプ	○	○	○
身体状態タイプ	○	○	×
感情表出タイプ	×	○	×

- (94) a. 心理状態タイプの結果補語は、三種類すべての目的語と共起できる。
 b. 身体状態タイプの結果補語は、I 類と II 類の目的語と共起できるが、III 類の単純名詞句とは共起できない。
 c. 感情表出タイプの結果補語は、II 類の複雑名詞句としか共起できない。

以上のように、心理状態タイプの結果補語と共起しうる目的語はかなり自由であり、感情表出タイプの補語と共起しうる目的語は最も厳しく制限され、身体状態タイプの補語はごく短い目的語か非常に複雑な目的語をとることが分かった。

また、目的語となる名詞句は「単独名詞」「複雑名詞句」「単純名詞句」の三種類に分けられ、＜単独名詞-複雑名詞句-単純名詞句＞の順で容認度が下がること、さらに形容詞

による修飾語句は容認度を上げるのに対して、指示詞は逆に容認度を下げる効果があることを明らかにした。

しかし、なぜ三種類の目的語にこのような容認度の違いが生じるのか、そして、指示詞だけをつける単純名詞句は目的語として非常に生起しにくいのに、なぜ長い目的語の方は容認度が逆に上がるのか、更なる分析が必要である。

なお、本節の考察に基づいて、以下の2点が推測される。

- (95) ① 真性の目的語をとる“膩”“煩”“懂”タイプの結果補語はほかのタイプと区別して目的語と共起する仕組みを検討すべきである。
- ② 非常に短い名詞と長く複雑な名詞句は似たような生産性を見せるが、それぞれの形成の仕組みは異なるはずである。

次節からは、真性の目的語・短い目的語・長い目的語を伴う他動詞タイプの意味特徴と項構造をまず考察していく。

5.4.4 真性の目的語を伴う他動詞タイプ：“读懂书”型

このタイプの代表的な文を改めて(96)に挙げる。王(1995)が指摘するとおり、前項動詞も後項も二項述語で、前項動詞の主語と後項動詞の主語、前項動詞の目的語と後項動詞の目的語が一致しているのが特徴である。

- (96) a. 老师 讲-烦 了 课。 (=61c) (任 2001)
 lǎo shī jiǎng-fán le kè
 先生 教える-うんざりする PERF 授業
 「先生は授業をしすぎてうんざりした。」
- b. 我 住-习惯 了 大连。 (=85b)
 wǒ zhù-guàn le dà lián
 私 住む-なれる PERF 大連
 「私は大連に住み慣れた。」
- c. 他 学-会 了 高尔夫。 (=85d)
 tā xué-huì le gāo ěr fū
 彼 学ぶ-通曉する PERF ゴルフ
 「彼はゴルフを学んで、できるようになった。」

d. 我 听-懂 了 他说的话。 (= (77b))

wǒ tīng-dǒng le tā shuō de huà

私 聞く-分かる PERF 彼の話

「私は彼の話聞いて理解した。」

e. 他们 踢-赢 了 首场球赛。 (施 2008 : 98)

tā men tī-yíng le shǒu chǎng qiú sài

彼ら 蹴る-勝つ PERF 初めてのサッカー試合

「彼らは初めてのサッカー試合に勝った。」

上に述べたとおり、結果補語の二つの項はどちらも前項動詞の項と重なっている。

- (97) a. i. 老师 讲了 课。
 ii. 老师 烦了 课。
 b. i. 我 住 大连。
 ii. 我 习惯 了 大连。
 c. i. 他 学了 高尔夫。
 ii. 他 会了 高尔夫。
 d. i. 我 听了 他说的话。
 ii. 我 懂了 他说的话。
 e. i. 他们 踢了 首场球赛。
 ii. 他们 赢了 首场球赛。

そのため、このタイプに現れる目的語は統語上要求される真性の目的語である。このタイプの結果補語として、王 (1995) は以下のものを挙げている。心理状態を表す“懂 (分かる)”“腻 (飽きる)”のような動詞以外に、“输 (負ける)”“赢 (勝つ)”のような動詞もこのタイプに含まれる。

- (98) 懂 (分かる), 明白 (理解する), 会 (通曉する), 输 (負ける), 赢 (勝つ),
 怕 (怖がる), 怵 (恐れる), 烦 (うんざりする), 够 (十分である), 熟 (慣れる),
 腻 (飽きる), 腻味 (飽き飽きする)

このタイプの文は、動作主が目的語で示される対象に向けて、前項動詞が示す動作や行為を行うことにより、動作対象ではなくて動作主自身に状態変化を生じさせるという意味関係を表す。ただし、結果補語も動作主と対象をそれぞれ外項と内項としてとるため、

動作主に起こる状態変化は動作対象にも関連がある。例えば、「先生は授業をしすぎたせいで授業に飽きた」(96a)、「彼はゴルフを学んでゴルフができるようになった」(96c)、「彼らは試合に参加して試合に勝った」(96e)に示すように、動作主と対象は原因事象と結果事象の両方に参与している。

前述したように、非能格・他動詞タイプは共通して原因事象に意図性がある。一方、このタイプの結果補語が表す状態変化は前項動詞の語義から予想される一般的な変化方向から外れておらず、前項動詞の意味フレームに含まれる、つまり、語用論的に含意されるとは考えられる。しかし、結果状態が前項動詞の語義に含まれているとまでは言えず、「目標通り」の対象物に意図的な状態変化を引き起こすわけではないから、結果事象には意図性がない。なお、動詞が表す動作は結果を引き起こす直接な原因と考えられ、因果事象の間に時間間隔はない。

使役行為者について、目的語を伴わない場合と同じように、＜基礎行為＞自体が使役行為者となる。ただし、このタイプにおいて、前項動詞の目的語も＜基礎行為＞の一部として使役行為者の中にあるほか、状態変化の一部でもあるため EVENT2 にも表れる。(96c)の文を例として、このタイプの概念構造を(99)に示す。

(99) 他学-会了高尔夫。(= (96c))

「彼はゴルフを学んで、できるようになった。」

[[EVENT1 x ACT(学) ON z] CAUSE [EVENT2 y BECOME [y BE 会 z]]]

(x=y=他, z=高尔夫)

以上をまとめると、このタイプの意味特徴は以下の通りである。

- (100) a. i. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されている。
 b. 前項動詞は他動詞ないし目的語と共起可能な非能格自動詞であり、結果述語は心理状態などを表す二項動詞である。
 c. 主語は意志性を持つ有生物である。
 d. 原因事象と結果事象の間に因果関係が直接的であり、時間間隔はない。
 e. 使役行為者 (Causer) は行為対象を含む＜基礎行為＞自体である。

意味特徴から分かるように、このタイプは、原因事象と結果事象の緊密度が比較的高いといえる。

次は(96c)を例としてこのタイプの項構造を考察しよう。

前項動詞“学（学ぶ）”は他動詞であり、意味フレームにある Agent “他（彼）”と Theme_i “高尔夫（ゴルフ）”は最も卓越性の強い参与者であるため、強制的にプロファイルされる。結果述語“会（通曉する）”は主語の心理状態などを表す二項動詞であるため、活動を表す他動詞と違って、Experiencer “他（彼）”と Theme_j “高尔夫（ゴルフ）”という二つの項が義務的にプロファイルされる。二組の項は同一指向のためそれぞれ融合し、他動詞構文のように動補構造の二つの項として実現する。

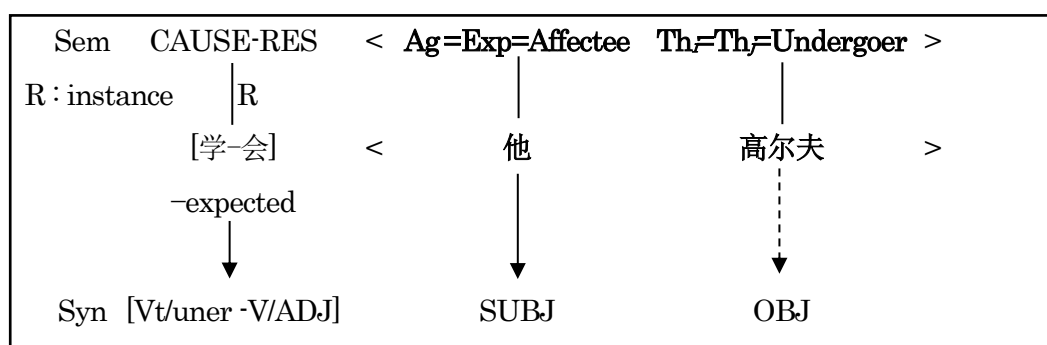
使役役割と融合する時、目的語を伴わない場合と同じく、主語“他（彼）”は変化主体かつ前項動詞の意味フレームに結びつく参与者として、被使役主役割 Affectee を指定される。一方、Theme 項 “高尔夫（ゴルフ）”は使役役割とは融合しないが、動補構造の真性の目的語として統語上に表出する義務があり、Undergoer としてそのまま目的語の位置を占める。この過程を（101）に示す。

$$(101) \quad V_{\text{学}} \langle \text{Ag Th}_i \rangle + V_{\text{会}} \langle \text{Exp Th}_j \rangle \rightarrow V_{\text{caus}} \text{学} \cdot V_{\text{res}} \text{会} \langle \text{Ag} = \text{Exp}[\text{Aff}] \text{Th} = \text{Th}_j[\text{Und}] \rangle$$

(他学高尔夫) (他会高尔夫) (他学会了高尔夫)

構文表示を（102）に示す。原因事象には意図性があるが結果事象には意図性がないため、[-expected] で示す。使役役割 Cause が名詞項の形式を持たなくて実現していない一方、前項動詞の目的語が Undergoer として動詞の後ろの位置を占めるため、統語上は普通の他動詞構文と同じように 2 項をとる文となる。ここで注意すべきは、目的語を伴う他動詞タイプはすべて目的語なしの構文形式を持つため、目的語は項役割を受けても、構文上の出現は義務的ではないから、参与者役割と統語位置 OBJECT との連結は破線で表示する。

（102）結果構文 + “学会”



5.4.5 短い目的語を伴う他動詞タイプ：“吃饱饭”型

前節で検討した真性の目的語とは異なり、このタイプの目的語は前項動詞の内項ではあるが、結果述語とは意味上の関係を持たず、結果構文の項融合原則から外れたタイプである。

このタイプの目的語の特徴は修飾語が一切付かない単独名詞であるということである。身体状態タイプの結果補語と共起できるが、感情表出タイプの結果補語とは共起できない。石村（2011：172）はこれを「虚目的語」という呼ぶが、次節に考察する同じく結果述語と統語関係を持たない長い目的語と区別するため、ここでは短い目的語と呼ぶことにする。典型的な例文は以下のようなものである。

- (61) a. 他 吃-饱 了 饭。
 tā chī-bǎo le fàn
 彼 食べる-満腹である PERF ご飯
 「彼はご飯を食べて満腹になった。」
- b. 他 喝-醉 了 酒。
 tā hē-zuì le jiǔ
 彼 飲む-酔っ払う PERF 酒
 「彼は酒を飲んで酔っ払った。」
- d. 我 看-倦 了 风景， 走-累 了 路。
 wǒ kàn-juàn le fēngjǐng zǒu-lèi le lù
 私 見る-疲れる PERF 風景 歩く-疲れる PERF 道
 「私は風景を見るのに疲れたし、道も歩き疲れてしまった。」

（简嫔《胭脂盆地》）

- (88) a. 我 看-倦 了 书。
 wǒ kàn-juàn le shū
 私 読む-倦む PERF 本
 「私は本を読み疲れた。」
- b. 张三 喝-晕 了 酒。
 zhāng sān hē-yūn le jiǔ
 張三 飲む-くらくらする PERF 酒
 「張三は酒を飲んで頭がくらくらしている。」

- c. 妈妈 睡-醒 了 午觉。
 mā ma shuì-xǐng le wǔ jiào
 母 寝る-目覚める PERF 昼寝
 「母は昼寝から目覚めた。」

まずは短い目的語を伴う他動詞タイプの意味特徴を分析しよう。動作主の行為である原因事象には意図性があるが、結果事象には意図性がない。結果補語は身体状態を表すため、前項動詞が表す動作主の行為によって、動作主自身にもたらされる結果として自然に認知される。例えば、ご飯を食べることでお腹いっぱいになったり、酒を飲んで酔っ払って頭がクラクラしたりすることなどは自然に想定される出来事である。何かをずっと見たりあるいは読んだり、長時間歩いたりすることによって、体が疲れる事も容易に想像できる。(88c)の“睡醒”は一種の定型表現であるが、“睡(寝る)”と“醒(目覚める)”の意味関係の緊密さは否定できない。したがって、結果補語が表す状態変化は動詞の語義には含まれないにしても、語用論的な意味フレームには存在していると考えられる。

なお、このタイプの原因事象は結果事象を直接に引き起こす原因であり、両事象の間に時間間隔がないことも、以下の例文との対比から分かる。動詞“喝”“吃”“看”はそれぞれ“死(死ぬ)”“吐(吐く)”“困(眠い)”を含意するとは考えにくく、因果関係を捉えるために、原因事象と結果事象の間に「粗悪な酒を飲む—中毒する—死ぬ」「食べ放題に食べる—食べ過ぎてしまって胃の調子が悪くなる—吐く」「本を読む—本の内容が味気ない—眠くなる」のような内部事象を入れなければならない。また、肉を食べることで太ることは想像できるが、食べてすぐ太るわけではないから、二つの事象の間に時間間隔ができてしまう。要するに、この種の目的語を伴う他動詞タイプは、因果関係が強い動補構造に限られるのである。

- (103) a. *很多人 喝-死 了 假酒。
 hěn duō rén hē-sǐ le jiǎ jiǔ
 多くの人 飲む-死ぬ PERF 粗悪な酒
 「多くの人が粗悪な酒を飲んで死んでしまった。」

- b. *他 吃-吐 了 自助餐。
 tā chī-tǔ le zì zhù cān
 彼 食べる-吐く PERF 食べ放題
 「食べは食べ放題を食べ(すぎ)て吐いてしまった。」

- c. *我 看-困 了 书。
 wǒ kàn-kùn le shū
 私 読む-眠い PERF 本
 「私は本を読んで眠くなった。」
- d. *他 吃-胖 了 肉。
 tā chī-pàng le ròu
 彼 食べる-太い PERF 肉
 「彼は肉を食べて太った。」

また、このタイプも目的語を含む＜基礎行為＞自体が使役行為者となる。概念構造について、結果事象に目的語を取らない点を除き、真性の目的語タイプと同じである。例文(61a)を用いて概念構造を以下のように表示する。暗黙項を持つ非対格タイプ(52a)とは違い、非能格・他動詞タイプの概念構造には使役関係 CAUSE が一つのみである。

- (104) 他吃-饱了饭。(= (61a))
 「彼はご飯を食べてお腹一杯になった。」
 [[_{EVENT1} x ACT(吃) ON z] CAUSE [_{EVENT2} y BECOME [y BE 饱]]]
 (x=y=他, z=饭))

意味特徴は以下のようにまとめられる。

- (105) a. i. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に語用論的に含意される。
 b. 前項動詞は他動詞ないし目的語と共起可能な非能格自動詞であり、結果述語は身体状態を表す動詞ないし形容詞である。
 c. 主語は意志性を持つ有生物である。
 d. 原因事象と結果事象の間に因果関係が直接的であり、時間間隔はない。
 e. 使役行為者 (Causer) は行為対象を含む＜基礎行為＞自体である。

次は、短い目的語の性質について考えよう。

Huang (2006)、石村 (2011 : 172) などは、＜目的語指向型＞とは違い、この種の目的語名詞句は特定のものを指すことができず、必ず非指示的 (non-referential) な名詞成分であり、前項動詞とのみ文法関係を持つと指摘する。

短い目的語の性質を議論する研究は多くあるが、基本的にこれを生産性の低い一種の例外として扱っている（李 1986, 郭 1995, 石 2000, 施 2005, 石村 2011 など）。施（2008 : 144-146）によれば、目的語“酒（酒）”“飯（ご飯）”“覚（眠り）”は結果述語“醉（酔う）”“饱（満腹である）”“醒（目覚める）”のデフォルト情報として存在し、動補構造“喝醉”“吃饱”“睡醒”の“影子论元（shadow argument）”として動補構造の意味に含まれるものであり、真の自由目的語（free object）ではない。すなわち、この種の目的語になれるのは一般的に“酒”“飯”“覚”のような同族目的語（cognate object）であり、それ以外の目的語はすべて個人的・臨時的な特例であるという。

施（2008 : 145）はこのようなデフォルト情報を新しい意味情報を持つほかの名詞句に変えると成立できないと述べるが、(71b,c) (106) の文の容認度は非常に高い。

- (71) b. 牲口 吃-饱 了 草料。
 shēng kǒu chī-bǎo le cǎo liào
 家畜 食べる-満腹である PERF まぐさ
 「家畜はまぐさを食べて満腹になった。」
- c. 那群人 喝-高 了 茅台酒。
 nà qún rén hē-gāo le máo tái jiǔ
 あの連中 飲む-酔っ払う PERF 茅台酒
 「あの連中は茅台酒を飲んで酔っ払った。」
- (106) a. 他们 吃-饱 了 民脂民膏。
 tā men chī-bǎo le mín zhī mín gāo
 彼ら 食べる-満腹である PERF 人民の膏血
 「彼らは人民の膏血を食べて満腹になった。」
- b. 小女孩 吃-饱 了 棉花糖。
 xiǎo nǚ hái chī-bǎo le mián huā táng
 小さな女の子 食べる-満腹である PERF 綿飴
 「小さな女の子は綿飴を食べて満腹になった。」

“酒”“飯”“覚”およびほかの短い目的語はすべて前項動詞の意味フレームにある典型的な動作対象 Patient であることは、例文から明らかである。前項動詞が表す＜基礎行為＞自体が使役行為者であるため、＜基礎行為＞の対象も使役行為者の一部として、使役行為者に十分の使役力があることを認定する際に必要となる。その目的語は結果述語が表す状態変化をもたらす自然な要因と考えられる物であれば、文に現れる事は意味的かつ語

用論的に許容される。石村（2011：179）に指摘される通り、虚目的語をとる結果構文が特殊な内部構造を持つことは間違いない。ただし、意味的かつ語用論的な力により、統語上の可能性を広げることが可能である。

逆に、目的語が結果補語の表す状態変化に対する使役力に不足しているのであれば、統語上の拡張が難しい。前述したように、短い目的語は＜基礎行為＞の一部として、必ず前項動詞が自然に取れる目的語であり、行為と結果が直接因果関係で結ばれ、かつ、時間間隔がない場合に限られ、動詞の含意から比較的推測しやすい身体状態補語としか共起できない。

なお、身体状態補語は飽（満腹になる）、酔（酔っ払う）、累（疲れる）、倦（倦む）、暈（くらくらする）、醒（目覚める）などのごく一部の動詞に限られる。

以上の条件を満たせば、この構文は先行研究が主張する厳しい制限に必ずしも従わなくても構わない。

つづいて、(61a) を例として項構造を考察しよう。

- (61) a. 他 吃-飽 了 飯。
 tā chī-bǎo le fàn
 彼 食べる-満腹である PERF ご飯
 「彼はご飯を食べて満腹になった。」

前項動詞“吃（食べる）”の意味フレームでは Agent “他（彼）” と Theme “飯（ご飯）” という二つの卓越性の高い項がプロファイルされる。結果述語“飽（満腹である）”は Experiencer “他（彼）” という一つの項のみをとる。Agent 項と Experiencer 項は同一指向のため融合して、動補構造の義務的な項となり、意味的にプロファイルされた Theme 項は前項動詞の卓越項であるためそのまま保留される。その結果、他動詞構文のように、動補構造は項を二つとることとなる。

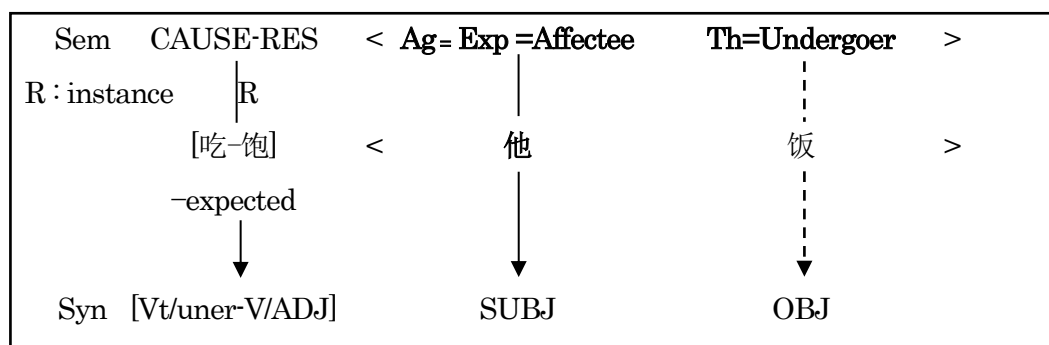
使役役割と融合する時、“他（彼）” という項は変化主体かつ前項動詞の意味フレームに結びく参与者として、被使役主役割 Affectee を指定される。一方、Theme 項“飯（ご飯）” は使役役割を指定されず、Undergoer として目的語の位置をとる。この過程を (107) に示す。

- (107) V 吃<Ag Th> + V 飽<Exp> → V_{caus} 吃・V_{res} 飽<Ag=Exp[Aff] Th[Und]>
 (他吃饭) (他饱) (他吃饱了饭)

構文表示を (108) に示す。原因事象には意図性があるが結果事象には意図性がないため、[-expected] で示す。実際、短い目的語は必ず Theme や Object のような典型的な目

的語であるわけではなく、Path ((61d) の“路(道)”) などのような非能格自動詞とも共起できる斜格の名詞句も含まれているが、数量的に少ないから、ここでは特に区別せず、典型的な内項 Theme として記する。また、短目的語は一種の虚目的語であるため、構文の項役割との融合は義務的ではない上、統語上に出現しなくても文は成立するため、破線で結んで表示する。

(108) 結果構文+ “吃饱”



5.4.6 長い目的語を伴う他動詞タイプ

長い目的語は短い目的語と同様に、動補構造から項役割をもらえない一種の虚目的語である。修飾要素を一切付けない非指示的な (non-referential) 単独名詞である短い目的語と異なり、長目的語は詳細であればあるほど容認度が高くなる。身体状態補語とのみ共起できる短い目的語に対して、長い目的語は身体状態補語のほかに感情表出類補語とも共起できる。例文を再掲する。

- (77) f. 而现在， 能够 吃-饱 萨勒 亲手 烹调的
ér xiàn zài néng gòu chī -bǎo sà lè qīn shǒu pēng tiáo de
しかし今 できる 食べる-満腹である サーラー 手掛ける 作った
可口 饭菜， 他 看起来 健壮 多 了。
kě kǒu fàn cài tā kàn qǐ lái jiàn zhuàng duō le
美味しい 料理 彼 に見える たくましい より PERF
「しかし今、サーラーの美味しい手作り料理が食べられ、満腹になれるから、彼はたくましくなったようだ。」

- (89) a. 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。(=(79))
 tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
 「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」
- b. 他 看-倦 了 那 厚厚 一摞 泛黄的 史书文献。
 tā kàn-juàn le nà hòu hòu yī luò fān huáng de shǐ shū wén xiàn
 彼 読む-倦む PERF あの 厚い 一重ね 古い 史書と文献
 「彼は一重ねの古い史書と文献を読んで疲れた。」
- c. 他 嗅-晕 了 那女子 身上 浓烈的 香水味。
 tā xiù-yūn le nà nǚ zǐ shēn shàng nóng liè de xiāng shuǐ wèi
 彼 嗅ぐ-くらくらする PERF あの女子 体の 濃密な 香水の香り
 「彼はあの女性がつけている香水の濃密な香りを嗅いでくらくらした。」
- (92) a. ?妈妈 看-哭 了 那本 俄罗斯作家 写的 悲剧小说。
 mā mā kàn-kū le nà běn é luó sī zuò jiā xiě de bēi jù xiǎo shuō
 母 読む-泣く PERF あの-CL ロシア作家 書いた 悲劇の小説
 「母はあのロシア作家が書いた悲劇の小説を読んで泣いた。」
- b. ?老师 看-笑 了 小明写的 那篇 关于外星人的 作文。
 lǎo shī kàn-xiào le xiǎo míng xiě de nà piān guān yú wài xīng rén de zuò wén
 先生 読む-笑う PERF 明くんが書いた あの-CL 宇宙人に関する 作文
 「先生は明ちゃんが書いたあの宇宙人についての作文を読んで笑った。」
- c. ?爸爸 听-乐 了 两个小孩 一本正经的 对白。
 bà bà tīng-lè le liǎng gè xiǎo hái yī běn zhèng jīng de duì bái
 父 聞く-面白がる PERF 二人の子ども 大真面目な 対話
 「父は二人の子どもの大真面目な対話を聞いて面白がった。」

(77f) (89) は身体状態タイプ、(92) は感情表出タイプの結果補語との共起している。母語話者の判断では、前者のほうが後者より容認度は高い。なぜこのような違いが生じるかを考える前に、まずはこのタイプの意味特徴について考えよう。

非能格タイプと同じく、原因事象には意図性があるが、結果事象には意図性がみられない。また、使役行為者 (Causer) は行為対象を含む<基礎行為>自体である。しかし、

前項動詞と結果補語の意味関連、内部事象の有無および事象間の時間間隔について、結果補語のタイプごとに違いがみられる。

まずは (77f) (89) に示される身体状態タイプ結果補語の場合を見よう。前述したように、これらの結果補語は短い目的語とも共起でき、前項動詞は一般的に結果補語の状態変化を含意し、二つの事象は直接因果関係で結ばれ、時間差もない。その結果、このタイプの長い目的語の容認度は最も高い。

次は (92) のような感情表出タイプ結果補語の場合を見よう。5.4.3 節に述べたように、“哭”“笑”“乐”のような結果述語は、動作や活動を表す前項動詞に含意されているわけではない。また、“看哭”“看笑”“听乐”のような動補構造において、原因事象は結果事象を直接に引き起こすとは考えにくく、何らかの内部事象の補充が必要である。例えば、小説を読むとき、悲劇的ストーリーに共感して悲しくなり、つい泣いてしまうというように、聞き手は自ら泣く理由を推測しなければならない。ただし、二つの事象の間に時間間隔はなく、「読む」「聞く」の結果として、「泣く」「笑う」「面白がる」ということは直ちに発生する。

この二つのタイプの対比から、因果事象がより緊密に結ばれるほうが、長い目的語と共起しやすいと推測できる。この推測を検証するために、以下のような非能格・他動詞タイプとして成立するが、目的語を非常にとりにくい例文を対照して見よう。

- (109) a. 他 吃-胖 了。
 tā chī-pàng le
 彼 食べる-太い PERF
 「彼は食べて太った。」
- b. *他 吃-胖 了 米饭。
 tā chī-pàng le mǐ fàn
 彼 食べる-太い PERF ごはん
 「彼はごはんを食べて太った。」
- c. *他 吃-胖 了 一整年的 香喷喷的 白米饭。
 tā chī-pàng le yī zhěng nián de xiāng pēn pēn de bái mǐ fàn
 彼 食べる-太い PERF 一年分の よい香りの 白ごはん
 「彼は一年分の美味しい白ごはんを食べて太った。」

- (110) a. 他 竟然 吃-瘦 了。
 tā jìng rán chī-shòu le
 彼 まさか 食べる-痩せる PERF
 「彼はなんと食べて痩せた。」
- b. *他 吃-瘦 了 咸菜。
 tā chī-shòu le xián cài
 彼 食べる-痩せる PERF 漬物
 「彼は漬物を食べて痩せた。」
- c. *他 吃-瘦 了 没有营养的 咸菜窝头。
 tā chī-shòu le méi yǒu yíng yǎng de xián cài wō tóu
 彼 食べる-痩せる PERF 栄養のない 漬物と雑糧パン
 「彼は栄養のない漬物と雑糧パンを食べて痩せた。」
- (111) a. 全村人 都 喝-死 了。
 quán cūn rén dōu hē-sǐ le
 全村の人 みんな 飲む-死ぬ PERF
 「全村の人は全員飲んで死んだ。」
- a. *全村人 都 喝-死 了 假酒。
 quán cūn rén dōu hē-sǐ le jiǎ jiǔ
 全村の人 みんな 飲む-死ぬ PERF 粗悪酒
 「全村の人は全員粗悪な酒を飲んで死んだ。」
- b. *全村人 都 喝-死 了 小作坊 产的 假酒。
 quán cūn rén dōu hē-sǐ le xiǎo zuō fāng chǎn de jiǎ jiǔ
 全村の人 みんな 飲む-死ぬ PERF 小さな工場 生産した 粗悪酒
 「全村の人は全員小さな工場が生産した粗悪酒を飲んで死んだ。」
- (112) a. 他 闻-吐 了。
 tā wén-tù le
 彼 嗅ぐ-吐く PERF
 「彼は嗅いで吐いた。」

b. ?他 闻-吐 了 香水味。
tā wén-tù le xiāng shuǐ wèi

彼 嗅ぐ-吐く PERF 香水の香り

「彼は香水の香りを嗅いで吐いた。」

c. ?他 闻-吐 了 电梯 里 浓浓的 香水味。
tā wén-tù le diàn tī lǐ nóng nóng de xiāng shuǐ wèi

彼 嗅ぐ-吐く PERF エレベーター 中 濃厚な 香水の香り

「彼はエレベーターの中の濃厚な香水の香りを嗅いで吐いた。」

(109) (110) (111) における動補構造は、すべて前項動詞が結果補語を含意せず、かつ間接因果関係で結ばれる例文である。(109) (110) の“吃胖”“吃瘦”は二つの事象の間に時間間隔があり、(111) は粗悪酒を飲んだら中毒してすぐ死ぬことと、中毒して日にちが経ってから死ぬという二つの読みが可能である。要するに、これらの文において、因果事象の結びつきは非常に弱い。結果として、これらの文は短い目的語とも長い目的語とも共起しにくい。

一方、(112) において、結果補語“吐 (吐く)”は動作を表す非能格自動詞であり、動詞“闻 (嗅ぐ)”に含意されていない。また、直接因果関係とは考えられず、原因事象と結果事象の間に「刺激的なおいで気分が悪くなる」という内部事象を補充する必要がある。ただし、香水のにおいを嗅ぐと、彼がすぐ吐いてしまうという状況が常識から推測でき、嗅いで一時間後に吐いてしまうことは通常ありえないため、因果事象の間に時間間隔はないと言える。こうして、三つの条件の内二つを満たさない(112)の文は、三つの条件すべてに違反する(109) (110) (111) より因果事象の結びつきが比較的強く、相対的に容認度が少し上がる。

なお、(112)の文は感情表出タイプの“哭”“笑”以外の非能格自動詞も結果補語の位置に現れうることを示唆しているが、どのような結果補語が虚目的語と共起できるのかについて、なお不明な点が多く、詳細は今後の課題とする。

以上の考察から、以下の結論が得られる。この結論は長い目的語のみならず、短い目的語にもあてはまる。

- (113) A. 虚目的語の成立可能性は動補構造の因果関係の緊密度と相関関係がある。因果関係の緊密度が高ければ高いほど、虚目的語に対する容認度も相対的に上がる。
- B. 短い目的語が因果関係に対する制限は長い目的語より厳しい。短い目的語は必ず因果関係に係る三つの条件がすべて満たされる動補構造としか共起

できないのに対して、長い目的語は三つの条件がすべて満たす動補構造とはもちろん、二つの条件までであれば違反しうる。違反がある場合には、一定の容認度の降下が伴う。

では、このように容認度に差が発生する原因は何であろうか。また、長い目的語が成立する要因は一体何であろうか。

前者の答えは、長い目的語と短い目的語を伴う他動詞タイプにおいて、目的語である<基礎行為>の対象も使役行為者の一部であり、十分な使役力が必要とされる。逆に、結果述語が表す状態変化をもたらす自然な要因と考えられるものであれば、目的語が文中に現れる事は意味的かつ語用的に許容される。

虚目的語は使役行為者の一部として、使役行為者つまり<基礎行為>自体が持つ使役力を判定する一つの要素である。短い目的語は前項動詞の自然な目的語であるため、動作のデフォルトの対象であり、動作の結果に全く関与しない。しかし、目的語の情報量をできるだけ縮小するだけでなく、逆に、目的語を具体化させて、情報量を大量に増やすことによっても、使役力は保証される。情報量の増加に伴い、状態変化に対する使役力は<基礎行為>の行為部分から目的語部分に転移し、意味的かつ語用論的に成立するようになる。

動詞の意味から比較的に推測しやすい身体状態補語の場合、短い目的語も長い目的語をどちらも可能であるが、それは上述した二つの異なる操作を経た結果である。さらに、情報量増加の操作によって、状態変化に対する語用論的な力が強くなり、より多くの状況を叙述することが可能となる。その証拠に、短い目的語と共起できない感情表出タイプ補語も、長い目的語となればある程度は共起できる。情報量を操作するメカニズムについては、次節で詳しく説明する。

また、因果関係の緊密度が下がるにつれて、虚目的語との共起も難しくなる。

以上をまとめると、長い目的語を伴うタイプの意味特徴は以下のようにまとめられる。

- (114) a. i. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。
ii. 結果述語の表す状態変化は必ずしも前項動詞に含意される必要はない。
b. 前項動詞は他動詞であり、結果述語は身体状態または感情表出を表す動詞ないし形容詞である。
c. 主語は意志性を持つ有生物である。
d. 一般的に原因事象と結果事象の間に因果関係が直接的であり、時間間隔はないが、間接的因果関係ないし時間間隔がある動補構造もある程度許容される。
e. 使役行為者 (Causer) は行為対象を含む<基礎行為>自体である。

長い目的語を伴うタイプにおける概念構造、項構造および構文表示は、短い目的語の場合と同じであるため、ここでは省略する。

5.4.7 焦点からみた虚目的語出現の原因

本節では、実現する義務のない虚目的語があえて出現する理由を、焦点と話題という情報構造の視点から考察する。

焦点 (focus) は文の意味において比較的に際立つ部分であり、話題 (topic) に係る新情報を反映する (Halliday 1967, Rochment 1986, Gundel 1999, 袁毓林 2003)。(115) に太字で示すように、中国語において、語順で焦点を表すことが可能であり (袁 2003)、文法的に許される限り、焦点は一般的に文末に置かれる (張・方 1996 : 73, 刘・徐 1998)。

- (115) 半路上 杀 出来 一个 **程咬金**。
 bàn lù shàng shā chū lái yī gè chéng yǎo jīn
 途中で 飛び出す 来る 1-CL 人名

「道の途中で (伏兵として隠れていた) 程咬金が勢いよく飛び出してくる。」

(袁 2003)

さらに、Van Valin & Lapolla (1997) によると、中国語の焦点の出現できる領域 (potential focus domain) は節内の動詞および動詞の後ろの位置に限られる。

...while in many other language, such as Italian, French, Chinese and Sesotho, the potential focus domain is generally limited to the verb and post-verbal positions within the clause. (Van Valin & Lapolla 1997 : 212)

結果構文の特徴の一つは、結果事象のほうが原因事象より卓越性が高いことである。その統語上の表現として、多くの場合、状態変化が起こる主体または結果補語自身は文末もしくは文末近くにある。つまり、結果事象およびその主体が結果構文の焦点となる。それに対して、原因事象の主体は通常旧情報であり、叙述される話題 (Topic) として文頭に置かれるのが普通である。すなわち、結果構文において、統語的形式と情報構造には以下のような対応関係があるのが一般的である。

- | | | |
|---------------------------|---------|--------|
| (116) Syntactic relation: | SUBJECT | OBJECT |
| Information Structure: | Topic | Focus |

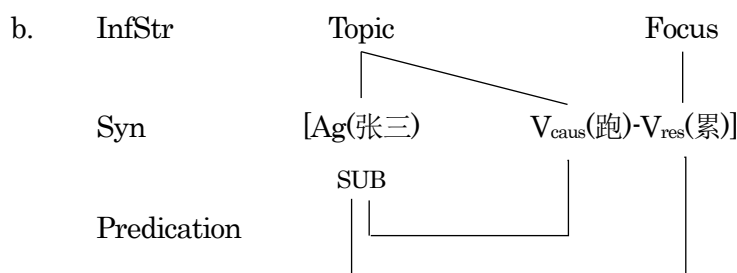
非能格タイプの場合は、前項動詞の外項 **Agent** が主語として文頭に現れる。このとき、内項が存在しないので、焦点は結果述語のみとなる。

(119) a. 张三 跑-累 了。 (=2a)

zhāng sān pǎo-lèi le

张三 走る-疲れている PERF

「張三は走り疲れた。」



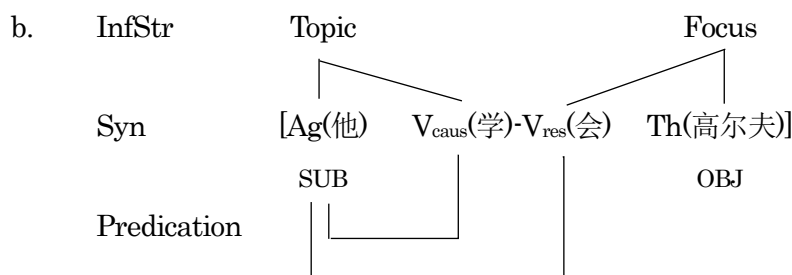
他動詞タイプ<主語指向型>のうち、前項動詞も後項動詞も他動詞の場合、原因事象と結果事象の項構造は一致する。

(120) a. 他 学-会 了 高尔夫。 (=85d)

tā xué-huì le gāo ěr fū

彼 学ぶ-通曉する PERF ゴルフ

「彼はゴルフを学んで、できるようになった。」



さて、問題となるのは結果補語とは項関係を持たない虚目的語の存在である。

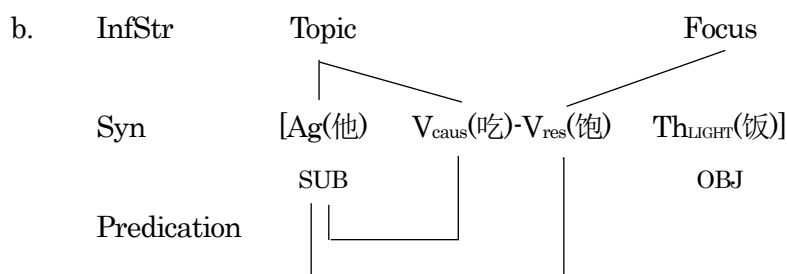
短い目的語の場合、文末の目的語（“饭（ご飯）”）は前項動詞のみの項であり、結果事象には参与せず、原因事象の自然な目的語であり、かつ最小限の意味情報しか持たない単独名詞であるため、目的語は背景化され、意味解釈上の重要性が非常に低い存在となり、あってもなくても文の意味に影響を及ぼさない。そのため、文の焦点は結果補語“饱（満腹である）”だけとなる。

(121) a. 他 吃-饱 了 饭。 (=61a)

tā chī-bǎo le fàn

彼 食べる-満腹である PERF ご飯

「彼はご飯を食べて満腹になった。」



それに対して、長い目的語には正反対の操作が起こる。短い目的語の場合と同様に、長い目的語も結果事象に参与しないが、大量の具体的な情報をもつため、背景化されず、焦点になってしまう。逆に言えば、それだけの情報量がなければ許されない構文である。

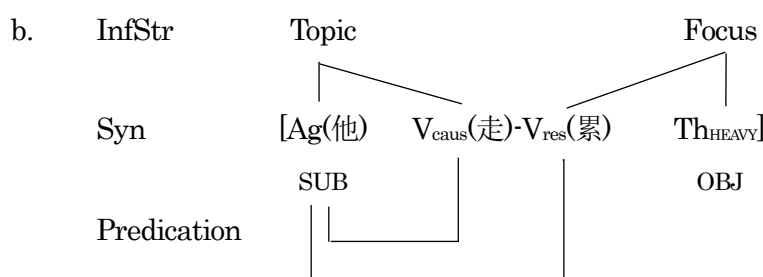
5.4.3 節で考察したように、単純名詞句（代名詞、疑問詞、固有名詞、指示詞・数量詞付きの名詞句）が目的語として現れることができないのは、単純名詞句は背景するには情報が多すぎ、使役主となるには情報量が足りないから焦点になることもできないからである。

(122) a. 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。 (=79)

tā zǒu -lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù

彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道

「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」



以上、情報構造と統語構造の観点から、目的語を伴う非能格・他動詞タイプの分析を行い、長い目的語が認可される条件を説明した。

5.5 本章のまとめ

本章では、＜主語指向型＞結果構文を非対格タイプと非能格・他動詞タイプに分けて、英語と対比しながらそれぞれの意味特徴・使役の仕組み・項構造および構文意味を考察した。本章の主な結論を以下にまとめる。

非対格タイプは前項動詞の意味フレームにおいて暗黙項（implicit argument）として存在する原因（Cause）を、使役行為者（Causer）として設定することが可能なため、使役関係を持つ結果構文の枠組の中で扱うことができる。

最初から前項動詞の概念構造または意味フレームに存在して意味的に働いている原因（Cause）を構文の力によって実現させることにより、非対格タイプ＜主語指向型＞が原因を主語とする＜原因型＞と交替する。原因事象と結果事象の間の使役関係（CAUSE₁）と、原因事象内部にある暗黙原因項と状態変化の間の使役関係（CAUSE₂）が同時に働くため、非対格タイプ＜主語指向型＞も＜単純原因型＞も概念構造に二つの使役関係（CAUSE）を持つ。

非能格・他動詞タイプにおいて、使役主は、プロトタイプの使役行為者からメトニミックな拡張を経て、潜在的な目的語を含む＜基礎行為＞自体となる。

目的語を取らない形式が多いが、前項動詞・後項動詞のどちらも他動詞の場合は真性の目的語をとる。前項動詞のみが他動詞の場合は、長短二種類の虚目的語を伴うことが可能である。短い目的語は前項動詞の最も自然な目的語として最低限の意味情報を持ち、結果補語の意味上の焦点の地位を脅かさず、原因事象の対象として文末に現れる。長い目的語は具体的かつ詳細な情報を大量に持つことにより、焦点となって実現する。

非対格タイプとは違い、非能格・他動詞タイプの使役主が名詞形式を持たない＜基礎行為＞自体であるため、概念構造に一つだけの使役関係（CAUSE）を持つ。

第6章 <原因型>結果構文

6.1 はじめに

<原因型>というのは主語に原因 (Cause) をとる結果構文のことで (石村 2011 : 183)、すでに考察した二種類の結果構文とは違い、前項動詞の主語が文末に生起する。主語となる名詞句が結果述語の表す状態変化を生じさせるという使役的な意味を持ち、拡張された一種の結果構文であると考えられる。

本章では、<原因型>を意味特徴と拡張プロセスの違いに基づいて<単純原因型>と<倒置原因型>に二分類し、それぞれ非対格タイプと非能格・他動詞タイプの<主語指向型>から拡張されると提案し、その意味特徴・統語上の特殊性の原因および拡張メカニズムについて考察する。

主な結論は以下の通りである。

1. <単純原因型>

- i. 使役行為者は前項動詞の意味フレームに存在する<基礎行為>の原因 (Cause) である。
- ii. 原因項は前項動詞の意味フレームに含まれる自然な暗黙項でなければならぬ。また、結果補語も前項動詞が表す原因事象の語用論的に自然な帰結でなければならず、動補構造の組み合わせは制限される。
- iii. 英語に対応するタイプがあり、プロトタイプからの拡張程度は高くはない。

2. <倒置原因型>

- i. 使役行為者は、<基礎行為>自体から二次的メトニミックな拡張を経て<基礎行為>の対象となる。
- ii. 原因項は一般的に前項動詞の意味上の目的語に限られるが、因果関係が非常に緩い因果事象の組合せまで許されるため、動補構造には高い生産性を持つ。
- iii. 英語に対応するタイプがなく、プロトタイプからの拡張程度は非常に高い。

6.2 二種類の<原因型>

上述の通り、<原因型>には二種類ある。一つは前項動詞と後項動詞のいずれも非対格自動詞であるが、主語に外項、目的語に内項が現れるタイプである。もう一つは前項動詞の意味上の主語が文の目的語位置に生起する一方、前項動詞の目的語が文頭に来て、O-[V-RP]-S という語順となるものである。代表的な例文を以下に挙げる。

- (1) a. 这件事 累-死 了 张三。 (Huang 2006)
zhèjiànshì lèi-sǐ le Zhāngsān
この-CL-こと 疲れる-死ぬ PERF 張三
「このことは張三を死ぬほど疲れさせた。」
- b. 这杯伏特加 醉-倒 了 李四。 (Huang 2006)
zhè bēi fú tè jiā zuì-dǎo le lǐ sì
この-CL-ヴォッカ 酔う-倒れる PERF 李四
「この一杯のヴォッカは李四を酔わせて倒らせた。」
- c. 青草 吃-肥 了 羊儿。 (沈 1999 : 215)
qīngcǎo chī-féi le yáng-er
青草 食べる-肥える PERF 羊
「青草を食べた羊が肥えた。」
- d. 这么多衣裳 洗-累 了 妈妈。 (施 2008 : 222)
zhè me duō yī shang xǐ-lèi le mā ma
たくさんの服 洗う-疲れる PERF 母
「たくさんの服を洗うことで母が疲れた。」

(1c,d) の“青草 (青草)”“这么多衣裳 (多くの服)”はそれぞれ前項動詞“吃 (食べる)”“洗 (洗う)”の目的語に相当するが、文頭にあって主語になっている。逆に、前項動詞の意味上の主語に相当する“羊儿 (羊)”“妈妈 (母)”は目的語の位置にある。(1a,b) の“这件事 (このこと)”と“这杯伏特加 (この一杯のヴォッカ)”はいずれも前項動詞とも後項動詞とも意味関係を持っていないが主語の位置にあり、本来の主語“张三”“李四”は目的語の位置に生起している。形式的にはすべて (2) のような一般的な他動詞型の結果構文とよく似ている。

- (2) 他 穿-破 了 那双鞋。
tā chuān-pò le nà-shuāng-xié.
彼 履く - 破れる PERF その靴
「彼はその靴を履きつぶした。」 (申・望月 2007)

<原因型>に対して、様々な視点から分析が行われている (望月 1990,2003、石村 2011、Cheng & Huang 1994、Huang 2006、任 2001、施 2007、張 2009、2013a、2013b、吳 2013、

熊・魏 2014、蔡・張 2017 など）が、(1) の文を同じタイプとして扱う研究と、異なるタイプに分ける研究がある。

例えば、＜原因型＞における使役主の性質を同一に扱う望月（2003）、石村（2011）は、＜原因型＞を自動詞用法に外的な原因を導入して派生されると主張する。

石村（2011）によると、＜原因型＞は二重使役の意味構造をもち、前項動詞の自他性によって以下の二種類の派生過程がある。前項動詞が二項動詞の場合、虚目的語をとる＜主語指向型＞の虚目的語が原因（Cause）として捉え直されて文頭の主語位置に具現する（石村 2011：190）。それに対して、前項動詞が 1 項動詞の場合、派生前の＜主語指向型＞が再帰的意味構造を持つため、主語名詞句が直接目的語に相当し、それが文末に移動して外的な原因項を導入する（3）。

- (3) a. 这瓶酒喝-醉了。他。(彼はこの酒を飲んで酔っ払った。)
[(他喝) 这瓶酒] CAUSE [[他_i喝] CAUSE [他_i醉了]] (石村 2011：189)
- b. 那场饥荒饿死了很多人。(あの飢饉で多くの人が飢え死にした。)
那场饥荒 CAUSE [[很多人_i饿] CAUSE [很多人_i死了]] (石村 2011：197)

しかし、前者について、石村（2011）が言う虚目的語は必ず非指示的（non-referential）な単独名詞であるが、状態変化を引き起こすのに十分な使役力を具えた特定の事物または人でなければならない原因項との間のズレに言及していない。また、(3a) は (3b) と異なり、使役力をもたらすのは前項動詞の目的語というより、前項動詞が表す動作事象であるため、原因項を区別しないのは妥当性に欠ける。後者について、仮に＜主語指向型＞が再帰的な意味構造を持つとしても、外部から原因項が導入される理由、すなわち二重使役が成立する理由について石村は説明していない。なお、すべての＜原因型＞において、追加された原因項の性質として「臨時的なエネルギー源」という解釈はあまりにもアドホックであり、それが生起する根拠も不明である。

＜原因型＞を二分類する研究には、蔡・張（2017）がある。蔡・張（2017）は (1a,b) の主語は実体型（entity）使役主つまり名詞句であるのに対して、(1c,d) の主語は事象型使役主つまり動詞フレーズであると主張する。彼らによると、事象型使役主は元々 (4) のような活動事象を表す動詞フレーズであるが、文頭の動詞と動作主が省略されると (1a,b) のような形式となる。これを「劣性事象型使役主（隐性事件性致事）」と名付ける。実体型使役主と劣性事象型使役主を用いる文の意味構造を (5) に示す。

- (4) (看) 精湛 演出 看-哭 了 琼瑶。
 (kàn) jīng zhàn yǎn chū kàn-kū le qióng yáo
 見る 見事な 公演 見る-泣く PERF 人名
 「瓊瑤は見事な公演を見て泣いた。」

- (5) a. 那瓶白酒醉-倒了张三。(あの焼酎が張三を酔わせて倒れさせた。)
 [(x = 那瓶白酒) CAUSE [BECOME [(y = 张三) <醉倒>]]]
 b. 那瓶白酒喝-醉了张三。(張三があの焼酎を飲んで酔っ払った。)
 [[(x = 张三) ACT <喝, 那瓶白酒> CAUSE [BECOME [(y = 张三) <喝醉>]]]

しかし、もし文頭には省略された動作主があったとしたら、なぜそれが実現しないのか、なぜ省略されなければならないのか、明らかではない。つまり、(4) の文頭に動作主“琼瑶”を置くと、“*琼瑶看精湛演出看哭了琼瑶”のように非文となる理由が説明できない。その一方で、文頭の動詞“看”はあってもなくてもよく、動詞の省略メカニズムもアドホックである。蔡・張 (2017) は、文末の動作主を再帰代名詞で入れ替えることまたは文頭と文末の動作主のどちらかを削除することによって、動作主重複の問題について説明を与えるが、仮にそれが成立するとしても、動詞を省略する操作は未だに不明である。

本論文は、前章の分析を踏まえ、(1a,b) の文と (1c,d) の文は前項動詞の性質・統語特徴および使役行為者の違いによって二種類に分類し、それぞれ非対格タイプと非能格・他動詞タイプ<主語指向型>から異なるプロセスを経て拡張されると提案する。

6.3 <単純原因型>に対する考察

本論文で<単純原因型>と呼ぶのは、以下のような文である。形式的に他動型の<目的語指向型>に類似するが、動補構造の前項動詞も結果述語も非対格自動詞であるところが<目的語指向型>と異なる。非対格タイプ<主語指向型>とは逆に、変化が生じる対象は目的語位置にあり、主語にある名詞句は前項動詞と結果補語のいずれの項でもなく、動補構造全体がとる原因 (Cause) という項である。

- (6) a. 一场寒流 冻-硬 了 池塘。
 yī chǎng hán liú dòng-yìng le chí táng
 一・CL-寒波 凍る—カチカチ PERF 池
 「寒波は池をカチカチに凍らせた。」

- b. *张三 病-死 了 李四。
 zhāng sān bìng-sǐ le lǐ sì
 張さん 病気になる-死ぬ PERF 李四
 「張さんが李四を病気にさせて死なせた。」

以上から、前項動詞も後項動詞も非対格自動詞でありながら、主語に原因項を、目的語に被動者項をとる結果複合動詞の構文を＜単純原因型＞と呼ぶ。

6.3.1 ＜単純原因型＞の意味特徴

(6)に示した通り、このタイプの動補構造は非対格タイプ＜主語指向型＞と同じように[非対格自動詞＋非対格自動詞]の組合せであり、目的語の対象(Theme)または経験者(Experiencer)に起こる状態変化を表す。かつ、主語は意志性を持たない物事であり、意図的に何らかの状態変化を生じさせて目標通りの結果を達成することが不可能であるため、原因事象にも結果事象にも意図性がない。ただし、結果述語が表す状態変化は前項動詞の語彙意味から想定される一般的な変化方向に沿う。例えば、以下に示すように、前項動詞に含意されないまたは含意される変化に反する結果状態を表そうとすると、容認度が下がってしまう。つまり、＜単純原因型＞を用いて百科知識や人の常識から外れた意外な結果は表すことは難しいのである。

- (8) a. *一场寒流 冻-软 了 池塘。
 yī chǎng hán liú dòng-ruǎn le chí táng
 一-CL-寒波 凍る-柔らかい PERF 池
 「寒波は池を柔らかく凍らせた。」
- b. *三瓶烈酒 醉-病 了 一桌人。
 sān píng liè jiǔ zuì-bìng le yī zhuō rén
 3-CL-強い酒 酔う-病気になる PERF 同じテーブルに座る人
 「3 瓶の強い酒は同じテーブルに座る人全員を酔わせて病気にさせた。」
- c. *那场饥荒 饿-胖 了 很多人。
 nà chǎng jī huāng è-pàng le hěn duō rén
 あの-CL-飢饉 飢える-太る PERF 多くの人
 「あの飢饉で多くの人が飢えて太った。」

また、前章に述べた通り、非対格タイプ＜主語指向型＞の場合、原因事象と結果事象は基本的に同時進行か連続しており、その間に時間差はない。例えば、寒波で池が徐々に

凍ったり、飢饉で人が飢えて死んだりする結果状態にたどり着くまで、時間の経過はあるものの、二つの事象は一体化している。あるいは、ある言葉を聞いて張三が怖がって呆然としたり、悪夢で赤ちゃんが驚いて目覚めたりするように、二つの出来事はほぼ同時に発生する。したがって、両事象はお互いに独立しておらず、直接因果関係で結ばれている。

＜単純原因型＞の使役行為者は明らかに文頭にある名詞句つまり原因項である。つまり、＜単純原因型＞の項構造は非対格タイプの項構造に状態変化をもたらす原因項が加えたものだが、原因項は前項動詞の意味フレームに隠れて存在している暗黙項を統語的に実現させただけである。中右・西村（1998：136）が提案するプロトタイプの＜使役行為者＞（Causer）は、自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において用いることによって、＜対象＞の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する人間である。ただし、＜単純原因型＞の原因項は、意図性を持つ人間ではなく、一見したところ前項動詞とも結果補語とも関係がない名詞句に見える。

多くの先行研究において、原因項は動補構造から離れて独立して存在する使役主として扱われている。例えば施（2007）はこのタイプの主語を「外在的使役主（external causer）」と呼び、前項動詞と結果補語から独立した参与者であるという。しかし、この考え方は原因項と動補構造の関係を分断し、原因項の生起メカニズムが見えなくなるほか、以下のような文が言えない理由も説明が難しい。

- (9) a. *冰淇淋 醉-倒 了 李四。
 bīng qí lín zuì-dǎo le lǐ sì
 アイスクリーム 酔う-倒れる PERF 李四
 「アイスクリームは李四を酔わせて倒らせた。」
- b. *李四 病-倒 了 张三。
 lǐ sì bìng-dǎo le zhāng sān
 李四 病気になる-倒れる PERF 張三
 「李四が張三を病気にさせて倒させてしまった。」

本論文は、原因項を前項動詞の意味フレームにある暗黙の原因という参与者として扱うことにより、以上の問題が解決できる。すなわち、原因項は動補構造の外部に存在する使役主ではなく、原因事象の内部にある内在的な原因であるため、原因項となる名詞句はまず前項動詞が表す状態変化を引き起こす力を持たなければならない。(9)において、少なくとも一般常識から考えて、アイスクリームには人を酔わせる力を持たず、人が人を病気にすることも想定しにくい。ただし、原因項に必要な情報を追加すると、使役主としての原因項が十分な使役力を持つようになり、(10)のような容認度の高い文になる。逆

に、一般常識から考えて使役力のある物事であっても、非指示的 (non-referential) な形式をとると、前項動詞が表す状態変化の原因にはなれても、結果補語が表す状態変化まで生じさせる使役力に欠けるため、非文となる (11)。つまり、原因項は二つの事象を引き起こすに十分な使役力と情報量を持たなければならないのである。

- (10) a. 朗姆酒冰淇淋 醉-倒 了 李四。
 lǎng mǔ jiǔ bīng qí lín zuì-dǎo le lǐ sì
 ラム酒アイス 酔う-倒れる PERF 李四
 「ラム酒アイスは李四を酔わせて倒らせた。」
- b. 照顾 李四 病-倒 了 张三。
 zhào gù lǐ sì bìng-dǎo le zhāng sān
 世話をする 李四 病気になる-倒れる PERF 張三
 「李四の世話をすることが張三を病気にさせて倒させてしまった。」
- (11) a. *酒 醉-倒 了 李四。
 jiǔ zuì-dǎo le lǐ sì
 酒 酔う-倒れる PERF 李四
 「酒は李四を酔わせて倒らせた。」
- b. *话 吓-呆 了 李四。
 huà xià-dāi le lǐ sì
 言葉 恐がる-ぼんやり PERF 李四
 「言葉は張三を怖がらせてぼんやりさせた。」

要するに、原因項は<基礎行為>に内在する原因 (Cause) という参与者として、自らのエネルギーで、目的語である対象に対して力を及ぼし、かつ対象に状態変化を直接引き起こすという点でプロトタイプの使役行為者と共通する。例えば、「寒波」は池に直接力を及ぼすことによって、池をカチカチの状態にする。李四の世話をするという仕事のきつさが張三を病気にし、張三が倒れる直接の原因となる。したがって、このタイプの使役行為者を「<基礎行為>の原因」と呼び、プロトタイプの使役行為者の拡張の一種として捉えることができる。

以上をまとめると、<単純原因型>の原因項は前項動詞の意味フレームの暗黙項として語用論的に自然な使役力を持たなければならないが、自然である限りにおいてはその選択は自由である。また後項動詞も前項動詞の語用論的に自然な帰結でなければならないため、動補構造の組合せの選択はそれほど自由ではない。

ここで (6f) を例に、＜単純原因型＞における概念構造を以下のように示す。原因事象の内部にある原因 (Cause) が、出来事全体の使役行為者となって文頭に実現し、使役化のプロセスの発生とともに、焦点に当てられる使役関係は原因事象と結果事象の間の CAUSE₁ から、原因項と両事象の間の CAUSE₂ に移している。結果として、非対格タイプ＜主語指向型＞から継承された二重使役の意味構造が統語的に実現される。

(12) 那场饥荒饿死了很多人。(= (6f))

「あの飢饉で多くの人が飢え死にした。」

[x CAUSE₂ [[_{EVENT1} y BECOME [y BE 饿]]]

CAUSE₁ [_{EVENT2} y BECOME [y BE 死]]]

(x=那场饥荒, y=很多人)

＜単純原因型＞の意味特徴は以下の通りまとめることができる。

- (13) a. i. 原因事象と結果事象のいずれにも意図性がない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されている。
 b. 前項動詞は非対格自動詞である。
 c. 主語は意志性を持たない物事である。
 d. 原因事象と結果事象の間の因果関係は直接的であり、時間間隔はない。
 e. 使役行為者 (Causer) は＜基礎行為＞の原因 (Cause) であり、前項動詞の項ではないが意味フレームには含まれる。

また、Huang (2006) に指摘されるように、英語にも類似する非対格-使役交替 (unaccusative-causative alternation) を経て拡張された原因型結果構文がみられる。この種の拡張は中国語の独自の特徴ではないことが分かる。

- (14) a. The river froze solid.
 b. The change in weather the last few weeks froze the river solid.
 c. The garage door rumbles open.
 d. A few bulldozers passing by rumbled the garage door open.

(Huang 2006)

6.3.2 ＜単純原因型＞の項構造と構文意味

Goldberg (1995) の構文文法によると、構文形式の意味と構文に嵌めこむ主要動詞の意味を融合する (fuse) ことによって、個別の文の意味となる。その融合の過程では、一

般的には構文独自の項構造と、動詞が本来持っている参与者役割とが融合することになる (Goldberg 1995 : 190)。例えば、構文の主語位置にある名詞句は、動詞の動作主項 (Agent) と融合するのが普通である。しかし、＜原因型＞のように主語にある名詞句が第一動詞の項構造と一致しない構文は Goldberg (1995) の説明に合わない。

Li(1995) は (6f) の文について、主語にある名詞句“那场饥荒 (あの飢饉)”は「内在的・臨時的意味役割 (intrinsic temporal theta role)」を持つため、前項動詞から直接に意味役割をもらうことができないが、この名詞句は結果述語の項ではないため、主語になることが可能であるという。しかし、Li(1995) はこの「内在的・臨時的意味役割」がなぜ存在しうるのかを言及していない。

楊 (2013 : 139-140) では、原因項は状態変化を引き起こす背景となる原因役割とされる。原因役割は背景事態であるため、状態変化が起こる経験主 (Experiencer) と「制御と被制御の関係」にあり、両者は「抽象的な非対称関係」で結ばれているという。しかし、「制御と被制御の関係」は簡単に言えば使役関係にほかならないし、＜単純原因型＞の特殊な項構造の形成に対する説明になっていない。

(15) 使役役割融合二原則：

- I. 被使役主役割と融合可能なのは、結果述語のフレームでプロファイルされる変化主体でなければならない、かつ、それは前項述語の意味フレームに結びつく参与者でなければならない。
- II. 使役主役割と融合可能な参与者は、被使役主役割と融合可能な参与者と同一物であってはならず、かつ、両者は前項述語の意味フレームにおいて具体的・抽象的な非対称関係で結びつかなければならない。

(楊 2013 : 97)

以上を踏まえ、本論文では、＜単純原因型＞における項構造の融合を以下のように提案する。

まず、前項動詞の変化対象“张三”は“病”の意味フレームにおいて唯一の Theme_i 項としてプロファイルされ、結果述語“倒”の唯一プロファイルされる Theme_j 項“张三”と同定により融合し、一つの項として実現し、被使役主役割 Affectee を指定される。

前述したように、非対格タイプ＜主語指向型＞の前項動詞の意味フレームには、原因事象の状態変化に対して使役力を具えた暗黙の原因 Cause という参与者が存在する。その参与者 Cause がプロファイルされると、参与者役割として明示され、構文の項構造と融合することが可能となる。しかし、前項動詞と結果述語のいずれの項でもないため、プロファイルされた参与者役割 Cause は Agent という項役割と融合することができず、空

(6f) を例に、項構造融合の過程を以下に示す。前項動詞にある原因 (Cause) は項役割を持たないため「〈因饥荒〉(飢饉が原因で)」で示す。

- 以上から Li (1995) と楊 (2013) の問題を解決することができる。すなわち、原因項は原因事象に内在する意味要素であり、内在する原因がプロファイルされて直接に使役役割の **Cause** と融合することによって、通常の項役割を獲得できない原因項が文頭に現れることができるようになる。こうして、非対格タイプ〈主語指向型〉が〈原因型〉へ拡張することによって暗黙項が使役主として実現し、使役の意味構造を持つ他動型の使役構文となる。

(17) 結果構文+“饿死”

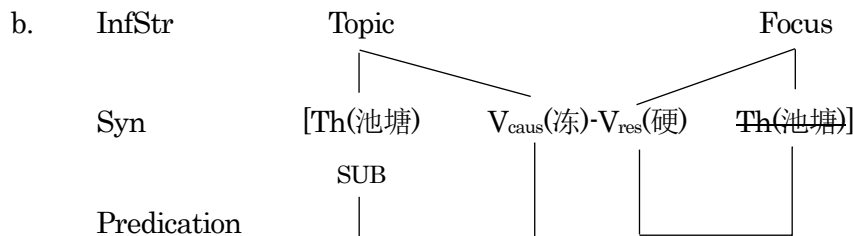


6.3.3 <単純原因型>の拡張メカニズム

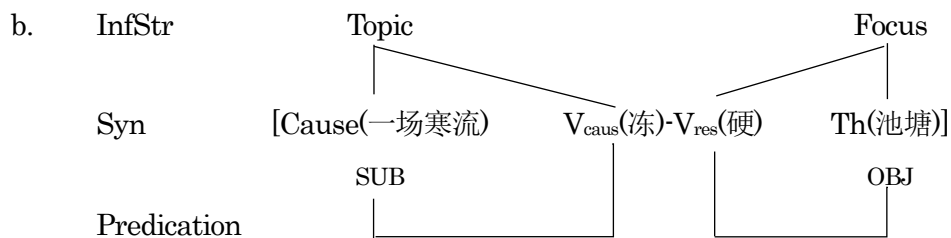
これまで<単純原因型>の形式と意味の特殊性を分析したが、このような特殊な形式はどのように拡張されてきたのかについて、情報構造の視点から説明する。

前述のように、中国語において文の意味焦点は一般的に文末に置かれるため、結果事象の組成部分が通常は結果構文の焦点となる。<単純原因型>の前の段階と考えられる非対格タイプ<主語指向型> (18a) において、原因事象の主体である“池塘”が前項動詞の唯一実現した項として主語位置を指定され、かつ目的語を伴わないため、文末の結果補語“硬”が焦点に当たる。しかし、“池塘”は状態変化が起こる対象として同時に結果事象の主体であり、焦点化される可能性を充分持つ。一方、前項動詞には暗黙の原因が存在し、動補構造が表す一連の状態変化を引き起こす主体であるため、統語的に出現することが可能である。そこで、元々存在する暗黙の原因項は、意味的かつ統語的な必要に応じて、原因事象の背景として主語位置に生起し、同時に変化対象である“池塘”は前景化されて文末に移動して焦点となる。このような還元的な拡張過程を経て、非対格タイプ<主語指向型>から<単純原因型>が拡張される。

- (18) a. 池塘 冻-硬 了。
 chí táng dòng-yìng le
 池 凍る-硬い PERF
 「池がカチカチに凍った。」



- (19) a. 一场寒流 冻-硬 了 池塘。 (=6a)
 yī chǎng hán liú dòng-yìng le chí táng
 一・CL-寒波 凍る—カチカチ PERF 池
 「寒波が池をカチカチに凍らせた。」



6.4 <倒置原因型>に対する考察

<倒置原因型>というのは(1c,d)と(20)のような文である。前項動詞の意味上の主語すなわち動作主が文の目的語位置に生起し、意味上の目的語すなわち動作の対象が文頭に現れ、意味役割と統語位置が逆転しているように見える。そのため、本論文では<倒置原因型>と呼ぶことにする。<単純原因型>とは同じように、<倒置原因型>の文頭の名詞句も文末の有生物に対して使役関係を持つと考えられる。

- (1) c. 青草 吃-肥 了 羊儿。 (沈 1999 : 215)

qīngcǎo chī-fèi le yáng-er
青草 食べる-肥える PERF 羊
「青草を食べた羊が肥えた。」

- d. 这么多衣服 洗-烦 了 妈妈。
zhè me duō yī fu xǐ-fán le mā ma
こんなにたくさんの服 洗う-うんざりする PERF 母
「こんなにたくさんの服を洗って母がうんざりした。」

- (20) a. 一杯伏特加 喝-倒 了 张三。
yī bēi fú tè jiā hē-dǎo le zhāng sān
一-CL-ヴォッカ 飲む-倒れる PERF 張三
「一杯のヴォッカを飲んで張さんが倒れた。」

- b. 崎岖的山路 走-累 了 李四。
qí qū de shān lù zǒu-lèi le lǐ sì
険しい山道 歩く-疲れる PERF 李四
「李四は険しい山道を歩いて疲れた。」

- c. 公交车 等-急 了 我。
gōng jiāo chē děng-jí le wǒ
バス 待つ-焦る PERF 私
「バスを（ずっと）待っていて私は焦った。」

- d. 那部电影 看-哭 了 妈妈。
nà bù diàn yǐng kàn-kū le mā ma
あの-CL-映画 観る-泣く PERF 母
「あの映画を観て母は泣いた。」

- e. 山西假酒 喝-死 了 很多人。
 shān xī jiǎ jiǔ hē-sǐ le hěn duō rén
 山西省産の粗悪酒 飲む-死ぬ PERF たくさんの人
 「山西省産の粗悪な酒を飲んでたくさんの人が死んだ。」
- f. 烤肉 吃-渴 了 李四。
 kǎo ròu chī-kě le lǐ sì
 焼肉 食べる-喉が渴く PERF 李四
 「焼肉を食べて李四は喉が渴いた。」
- g. 论文 写-秃 了 张三。
 lùn wén xiě-tū le zhāng sān
 論文 書く-禿げる PERF 張さん
 「論文を書いて張三が禿げてしまった。」

6.4.1 <倒置原因型>の意味特徴

(20) に示すように、動補構造の前項動詞は他動詞または目的語を伴うことが可能な非能格自動詞であり、結果述語は心理状態・身体状態または感情表出を表す動詞ないし形容詞である。

ここまでは目的語を伴う非能格・他動詞タイプ<主語指向型>と同じであるが、前章で検討した心理状態などを表す二項動詞の内、“烦（うんざりする）”“膩（飽きる）”“怕（恐がる）”のような意味を表す動詞は<倒置原因型>の結果述語となれるが、“惯（慣れる）”“懂（理解する）”“会（通曉する）”“赢（勝つ）”“输（負ける）”のような動詞は結果述語として不適切であるという点は異なる。

- (21) a. 剩菜 吃-膩 了 大家。 (任 2001)
 shèng cài chī-nì le dà jiā
 食べ残し料理 食べる-飽きる PERF 皆
 「食べ残し料理を食べすぎて皆は飽きてしまった。」
- b. 数学 学-怕 了 小王。
 shù xué xué-pà le xiǎo wáng
 数学 勉強する-怖い PERF 王さん
 「数学を勉強することに王さんは恐がった。」

- c. *大连 住-慣 了 我。
dà lián zhù-guàn le wǒ
大連 住む-慣れる PERF 私
「私は大連に住み慣れた。」
- d. *这本书 看-懂 了 我。
zhè běn shū kàn-dǒng le wǒ
この-CL-本 読む-理解する PERF 私
「私はこの本を読んで理解した。」
- e. *这场比赛 踢-贏 了 中国队。
zhè chǎng bǐ sài tī-yíng le zhōng guó duì
この-CL-試合 蹴る-勝つ PERF 中国チーム
「中国チームはこの（サッカーの）試合に参加して勝った。」

その原因として、“烦（うんざりする）”“膩（飽きる）”“怕（恐がる）”はそれぞれ“烦人（うるさい）”“膩人（うんざり）”“怕人（怖い）”のような慣習化された使い方があり、「人をうんざりさせる/嫌にさせる/恐怖を感じさせる」という使役的な意味が文法化されて動詞の意味に含まれることとなるため、使役の意味が強い＜倒置原因型＞に出現しやすいのではないかと考えられる。一方、“慣（慣れる）”“懂（理解する）”“会（通曉する）”“贏（勝つ）”“輸（負ける）”などの動詞は使役義を持たず、一方的な二項動詞であるため、結果述語として用いられると、目的語位置の名詞句が意味上の目的語となり、文全体が＜目的語指向型＞のように[S-VR-O]語順と解釈されやすい。要するに、＜倒置原因型＞の結果述語として現れる二項動詞はごく一部の「飽きる」タイプの心理状態動詞に限られる。

続いて、原因事象と結果事象の関係をみると、非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞と同様に、＜倒置原因型＞でも、動作主が自発的に行う活動や行為を表すため、原因事象には意図性があるが、結果述語が表す状態変化には意図性がない。例えば（20a）の原因事象は「張三が一杯のヴォッカを飲む」であり、その結果として「張三が倒れる」という事象が生じている。

前項動詞の含意と結果補語の関係については、前章で考察した長い目的語を伴う非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞と同じく、「食べる-太る」のような結果補語が動詞の語義から自然に推論される場合もあるが、「飲む-倒れる」のようにそうでない場合が多い。

同じ傾向は因果事象の緊密性においても見られる。（1d）（20b,c,f）は時間間隔がなく、直接因果関係で結ばれる文である一方、（20a,d,e,g）において、原因と結果は時間的連続していても、「酒を飲む-酔っ払う-倒れる」「映画を観る-感動する-泣く」「粗悪な酒を飲

む-中毒する-死ぬ」「論文を書く-頭をかきむしる-禿げる」のように、原因事象と同時進行する内部事象を補充することが必要となることもある。

前章において、目的語を伴う非能格・他動詞タイプ<主語指向型>の成立可能性は動補構造の因果関係の緊密度と相関関係があることを提案した。因果関係の緊密度が高ければ高いほど、虚目的語に対する容認度も相対的に上がる。真性の目的語と短い目的語の場合、前項動詞は必ず結果補語を含意し、因果事象の間に内部事象がなく、直接因果関係で結ばれるが、長い目的語の場合はこの三つの条件の内二つ満たせば成立するからである。

<倒置原因型>においては、三つの条件がすべて満たされる場合も少ない。結果は必ずしも原因から予想はされず、内部事象が必要となることも多い。この事実から、<倒置原因型>は因果関係が相対的に緊密な因果事象から、二つの独立した事象を強引に結び付けた因果関係まであり、かなり広い範囲の状況を表現することができることが分かる。

さらに言うと、(22)に示すように、動補構造の因果関係が比較的に緩いほうが、<倒置原因型>として容認度が逆に上がることがあり、目的語を伴う非能格・他動詞タイプ<主語指向型>とは正反対に見える。そのため、非能格・他動詞タイプでは表しにくい状況表現するために、<倒置原因型>が拡張されるのではないかと推測できる。事実、以下の例から明らかなように、両者は相補分布をなすようである。

- (22) a. 他 吃-饱 了 饭。
 tā chī-bǎo le fàn
 彼 食べる-満腹である PERF ご飯
 「彼はご飯を食べて満腹になった。」
- b. ?大米饭 吃-饱 了 他。
 dà mǐ fàn chī-bǎo le tā
 白ごはん 食べる-満腹である PERF 彼
 「ご飯を食べて彼は満腹になった。」
- c. *他 吃-胖 了 肉。
 tā chī-pàng le ròu
 彼 食べる-太る PERF 肉
 「彼は肉を食べて太った。」
- d. 大鱼大肉 吃-胖 了 他。
 dà yú dà ròu chī-pàng le tā
 魚や肉などのごちそう 食べる-太る PERF 彼
 「魚や肉などのごちそうを食べて彼は太った。」

e. *他 吃-瘦 了 咸菜。

tā chī-shòu le xián cài

彼 食べる-痩せる PERF 漬物

「彼は漬物（ばかり）を食べて痩せた。」

f. 咸菜窝头 吃-瘦 了 他。

xián cài wō tóu chī-shòu le tā

漬物と雑糧パン 食べる-痩せる PERF 彼

「漬物と雑糧パン（ばかり）を食べて彼は痩せた。」

(23) a. 他 喝-醉 了 酒。

tā hē-zuì le jiǔ

彼 飲む-酔う PERF 酒

「彼は酒を飲んで酔っ払った。」

b. ?白酒 喝-醉 了 他。

bái jiǔ hē-zuì le tā

焼酎 飲む-酔う PERF 彼

「焼酎を飲んで彼は酔っ払った。」

c. *他 喝-哭 了 酒。

tā hē-kū le jiǔ

彼 飲む-泣く PERF 酒

「彼は酒を飲んで泣いた。」

d. 烈酒 喝-哭 了 他。

liè jiǔ hē-kū le tā

強い酒 飲む-泣く PERF 彼

「強い酒を飲んで彼は泣いた。」

e. *他 喝-死 了 假酒。

tā hē-sǐ le jiǎ jiǔ

彼 飲む-死ぬ PERF 粗悪酒

「彼は粗悪な酒を飲んで死んだ。」

f. 假酒 喝-死 了 他。

jiǎ jiǔ hē-sǐ le tā

粗悪酒 飲む-死ぬ PERF 彼

「粗悪酒を飲んで彼は死んだ。」

張（2009）、楊（2014）は、ほかの種類の結果構文と比べると、＜倒置原因型＞は通常予想外で、マイナスイメージの結果を表すと指摘する。しかし、(24) のような文も多く存在するため、マイナスイメージというより、原因事象から推測しにくい結果を表すと言う方が妥当である。言い換えると、自然結果を表す＜単純原因型＞とは違い、＜倒置原因型＞は一種の意外な結果を表す傾向があるのである。

- (24) a. 可乐 喝-爽 了 他。
 kě lè hē-shuǎng le tā
 コーラ 飲む-気持ちいい PERF 彼
 「コーラを飲んで彼は気持ちよくなった。」
- b. 哈密瓜 吃-美 了 他。
 hā mì guā chī-měi le tā
 メロン 食べる-愉快 PERF 彼
 「メロンを食べて彼は愉快になった。」
- c. 故事 听-乐 了 孩子。 (任 2001)
 gù shì tīng-lè le hái zi
 物語 聞く-面白がる PERF 子供
 「物語を聞いて子供は面白がった。」

次に＜倒置原因型＞における使役行為者（Causer）を考察しよう。＜単純原因型＞と同じように、目的語位置にある変化主体は自らの状態変化を意志的にコントロールすることができないため、文頭の名詞句を通常の使役主として考えるのが最も自然である。＜単純原因型＞の場合、文頭名詞句は＜基礎行為＞が自ら持つ原因であり、＜基礎行為＞とそれによって引き起こされる結果状態に対して自然な使役力を持つ。それに対して、＜倒置原因型＞の文頭名詞句は＜基礎行為＞の対象であり、＜基礎行為＞つまり原因事象を引き起こす能力を持たない。例えば、「寒波」は池を凍らせて、カチカチな状態にさせる使役力を持つため、「凍る-カチカチである」という状態変化の連鎖を生じさせる原因となる。一方、「青草」は飼料として確かに羊を太らせる性質を持つが、あくまで「羊が青草を食べる」ことが原因で、「羊が肥える」という結果が生じるため、「青草」は独立して「食べる-肥える」という因果事象の使役主とはならない。

言い換えると、＜倒置原因型＞における実質的な使役行為者は、非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞と同じく＜基礎行為＞自体のはずである。では両者の違いは何か。一つの可能性として、＜倒置原因型＞において、＜基礎行為＞の最も主要な組成部分である動作対象が、＜基礎行為＞自体を換喩し、事象の代わりに実体（entity）として使役行為者

となり、文頭に生起して二重使役を起こさせるのではないか。すなわち、二次的メトニミック拡張を経て使役行為者が<基礎行為>の自体から<基礎行為>の対象へと拡張されると考えるのである。

実体的使役主が活動的使役主の換喩であることはいくつかの研究によって提案されている。熊（2003：84, 86）、郭（2006）、吴（2013）、熊・魏（2014）などによれば、活動自体が終始本当の使役主であり、メトニミーのメカニズムを経て動作主・動作対象またはほかの活動参与者で活動を換喩し、事象の代わりに個体が使役主として現れることが可能である。

しかし、活動自体が終始本当の使役主であるという考え方は、事象と事象の主体という二つの概念を混同してしまい、使役主つまり本論文が言う使役行為者の性質を正確的に捉えることができない。例えば、“他开了门。（彼はドアを開けた）”のような典型的な使役動詞を用いるプロトタイプの使役構文において、使役行為を表すのは確かに“他开门（彼はドアを開ける）”という事象であるが、この事象を実施するかつ“门开了（ドアが開いた）”という結果に責任を持つのは、使役行為者の「彼」である。言い換えると、使役を表す事象は背景であり、使役事象を引き起こす動作主という実体が典型的な使役行為者である。では、どうすれば動作主ではなく、動作の対象が使役行為者となれるのか。メトニミーによる拡張が、なぜ動作主ではなく、動作対象を選ぶのか。

(1a) の文を用いて<倒置原因型>の概念構造をもう一度、整理なおしてみよう。原因事象は「羊が青草を食べる」ことである。結果事象は「羊が太る」ことである。またこの構文の意味特徴は、意外な結果を表すことにある。この場合は羊の変化である。つまり、羊は動作主としてではなく、変化主体としての役割に重点が置かれるのである。必然的に、原因事象における動作主の意味は重要性を失い、背景化されることになる。原因事象では相対的に被動者の地位が上昇し、使役行為者が<基礎行為>の自体から<基礎行為>の対象へと拡張することが可能となるのである。これを以下のように表示する。

(25) 青草吃-肥了羊儿。(=(1c))

「青草を食べて羊が肥えた。」

$$\begin{array}{c}
 [z \text{ [CAUSE [EVENT2 } y \text{ BECOME [y BE 肥]]}]] \\
 \uparrow \text{メトニミー} \\
 [\text{EVENT1 } x \text{ ACT(吃) ON } z] \\
 (x=y=\text{羊儿}, z=\text{青草})
 \end{array}$$

主語となる原因項の特徴をもう少し詳しく見てみよう。施（2007）、石村（2011：191）、熊・魏（2014）などに指摘される通り、非指示的（non-referential）な総称名詞が主語と

して用いられると不適格となり、必ず状態変化を引き起こすのに十分な使役力を具えた特定の事物または人でなければならない。

- (26) a. *酒 喝-酔 了 他。
 jiǔ hē-zuì le tā
 酒 飲む - 酔う PERF 彼
 「酒を飲んで彼は酔っ払った。」 (石村 2011 : 191)
- b. 这瓶酒 喝-酔 了 他。
 zhè píng jiǔ hē-zuì le tā
 この-CL-酒 飲む-酔う PERF 彼
 「この酒を飲んで彼は酔っ払った。」
- c. 伏特加 喝-酔 了 他。
 fú tè jiā hē-zuì le tā
 ヴォッカ 飲む-酔う PERF 彼
 「ヴォッカを飲んで彼は酔っ払った。」

さらに、修飾成分が多ければ多いほど、文の容認度も相応的に上がる。(27) から明らかのように、概念の階層からみると、上位概念である“酒（酒）”は、原因項としては非常に不自然だが、「酒」の下位概念である“伏特加（ウォッカ）”の場合はよくなる。さらに、ウォッカの下位分類の一つである“A 牌伏特加（A ブランドのウォッカ）”の場合と、それに指示的な表現“三杯”を付けた“三杯 A 牌伏特加”と、属性を表す修飾語“烈性的”をつけた“三杯烈性的 A 牌伏特加”は、容認度が順に高くなる。つまり、原因主がより具体的または明確になればなるほど、使役主としての使役力が強くなり、＜倒置原因型＞がより自然になる。

- (27) { *酒（酒）
 伏特加（ウォッカ）
 A 牌伏特加（A ブランドのウォッカ）
 三杯 A 牌伏特加
 （A ブランドのウォッカを三杯）
 三杯烈性的 A 牌伏特加
 （A ブランドの強いウォッカを三杯） } 喝醉了他。

なお、前章で考察したように、非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞には短い目的語が最も自然で、長い目的語がそれに続き、指示詞を伴うだけの名詞句は生起できない(28)。それに対して、＜倒置原因型＞は指定的な名詞句であれば原因項として認められ、単音節の短い目的語のみが不適格である。＜倒置原因型＞の主語は原因事象を代表できるだけの力があればよいが、逆にそのようなメトニミーの難しい短い名詞では、基礎行為とは解釈できないからである。

- (28) *张三 吃-饱 了 那碗饭/两碗饭/几碗饭。
 Zhāngsān chī-bǎo le nàwǎn fàn/ liǎngwǎn fàn/ jǐwǎn fàn
 張三 食べる-お腹一杯 PERF あのと-CL-ご飯/二-CL-ご飯/何-CL-ご飯
 「張三はあのご飯/ご飯二杯/ご飯何杯食べて、お腹いっぱいになった。」
 (Huang 2006)

原因項の意味的な特徴について、熊・魏（2014）は＜倒置原因型＞の原因項は必ず「致 R 性」すなわち結果状態に対して使役力を持つ名詞句でなければならないと主張し、「致 R 性」は意味のないし認知的のいずれかの面において認められれば成立すると述べる。例えば、(29) の文において、セーターを長時間編むことで疲れることや眠くなることは認知的にいずれも想定されるため、セーターは二つの文の原因項となる。

- (29) a. 毛衣 织-累 了 小红。
 máo yī zhī-lèi le xiǎo hóng
 セーター 編む-疲れる PERF 紅ちゃん
 「セーターを編んで紅ちゃんが疲れた。」
 b. 毛衣 织-困 了 小红。
 máo yī zhī-kùn le xiǎo hóng
 セーター 編む-眠い PERF 紅ちゃん
 「セーターを編んで紅ちゃんが眠くなった。」

換言すれば、常識に基づいて容易に推論可能であればよいということになるが、そのような場合だけではないことを指摘したい。例えば、百科的知識から考えれば、(30a,c) の「漬物と雑糧パン」「アメリカから輸入した薬」はそれぞれ「痩せる」「治癒する」に対して十分な使役力を持つ。それに対して、「白米と精製小麦粉」が「痩せる」、「アメリカから輸入した薬」が「死ぬ」の原因としては通常考えられないにもかかわらず、(30b,d) の文は容認される。常識に矛盾する結果を表現するこれらの文は、驚きを表すという語用

論的機能を果たしていると考えられる。なお、それは前述した＜倒置原因型＞が一種の意外な結果を表すことと軌を一にしている。

- (30) a. 咸菜窝头 吃-瘦 了 他。 (=22f)
 xián cài wō tóu chī-shòu le tā
 漬物と雑穀パン 食べる-痩せる PERF 彼
 「漬物と雑穀パン（ばかり）を食べて彼は痩せた。」
- b. 大米白面 吃-瘦 了 他。
 dà mǐ bái miàn chī-shòu le tā
 白米と精製小麦粉 食べる-痩せる PERF 彼
 「白米と精製小麦粉を食べて彼は痩せた。」
- c. 美国进口药 吃-好 了 很多人。
 měi guó jìn kǒu yào chī-hǎo le hěn duō rén
 アメリカから輸入した薬 食べる-治る PERF たくさんの人
 「アメリカから輸入した薬を服用してたくさんの人が治った。」
- d. 美国进口药 吃-死 了 很多人。
 měi guó jìn kǒu yào chī-sǐ le hěn duō rén
 アメリカから輸入した薬 食べる-死ぬ PERF たくさんの人
 「アメリカから輸入した薬を服用してたくさんの人が死んだ。」

なお、＜単純原因型＞と同じように、＜倒置原因型＞も意図性を持つ人間は原因項として不適切であり、多義性が生じやすくなる。典型的な例文は以下の文である。

- (31) 滔滔 追-累 了 悠悠 了。 (Li 1995)
 tāo tāo zhuī-lèi le yōu yōu le
 人名 追う-疲れる PERF 人名 MOD
 「滔滔が悠悠を追いかけて、悠悠が疲れた。」
 「滔滔が悠悠を追いかけて、滔滔が疲れた。」
 「*悠悠が滔滔を追いかけて、滔滔が疲れた。」
 「悠悠が滔滔を追いかけて、悠悠が疲れた。」

Li (1995) はこの文において、四つの読みがあり、その中の三つが成立すると述べる。本論文の観点から見れば、前項動詞が他動詞または非能格自動詞であるため、意図性を持

つ人間が主語となれば、目的語と解釈される場合は＜倒置原因型＞となり、動作主と解釈される場合は＜目的語指向型＞または目的語を伴う＜主語指向型＞となる。つまり、(31)の文が持つ読みは以下のように三つの異なるタイプの結果構文のテンプレートに合致するため、多義性が生じるのである。

- (32) a. <目的語指向型>
 [滔滔 ACT(追)ON 悠悠] CAUSE [悠悠 BECOME 累]
 b. 目的語を伴う＜主語指向型＞
 [滔滔 ACT(追)ON 悠悠] CAUSE [滔滔 BECOME 累]
 c. <倒置原因型>
 [悠悠 ACT(追)ON 滔滔] CAUSE [悠悠 BECOME 累]

以上をまとめると、＜倒置原因型＞に用いられる原因項は、以下の特徴を持つ。

- (33) A. 前項動詞の目的語であり、意志を持つ有生物であってはならない。
 B. 単音節名詞は排除され、指示的な名詞句であり、具体的であればあるほど容認度が上がる。
 C. 結果状態が常識的に容易に推論できるか、または逆に常識からとは逆の驚くべき結果状態になるとき、原因として認められる。

＜倒置原因型＞の意味特徴を以下のように表示する。プロトタイプの結果構文と比べると、＜倒置原因型＞は独立性の高い二つの事象を強引に結び付けて一つの文で表現することも可能であり、結果構文の範囲をかなり広げている。

- (34) a. i. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意される場合もあるが、含意されない場合も多い。
 b. 前項動詞は他動詞ないし目的語と共起可能な非能格自動詞であり、結果述語は「飽きる」型の心理状態・身体状態または感情表出を表す動詞ないし形容詞である。
 c. 主語は意志性を持つ有生物を除く指示的な名詞句である。
 d. 原因事象と結果事象の間に因果関係に時間差はないが、内部事象の存在は許される。
 e. 使役行為者 (Causer) は＜基礎行為＞の対象である。

なお、Huang (2006) に指摘される通り、英語には非能格-使役交替 (unergative-causative alternation) が成立しないため、このような構文が見当たらない。＜倒置原因型＞は中国語にのみ拡張されることは、中国語における結果構文の拡張程度の高さを示唆している。

- (35) a. *The little mermaid's disappearance cried the baby sadly.
 b. *The event talked them silly.
 c. *The threat of death quickly kicked her free.

(Huang 2006)

6.4.2 ＜倒置原因型＞の項構造と構文意味

つづいては、(1c) をもう一度取り上げて、＜倒置原因型＞の項構造を考察しよう。

- (1) c. 青草 吃-肥 了 羊儿。 (沈 1999 : 215)
 qīngcǎo chī-féi le yáng-er
 青草 食べる-肥える PERF 羊
 「青草を食べた羊が肥えた。」

＜倒置原因型＞の原因事象と結果事象はそれぞれ“羊儿吃青草（羊が青草を食べる）”“羊儿肥了（羊が肥える）”である。前項動詞“吃（食べる）”の意味フレームでは Agent “羊儿（羊）”と Theme_i “青草（青草）”という二つの卓越性の高い項がプロファイルされる。結果述語“肥（肥える）”は Theme_j “羊儿（羊）”という1つの項のみをとる。

Agent 項と Theme_j 項は同一指向のため融合して、Li (1995) の指定原則 (36b) と楊 (2013) の融合原則 (15I) に従い、“羊儿（羊）”という項は変化主体かつ前項動詞の意味フレームに結びつく参与者として、被使役主役割 Affectee を指定される。一方、意味的にプロファイルされた Theme_i 項“青草（青草）”は前項動詞の卓越項であるためそのまま保留され、(36a,c) (15II) により、使役主役割 Cause を指定される。この過程を (37) に示す。

- (36) The descriptive conditions for c-role assignment:
 a. The argument in the subject position receives the c-role Cause from a resultative compound only if it does not receive a theta role from V_{res}.
 b. The argument in the object position receives the c-role Affectee from a resultative compound if it receives a theta role at least from V_{res}.

- c. Theta roles can be assigned contrary to the thematic hierarchy if the arguments receiving them are assigned c-roles in ways compatible with the causative hierarchy.

Li (1995)

(15) 使役役割融合二原則：

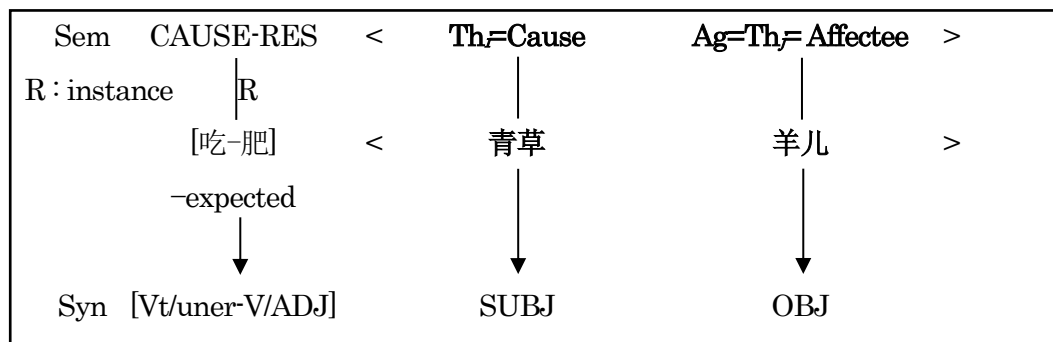
- I. 被使役主役割と融合可能なのは、結果述語のフレームでプロファイルされる変化主体でなければならず、かつ、それは前項述語の意味フレームに結びつく参与者でなければならない。
- II. 使役主役割と融合可能な参与者は、被使役主役割と融合可能な参与者と同一物であってはならず、かつ、両者は前項述語の意味フレームにおいて具体的・抽象的な非対称関係で結びつかなければならない。

(楊 2013 : 97)

(37) $V_{吃} \langle Ag\ Th_i \rangle + V_{肥} \langle Th_j \rangle \rightarrow V_{caus} 吃 - V_{res} 肥 \langle Th_i [Cau] Ag = Th_j [Aff] \rangle$
 (羊儿吃青草) (羊儿肥) (青草吃肥了羊儿)

構文表示を(38)に示す。原因事象には意図性があるが結果事象には意図性がないため、[-expected]で示す。形式的に<目的語指向型>に類似しており、典型的な使役構文に見えるが、前項動詞の動作主 Agent と動作対象 Theme_i が逆転して、それぞれ構文の目的語と主語位置に現れる。

(38) 結果構文+“吃肥”



ここで一つ注意すべきは、ここまで見てきた[S-VR-O]という語順をとる結果構文において、動補構造の内項はすべて動詞の内項でもあるため、典型的な目的語と考えられる(39)。それに対して、<倒置原因型>の項構造の融合過程において、動補構造の内項“羊儿”は前項動詞の外項 (Agent) と結果述語の内項 (Theme) が融合したものであり、

動補構造の外項“青草”は結果述語の内項であるため、いずれも典型的な目的語と典型的な主語ではない。

- (39) a. 小王推倒了大树。(王さんは大木を押し倒した)

$$V \text{ 推} \langle \text{Ag} \quad \text{Th}_i \rangle + V \text{ 倒} \langle \text{Th}_j \rangle \rightarrow V_{\text{caus}} \text{ 推} \cdot V_{\text{res}} \text{ 倒} \langle \text{Ag}[\text{Cau}] \quad \text{Th}_i[\text{Aff}] \rangle$$
(小王推大树) (大树倒了) (小王推倒了大树)
- b. 他学会了高尔夫。(彼がゴルフを学んでできるようになった)

$$V \text{ 学} \langle \text{Ag} \quad \text{Th}_i \rangle + V \text{ 会} \langle \text{Exp} \quad \text{Th}_j \rangle$$
(他学高尔夫) (他会高尔夫)

$$\rightarrow V_{\text{caus}} \text{ 学} \cdot V_{\text{res}} \text{ 会} \langle \text{Ag}=\text{Exp}[\text{Aff}] \quad \text{Th}_i=\text{Th}_j[\text{Und}] \rangle$$
(他学会了高尔夫)
- c. 饥荒饿死了很多人。(飢饉で多くの人が飢え死にした)

$$V \text{ 饿} \langle \langle \text{Cau} \rangle \quad \text{Th}_i \rangle + V \text{ 死} \langle \text{Th}_j \rangle$$
(〈饥荒〉很多人饿) (很多人死)

$$\rightarrow V_{\text{caus}} \text{ 饿} \cdot V_{\text{res}} \text{ 死} \langle \text{Caus} [\text{Cau}] \quad \text{Th}_i=\text{Th}_j[\text{Aff}] \rangle$$
(饥荒饿死了很多人)

<倒置原因型>の主語と目的語が典型性を欠くことから、通常他動詞文なら問題のない操作の適用が難しいことがある。(1c)の文に、目的語を“把”の後に置く“把”構文に変換するとやや不自然になる¹。また“被”構文による受動化は不可能である。

- (40) 青草 把 羊儿 吃-肥 了。
qīng cǎo bǎ yáng ér chī-féi le
青草 BA 羊 食べる-肥える PERF
「青草は羊に食べられて、羊を肥えらせた。」

- (41) * 羊儿 被 青草 吃-肥 了。
yáng ér bèi qīng cǎo chī-féi le
羊 BEI 青草 食べる-肥える PERF
「羊は青草を食べて、肥えられた。」

¹ 容認度はそれほど高くないかもしれないが、非文でもないので、“羊儿 (羊)”が(1c)の目的語である根拠の一つにはなる。

6.4.3 非能格・他動詞タイプから<倒置原因型>への拡張プロセス

ここでは、情報構造と統語構造のインタフェースの観点から、非能格・他動詞タイプ<主語指向型>から<倒置原因型>への拡張の可能性を考察しよう。

まず、非能格・他動詞タイプ<主語指向型>における主語である人間は、動作主であると同時に状態変化の主体でもあり、焦点化される可能性を充分持つ。

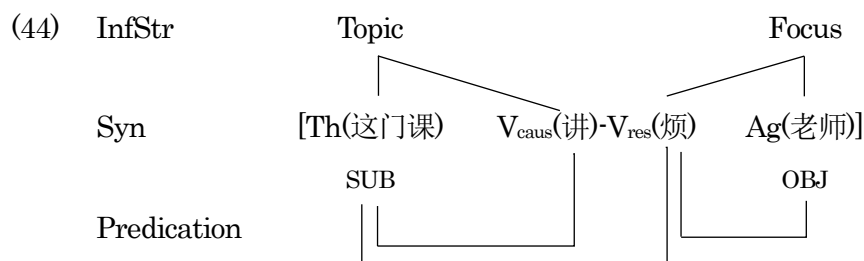
真性の目的語を伴う他動詞タイプにおいて、目的語は二項動詞の結果補語に選択される項であるため、結果事象の一部となり、連動して焦点化されて文末に生起する。ただし、(42a)において、「ゴルフを学ぶ」をメトニミックに拡張して「ゴルフ」を使役行為者とするのは難しい。さらに、結果補語が“会（通曉する）”“懂（分かる）”“赢（勝つ）”などの場合、目的語が表す情報は状態変化を経験させるほどの使役力はないと考えられる。例えば、また「ゴルフを学ぶこと」が自然に「ゴルフを習得すること」に結びつくわけでもないし、かといって驚くべき結果状態でもない。「彼の話聞くこと」と「理解すること」、「サッカー試合をすること」と「勝つこと」も同様に、「彼の話」「サッカーの試合」を原因項と解釈するのは困難である。そのため、(42a)を(42b)のように<倒置原因型>へ拡張すると容認度は非常に低くなる。

- (42) a. 他 学-会 了 高尔夫。
 tā xué-huì le gāo ěr fū
 彼 学ぶ-通曉する PERF ゴルフ
 「彼はゴルフを学んで、できるようになった。」
- b. *高尔夫 学-会 了 他。
 gāo ěr fū xué-huì le tā
 ゴルフ 学ぶ-通曉する PERF 彼
 「ゴルフを学んで、彼はできるようになった。」

一方、(43)のように、「授業をすること」をメトニミックに拡張して「授業」を使役行為者とするのは容易である。特に結果述語が“烦（うんざりする）”“膩（飽きる）”のような動詞の場合、同じことを続ければ飽きて嫌になることは容易に想像がつき、常識的に自然な推論となる。そのため、被動者項の“这门课”が主題化されて文頭位置に生起し、原因項となることが可能となる。一方、状態変化の主体“老师”は焦点となり、文末の強勢位置に実現し、(43b)の<倒置原因型>へと拡張される。

- (43) a. 老师 讲-烦 了 这门课。
 lǎo shī jiǎng-fán le zhè mén kè
 先生 教える-うんざりする PERF この-CL-授業
 「先生はこの授業をしすぎてうんざりした。」
- b. 这门课 讲-烦 了 老师。
 zhè mén kè jiǎng-fán le lǎo shī
 この-CL-授業 教える-うんざりする PERF 先生
 「この授業をしすぎて先生はうんざりした。」

真性の目的語が原因項となる＜倒置原因型＞の情報構造と統語構造を以下に示す。



次に、短い目的語を伴う非能格・他動詞タイプは、結果状態は動詞に含意され、因果事象は緊密に結ばれている。(45) の文において、単音節名詞目的語“酒”は統語形式が極めて簡単であり、前項動詞が取れる最も自然な目的語として、結果を引き起こす動作「飲む」に含意される意味要素と考えられる。特定の指示対象を持たず、主題としても、使役の原因項としても力不足であり、直接＜倒置原因型＞へと拡張することはできない。ただし (45c) のように、名詞句に指示詞などの具体的意味情報を付けくわえ、原因として使役力を持たせれば＜倒置原因型＞への拡張は可能である。

- (45) a. 他 喝-醉 了 酒。
 tā hē-zuì le jiǔ
 彼 飲む-酔っ払う PERF 酒
 「彼は酒を飲んで酔っ払った。」
- b. *酒 喝-醉 了 他。
 jiǔ hē-zuì le tā
 酒 飲む-酔う PERF 彼
 「酒を飲んで彼は酔っ払った。」

- c. 三杯茅台酒 喝-醉 了 他。
 sān bēi máo tái jiǔ hē-zuì le tā
 三-CL-茅台酒 飲む-酔う PERF 彼
 「三杯の茅台酒を飲んで彼は酔っ払った。」

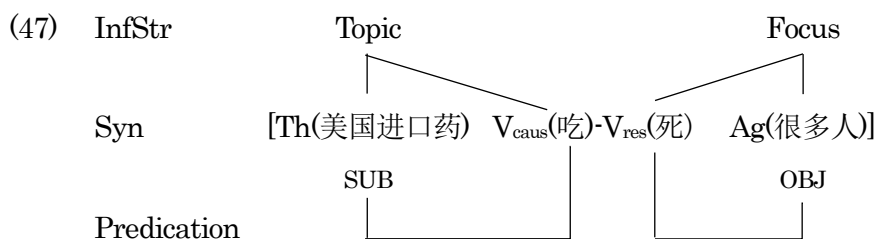
長い目的語を伴う非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞の場合、前項動詞だけでは結果状態をもたらすには力が足りず、目的語を借りて使役力を強化している。そのため、原因事象において、長い目的語は結果状態を引き起こすのに必要不可欠な組成部分となり、かつ大量な情報を持つため、焦点となりうる。一方、長い目的語は指示対象が明確な名詞句であり、主題としても十分機能しうるため、結果事象が表す状態変化の主体“他（彼）”が焦点化される場合、長い目的語が背景化されて文頭に現れることも可能である。その結果、＜倒置原因型＞となる。

- (46) a. 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。
 tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
 「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」
- b. 那条 泥泞不堪的 乡间石子路 走-累 了 他。
 nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù zǒu-lèi le tā
 あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道 歩く-疲れる PERF 彼
 「あの泥まみれの田舎の砂利道を歩いて彼は疲れた。」

さらに、結果述語が動詞から推測しにくく、意外な結果を表す場合、結果事象全体が焦点となり、被動者の脱焦点化がさらに発生しやすい。それが、前述した＜倒置原因型＞は意外な結果の場合において容認度が上がる理由である。

- (30) d. 美国进口药 吃-死 了 很多人。
 měi guó jìn kǒu yào chī-sǐ le hěn duō rén
 アメリカから輸入した薬 食べる-死ぬ PERF たくさんの人
 「アメリカから輸入した薬を食べてたくさんの人が死んだ。」

目的語が原因項となる＜倒置原因型＞の情報構造と統語構造を以下に示す。



構文拡張の動機づけのひとつに、既存の構文形式で目標の意味情報を表すことができない場合、統語的または意味的に拡張することによって叙述範囲を広げることがある。S-V-R-O が目的語の状態変化を焦点として表すプロトタイプの結果複合動詞から、主語の状態変化を表す構文へさらに、主語の状態変化を焦点として表す構文へと順に拡張していく過程は、意味と形式の組み合わせを広げていく過程なのである。

6.4.4 目的語以外の原因項を持つ非能格＜原因型＞の拡張過程

ここまでは、前項動詞が他動詞または目的語を伴うことが可能な非能格自動詞の場合を考察した。このとき、(48) のように、文頭の名詞句は必ず前項動詞の目的語である。

- (48) a. 大鱼大肉 吃-胖 了 他。 (=22d)
- dà yú dà ròu chī-pàng le tā
- 魚や肉などのごちそう 食べる-太る PERF 彼
- 「魚や肉などのごちそうを食べて彼は太った。」
- b. *太太的好厨艺 吃-胖 了 他。
- tài tai de hǎo chú yì chī-pàng le tā
- 奥さんの料理の腕 食べる-太る PERF 彼
- 「奥さんの料理の腕は彼を食べさせ太らせた。」

しかし、前章で見たように、非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞には、(49) のような通常目的語をとらない純粋な非能格自動詞が前項動詞となる動補構造がある。

- (49) a. 张三 跑-累 了。
- zhāng sān pǎo-lèi le
- 張三 走る-疲れる PERF
- 「張三は走って疲れた。」

b. 李四 笑-瘋 了。
 lǐ sì xiào-fēng le
 李四 笑う-錯乱する PERF
 「李四は頭がおかしくなるほど笑った。」

c. 孩子 哭-醒 了。
 hái zi kū-xǐng le
 子供 泣く-目覚める PERF
 「子どもは泣いて目覚めた。」

それらの場合も (50) に示すように<原因型>へ拡張することが可能であるが、拡張される文は、前項動詞の目的語が原因項となる<倒置原因型>より、二つの動詞と項構造上の関係を持たない名詞句が原因項となる<単純原因型>に近く、<基礎行為>と何らかの関連をもつ名詞句が主語となっている。

(50) a. 这双鞋 跑-累 了 妈妈。 (岸本・于 2014)
 zhè shuāng xié pǎo-lèi le mā ma
 この-CL-靴 走る-疲れる PERF 母
 「この靴が原因で母は走り疲れた。」

b. 炎热的天气 跑-累 了 妈妈。 (岸本・于 2014)
 yán rè de tiān qì pǎo-lèi le mā ma
 熱い天気 走る-疲れる PERF 母
 「熱い天気が原因で母は走り疲れた。」

c. 这个好消息 笑-瘋 了 李四。
 zhè gè hǎo xiāo xī xiào-fēng le lǐ sì
 この-CL-いい知らせ 笑う-気が狂う PERF 李四
 「このいい知らせが原因で李四は頭がおかしくなるほど笑った。」

d. 一个噩梦 哭-醒 了 孩子。 (施 2007)
 yī gè è mèng kū-xǐng le hái zi
 一-CL-悪夢 泣く-目覚める PERF 子供
 「悪夢が原因で子供は泣いて目覚めた。」

これらの文において、「母が疲れる」「李四の気が狂う」「子どもが目覚める」という結果状態を生じさせるのは、それぞれ「母が走る」「李四が笑う」「子どもが泣く」という活

動自体というより、「母が履いている靴」「母が走るときの熱い天気」「李四を笑わせるいい知らせ」「子どもを泣かせる悪夢」という、前項動詞の意味フレームに想定される周辺の要素である。

ただし、＜単純原因型＞とは違い、これらの周辺要素はすべて＜基礎行為＞の暗黙の原因というわけではない。「いい知らせ」「悪夢」は「笑う」「泣く」の原因とは考えられるが、「靴」や「天気」は「母が走る」ことを引き起こすわけではなく、あくまで動作事象に伴う道具や環境である。

一つ注意すべきは、前述したように、動詞“跑（走る）”は（51a）に示すようにPATHなどの意味役割を持つ非典型的な目的語をとることも可能であるという点である。その目的語は非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞の文末に生起すると容認度が下がる（51b）が、主語と位置を交換して＜倒置原因型＞に見える構文へ拡張する（51c）ことが可能である。しかし、このような目的語も前述した「靴」「天気」と同じく前項動詞の意味フレームにある様々な周辺要素の中の一つに過ぎず、目的語位置に生起可能なため＜倒置原因型＞に見えるが、（50）の文と同じ性質の構文である。

- (51) a. 张三 跑 马拉松。
 zhāng sān pǎo mǎ lā sōng
 張三 走る マラソン
 「張三はマラソンを走る。」
- b. ? 张三 跑-累 了 马拉松。
 zhāng sān pǎo-lèi le mǎ lā sōng
 張三 走る-疲れる PERF マラソン
 「張三はマラソンを走って疲れた。」
- c. 马拉松 跑-累 了 张三。
 mǎ lā sōng pǎo-lèi le zhāng sān
 マラソン 走る-疲れる PERF 張三
 「マラソンを走ることが張三を疲れさせた。」

これらの＜原因型＞は前項動詞がすべて非能格自動詞であるため、拡張前の＜主語指向型＞の段階において、いずれも前項動詞が表す＜基礎行為＞自体が使役行為者の非能格タイプと考えられる。ただし、＜原因型＞へと拡張する際に、典型的な目的語が存在しないため、一部は＜基礎行為＞における目的語以外の卓越性の高い組成要素を取り上げて＜基礎行為＞自体を換喩し、非典型的＜倒置原因型＞へと拡張する（50a,b,51c）。施（2007）、呉（2013）などが提案する原因事象にある意味成分はほぼすべて事象自体を換

喩することが可能であるという論述に従えば、この操作は可能である。ほかの一部は、＜基礎行為＞の暗黙の原因を取り上げ、原因項として実現し、非典型的＜単純原因型＞へと拡張する。

しかし、この二種類の非典型的＜原因型＞のいずれにおいても、前項動詞が動作を表す非能格自動詞であるため、6.4.2 節に述べた通り、項構造融合の過程に Agent と Theme が融合するという項役割のズレがある。その結果、このような文、特に (50c,d) の非典型的＜単純原因型＞は、本当の＜単純原因型＞(52) に比べると、＜倒置原因型＞と同じぐらいに容認度が下がっている。

(52) a. 这句话 吓-疯 了 李四。

zhè jù huà xià-fēng le lǐ sì

この-CL-言葉 恐がる-気が狂う PERF 李四

「この言葉は李四を気が狂うほど怖がらせた。」

b. 噩梦 惊-醒 了 小宝宝。

è mèng jīng-xǐng le xiǎo bǎo bao

悪夢 驚く-目覚める PERF 赤ちゃん

「悪夢は赤ちゃんを驚かせて目覚めさせた。」

なお、このような非典型的＜原因型＞はごく一部の非能格自動詞に限られるため、ここでは＜倒置原因型＞における例外として深く追究しないことにする。ただし、これらの例外も、本章で検討した二種類の＜原因型＞への拡張メカニズムは、思った以上に高い生産性を持つことを示唆している。

6.5 本章のまとめ

本章は前項動詞の性質・統語特徴および使役行為者の違いにより、＜原因型＞を＜単純原因型＞と＜倒置原因型＞という二種類に分類し、それぞれ非対格タイプと非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞から異なるプロセスを経て拡張されると提案した。

＜単純原因型＞について、主な結論は以下の通りである。

1. 因果事象は緊密に結ばれ、百科知識や常識から予想される結果のみを表すため、動補構造の組合せの選択は限られる。
2. 原因項は前項動詞の意味フレームにある暗黙項を統語的に実現させただけであり、二つの事象を引き起こすに十分な使役力と情報量を持たなければならない。原因項の実現により、非対格タイプ＜主語指向型＞から継承された二重使役の意味構造が統語的に実現される。

3. 情報構造からみると、原因項は原因事象の背景として主語位置に生起し、変化対象は前景化されて文末に現れる。
4. 英語にも対応する拡張があり、結果構文としての拡張程度は特に高くない。

＜倒置原因型＞に関する主な結論は以下の通りである。

1. 許容される因果事象の組合せは比較的に広いが、結果状態が前項動詞に含意されず、緩い因果関係で結ばれる事象関係のほうが容認度は高い。つまり、一種の意外な結果を表す傾向がある。
2. 原因項は必ず指示的名詞句であり、具体的であればあるほど容認度が上がるが、意志性を持つ人間は排除される。また、結果状態が常識的に容易に推論できるか、または逆に常識からとは逆の驚くべき結果状態になるとき、原因として認められる。
3. 使役行為者は二次的メトニミック拡張を経て＜基礎行為＞の自体から＜基礎行為＞を換喩する行為対象へと拡張される。行為対象が選ばれるのは、動作主が背景化され、重要度が下がるためである。
4. 英語には対応する拡張がなく、拡張程度がかなり高い。なお、項構造の融合において本来は卓越性の高い動作主が目的語に、低い被動者が主語になるという、意味役割と文法関係のズレがあり、全体的な容認度はやや低い。
5. 情報構造からみると、意外な結果を表す結果述語の主語が焦点化されて文末位置に実現し、具体的な意味を持つ目的語が背景化されて文頭に現れたもので、非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞からの拡張といえることができる。

第7章 二種類の動詞コピー構文

7.1 はじめに

本章では、結果を表す動詞コピー構文と過分義を表す動詞コピー構文について考察する。結論として、両者は構文形式が同じように見えるが、実際は異なる構文から異なるメカニズムを経て拡張されるものであることを提案する。

7.2 結果を表す動詞コピー構文

動詞コピー構文というのは、(1) のように同じ動詞が二回繰り返して出現し、前方の動詞が目的語を伴い、後方の動詞が補語を伴う構文形式である。動詞コピー構文は中国語において使用頻度が高く、補語の類型によっていくつかの下位分類があり、それぞれ形式的に異なっている。本章で取り扱いたいのは、先に考察した結果構文と共通して動補構造を用いる (1f) のような、[S-V₁-O₁-V₂R(-O₂)] という語順をとる動詞コピー構文である。ここでは結果を表す動詞コピー構文と呼ぶことにする。

- (1) a. 他 弹 钢琴 弹 了 一个小时。 <時間補語>
tā tán gāng qín tán le yī gè xiǎo shí
彼 弾く ピアノ 弾く PERF 一時間
「彼はピアノを一時間弾いた。」
- b. 他 去 北京 去 过 三次。 <動量補語>
tā qù běi jīng qù guò sān cì
彼 行く 北京 行く ASP 三回
「彼は北京に三回行った。」
- c. 他 弹 钢琴 弹 得 很 累。 <“得”を伴う結果補語>
tā tán gāng qín tán de hěn lèi
彼 弾く ピアノ 弾く de とても 疲れている
「彼はピアノを弾いてとても疲れている。」
- d. 他 擦 桌子 擦 得 很 干净。 <様態補語>
tā cā zhuō zi cā de hěn gān jìng
彼 拭く テーブル 拭く de とても きれい
「彼はテーブルをととてもきれいに拭いた。」

- e. 他 追 小明 追 到 操场 上。(施 2010) <場所補語>
 tā zhuī xiǎo míng zhuī dào cāo chǎng shàng
 彼 追う 明君 追う 至る 運動場 …のところ
 「彼は明君を運動場まで追った。」
- f. 小王 洗 衣服 洗-湿 了 袖子。 <動補構造>
 xiǎo wáng xǐ yī fu xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗う 服 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは服を洗って（着ている服の）袖を濡らした。」

7.2.1 結果を表す動詞コピー構文の意味特徴

結果を表す動詞コピー構文の典型的な例文を以下に挙げる。

- (2) a. 宝玉 想 晴雯 想-呆 了。(施 2010)
 bǎo yù xiǎng qíng wén xiǎng-dāi le
 人名 懐かしく思う 人名 懐かしく思う-ぼんやり PERF
 「宝玉は晴雯を懐かしく思っ**て**ぼんやりした。」
- b. 张三 吃 面包 吃-胖 了。
 zhāng sān chī miàn bāo chī-pàng le
 張さん 食べる パン 食べる-太る PERF
 「張三はパンを食べて太った。」
- c. 妈妈 看 小说 看-哭 了。
 mā ma kàn xiǎo shuō kàn-kū le
 母 読む 小説 読む-泣く PERF
 「母は小説を読んで泣いた。」
- d. 老师 讲 这门课 讲-烦 了。
 lǎo shī jiǎng zhè mén kè jiǎng-fán le
 先生 教える この-CL-授業 教える-うんざりする PERF
 「先生はこの授業をしすぎてうんざりした」
- e. 小王 切 那个 很 硬的 南瓜 切-钝 了 菜刀。
 xiǎo wáng qiē nà gè hěn yìng de nán guā qiē-dùn le cài dāo
 王さん 切る あの とても 硬い かぼちゃ切る-鈍い PERF 包丁
 「王さんはあのとても硬いかぼちゃを切**って**包丁を鈍くした。」

- f. 女朋友 吃 大餐 吃-空 了 他的钱包。
 nǚ péngyǒu chī dà cān chī-kōng le tā de qián bāo
 ガールフレンド 食べる 御馳走 食べる-空っぽ PERF 彼の財布
 「恋人が（高価な）ごちそうを食べて、彼の財布を空っぽにした。」

結果構文と同じように動補構造をとるため、ここではまず結果構文として動詞コピー構文の意味特徴を考察する。

(2) に示すように、繰り返して出現する動補構造の前項動詞は必ず目的語をとる能力を備える他動詞ないし一部の非能格自動詞である。(1f) において、原因事象は V_1 とそれに後続する目的語 O_1 が“小王洗衣服（王さんが服を洗う）”という動作事象であり、結果事象と考えられるのは結果述語 R と文末の目的語 O_2 で表される“袖子湿了（袖が濡れた）”という状態変化事象である。文末に目的語 O_2 を伴わない (2b) の場合、原因事象は“张三吃面包（張三がパンを食べる）”であり、結果事象は結果述語 R が単独で表す“张三胖了（張三が太った）”である。それぞれは第 4 章で考察した特殊なく目的語指向型>III “洗湿”タイプと第 5 章で考察した非能格・他動詞タイプ<主語指向型>の事象構造に一致する。したがって、原因事象には意図性があるが、結果事象には意図性がない。

前項動詞の含意と結果述語の関係、ならびに時間間隔の有無も、同じ動補構造を用いる<目的語指向型>や<主語指向型>の結果構文に一致する。

また、このタイプの統語的特徴からみると、使役行為者は明らかに、 V_1 と O_1 で表される原因事象、つまり<基礎行為>自体である。

そのため、結果を表す動詞コピー構文は従来提案されているように、独立して存在する構文あるいは動補構造が動詞コピー構文に出現するだけの文ではなく、結果構文からさらに拡張された構文であることが想定できる。

楊 (2016) は動詞コピー構文の意味機能には、前項動詞の対象を導入すること、そして背景情報を補充するという 2 点があると主張する。例えば、(2b) の文は“张三吃胖了（張三が食べて太った）”という<主語指向型>結果構文から拡張されたと考えられる。

(2b) に拡張する際に、“面包（パン）”を前項動詞“吃（食べる）”の目的語として導入し、“胖（太る）”という結果事象に対して必要となる情報を明示しているのである。

同じ動詞を二回繰り返して目的語をとるという動詞コピー構文の特殊な形式は、英語にも日本語にも見当たらない。日本語では、「張三はパンを食べて太った」という文は結果構文とは言えない。英語でも、*He ate the bread and made himself fat.* のように、同じ動詞の二回繰り返すためには、必ず複文のマーカー *and* を入れなければならない。動詞コピー構文は中国語結果構文の拡張能力の高さを改めて示唆している。

以下、動詞コピー構文を結果構文の延長線上に捉え、結果構文からの拡張過程を分析する。

7.2.2 結果を表す動詞コピー構文の項構造と拡張過程

(1f) を改めて取り上げて項構造を分析しよう。その文は第4章に考察した以下の文から拡張されてきたと考えられる。

- (3) 小王 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは洗濯して袖を濡らしてしまった。」

第4章に分析した通り、他動詞である前項動詞に選択されているはずの内項が現れないのがこのタイプの特徴である。例文(3)では、“洗(洗う)”の真の目的語“衣服(服)”が抑制されて現れず、“湿(濡れる)”の唯一の項“袖子(袖)”が目的語となっている。抑制される項は意味的に削除されるわけではなく、構文の項として実現することがブロックされるだけである。したがって、前項動詞の内項は抑制されても、動補構造の意味構造には存在していると考えられる。

Agent 項は使役役割の Cause と融合して主語位置をとり、Th_j項は抑制された Th_i項に代わって Affectee と融合して目的語になる。この過程を(4)に示す。

- (4) V 洗<Ag Th_i> + V 湿<Th_j>
 (小王洗衣服) (袖子湿了)
 → V_{caus} 洗-V_{res} 湿<Ag[Cau] ~~Th_i[Und]~~ Th_j[Aff]>
 (小王洗湿了袖子)

前述したように、動補構造“洗湿”の裏には動詞述語文“小王洗衣服(王さんが服を洗う)”が隠れている。そこで、動詞を含めた原因事象全体つまり“小王洗衣服(王さんが服を洗う)”を動補構造の前にコピーすることによって、Th_iを実現することが可能である。(5)で示すように、抑制された Th_iが改めて動詞述語文の目的語として出現する。使役関係は拡張前の結果構文とは変わらないため、使役役割も同様に動補構造の外項と内項に指定する。このような過程を経て派生されたのが動詞コピー構文(1f)である。

- (5) V 洗<Ag Th_i> + V_{caus} 洗-V_{res} 湿<Ag Th_i Th_j> →
 (小王洗衣服) (小王洗湿了袖子)

 修飾
 (小王洗衣服洗湿了袖子)

- (1) f. 小王 洗 衣服 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ yī fu xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗う 服 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは服を洗って（着ている服の）袖を濡らした。」

ここで注意すべきは、実現する Th_i は最初に構文化された動詞述語文の一部であり、先に結果構文に組み込まれた原因事象と同一でなければならないという点である。したがって、(6) に示すように、動詞を別の語に置き換えることはできない。

- (6) a. *小王 刷 衣服 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng shuā yī fu xǐ-shī le xiù zi
 王さん こする 服 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは服をこすって、袖を濡らしてしまった。」
- b. *小王 冲 衣服 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng chōng yī fu xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗い流す服 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは服を水で洗い流して、袖を濡らしてしまった。」

(1f) の動詞コピー構文が表す事象関係は、構造が複雑になっているにもかかわらず、依然として「王さんが服を洗った結果、洗濯物ではない袖が濡れてしまった」であり、

(3) の結果構文とはあまり変わっていない。上述した派生過程からも分かるように、動詞コピー構文は一見動詞述語文と結果構文の単純な連続に見えるが、実際には文の中心は動補構造にあり、前置された動詞述語文は原因事象を明示化するための修飾要素に過ぎない。(7) に示すように、コピーとして左側に再度現れた原因事象には“了”や否定辞がつけられないことから、この点は明らかである。

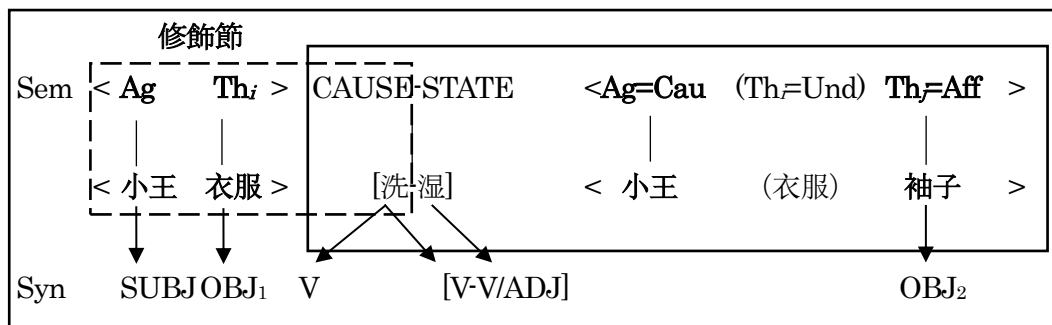
- (7) a. 小王 洗 衣服 洗-湿 了 袖子。 (= (1f))
 xiǎo wáng xǐ yī fu xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗う 服 洗う-濡れる PERF 袖
 「王さんは服を洗って（着ている服の）袖を濡らした。」
- b. *小王 洗 了 衣服 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ le yī fu xǐ-shī le xiù zi
 王さん 洗う PERF 服 洗う-濡れる PERF 袖

- c. 小王 洗 衣服 没 洗-湿 袖子。
 xiǎo wáng xǐ yī fu méi xǐ-shī xiù zi
 王さん 洗う 服 ない 洗う-濡れる 袖
 「王さんは服を洗って、袖を濡らさなかった。」

- d. *小王 没 洗 衣服 洗-湿 袖子。
 xiǎo wáng méi xǐ yī fu xǐ-shī xiù zi
 王さん ない 洗う 服 洗う-濡れる 袖

以上から、(1f) の動詞コピー構文の構造は以下のように表示できる。動補構造に破線のボックスで示す動詞コピーの修飾節が付け加えられ、すべての項が実現している。

(8) 動詞コピー構造+ “洗湿”



7.2.3 動詞コピー構文における動詞不一致の可能性

上で述べたように、動補構造の前に改めて生起する原因事象は先に結果構文に組み込まれた原因事象と同一でなければならないため、動詞を類義語で置き換えることはできない。しかし、次のように、動補構造の前項動詞“洗”を軽動詞“弄、搞、整（する）”で入れ替わることは可能である。一見したところ、前述した規則に違反しているが、このような文はどのように説明できるであろうか。


- (9) a. 小王 洗 衣服 弄-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ yī fu nòng-shī le xiù zi
 王さん 洗う 服 する-濡れる PERF 袖
 「王さんが服を洗っていると、袖が濡れてしまった。」

- b. 小王 洗 衣服 搞-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ yī fu gǎo-shī le xiù zi
 王さん 洗う 服 する-濡れる PERF 袖
 「王さんが服を洗っていると、袖が濡れてしまった。」

- c. 小王 洗 衣服 整-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ yī fu zhěng-shī le xiù zi
 王さん 洗う 服 する-濡れる PERF 袖
 「王さんが服を洗っていると、袖が濡れてしまった。」

一般的に「軽動詞 (light verb)」というのは、具体的な語彙意味を持たずに統語機能のみを担う動詞のことである。例えば、英語における *have a rest* の *have*、*take a walk* の *take* (朱 2015) など、日本語における「勉強をする」「旅行をする」の「する」(Miyamoto 1999)、また中国語における“搞研究 (研究をする)”の“搞 (する)”、“做解释 (解釈をする)”の“做 (する)”、“打埋伏 (待ち伏せをする)”の“打 (する)” (朱 2015) などは代表的な軽動詞である。中国語の軽動詞は数多くあり、基本的な意味や文法機能によっていくつかの種類に分けられる。ただし、抽象的な *DO* の意味を持つ軽動詞の中で、複合動詞の構成要素になりやすい“弄”“搞”“整”を含む文 (9) のみが (1f) のパラフレーズとして用いられる。三つの文はほぼ同じ意味を持つため、ここでは、(9a) の“弄湿”文を取り上げ、その拡張過程について二つの仮説を立て、(1f) の“洗湿”コピー構文と対照しながら検証していく。

まず考えられるのが、“弄湿 (する-濡れる)”文は“洗湿 (洗う-濡れる)”文のただの言い換えであり、“洗湿 (洗う-濡れる)”文と同じような拡張過程を持つという仮説である。つまり、“弄湿 (する-濡れる)”文も“洗湿 (洗う-濡れる)”文と同様に、最初は原因事象“洗 (洗う)”と結果事象“湿 (濡れる)”の融合を経て動補構造を作るのであるが、その融合過程において、語用論的な理由 (例えば実際の動作を明示する必要がない、など) により、動詞“洗 (洗う)”の意味を漠然と表し、その代わりに、具体的な意味を持たず、ただ働きかけを示すだけの動詞“弄 (する)”を用いれば、“小王弄湿了袖子”となる。ただし、“弄 (する)”は動作だけを表すため、Ag 項のみをとり、Th_iはとれない。ここで動詞の意味情報を明示したければ、元々ある原因事象“洗 (洗う)”の項構造を改めてコピーによって表出させて、“洗衣服弄湿了袖子”という文が派生される。この過程を (10) に示す。

- (10) a. V洗<Ag Th_i> -----> V弄<Ag>
 (小王洗衣服) 言い換え (小王弄)
- b.
- 

コピ-
- c. V洗<Ag Th_i> + V弄·V湿<Ag Th_j>
 (小王洗衣服) (小王弄湿了袖子)
 → ○ V洗<Ag Th_i> → ○ V弄 · V湿<Ag Th_j>
 修飾
 (小王洗衣服弄湿了袖子)

このように“弄湿（する-濡れる）”文を“洗湿（洗う-濡れる）”文の単なる言い換えであるとする、両者の意味は等価でなければいけない。しかし実際のところ、両者の意味には若干の違いがある。“洗湿（洗う-濡れる）”文では、原因事象は動補構造の前項動詞“洗（洗う）”で示され、結果状態の“湿（濡れる）”に直接結びつくから、結果事象の直接の原因でなければならない。すなわち、「袖が濡れる」という事象は必ず「洗う」という動作によって直接引き起こされたもので、二つの事象は連続して生じなければならない。

一方、“弄湿（する→濡れる）”文で原因事象となるのは、“湿（濡れる）”と結合した“弄（する）”ではなく、“洗衣服（服を洗う）”であり、“湿（濡れる）”との因果関係は間接的でもよく、二つの事象の間に時間差があっても構わない。洗う動作だけではなく、洗濯に関連することであれば「袖が濡れる」原因となれるのである。たとえば、洗濯を開始する前に盥に水を注ぐとき、蛇口の水が袖を濡らしてしまうという状況、または洗濯が終って服を干すときに、服が濡れていたために袖口が濡れてしまうという状況も“弄湿”文によって表すことができる。直接因果関係に限られる“洗湿”文ではそのような解釈ができない。したがって、“弄湿（する→濡れる）”文は“洗湿（洗う→濡れる）”文のただの言い換えという仮説は成り立たない。

同様の違いは以下のペアにも見られる。

- (11) a. 他 蒸 鸡蛋 蒸-坏 了 两口锅。
tā zhēng jī dàn zhēng-huài le liǎng kǒu guō
彼 蒸す 卵 蒸す-壊れる PERF 二-CL-鍋
「彼は蒸し卵を作っているときに（蒸すことが原因で）蒸し器を二つ蒸し壊した。」

- b. 他 蒸 鸡蛋 弄-坏 了 两口锅。
tā zhēng jī dàn nòng-huài le liǎng kǒu guō

彼 蒸す 卵 する-壊れる PERF 二-CL-鍋

「彼が蒸し卵を作っていると、(何かの事故を起こして) 蒸し器が二つ壊れた。」

- (12) a. 她 跳舞 跳-破 了 鞋。

tā tiào wǔ tiào-pò le xié

彼女 ダンス 踊る-破れる PERF 靴

「彼女はダンスをしているときに、(ダンスをすることが原因で) 靴を潰してしまった。」

- b. 她 跳舞 弄-破 了 鞋。

tā tiào wǔ nòng-pò le xié

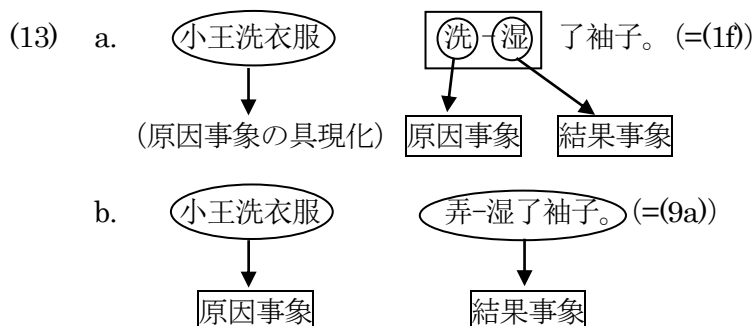
彼女 ダンス する-破れる PERF 靴

「彼女がダンスをしていると、(何らかの事情で) 靴が潰れてしまった。」

(11a) では、蒸し器が壊れる直接な原因は蒸すという行為であるため、蒸し器が壊れるのは蒸している最中でなければならない。一方 (11b) では、蒸し器が壊れる原因は蒸し卵を作る過程に関連していればよい。たとえば、慌てて熱い蒸し器を取ろうとして、不注意で蒸し器を落としてしまい、壊してしまったという状況も想起できる。

(12a) で最も自然な解釈は、ダンスを続けているうちに靴の底が段々すり減っていき、最後に破れてしまうというものである。それに対して、舞踏会で踊っているときに、たまたま何かを踏んでしまい、穴が空いたというような状況であれば (12b) がふさわしい。

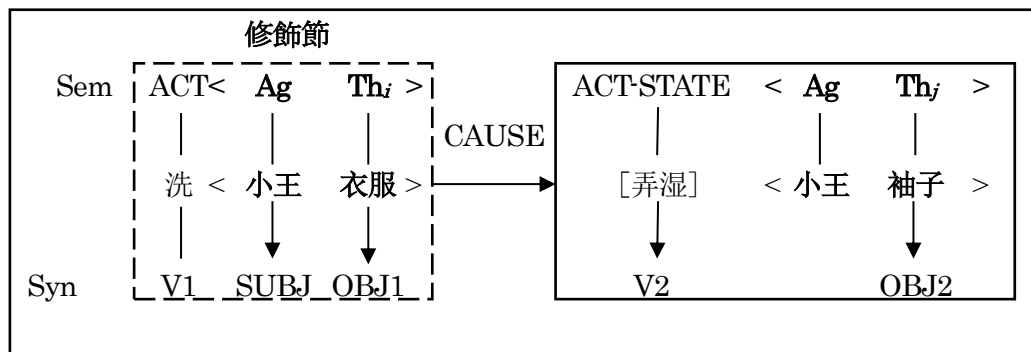
こうした違いは以下のように表示することができよう。



複合動詞“洗濯（洗う-濡れる）”においては、二つの事象は緊密に結びついており、因果関係は直接的かつ連続的である。それに対して“洗衣服（服を洗う）”と“弄湿（する-濡れる）”はそれぞれ独立した事象であり、間接的・非連続的關係であっても構わない。

そこで、次の第二の仮説を提案する。“弄湿（する-濡れる）”文は動詞コピー構文とは異なる過程を経て形成される。つまり、動詞をコピーする代わりに、外から新たな修飾節を導入して原因事象を作る連動文（serial verb construction）の一種である。（26）に示すように、まず、他動詞形態素（V）“弄”が結果補語“湿”と結合し、“小王弄湿了袖子（王さんが服を濡らした）”という他動詞（Vt）文を作る。そして、“弄湿（する-濡れる）”の原因を提示するため、“他洗衣服（彼が服を洗う）”という動詞述語文を他動詞文に付け加え、“洗衣服弄湿了袖子（服を洗って袖を濡らした）”という文が完成する。さらに、“*小王洗了衣服弄湿了袖子”のように先行する動詞に“了”をつけることができないことから、動詞コピー文と同じく、“洗衣服弄湿了袖子（服を洗って袖を濡らした）”においても、“洗衣服（服を洗う）”は修飾節であることが分かる。ただし、動詞コピー構文の修飾節は原因事象を明示する機能を持つのに対して、“弄湿（する-濡れる）”文の修飾節はそれ自体が原因事象であり、結果事象である他動詞文を修飾している。（9b, c）の“搞湿（する-濡れる）”文と“整湿（する-濡れる）”文も同様に分析できる。このタイプの構文構造を（15）のように表示する。

(15) 連動文+ “小王洗衣服弄（搞/整）湿了袖子”



7.2.4. 結果構文が動詞コピー構文に拡張する条件

7.2.2 節では、“洗湿” タイプの<目的語指向型>結果構文から動詞コピー構文への拡張を考察した。以下、典型的な目的語指向型と主語指向型結果構文の動詞コピー構文への拡張の可能性について考察する。

まず、典型的な目的語指向型として、例文（16）を取り上げて分析する。第4章で分析したとおり、この文では、前項動詞と結果補語の間に共通する Theme 項があり、項構造の融合に伴ってひとつが抑制され、残りのひとつが目的語位置に生起する。（1f）に倣って、抑制された Th_iを動詞コピーによって再び実現させると、（17a）のような非文になる。しかも、重複している意味情報“大树”を削除しても、（17b）で示すとおり依然として容認度は非常に低い。プロトタイプの結果構文はすでに全ての項が実現しており、動詞コピー構文へ拡張しても、新しい情報が付け加わることがないためである。

- (16) a. 小王 推-倒 了 大树。
 xiǎo wáng tuī-dǎo le dàshù
 王さん 押す-倒れる PERF 大木
 「王さんは大木を押し倒した。」

- b. V 推<Ag Th_i> + V 倒<Th_j> → V_{caus} 推-V_{res} 倒<Ag Th_i Th_j>

- (17) a. * 小王 推 大树 推-倒 了 大树。
 xiǎo wáng tuī dà shù tuī -dǎo le dà shù
 王さん 押す 大木 押す-倒す PERF 大木
- b. * 小王 推 大树 推-倒 了。
 xiǎo wáng tuī dà shù tuī -dǎo le
 王さん 押す 大木 押す-倒す PERF

また、プロトタイプの結果構文から拡張された無生物主語の＜目的語指向型＞と強い結果構文もすべての項が実現しているため、“哭走”タイプは前項動詞が目的語をとれないため、(18) に示すとおり、いずれも動詞コピー構文への拡張が通常許されない。

- (18) a. *大风 吹 树枝 吹-折 了。 (施 2005)
 dà fēng chuī shù zhī chuī-shé le
 大風 吹く 木の枝 吹く-折れる PERF
 「大風が木の枝を吹き折った。」
- b. ?? 他 穿 那双鞋 穿-破 了。
 tā chuān nà shuāng xié chuānpò le
 彼 履く あの-CL-靴 履く-破れる PERF
 「彼はその靴を履き、その靴が破れた。(→彼はその靴を履きつぶした。)」
- c. *黛玉 哭 哭-走 了 很多 客人。 (Li 1990)
 dài yù kū kū-zǒu le hěn duō kè rén
 黛玉 泣く 泣く-帰る PERF たくさんの 客
 「黛玉が泣いたために、多くのお客さんが帰ってしまった。」

次に、＜主語指向型＞結果構文を考察する。前項動詞は目的語をとる動詞に限られるため、非対格タイプは排除される。(19) のように、前項動詞が非能格自動詞である場合、前項動詞と結果補語それぞれ項をひとつしかとらず、かつ、二つの動詞の項は同一物を指し、融合して主語になり、目的語は現れない。しかし、(20a) のように、一部の非能格自動詞も場所 (Location) や量 (Measure) を目的語としてとることが可能なので、その目的語をコピーして動補構造の前に置けば、動詞コピー構文に拡張することができる。

- (19) a. 小王 跑-累 了。
 xiǎo wáng pǎo -lèi le
 王さん 走る-疲れる PERF
 「王さんは走って疲れた。」
- b. V 跑<Ag_i> + V 累<Th_i> → V_{caus} 跑-V_{res} 累<Ag=Th_i>
 (小王跑) (小王累) (小王跑累了)

- (20) a. 小王 跑 {操场/八百米}。
 xiǎo wáng pǎo cāochǎng/bā bǎi mǐ
 王さん 走る グラウンド／八百メートル
 「王さんは {グラウンド／八百メートル} を走った。」
- b. 小王 跑 {操场/八百米} 跑累 了。
 xiǎo wáng pǎo cāochǎng/bā bǎi mǐ pǎo lèi le
 王さん 走る グラウンド／八百メートル 走る-疲れる PERF
 「王さんは {グラウンド／八百メートル} を走って疲れた。」
- c. V 跑<Ag_i Loc/M> + V_{caus} 跑-V_{res} 累<Ag=Th_i>
 (小王跑操场/八百米) (小王跑累了)
 → V 跑<Ag_i Loc/M> V_{caus}-V_{res} 跑累<Ag=Th_i>
 (小王跑操场/八百米跑累了)

最後に、前項動詞が他動詞の＜主語指向型＞結果構文を取り上げる。このタイプの結果構文の特徴は、他動詞の目的語が現れないことである。ただし、例によって、動詞コピー構文と組み合わせることにより、目的語を出現させることができる。

- (21) a. 小王 吃-胖 了 (*汉堡包)。
 xiǎo wáng chī pàng le (hàn bǎo bāo)
 王さん 食べる-太る PERF ハンバーガー。
 「王さんは (ハンバーガーを) 食べて太った。」
- b. 小王 吃 汉堡包 吃-胖 了。
 xiǎo wáng chī hàn bǎo bāo chī pàng le
 王さん 食べる ハンバーガー 食べる-太る PERF
 「王さんはハンバーガーを食べて太った。」

以上から分かるように、前項動詞の目的語が現れない“洗湿”タイプの＜目的語指向型＞、および目的語を伴うことが可能な非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞の結果構文は動詞コピー構文に拡張できる。いずれも結果構文だけでは目的語をとれないため、動詞コピー構文を用いて目的語を表出させているのである。この事実から、動詞コピー構文は結果構文では抑制された目的語を表出させるために用いられる構文であることを、改めて明らかにした。

7.3 過分義を表す動詞コピー構文

前述したとおり、前項動詞の目的語がすでに実現している場合、“洗湿”タイプ以外の<目的語指向型>結果構文は動詞コピー構文へ拡張できない。ところが、(22)のように、(21b)と同じ構造([S-V₁-O₁-V₂R])であるにもかかわらず、動詞コピー構文が排除されない場合がある。

- (22) a. 她 炒 菜 炒-咸 了。
tā chǎo cài chǎo xián le
彼女 炒める 料理 炒める-塩っぽい PERF
直訳「彼女が料理をしょっぱすぎる味に作った。」
意訳「彼女が料理を作ったが、しょっぱすぎた。」
- b. 他 挖 坑 挖-浅 了。
tā wā kēng wā qiǎn le
彼 掘る 穴 掘る-浅い PERF
直訳「彼が穴を浅すぎる深さに掘った。」
意訳「彼が穴を掘ったが、浅すぎだった。」

(彭 2011 : 85, 訳文は筆者)

これらは一般的に「過分義」を持つ動補構造から派生されるコピー形式であるとされている。馬・陸 (1997)、彭 (2011) などはこれを「偏離義」と呼び、形容詞が表す性質が話者の期待または想定から外れるという意味を表すと述べる。

現代汉语中有些动结式可以表达所谓“偏离”的意义，即形容词所述的性质超过了说话者的期望或原定的设想。

(現代中国語には、いわゆる「偏離」の意味を表す動補構造があり、形容詞が表す性質は話者の期待または最初の想定を上回っている。)

(彭 2011 : 51, 訳文は筆者)

また、岩崎 (1990) は過分義について、形容詞が表す状態は好ましくない方向にずれていると述べ、日本語では「～すぎる」と表現されることが多いと指摘する。望月・申 (2011) も過分義が「～すぎる」に対応すると述べ、“买贵 (買った結果、値段が高過ぎる)”、“吃多 (食べ過ぎる)”、“来早 (来るのが早過ぎる)”、“起晚 (起きるのが遅過ぎる)”などの例を挙げている。

しかし先行研究の多くは、過分義の意味については考察しているものの、過分義を持つ動補構造文及びそこから拡張される動詞コピー構文の形式と意味についての分析は不十分である。彭（2011）は過分義動補構造文の統語的特徴を一般化して、文構造を解明しようとしているが、その前提として挙げられる統語的特徴について不適切な指摘が多いうえ、分析もはつきりしない点が多く、その結論も支持しがたい。

本論文では、彭（2011）を踏まえ、典型的な結果構文および結果を表す動詞コピー構文と対照しながら、過分義動補構造文と過分義動詞コピー構文の意味特徴を検討し、一連の拡張過程を考察する。主に解明したいのは、過分義動補構造文と結果構文、そして過分義を表す動詞コピー構文と結果を表す動詞コピー構文は、それぞれ意味上および構造上にどのような違いがあるかという問題である。

なお、過分義動補構造文の成立には、主動詞および形容詞の種類に制限があるなど、語彙的な要素も関わっているが、ここでは構文の意味を中心に考察する。

以下、過分義動補構造文をまず考察する。

7.3.1 過分義動補構造文の特徴

過分義動補構造文の典型的な形式として、例文（23）を挙げる。以下、形態・意味・統語の三つの側面から、結果構文と比較しながら考察していく。

- (23) a. 这 房子 盖-小 了。
zhè fáng zi gài xiǎo le
この 家 建てる-小さい PERF
「この家が小さすぎるサイズに建てられた。」
- b. 你 这件 衣服 买-贵 了。
nǐ zhè jiàn yī fu mǎi-guì le
あなた この-CL 服 買う-高い PERF
「あなたはこの服を高く買った。」

（彭 2011 : 51, 訳文は筆者）

まず、形態的な面において、過分義動補構造文は従来[VA 了]動補構造文と呼ばれるように、動補構造は動詞と様態を表す形容詞からなり、文末にはアスペクト助詞（“了”など）がつくのが一般的である。複合動詞の一種である結果構文の補語は非対格自動詞または非対格自動詞の機能を持つ形容詞であるため、過分義動補構造文とは異なる。また、結果構文は必ずしもアスペクトマーカを必要としない。

次に、岩崎（1990）、望月・申（2011）などに指摘されるとおり、過分義動補構造文は形容詞が表す状態は好ましくない方向にずれているという意味を表す。結果構文は「動作

主の働きかけで何かの状態変化をもたらす」という状態変化 (become) の意味を表し、完結性 (telicity) を持つのに対して、過分義動補構造文は非完結的で静的な状態 (state) を表す (彭 2011 : 56)。例えば (24a) において、家を建てている過程の中で家のサイズが小さくなってしまいうけではなく、単純に「建てた家が小さすぎる」という状態 (state) を表している。静的状態であるため、過程 (process) の意味を表すことができず、彭 (2011 : 56) に指摘されるとおり、過分義動補構造文には“慢慢 (徐々に)”という漸次性を表す副詞は入れられない。例文 (24,25) に示すように、前項動詞が過程を表す達成動詞 (accomplishment verb) “盖 (立てる)” “炒 (炒める)” であるにもかかわらず、過分義動補構造文は“慢慢 (徐々に)”とは共起できない。

(24) a. 他 慢慢 盖 了 一栋 房子。
 tā màn màn gài le yī dòng fáng zi
 彼 徐々に 建てる PERF 一-CL 家
 「彼は徐々に一軒の家を建てた。」

b. *这 房子 慢慢 盖-小 了。
 zhè fáng zi màn màn gài xiǎo le
 この 家 徐々に 建てる-小さい PERF
 「#この家は徐々に小さすぎるサイズに建てられた。」

(25) a. 他 慢慢 炒 了 两个 菜。
 tā màn màn chǎo le liǎng-ge cài
 彼 徐々に 炒める PERF 二-CL 料理
 「彼は徐々に二つの料理を作り上げた。」

b. *菜 慢慢 炒-咸 了。
 cài màn màn chǎo-xián le
 料理 徐々に 炒める-しょっぱい PERF
 「#料理は徐々にしょっぱすぎる味に作られた。」

さらに、岩崎 (1990)、Liu (2016) によれば、過分義動補構造文の実質は比較の意味を表す構文である。岩崎 (1990) は過分義が持つ比較義は、動作が行った後に出現すると予想される状態と、実際に出現する状態との比較であり、動作が実行される前の状態 (Liu 2016 がいう initial state) とは無関係であるという。例えば、家を建てる前に、このぐらいの材料を使えばたぶんどぐらいのサイズの家が建てられるかは、予想としてまず話者の心の中にある。そして、実際に出来上がったサイズをその予想と比べると小さか

った、と感ずることが、過分義動補構造文が表す意味である。この比較の基準はあくまで話者の主観的な予測であり、建てる前に存在しない家のサイズと比較するわけではない。この提案に従えば、動作を行う過程は意味的に排除され、「結果の比較」という静的な状態しか表さないこととなり、彭（2011）の主張に一致する。

統語的な面において、彭（2011：57）は両者の相違を三つ挙げている。しかし、反例も少なくないため、それぞれを批判的に検討していく。

第一の相違は、過分義動補構造文には助詞“了”が必要不可欠であるという点である。彭（2011：57）によると、結果構文には（26a）のように動補構造の後ろに“了”をつけなくても構わないが、過分義動補構造文（26b）では“了”が必須であり、“了”がないと、過分の意味も消えるという。

- (26) a. 这件衣服 很 容易 洗-干净。
zhè jiàn yī fu hěn róng yì xǐ gān jìng
この・CL-服 とても しやすい 洗う-きれい
「この服は洗うとすぐきれいになる。」
- b. *这么 漂亮的 衣服 很 容易 买-贵。
zhè me piào liàng de yī fu hěn róng yì mǎi-guì
こんなに 綺麗な 服 とても しやすい 買う-高い
「こんなに綺麗な服は、高い値段で買いがちだ。」

（彭 2011：57-58，訳文は筆者による）

しかし、実際には発生確率を表す“容易（～しやすい）”と組み合わせることによって、“了”のない過分義動補構造文もかなり容認される。中国語母語話者の直感によると、“买贵（買う－高価な）”以外の動補構造、たとえば“挖浅（掘る－浅い）”なども“了”なしで成立可能であるうえに、過分の意味もそのまま残っている。ただし、“了”がない場合には、“容易（～しやすい）”や“常常（常に）”などが必要となる（27）。これは文が表すアスペクトの変換という角度から説明できる。“了”は完了のアスペクトであるため、必ず終点のある事象につける。“容易（～しやすい）”や“常常（常に）”などのような反復の意味を表す副詞をつけると、単一事象の完了性が取り消され、“了”をつける必要も自然になくなる。したがって、過分義動補構造文には常に“了”を伴うという現象の実質は、文の成立にはアスペクトマーカが必要不可欠だからであると説明できる。アスペクトマーカとして、完了を表す場合には一般的に“了”が使われ、未完了の場合にはほかの選択肢もある。

- (27) a. 外行 买 古董 *(常常) 买-贵。
 wài háng mǎi gǔ dòng cháng cháng mǎi-guì
 素人 買う 骨董 常に 買う-高い
 「素人は骨董を買うとき、よく実際より高い値段で買ってしまおう。」
- b. 不 按 图纸 挖 坑 *(容易) 挖-浅。
 bú àn tú zhǐ wā kēng róng yì wā qiǎn
 ない 沿う 設計図 掘る 穴 -しやすい 掘る-浅い
 「設計図を参照せずに穴を掘ると、浅くなってしまいがちだ。」

なお、(23) の“了”が文末のモダリティ助詞ではなく、動詞に付加されたアスペクト助詞であることは、補語が“了”に後続することができることから分かる。

- (23') a. 这 房子 盖-小 了 一圈。
 zhè fáng zi gài xiǎo le yī quān
 この 家 建て-小さい PERF 一回り
 「この家が一回り小さすぎるサイズに建てられた。」
- b. 你 这件 衣服 买-贵 了 一些。
 nǐ zhè jiàn yī fu mǎi-guì le yī xiē
 あなた この-CL 服 買う-高い PERF 少し
 「あなたはこの服を少し高く買った。」

結果構文との二つ目の相違は、プロトタイプの＜目的語指向型＞結果構文が動詞コピーの形式を持っていないのに対し、過分義動補構造文は同じ構造に見えるにもかかわらず、動詞コピー構文への拡張が可能であるという点である。7.2 節で論じたように、動詞コピー構文の拡張動機は項を実現することである。過分義動補構造文では前項動詞の内項がすでに実現しているにもかかわらず、動詞コピー構文へと拡張できるのは、外項を実現するためである。この点について具体的な分析は 7.3.2 節で行う。

- (28) a. *小王 推 大树 推-倒 了 大树。 (= (17a))
 xiǎo wáng tuī dà shù tuī-dǎo le dà shù
 王さん 押す 大木 押す-倒す PERF 大木

b. 他 挖 坑 挖-浅 了。 (= (22b))

tā wā kēng wā qiǎn le

彼 掘る 穴 掘る-浅い PERF

「彼が穴を掘ったが、浅かった。」

結果構文との三つ目の相違として、彭（2011）は、過分義動補構造文において、動作主を主語位置にいれ、叙述対象を目的語位置に移動することは難しく、動作対象を明示する“把”構文への変換もできないと指摘する。Liu（2016）なども過分義構文は主語になるものは必ず Patient 項であると主張する¹。

(29) a. *我 把 这件衣服 买-贵 了。

wǒ bǎ zhè jiàn yī fu mǎi-guì le

私 BA この服 買う-高い PERF

b. *我 买-贵 了 这件衣服。

wǒ mǎi-guì le zhè jiàn yī fu

私 買う-高い PERF この服

(30) a. 我 把 这件衣服 洗-干净 了。

wǒ bǎ zhè jiàn yī fu xǐ-gān jìng le

私 ACC この服 洗う-きれい PERF

「私はこの服をきれいに洗った。」

b. 我 洗-干净 了 这件衣服。

wǒ xǐ-gān jìng le zhè jiàn yī fu

私 洗う-きれい PERF この服

「私はこの服をきれいに洗った。」

しかし、岩崎（1990）によると、“他把衣服做大了（彼は服を作ったが、大きすぎた）”の文は問題なく言える。さらに検索によると、SVO 語順をとる文は確かに数も少なく、容認度も高くないが、“把”構文を用いて目的語を表示することは珍しくはない（31）。

¹ 被動者 Patient は一般的に行為の影響を受けるものであり、過分義の場合には若干不適切であるため、以下では Patient の代わりに動詞の対象 Theme 項と呼ぶ。

- (31) a. ?? 我 买-贵 了 票。
 wǒ mǎi guì le piào
 私 買う-高い PERF チケット
 「私はチケットを高く買った。」
- b. 她 把 毛衣 织-肥 了。
 tā bǎ máo yī zhī féi le
 彼女 BA セーター 編む-大きい PERF
 「彼女はセーターを必要以上に大きく編んだ。」

“把”構文は動詞の内項を強調する機能を持つため、過分義構文から“把”構文まで
 は一種の構文拡張と見なすべきであり、言えるのはおかしくない。しかし、SVO という
 中国語動詞文の最も基本的な形式を持たないという事実から、過分義動補構造文は動詞文
 ではない可能性があり、かつ結果構文とは根本的に性質が違うことが推測される。

以上、過分義動補構造文の特徴を以下にまとめる。

(32) 過分義動補構造文の特徴：

- i. 統語上、動補構造は[V-Adj]の形式をとり、アスペクトマーカ（通常は
 「完了」の“了”）を伴うことが多い。動作主（Agent）が現れずに動作対
 象（Theme）が主語となる。
- ii. [V-Adj]は動的变化ではなく、予想された理想値から外れた静的状態を表す。
- iii. 動詞コピー構文や“把”構文に拡張することによって動作主を表出する。

これらの特徴に基づき、本論文は、過分義動補構造文の性質が動詞文ではなく形容詞
 文であることを提案する。次節は、形容詞文としての過分義動補構造文の形成過程を分析
 していく。

7.3.2 過分義動補構造文の構文意味および形成過程

Goldberg（1995）によれば、構文は一つ一つ独立して存在するものではなく、意味的
 かつ統語的に関連性をもっている。以下、形式的に最も単純な形容詞文から、過分義動補
 構造文までの拡張過程を考察し、後者が持つ「比較」・「過分」の意味の由来を解明してい
 く。

7.3.2.1 形容詞比較文[S-A]

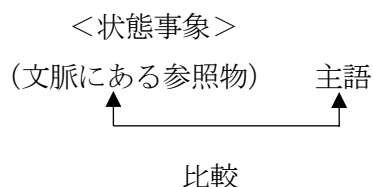
まずは形式的に最もシンプルな形容詞 [S-A] 文を考察しよう。朱（1956）によると、中国語の形容詞は単独で述語となると、比較対照の意味を持つ。例えば（33）の例文は、それぞれ主語となる“这个坑（この穴）”“她的头发（彼女の髪）”“这件毛衣（このセーター）”の性質を単に描写するのではなく、ほかのものと比較し、これらの方がより高い程度の特徴を持つことを表している。比較対象となる「ほかのもの」は話し手と聞き手が共有している情報であり、文脈によって補われる。彭（2007）が指摘する通り、ここの“浅”“短”“大”が対応する英訳は *more shallow, shorter, bigger* のような比較級である。形容詞の元の意味を表す場合には、（34）で示すように形容詞の前に“很”“挺”（とても）などの程度副詞をつける必要がある。

- (33) a. 这个 坑 浅。
zhè ge kēng qiǎn
この-CL 穴 浅い
「(ほかの穴と比べると) この穴が浅い。」
- b. 她的 头发 短。
tā de tóu fa duǎn
彼女の 髪 短い
「(ほかの誰かの髪と比べると) 彼女の髪が短い。」
- c. 这件 毛衣 大。
zhè jiàn máo yī dà
この-CL セーター 大きい
「(ほかのセーターと比べると) このセーターが大きい。」
- (34) a. 这个 坑 很/挺 浅。
zhè ge kēng hěn /tǐng qiǎn
この-CL 穴 とても 浅い
「この穴は浅い。」
- b. 她的 头发 很/挺 短。
tā de tóu fa hěn /tǐng duǎn
彼女の 髪 とても 短い
「彼女の髪は短い。」

- c. 这件 毛衣 很/挺 大。
zhè jiàn máo yī hěn /tǐng dà
この-CL セーター とても 大きい
「このセーターは大きい。」

ここでは、(33) のような文を「形容詞比較文」と呼び、一つの構文として扱うことにする。この構文の特徴は主語が定 (definite) 名詞句であり、比較の意味は構文形式からもたらされる。事象構造からみると、比較という単一の状態事象のみを表し、項構造からみると、形容詞の唯一の項 **Theme** が実現している。例文 (33a) の文の事象構造・項構造・構文表示はそれぞれ (35,36,37) に表示する。

(35) 形容詞比較文[S-A]の事象構造



(36) 形容詞比較文[S-A]の項構造

Adj < Theme >

(37) 形容詞比較文[S-A]+“浅”

Sem	COMPARISION	<	Th	>
	浅	<	这个坑	>
	↓		↓	
Syn	A		SUBJ	

7.3.2.2 過分義形容詞文[S-A 了]

(38) のように、形容詞比較文[S-A]に“了”をつけると、新しい構文意味が生じる。[S-A]文の比較の意味は残っているが、参照物は「ほかのもの」から「予想の状態」に変わっている。比較した結果、形容詞が表す状態は好ましくない方向にずれていた、という意味を表す。すなわち、[S-A 了]文も実際には過分義動補構造文と同じように、過分の意味を持っている。ここでは[S-A 了]文の意味から、「過分義形容詞文」と呼ぶことにする。

- (38) a. 这个 坑 浅 了。
 zhè ge kēng qiǎn le
 この-CL 穴 浅い PERF
 「(予想と比べると) この穴は浅すぎた。」
- b. 她的 头发 短 了。
 tā de tóu fa duǎn le
 彼女の 髪 短い PERF
 「(予想と比べると) 彼女の髪は短かすぎた。」
- c. 毛衣 大 了。
 máo yī dà le
 セーター 大きい PERF
 「(予想と比べると) セーターが大きすぎた。」

彭 (2011 : 64-66) によれば、予想状態との比較という意味は形容詞のスケール性によってもたらされる。一般的には、形容詞+“了”は動的变化を表す。例えば、(39)に示すように、閉鎖スケール (closed scale) を持つ形容詞の場合、名詞句は元の状態 (満ちていない) から、形容詞が自ら含意する基準点 (満ちている) へと変化する。その場合、“了”は状態変化の結果、つまり内在的基準の実現を表す。一方、過分義構文に用いられる形容詞はすべて開放スケール (open scale) を持つ形容詞であり、自ら内在的な基準を持たず、文脈から基準を得るしかない。さらに、主語となる名詞句は一般的に物理的な特性が固定していて、自由に変動することができない。そのため、動的事象のマーカー“了”をつけると、「掘りあがった穴のサイズが変わった」という動的变化を表すことはできず、文脈から「話者の予想値」という基準を取得し、「話者の認識」が変わったという主観的な状態変化を表すこととなる。しかし、文脈から「話者の予想値」という基準がもたらされる理由について、彭 (2011) は説明していない。ここでは、[S-A]文と同じく、「予想の状態」という意味は構文に含まれているものとする。

- (39) 瓶子 里 的 水 满 了。
 píng zi lǐ de shuǐ mǎn le
 ビン 中 の 水 満ちる PERF
 「ビンの中の水が満ちている。」 (彭 2011 : 64)

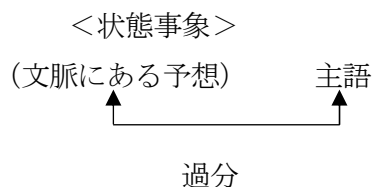
なお、一部の過分義を表す[S-A 了]文は文脈を設定すると、状態変化を表すことも可能である (40)。この場合、形容詞の前に“变 (～になる)”という動詞を入れることが多

く、過分義がなくなる。つまり[S-A 了]という構文形式は過分義と状態変化の意味を兼ねており、形式的に同じように見えるが、実際は二つの異なる構文である。ここでは、過分義を表す[S-A 了]文のみを検討する。

- (40) 昨晚 下 了 一夜 雨，今早 一看，坑 （变） 浅 了。
 zuó wǎn xià le yī yè yǔ jīn zǎo yī kàn kēng (biàn) qiǎn le
 昨夜 降る PERF 一晚中 雨 今朝 見ると 穴 （なる） 浅い PERF
 「昨夜は一晩中雨が降り続き、今朝見ると（穴に水が溜まって）穴が浅くなって
 いた。」

過分義形容詞文の主語は形式的に指示詞を持たなくても、必ず話し手と聞き手が知っている特定の（specific）対象でなければならない。事象構造からみると、[S-A]文と同じように単一事象であるが、比較の対象が異なる（41）。項構造も[S-A]文と同じく形容詞の唯一の項 Theme が実現している（42）が、[S-A]文から比較の意味を受け継ぐほか、新しい「過分」の意味も持つようになっているため、過分の意味は[S-A]文にはない“了”から生じることが明らかである。例文（38a）の構文構造は（43）のように表示できる。

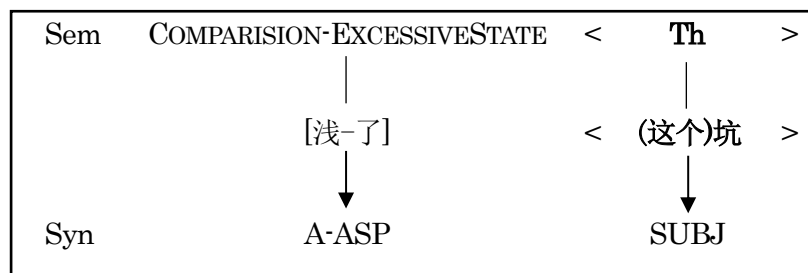
- (41) 過分義形容詞文[S-A 了]の事象構造



- (42) 過分義形容詞文[S-A 了]の項構造

Adj < Theme >

- (43) 過分義形容詞文[A 了]+“浅”



7.3.2.3 過分義動補構造文[VA 了]

過分義形容詞文[S-A 了]に動詞をつけることにより、過分義動補構造文[VA 了]が拡張される。ここで重要なのは、[VA 了]構文は[S-A 了]構文の拡張であるため、引き続き全体的に状態を表し、動詞は背景情報を表すしかなく、[VA 了]構文の意味中心は[S-A 了]構文から受け継いだ「過分」の意味にある。例えば(44)において、掘ることによって穴が徐々に浅くなるという、結果構文のような状態変化の意味は排除され、「掘る前の予想と比べて浅かった」という過分義が唯一の意味解釈となる。

(44) 坑 挖-浅 了。

kēng wā qiǎn le

穴 掘る-浅い PERF

「掘った穴は（予想と比べて）浅すぎた。」

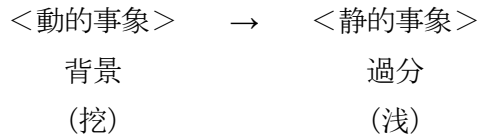
事象構造を見ると、過分義動補構造文は結果構文と同様に複合事象を持っている。結果構文の場合は、前項動詞が表す原因事象と、変化の終点を表す結果事象と結合することにより、一つの完了した事象となる。例えば例文(16a)は、「王さんが大木を押した結果、大木が倒れる状態になった」という複合事象を表す。

一方、(44)の過分義動補構造文が表すのは因果関係ではなく、「掘った穴は予想と比べて浅かった」という意味であるため、文が含む二つの下位事象は「穴を掘った」と「穴が浅かった」である。そして、文末の“了”は二つの事象両方に作用し、「動作の完了」および「理想とは異なる」という二重の意味を持つ。前項事象において、動作だけを表す動詞の“推（押す）”とは違い、動詞“挖（掘る）”はいわゆる作成動詞（creation verb）であり、動作の提示にとどまらず、「掘る動作によって穴が作られた」という成果まで含み、自ら行為の終点を持っている。すなわち、動的意味を表す事象は成果の出現に伴って“挖（掘る）”の段階ですでに完結している。一方、もう一つの下位事象「浅い」は先に完成した動的事象の成果「穴」について、その性質としての静的状態を述べている。前述した通り、この静的状態が過分義動補構造文の意味の中心となっており、完成した動的事象「穴を掘った」は背景化され、後続する発見事象「浅かった」の前提となるため、文全体は形容詞文の性質を持つこととなる。結果構文と過分義の動補構造における事象関係の違いを(45)に示す。

(45) a. 結果構文の事象構造

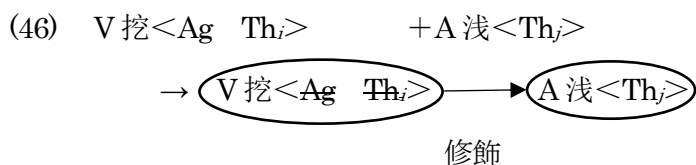
＜先行事象＞	→	＜後続事象＞
原因		結果
（推）		（倒）

b. 過分義動補構造文[VA了]の事象構造

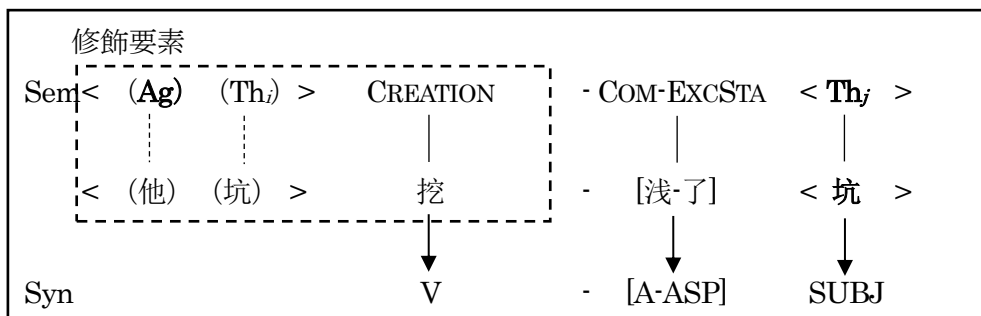


続いて、例文（44）を取り上げ、項構造の角度から過分義動補構造文の形成過程を分析しよう。陆（1990）はこの構文の構造は結果構文と違い、形容詞が先に“了”と結合した後で動詞と結合するため、構造の階層は[V[A了]]となる。しかし、陆（1990）はこのような構造になる理由について言及していない。ここでは、構文拡張の観点から陆（1990）が提案する構造の合理性を検証する。

（44）の文には、過分義形容詞文“坑浅了（穴が浅かった）”が含まれている。しかも、「浅かった」という状態は依然として文の中心であり、形容詞“浅（浅い）”の唯一の項“坑（穴）”（Th_j）は実現しなければならない。一方、動詞“挖（掘る）”は他動詞であり、動作主 Ag（例えば“他（彼）”）と動作対象“坑”（Th_i）という二つの項をとることが可能である。しかし、形容詞文において、穴を掘った動作主は情報として必要ではないため、背景化されて明示されない。一方、Th_iと Th_jは同じ「穴」であるため、情報の卓越性の低い背景事象の項 Th_iがさらに抑制され、Th_jのみが実現する。結果として、動詞“挖（掘る）”の項は一つも実現されず、統語上、修飾要素として完全に背景化されている。したがって、過分義動補構造文は、結果構文のように原因事象と結果事象が直接に組み合わせられて融合するのではなく、過分義形容詞文[A 了]に基づき、背景化された動的事象を付加して形成されるのである。項構造の融合過程は（46）のとおりである。動詞“挖（掘る）”は形容詞“浅（浅い）”と融合せず、修飾要素として形容詞と独立して存在する。構文の意味を（47）に示す。



（47） 過分義動補構造文+“挖浅”



こうして、形容詞比較文[S・A]から、過分義形容詞文[S・A 了]を経て、過分義動補構造文[VA 了]までの拡張経緯を明らかにした。また、[VA 了]文は動詞文に見えるものの、実質は[A 了]文と同様の形容詞文であり、「過分」の意味を持つことも分かった。

ただし、(48) に示す通り、形容詞が表す状態が動詞の表す事象の自然な結果である場合、結果構文と過分義動補構造文とであいまいになる（陸 1990）。

(48) 坑 挖-深 了。

kēng wā shēn le

穴 掘る-深い PERF

「掘った穴は（予想と比べて）深すぎた/穴を深く掘った。」

7.3.3 過分義の動詞コピー構文の特徴及び拡張過程

本節では、過分義動補構造文（44）から拡張された動詞コピー構文（49）を考察する。

(49) 他 挖 坑 挖-浅 了。(=(22b))

tā wā kēng wā qiǎn le

彼 掘る 穴 掘る-浅い PERF

「彼が穴を掘ったが、浅すぎた。」

まずは項構造の角度から分析する。前述した通り、結果構文が動詞コピー構文へ拡張する際、動詞を含めた原因事象全体（例えば“小王洗衣服”）を動補構造の前にコピーすることによって、抑制された目的語（“衣服”）が改めて動詞述語文の目的語として実現する。同様に、過分義を表す動詞コピー構文に拡張する動機付けも、現れていない項を実現させるためである。ただし、結果構文の場合とは違い、(46) から分かるように、過分義動補構造文には抑制される項が二つあり、両方とも背景化される前提事象“挖（掘る）”の項である。

この二つの項のうち、動作主 Ag は背景化によって抑制され、Th_iは形容詞の項 Th_jと重複するために抑制される。先に説明した通り、抑制されるとはいえ、意味的に削除されるわけではないため、動補構造の意味構造には存在している。したがって、改めて文頭に生起するのは、すべての項が実現している動詞“挖（掘る）”を含む動詞述語文“他挖了坑”である。背景事象をコピーして再び実現すると、Ag 項は自然に空所を埋めて再び現れ、再現される Th_iは Th_jと同一（“坑”）であるため、(16) “小王推倒了大树”のようなく目的語指向型＞結果構文の場合と同じく、(50a) のように非文となる。ただし、重複している“坑”を一つ除くと、(50b) のように自然な文となる。除かれた“坑”は Th_iと Th_j

のどちらであるのか、あるいは二つの Th が融合しているのか、このままでは判断できないので、この点は後で戻ることにして、しばらく保留にしておく。

- (50) a. *他 挖 坑 坑 挖-浅 了。
 tā wā kēng kēng wā-qiǎn le
 彼 掘る 穴 穴 掘る-浅い PERF
- b. 他 挖 坑 挖-浅 了。(=(22b))
 tā wā kēng wā-qiǎn le
 彼 掘る 穴 掘る-浅い PERF
 「彼が穴を掘ったが、浅すぎた。」

次に、彭（2011：59）が提案する動詞コピー構文の特徴を再検討する。彭（2011：59）は、結果構文から拡張される動詞コピー構文と過分義を表す動詞コピー構文の特徴について、(51) のように二つの違いがあると指摘する。それぞれの具体例を (52) に示す。

- (51) a. 過分義動詞コピー構文は最初の動詞に“了”をつけることができるが、結果構文の動詞コピー構文においてはつけられない
 b. 過分義動詞コピー構文は前の目的語が特定 (specific) 名詞句であることが可能であるが、結果構文の動詞コピー構文では前の目的語は特定でない方が自然である

- (52) a. 你 挖 了 一个 坑 挖-浅 了。
 nǐ wā le yī ge kēng wā-qiǎn le
 あなた 掘る PERF 一・CL 穴 掘る-浅い PERF
 「あなたが穴を一つ掘ったが、浅かった。」
- b. *他 骑 了 (一/那匹) 马 骑-累 了。
 tā qí le (yī /nà pǐ) mǎ qí-lèi le
 彼 乗る PERF (一/あの・CL) 馬 乗る-疲れる PERF
 「彼は（一匹の/あの）馬に乗って疲れてしまった。」

(彭 2011：59, 訳文は筆者)

- c. 他 骑 马 骑-累 了。
 tā qí mǎ qí-lèi le
 彼 乗る 馬 乗る-疲れる PERF
 「彼は馬に乗って疲れてしまった。」

そこで、前文に挙げた Th_i と Th_j の抑制問題についてももう一度考えてみたい。動詞コピー構文の前半部分の独立性が高いため、前の目的語は前提事象として完全な要素を持つ動詞述語文“他挖了坑”の目的語 Th_i であることがわかる。すなわち、ふたたび文に組み込まれた動詞述語文の二つの項 Ag と Th_i が、動詞コピーによって両方とも実現しているのである。一方、動補構造の方は、項 Th_j が抑制され、過分義だけが残され、補充的なものとなっている。したがって、過分義の動詞コピー構文は、前半部分の動詞述語文が文の中心的部分となり、過分義動補構造文がそれを補足する従属節である。動詞コピーにより、もともと背景化された動的な事象は前景化されて文の主要部分となり、統語上に中心的な地位を占めるようになる。過分義動補構造はそれに意味を補足する従属節となる。

$$\begin{array}{c}
 (53) \quad V \text{ 挖} \langle Ag \quad Th_i \rangle + \textcircled{V \text{ 挖} \langle Ag \quad Th_i \rangle} \longrightarrow \textcircled{A \text{ 浅} \langle Th_j \rangle} \\
 \hspace{15em} \text{修飾} \\
 \rightarrow V \text{ 挖} \langle Ag \quad Th_i \rangle \longleftarrow V \text{ 挖} \langle Ag \quad Th_i \rangle \cdot A \text{ 浅} \langle Th_j \rangle \quad (Th_i = Th_j) \\
 \hspace{15em} \text{補足}
 \end{array}$$

	從屬節			
Sem	< Ag Th_i >	CRE -	COM-EXCSTA	< (Ag) (Th_i) (Th_j) >
	↓ ↓	↓	↓	
	< 他 坑 >	挖 -	[浅-了]	
	↓ ↓	↓ ↘	↓	
Syn	SUBJ OBJ	V V - [A-ASP]		

199

うな結果の意味と過分の意味を両方持つ動補構造文は、動詞コピー構文に拡張することを通じて、多義性を解消することができる。

(55) a. 坑 挖-深 了。(=(48))

kēng wā shēn le

穴 掘る-深い PERF

「掘った穴は（予想と比べて）深すぎた/穴を深く掘った。」

b. 他 挖 坑 挖-深 了。

tā wā kēng wā shēn le

彼 掘る 穴 掘る-深い PERF

「彼が穴を掘ったが、深すぎた。」

以上、構文文法の観点に基づき、過分義動補構造文および動詞コピー構文の特徴を検討した上で、形容詞比較文[S-A]から、過分義形容詞文[S-A 了]・過分義動補構造文[VA 了]を経て、過分義動詞コピー構文までの拡張過程、および四つの構文それぞれの構文意味を考察した。さらに、過分義を持つ[S-A 了]から動詞コピー構文までの拡張動機は、背景となる先行事象の明示、および外項の実現にあることを明らかにした。結果として、過分義動補構造文および動詞コピー構文は、結果構文および結果構文から拡張された動詞コピー構文とは全く違う構文であることが分かった。

過分義動補構造文の実質は形容詞文であり、動詞が[S-A 了]形容詞文を修飾する要素に過ぎない。先行事象は背景化されて前提となり、後続事象が期待から外れた状態を表すため、[背景-過分]という事象関係を持つ。

過分義の動詞コピー構文は前半部分の動詞述語文が主節となり、動補構造がそれを補足する補語節であるため、動補構造が主節となってそれに動詞コピーの修飾節を付け加える結果を表す動詞コピー構文とは明らかに異なる。

7.4 本章のまとめ

本章では、二種類の動詞コピー構文の意味・統語特徴および拡張過程を考察した。

結果を表す動詞コピー構文は結果構文の延長線上に捉えられ、“洗湿”タイプの＜目的語指向型＞と非能格タイプ＜主語指向型＞結果構文において、抑制された目的語を表出させるために用いられる構文であることを明らかにした。

過分義を表す構文について、以下の二つのことを明らかにした。

1. 過分義動補構造文の実質は静的状態を表す形容詞文であり、状態変化を表す結果構文とは違う構文である。

2. 過分義動詞コピー構文は前半部分の動詞述語文が主節となり、動補構造がそれを補足する補語節であるため、動補構造が主節となってそれに動詞コピーの修飾節を付け加える結果を表す動詞コピー構文とは明らかに異なる。

第8章 結論

8.1 各章の概要

本論文は、構文文法理論の枠組で、中国語における各種類の結果構文を構文拡張の視点から体系的に捉え、すべてのタイプに共通する一般性いわゆる家族的類似性と、タイプごとに持つ特殊性、およびその形成の原因を分析してきた。以下、本研究のこれまでの分析を章毎に要約する。

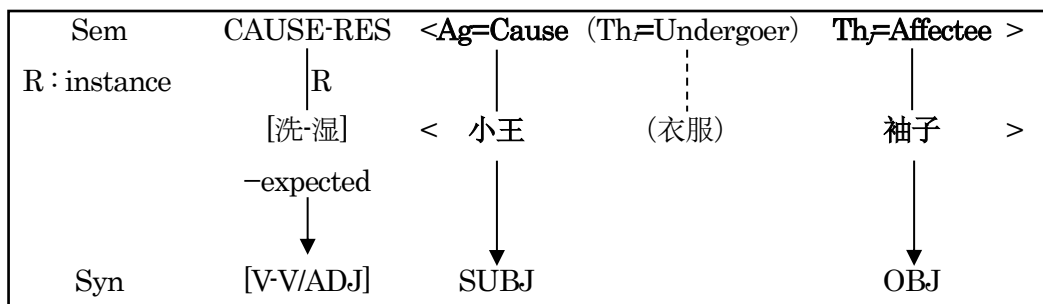
第3章では、先行研究を踏まえ、中国語結果構文を結果述語の意味指向によって<目的語指向型><主語指向型><原因型>という3種類に分類した。

第4章では、形式的に最も典型的な<目的語指向型>を、プロトタイプ・無生物主語タイプ・強いタイプ（“浇扁”・“擦脏”タイプ）・“洗湿”タイプ・“哭走”タイプの五つに分類し、事象の意図性・前項動詞の結果の含意・因果関係の直接性・使役行為者（Causer）の拡張などの面から、タイプごとにその意味特徴と構文拡張を考察した。結論として、プロトタイプの結果構文は意味上も形式上も最も厳しい制限が課せられているが、その制限を一つずつ外していくと、意味のないし形式的に新しい構文タイプに拡張され、結果構文という形式で表せる状況も自然に広がっていくことが分かった。プロトタイプの結果構文と特殊な項構造の融合の仕組みを持つ“洗湿”タイプ・“哭走”タイプそれぞれの構文ボックスを(1,2,3)に示す。また、<目的語指向型>において、すべてのタイプの使役行為者は<基礎行為>の遂行者である。結果状態は前項動詞で表される行為によって意図されたものであるかどうか、また含意されたものであるかどうかによって、つまり因果関係の直接性の強さによって、構文が拡張される。なお、意図とは逆の結果が生じてしまう強いタイプの結果構文（**He wiped the table dirty*）を除き、<目的語指向型>タイプはすべて英語に対応する用法がある。

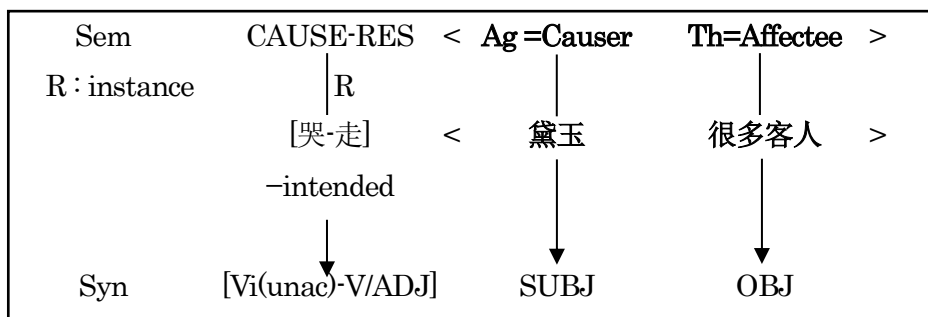
- (1) プロトタイプ：小王推倒了大树。（王さんは大木を押し倒した。）

Sem	CAUSE-RES	< Ag=Cause	Th _i /Th _j =Affectee	>
R: instance	R			
	[推-倒]	< 小王	大树	>
	+intended			
Syn	[Vt-V/ADJ]	SUBJ	OBJ	

- (2) “洗湿”タイプ：小王洗湿了袖子。(王さんは服を洗って袖を濡らした。)



- (3) “哭走”タイプ：黛玉哭走了很多客人。(黛玉が泣いたために、多くのお客さんが帰ってしまった。)



第5章で考察したのは、結果述語が表す状態変化が前項動詞の主語を指向する<主語指向型>である。前項動詞の性質によって「非対格タイプ」と「非能格・他動詞タイプ」に分けて、それぞれの意味・統語特徴と成立条件を考察した。非対格タイプ<主語指向型>の概念構造には、前項動詞が表す状態変化の暗黙の原因項 (implicit cause) という参与者が想定され、非対格タイプの使役行為者となる。非対格タイプ<主語指向型>の概念構造を(4)に示す。このタイプは二つの使役関係 CAUSE を持つが、プロファイルされる使役関係 CAUSE を太字で示す。

- (4) 张三病-倒了。

「張三是病気にかかって倒れた。」

[[EVENT1 (x CAUSE2) [y BECOME [y BE 病]]]

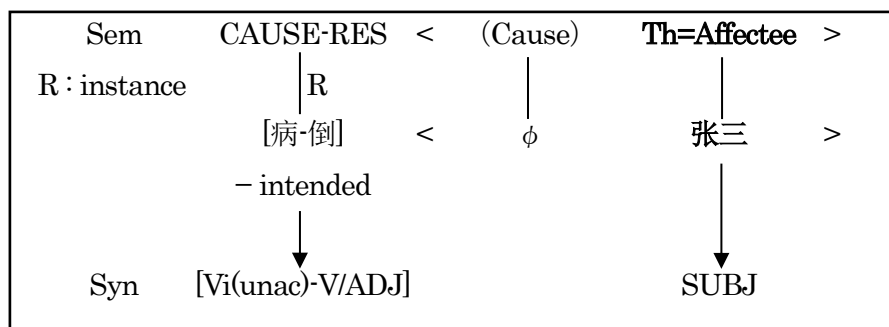
CAUSE1 [EVENT2 y BECOME [y BE 倒]]]

(x= implicit cause, y=张三)

非対格タイプの<主語指向型>における構文表示は以下のとおりである。暗黙の原因項 Cause は卓越性の低い参与者として語彙的にプロファイルされず、暗黙のままである。

結果構文のテンプレートと融合するとき、使役主 Cause は存在しないため、Affectee が唯一の名詞句として主語位置を占める。

- (5) 非対格タイプ：张三病倒了。(張三は病気にかかって倒れた。)



非能格・他動詞タイプ<主語指向型>において、前項動詞は非能格自動詞または非能格自動詞として使われる他動詞であり、主語が何らかの活動や行為を行った結果、主語自身に状態変化が起こるという意味関係を表す。プロトタイプの使役行為者からメトニミックな拡張を経て、潜在的な目的語を含む<基礎行為>自体となり、状態変化を表す結果事象との間が使役関係 CAUSE で結ばれる。CAUSE を二つ持つ非対格タイプとは違い、非能格・他動詞タイプには暗黙の使役主 (implicit cause) が存在しないため、使役関係は一つのみである。

- (6) 张三跑-累了。

「張三は走り疲れた。」

[[_{EVENT1} x ACT(跑) (PATH)] CAUSE [_{EVENT2} y BECOME [y BE 累]]]

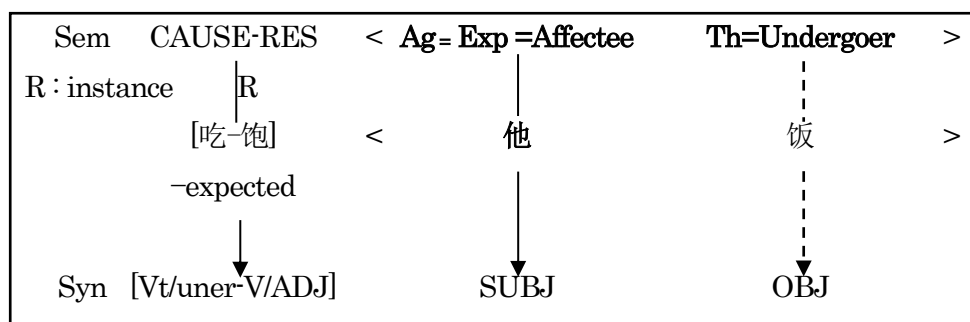
(x=y=张三, PATH =马拉松)

非能格・他動詞タイプは通常目的語を伴わないが、目的語を伴うこともある。その場合の結果補語は心理状態タイプ (“膩, 会”)・身体状態タイプ (“累, 饱”)・感情表出タイプ (“哭, 笑”) という三種類に限られ、目的語となる名詞句も「単独名詞」「複雑名詞句」「単純名詞句」の三種類に分けられる。それぞれの生起能力を考察した結果、心理状態タイプの結果補語と共起しうる目的語はかなり自由であり、感情表出タイプの補語と共起しうる目的語は最も厳しく制限され、身体状態タイプの補語はごく短い目的語か非常に複雑な目的語をとることが分かった。また、<単独名詞-複雑名詞句-単純名詞句>の順で容認度が下がること、さらに形容詞による修飾語句は容認度を上げるのに対して、指示詞は逆に容認度を下げる効果があることを明らかにした。心理状態タイプ結果補語が伴う目的語を真性の目的語と呼び、それに対して短い目的語・長い目的語を虚目的語と呼び、それぞ

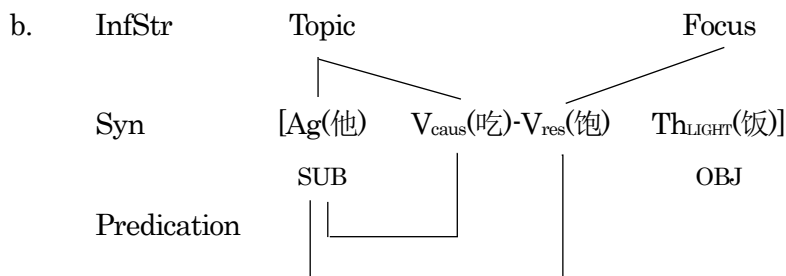
れの目的語を伴う非能格・他動詞タイプの意味・構文構造および目的語の成立の理由について考察した。

真性の目的語の場合、結果補語は主語と目的語の両方をとる二項動詞であるため、目的語は出現が統語的に要求される。短い目的語の特徴は修飾語が一切付かない非指示的な単独名詞であり、身体状態タイプの結果補語と共起できるが、感情表出タイプの結果補語とは共起できない。動補構造に対して、結果述語が表す状態変化は必ず前項動詞に含意され、原因事象と結果事象の間の因果関係が直接的であり、時間間隔はない。一方、短い目的語と異なり、長い目的語は詳細であればあるほど容認度が高くなる。身体状態補語とのみ共起できる短い目的語に対して、長い目的語は身体状態補語のほかに感情表出タイプ補語とも共起できる。ただし、前者のほうが因果事象は比較的緊密に結ばれ、容認度は高い。また、短い目的語の場合と同じく、長い目的語の場合の使役行為者（Causer）は行為対象を含む＜基礎行為＞自体である。両者の構文表示がほぼ同じであるため、ここでは短い目的語を伴う場合の構文ボックスのみを示す。

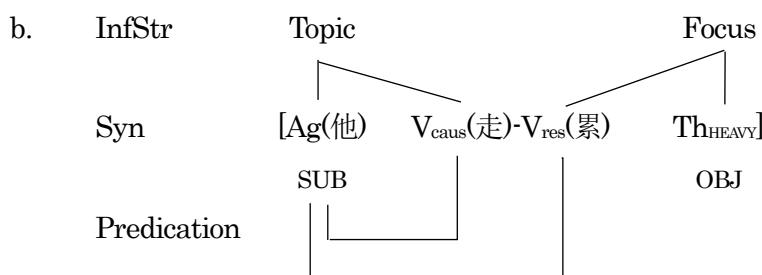
(7) 短い目的語を伴う他動詞タイプ：他吃饱了饭。（彼はご飯を食べて満腹になった。）



実現する義務のない虚目的語があえて出現する理由は、焦点と話題という情報構造の視点から説明できる。焦点（focus）は文の意味において際立つ部分であり、話題（topic）に関わる新情報を表す。中国語では、文法的に許される限り、焦点は一般的に文末に置かれる。短い目的語の場合、文末の目的語（“饭（ご飯）”）は前項動詞のみの項であり、結果事象には参与せず、原因事象の自然な目的語であり、かつ最小限の意味情報しか持たない単独名詞であるため、目的語は背景化され、意味解釈上の重要性が非常に低い存在となり、文の焦点は結果補語“饱（満腹である）”だけとなる。それに対して、長い目的語には正反対の操作が起こる。長い目的語も結果事象に参与しないが、大量の具体的な情報をもつため、背景化されず、焦点になってしまう。それぞれの情報構造を以下に示す。



- (9) a. 他 走-累了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。(=80)
 tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bù kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
 「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」



なお、英語では非対格自動詞を用いる結果構文があるが、(10)のような非能格自動詞を用いる結果構文を許さず、必ず再帰代名詞を用いて他動詞文の形式で表現する。

- (10) 前項動詞が非対格自動詞の場合

- a. The river froze solid. (Goldberg 1995 : 181)

前項動詞が非能格自動詞の場合

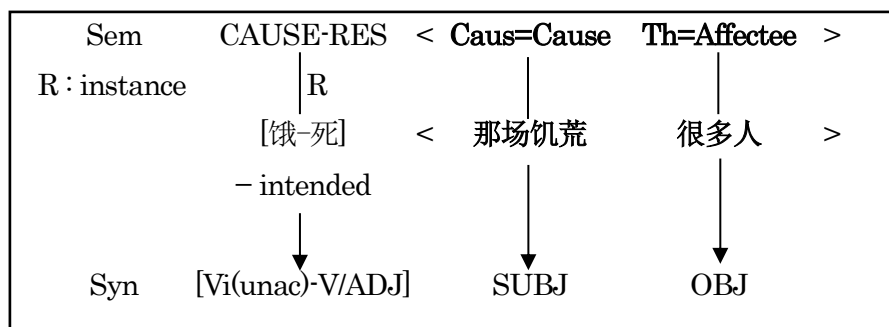
- a. *I danced tired. (Hoekstra 1992)
- b. I danced myself tired.

第6章では、主語に原因（Cause）をとる＜原因型＞結果構文を意味特徴と拡張プロセスの違いに基づいて＜単純原因型＞と＜倒置原因型＞に二分類し、それぞれ非対格タイプと非能格・他動詞タイプの＜主語指向型＞から拡張されると提案し、その意味特徴・統語上の特殊性の原因および拡張メカニズムについて考察した。

＜単純原因型＞の原因項は外から付加されるものではなく、最初から前項動詞の概念構造または意味フレームに存在して意味的に働いている原因（Cause）を構文の力によって統語的に実現させたものである。語用論的に自然な使役力を持たなければならないが、自然である限りにおいてはその選択は自由である。しかし後項動詞も前項動詞の語用論的

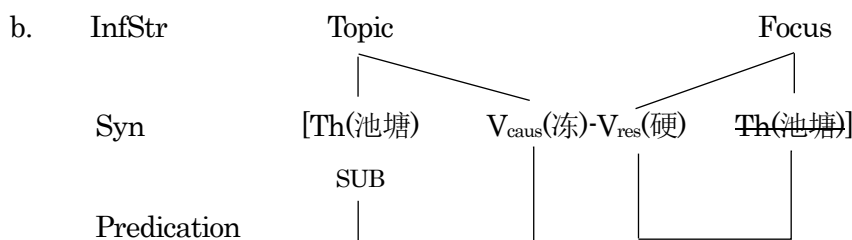
に自然な帰結でなければならないため、動補構造の組合せの選択はそれほど自由ではない。
このタイプは英語にもみられる。構文表示は以下のとおりである。

- (11) 単純原因型：那场饥荒饿死了很多人。（あの飢饉で多くの人が飢え死にした。）

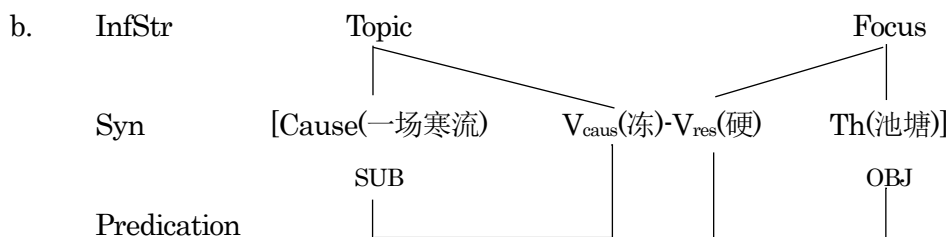


<単純原因型>の拡張過程は情報構造から説明される。元々存在する暗黙の原因項は、意味的かつ統語的な必要に応じて、原因事象の背景として主語位置に生起し、同時に変化対象は前景化されて文末に現れ、焦点となる。このような拡張過程を経て、非対格タイプ<主語指向型>から<単純原因型>が拡張される。

- (12) a. 池塘 冻-硬 了。
chí táng dòng-yìng le
池 凍る-硬い PERF
「池がカチカチに凍った。」

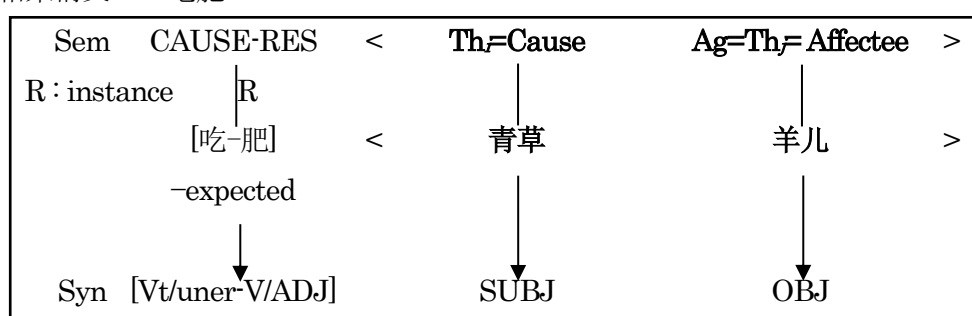


- (13) a. 一场寒流 冻-硬 了 池塘。
yī chǎng hán liú dòng-yìng le chí táng
一-CL-寒波 凍る-カチカチ PERF 池
「寒波が池をカチカチに凍らせた。」



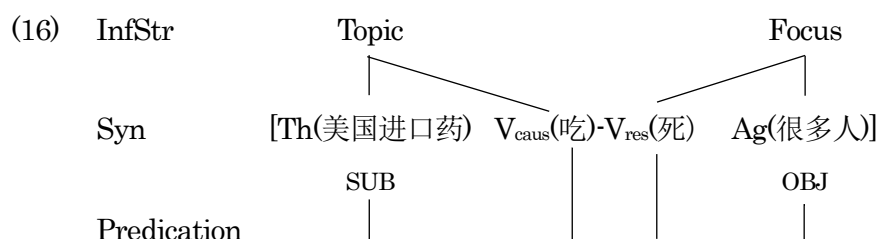
<倒置原因型>では、前項動詞の意味上の主語すなわち動作主が文の目的語位置に生起し、意味上の目的語すなわち動作の対象が文頭に現れ、意味役割と統語位置が逆転しているように見える。前項動詞は他動詞ないし目的語と共起可能な非能格自動詞であり、結果述語は「飽きる」型の心理状態・身体状態または感情表出を表す動詞ないし形容詞である。因果事象の結合関係が緩く、意外な結果の場合において容認度が上がる。<倒置原因型>は独立性の高い二つの事象を強引に結び付けて一つの文で表現することも可能であり、結果構文の範囲をかなり広げている。構文表示を以下に示す。

(14) 結果構文+“吃肥”



単音節名詞目的語は統語形式が極めて単純であり、前項動詞が取る最も自然な目的語として、結果を引き起こす動作に含意される意味要素である。特定の指示対象を持たず、主題としても、使役の原因項としても力不足であり、<倒置原因型>には拡張されない。長い目的語の場合、結果状態を引き起こすのに必要不可欠であり、かつ大量な情報を持つため、焦点となりうる。また、長い目的語は指示対象が明確であり、主題としても十分機能しうるため、状態変化の主体が焦点化される場合、長い目的語が背景化されて文頭に現れ、<倒置原因型>となる。さらに、結果述語が動詞から推測しにくく、意外な結果を表す場合、結果事象全体が焦点となり、被動者の脱焦点化がさらに発生しやすい。

- (15) b. 美国进口药 吃-死 了 很多人。
 měi guó jìn kǒu yào chī-sǐ le hěn duō rén
 アメリカから輸入した薬 食べる-死ぬ PERF たくさんの人
 「アメリカから輸入した薬を食べてたくさんの人が死んだ。」



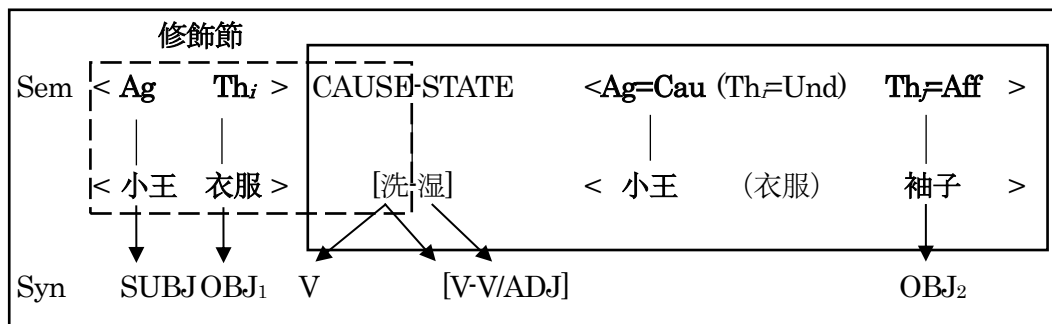
なお、英語には＜単純原因型＞に対応するものはあるが、＜倒置原因型＞はない。

第7章では、結果を表す動詞コピー構文と過分義を表す動詞コピー構文を考察した。両者は構文形式が同じように見えるが、実際には結果構文と過分義を表す動補構造文から異なるメカニズムを経て拡張される異なる構文であることを見た。二種類の動詞コピー構文それぞれの構文表示を以下に示す。(17)の結果を表す動詞コピー構文では、動補構造に破線のボックスで示す動詞コピーの修飾節が付け加えられ、すべての項が実現している。

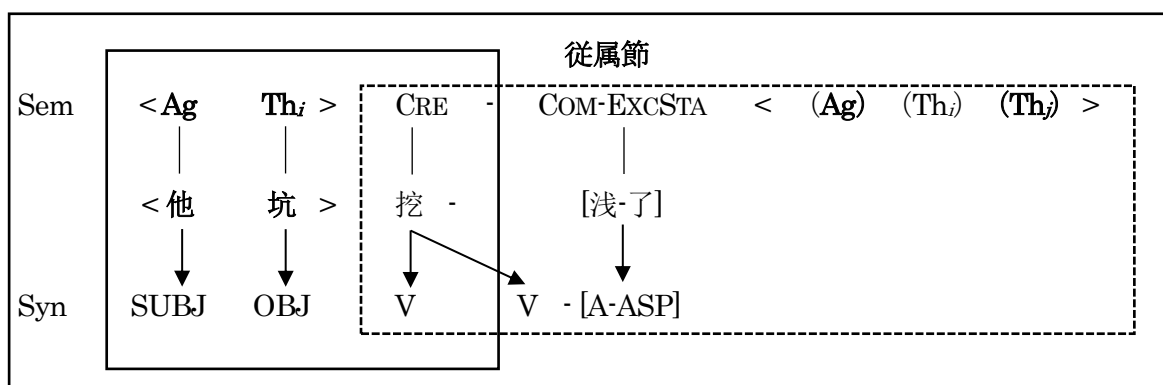
(18)の過分義を表す動詞コピー構文では、前項動詞で表す動的事象が前景化されて文の主要部分となり、統語上中心的な地位を占め、過分義動補構造はそれに意味を補足する従属節となる。

(17) 結果を表す動詞コピー構造

小王洗衣服洗湿了袖子。(王さんは服を洗って袖を濡らした。)



(18) 過分義動詞コピー構文：他挖坑挖浅了。(彼は穴を掘ったが、浅すぎた)



これまでは、三種類の結果構文とそれぞれの下位分類、ならびに結果構文の延長線上に捉えられる動詞コピー構文を考察し、それぞれの意味・統語特徴および成立条件を明らかにした。意味の制限も統語上の制約も最も厳しいプロトタイプの結果構文から、因果事象の緊密性に関する制限条件を一つずつ除くと、特殊なく目的語指向型＞が拡張される。さらに、使役行為者の拡張に伴い、二種類の＜主語指向型＞および二種類の＜原因型＞結

果構文へと順に拡張される。最後に、抑制される項を実現するために、修飾節を用いて構文形式を補うと、動詞コピー構文などへと拡張される。構文拡張により、様々な度合いの因果関係が包容され、結果構文という構文形式の表現力と生産力も大きくなって行く。

また、英語は＜目的語指向型＞と非対格自動詞を用いる＜主語指向型＞およびそこから拡張される＜単純原因型＞を許容するが、拡張程度が最も高い＜倒置原因型＞と複雑な形式を持つ動詞コピー構文は英語において見当たらないため、中国語結果構文の拡張程度の高さが分かる。

8.2 結果構文をめぐる構文ネットワーク

本節では、本論文で考察したすべての構文の間の拡張関係を、結果構文の家族 (family) の中で捉えることを試みる。

Goldberg (1995) によれば、構文は一つ一つ独立して存在するものではなく、「継承関係」によってネットワークを形成する。つまり構文は相互に、意味的にも統語的にも関連性をもち、非対称的な「継承リンク」(inheritance link) が立てられるとする。

Goldberg (1995) は四種類の継承リンクを挙げている。多義性のリンク (Polysemy Links) は同じ構文形式を持つが異なる意味を表すという形態素の多義性を捉えるために仮定されるものである。具体例のリンク (Instance Links) は構文における「特殊例」、例えば英語の *drive crazy* のような、いわゆるイディオムの用法を捉えるために立てられる。メタファー的拡張のリンク (Metaphorical Extension links) は移動使役構文と結果構文のような写像によって関連付けられる構文の関係を捉えるために想定される。

さらに、結果構文内部の拡張関係を捉えるのに最も適切な継承関係として、部分関係のリンク (Subpart Links) がある。部分関係のリンク (Is) とは、ある構文が、独立して存在する別の構文の「真部分」(proper subpart) である場合に想定される (Goldberg 1995 : 78)。たとえば、自動詞結果構文は、このリンクによって結果構文と関連付けられる。自動詞結果構文の意味と統語的特徴が結果構文の意味と統語的特徴の一部分であり、結果構文から「真部分」を継承していると考えるのである。それは、他動詞の構文と自動詞の構文が同じ方法で関係づけられるからである (Goldberg 1995 : 79)。

中国語結果構文において、すべての下位分類はプロトタイプの結果構文から使役関係という真部分を継承していると考えられるため、部分関係のリンク (Is) は一般的に適用される。そして、多義性のリンク (Ip) によって、＜目的語指向型＞結果構文の受動態と過分義動補構造文の間、および結果を表す動詞コピー構文と過分義を表す動詞コピー構文の間の関係が捉えられる。メタファー的拡張のリンク (Im) によって、プロトタイプの結果構文と無生物主語タイプ＜目的語指向型＞の間の擬人化の関係が捉えられる。中国語結果構文における動補構造の組合せにはかなりの自由度があるため、イディオム用法の意味

ではなく、非能格・他動詞タイプ＜主語指向型＞とその中の一部目的語を伴いうる文の間を、具体例のリンク (Ii) を用いて捉えることが可能である。

このように様々な構文の中から一般性を引き出し、継承リンクで関連づけることにより、構文間のネットワークを構築することができる。

なお、継承の一般的特性のうち、ある構文が階層の中で複数の支配構文を継承できるという、多重継承 (Multiple inheritance) の認可という特性がある (Goldberg 1995 : 73)。これに従うと、動詞コピー構文も、部分関係のリンク (Is) によって、動詞述語文と結果構文から構文形式および使役関係という真部分を継承し、形式上の拡張を経て1つの構文として組み立てられる、と考えられる。

最後の結論として、中国結果構文における家族像を捉えるために、動詞述語文・結果構文・動詞コピー構文・過分義構文によって組み立てられた構文ネットワークを、以下のように表示する。一つ注意すべきは、＜目的語指向型＞結果構文の受動態は本論文では1つの独立した構文として認めないため、括弧に入れて破線で＜目的語指向型＞とのつながりを表示する。

8.3 今後の課題

本論文は、中国語における結果構文を体系的かつ包括的に分析した。ただし、一部の例外的現象について、まだ問題が残っている。例えば、第5章で論じたように、非能格・他動詞タイプ<主語指向型>の主語は意志性を持つ人間だけではなく、人間の体の一部となることがある。この現象は非対格タイプの結果構文にも見られるが、これは元々目的語位置にある身体部分が主語になったとみることができる。この構文は<目的語指向型>の“洗湿”タイプにおける目的語が主語の所有物である場合にも類似しており、<目的語指向型>の受動態（Cheng & Huang 1994 が言う pseudo-passive resultatives）なのか、それとも全く別の構文なのか、判断するのは難しい。この問題を今後の課題としたい。

- (20) a. 他的腿 站-酸 了。

tā de tuǐ zhàn-suān le

彼の足 立つ-だるい PERF

「彼の足が立ち疲れてだるくなった。」

- b. 他 站-酸 了 腿。

tā zhàn-suān le tuǐ

彼 立つ-だるい PERF 足

「彼が立ち疲れたせいで足がだるくなった。」

- (21) a. 我的肚子 吃-坏 了。

wǒ de dù zi chī-huài le

私の腹 食べる-壊れる PERF

「私のお腹は食べて壊れた。」

(石村 2011 : 166)

- b. 我 吃-坏 了 肚子。

wǒ chī-huài le dù zi

私 食べる-壊す PERF お腹

「私は（何かを食べて）お腹を壊した。」

- (22) a. 小王 洗-湿 了 袖子。

xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi

王先生 洗う-濡れる PERF 袖

「王先生は洗濯して袖を濡らしてしまった。」

- b. 小王的袖子 洗-湿 了。
 xiǎo wáng de xiù zi xǐ-shī le
 王さんの袖 洗う-濡れる PERF
 「王さんの袖は（洗濯するときに）濡れてしまった。」

- (23) a. 他 跑-烂 了 两双运动鞋。
 tā pǎo-làn le liǎng shuāng yùn dòng xié
 彼 走る-ボロボロ PERF 二-CL-運動靴
 「彼が走るせいで二足の運動靴がボロボロになった。」

- b. 两双运动鞋 跑-烂 了。
 liǎng shuāng yùn dòng xié pǎo-làn le
 二-CL-運動靴 走る-ボロボロ PERF
 「二足の運動靴が走ってボロボロになった。」

参考文献

- Amberber, M., Baker, B., & Harvey, M. (eds.) (2010). *Complex predicates: cross-linguistic perspectives on event structure*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Boas, Hans Christian. (2003). *A constructional approach to resultatives*. CslI Publications.
- Boas, Hans Christian, & Sag, Ivan A. (eds.). (2012). *Sign-based construction grammar*. Stanford: CSLI publications.
- Carrier, Jill., & Randall, Janet. H. (1992). The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistic inquiry*, 173-234.
- Cheng, Lisa. Lai-Shen, & Huang, C.-T. James. (1994). On the argument structure of resultative compounds. Matthew Chen & Ovid Tzeng. (eds.) *In honor of William S-Y. Wang: Interdisciplinary studies on language and language chance*, 187-221.
- Croft, William. (2001). *Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective*. Oxford University Press on Demand.
- Croft, William. (2005). Logical and typological arguments for Radical Construction Grammar. Östman, Jan-Ola & Mirjam Fried. (eds.) *Construction Grammars: Cognitive grounding and theoretical extensions*, 273-314. John Benjamins Publishing.
- Dowty, David. R. (1979). *Word meaning and Montague grammar: The semantics of verbs and times in generative syntax and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Reidel.
- Fang, Ji, & Sells, Peter. (2007). A formal analysis of the verb copy construction in Chinese. Tracy Holloway King & Miriam Butt. (eds.) *Proceedings of the LFG07 Conference*, 198-213. CSLI Publications.
- Fauconnier, Gilles, & Mark Turner. (1996). Blending as a central process of grammar. Adele E. Goldberg (ed.) *Conceptual structure, discourse, and language*, 113-130. Stanford, CA: CSLI.
- Fillmore, Charles J. (1968). The case for case. Emmon Bach & Robert T. Harms. (eds.) *Universals in linguistic theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, & Catherine O'Connor. (1988). Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of Let Alone. *Language* 64, 501-538.
- Fillmore, Charles J, & Paul Kay. (1993). *Construction grammar coursebook: Chapters 1 thru 11*. University of California.

- Ginzburg, Jonathan, & Sag, Ivan A. (2000). *Interrogative Investigations: The Form, Meaning and Use of English Interrogatives*. Stanford: CSLI publications.
- Goldberg, Adele E. (1992). In Support of A Semantic Account of Resultatives. *Center for the Study of Language and Information (CSLI) Technical Report No. 163*, Stanford, CA.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele. E. (2003). Constructions: A new theoretical approach to language. *Trends in cognitive sciences*, 7(5), 219-224.
- Goldberg, Adele. E. (2006). *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford University Press on Demand.
- Goldberg, Adele. E., & Jackendoff, R. (2004). The English resultative as a family of constructions. *Language*, 80(3), 532-568.
- Gundel, Jeanette K. (1999). On Different Kinds of Focus. Bosch & van der Sandt (eds.) *Focus: Linguistic, cognitive, and computational perspectives*, 293-305. Cambridge University Press.
- Halliday, Michael AK. (1967). Notes on transitivity and theme in English: Part 2. *Journal of linguistics*, 3(2), 199-244.
- Her, One-Soon. (2007). Argument-function mismatches in Mandarin resultatives: A lexical mapping account. *Lingua*, 117(1), 221-246.
- Hoekstra, Teun (1992). Aspect and theta theory. Iggy Roca (ed.) *Thematic structure: Its role in grammar*, 145-174.
- Huang, Chu-Ren, & Lin, Fu-Wen. (1992). Composite event structure and complex predicates: a template-based approach to argument selection. *In Proceedings of the Third Annual Meeting of the Formal Linguistics Society of Midamerica*, 90-108.
- Huang, C-T. James (2006). Resultatives and unaccusatives: a parametric view. *Bulletin of the Chinese Linguistic Society of Japan* 253, 1-43.
- Jackendoff, Ray. (1990). *Semantic structures* (Vol. 18). MIT press.
- Lakoff, George. (1987). *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar. Volume II: Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Levin, Beth. and Malka. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity : At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Li, Yafei (1990) On V-V compounds in Chinese. *Natural language & linguistic Theory* 8, 177-207.
- Li, Yafei. (1995). The thematic hierarchy and causativity. *Natural Language & Linguistic Theory*, 13(2), 255-282.
- Liu, Hongyong. (2016). The syntax of the Chinese excessive resultative construction. Jong C. Park, & Jin-Woo Chung. (eds.) *Proceedings of the 30th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 27-34.
- Malka Rappaport-Hovav & Beth Levin (1998). Building Verb Meanings. Miriam Butt & Wilhelm Geuder. (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 97-134. CSLI Publications, Stanford, CA.
- Marantz, Alec. (1984). *On the Nature of Grammatical Relations (Linguistic inquiry monographs, vol. 10)*. MIT Press.
- Michaelis, Laura. A., & Lambrecht, Knud (1996). Toward a construction-based theory of language function: The case of nominal extraposition. *Language* 72, 215-247.
- Michaelis, Laura A. & Ruppenhofer, Josef. (2001). *Beyond Alternations: A Constructional Account of the Applicative Pattern in German*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Michaelis, Laura A. (2010). Sign-based construction grammar. Heine, Bernd & Narrog, Heiko. (Eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, 139-158. Oxford University Press.
- Michaelis, Laura A. (2013). Sign-based construction grammar. Hoffmann, Thomas, & Trousdale, Graeme. (Eds.) *The Oxford handbook of construction grammar*, 133-152. Oxford University Press.
- Miyamoto, Tadao. (1999). *The Light Verb Construction in Japanese: the role of the verbal noun*. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Perlmutter, David M. (1978). Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. In *annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Vol. 4, 157-190.
- Pollard, Carl Jesse & Sag, Ivan. A. (1987). *Information-Based Syntax and Semantics, Volume 1: Fundamentals*. CSLI Lecture Notes No. 13. Stanford: Center for the Study of Language and Information. University of Chicago Press.
- Pollard, Carl Jesse & Sag, Ivan. A. (1994). *Head-driven phrase structure grammar*. University of Chicago Press.
- Preminger, Omer (2008). Argument Externality. Ms. MIT.
- Pustejovsky, James. (1991) The generative lexicon. *Computational linguistics*, 17(4) : 409-441.

- Randall, Janet H. (2010). Syntactically Unexpressed Arguments, Incorporation, and Adjuncts. *Linking*, 89-135. Springer, Dordrecht.
- Rappaport Hovav, Malka, & Levin, Beth. (2001). An event structure account of English resultatives. *Language*, 77(4), 766-797.
- Rochemont, Michael. S. (1986). *Focus in generative grammar (Vol. 4)*. John Benjamins Publishing.
- Rothstein, Susan D. (1992). Case and NP licensing. *Natural Language & Linguistic Theory*, 10(1), 119-139.
- Simpson, Jane (1983) Resultatives. L. Levin, M. Rappaport, & A. Zaenen.(eds.) *Lexical-Functional Grammar*, 143-157. Bloomington Indiana: Indiana University Linguistics Club.
- Snyder, William. (2001). On the nature of syntactic variation: Evidence from complex predicates and complex word-formation. *Language* 77(2), 324-342.
- Sybesma, Rint (2013) *The mandarin VP*. Springer Science & Business Media.
- Tai, James HY. (1984) Verbs and times in Chinese: Vendler's four categories. David Testen, Veena Mishra & Joseph Drogo (eds.) *Papers from the parasession on lexical semantics*, 289-296. Chicago Linguistic Society.
- Vallduví, Enric., & Vilkuna, Maria. (1998). On rheme and kontrast. Peter Culicover & Louise McNally (ed.) *Syntax and semantics 29: The limits of syntax*, 79-108. San Diego, Calif.: Academic Press.
- Van Valin Jr, Robert. D., & LaPolla, Randy. J. (1997). *Syntax: Structure, meaning, and function*. Cambridge University Press.
- Van Valin, R., Jr. (1990). Semantic Parameters of Split Intransitivity. *Language* 66, 221-260.
- Vendler, Zeno. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Cornell: Cornell University Press.
- Vendler, Zeno. (1984). Agency and causation. *Midwest Studies in Philosophy*, 9(1), 371-384.
- Washio, Ryuichi. (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics*, 6(1) : 1-49.
- Wechsler, Stephen. (1997). Resultative predicates and control. Ralph C. Blight & Michelle Moosally (ed.) *Texas linguistic forum vol. 38: The syntax and semantics of predication*, 307-322. Austin: University of Texas Department of Linguistics.
- Williams, Alexander. (2014). Agents in Mandarin and Igbo resultatives. Li, A, Simpson, A & Tsai, W.-T. D. (eds.) *Chinese Syntax in a Cross-Linguistic Perspective*, 270-299. Oxford University Press, Oxford.

- Williams, Alexander. (2015). *Arguments in syntax and semantics*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Yin, Hogling. (2011). The semantic structures of Chinese verb-resultatives. *International Journal of English Linguistics*, 1(2), 126-133.
- 石村広 (2000) 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」『中国語学』247.
- 石村広 (2005) 「類型特徴から見た中国語の受動文」『成城文藝』192 : 142-128.
- 石村広 (2011) 『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から』白帝社.
- 岩崎皇 (1990) 「「動補」文における比較の二類型」『中国語学』237 : 71-81.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版.
- 影山太郎 (2001) 『日英対照・動詞の意味と構文』大修館書店.
- 岸本秀樹・于一楽 (2014) 「中国語結果複合動詞の統語構造」第 37 回中日理論言語学研究会発表原稿.
- 邱林燕 (2017) 『中国語結果構文の統語論的研究』北海道大学博士論文.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー』松柏社.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114 : 37-83.
- 望月圭子 (1990) 「動補動詞の形成」『中国語学』237 : 128-137, 日本中国語学会.
- 中右実・西村義樹 (1998) 『構文と事象構造』研究社.
- 野田大志 (2011) 『現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチ—』名古屋大学博士論文.
- 小野尚之 (2007) 『結果構文研究の新視点』ひつじ書房.
- 小野尚之 (2009) 『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房.
- 太田辰夫 (1958) 『中国語歴史文法』江南書院.
- 斉木美知世 (2004) 「結果表現の類型論」筑波大学現代言語学研究会 (編) 『次世代の言語研究Ⅲ』157-234.
- 申亜敏・望月圭子・Terence SEAH (2007) 「中国語の結果を表す複合動詞の分類と英語・日本語との対照コーパス」望月圭子 (編) 『多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム報告集 5 : 言語教育のための対照言語学研究』.
- 高見健一 (1997) 『機能的統語論』くろしお出版.
- 都築雅子 (2007) 「ゲルマン諸語に見られる派生的結果構文に関する一考察」小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』143-176.
- 楊麗榮 (2014) 「中国語の結果構文の使役化成立条件について」『現代社会文化研究』58 : 109-121.

- 楊明（2008）「動補構造における構文および意味統合」『千葉大学人文社会科学研究』17：91-109.
- 蔡军·张庆文（2017）〈汉语隐性事件性致使句的句法语义研究〉《现代外语》第3期：304-313+437.
- 郭姝慧（2006）〈倒置致使句的类型及其制约条件〉《世界汉语教学》第2期：40-50.
- 郭锐（1995）〈述结式的配价结构和成分的整合〉沈阳，郑定欧（主编）《现代汉语配价语法研究》168-191. 北京大学出版社.
- 何元建·王玲玲（2002）〈论汉语使役句〉《汉语学习》第4期：1-9.
- 李临定（1986）《现代汉语句型》商务印书馆.
- 刘丹青·徐烈炯（1998）〈焦点与背景、话题及汉语“连”字句〉《中国语文》04期：243-252.
- 陆俭明（1990）〈“VA了”述补结构语义分析〉《汉语学习》第1期：1-6.
- 马真·陆俭明（1997）〈形容词作结果补语情况考察（二）〉《汉语学习》第4期：1-18.
- 彭国珍（2011）《结果补语小句理论与现代汉语动结式相关问题研究》浙江大学出版社.
- 彭国珍（2007）〈英汉结果补语结构中补语形容词的差异〉《语言教学与研究》第3期：48-55.
- 任鹰（2001）〈主宾可换位动结式述语结构分析〉《中国语文》第6期：508-518.
- 沈家煊（1999）《不对称和标记论》江西教育出版社.
- 沈家煊（2003）〈现代汉语“动补结构”的类型学考察〉《世界汉语教学》第3期：17-23.
- 沈家煊（2006）〈再谈“有界”与“无界”〉《认知与汉语语法研究》商务印书馆.
- 沈家煊（1999）《不对称和标记论》江西教育出版社.
- 施春宏（2005）〈动结式论元结构的整合过程及相关问题〉《世界汉语教学》第1期：5-21.
- 施春宏（2007）〈动结式致事的类型、语义性质及其语法表现〉《世界汉语教学》第2期：21-39.
- 施春宏（2008）《汉语动结式的句法语义研究》北京语言大学出版社.
- 施春宏（2010）〈动词拷贝句句式构造和句式意义的互动关系〉《中国语文》第335期：99-113.
- 石毓智（2000）〈如何看待语法规则的“例外”——从“吃饱饭”、“喝醉酒”现象谈起〉《汉语学习》第6期：29-30.
- 吴淑琼（2013）〈汉语动结式非典型内在致事的语法转喻研究〉《外语研究》第2期：19-25.
- 王红旗（1995）〈动结式述补结构配价研究〉沈阳，郑定欧（主编）《现代汉语配价语法研究》144-167. 北京大学出版社.
- 王红旗（2001）〈动结式述补结构在把字句和重动句中的分布〉《语文研究》第1期：6-11.
- 熊学亮·魏薇（2014）〈倒置动结式的致使性透视〉《外语教学与研究》第4期：497-507+639.
- 熊仲儒（2003）《现代汉语中的致使句式》北京语言大学博士论文.

- 杨明（2013）《结果构式的认知语义研究——以中日英为例》知识产权出版社.
- 杨明（2016）〈试论把字句的论元融合原则——以动补结构作谓语的把字句为讨论焦点〉第44回中日理論言語学研究会発表原稿.
- 袁毓林（2003）〈句子的焦点结构及其对语义解释的影响〉《当代语言学》04期:323-338+380.
- 张伯江·方梅（1996）《汉语功能语法研究》江西教育出版社.
- 张翼（2009）〈倒置动结式的认知构式研究〉《外国语》第4期:34-42.
- 张翼（2013a）〈汉语致使性动结式复合动词的论元表达——基于构式融合的解释〉《现代外语》第2期:120-126+218.
- 张翼（2013b）〈概念整合理论对于语法问题的解释力:以汉语动结式为例〉《外语与外语教学》第4期:43-47.

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご指導、ご協力をいただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

まず、終始丁寧で温かいご指導を賜りました主指導教員の中本武志准教授（東北大学大学院 国際文化研究科 言語科学研究講座）に、深く感謝申し上げます。中本先生には、修士課程の時から今日に至るまで、研究に臨む基本姿勢とともに、理論言語学研究の難しさと楽しさ、そして何より面白さを教えていただきました。本論文の直接の指導ばかりでなく、様々な学会発表や雑誌投稿などの際にも、貴重な時間を割いて原稿に目を通していただきました。先生に教えていただいた数多くのことは一生の宝物です。

そして、研究全般にわたる多大なご支援とご指導を賜りました小野尚之教授（東北大学大学院 国際文化研究科 言語科学研究講座）、ナロック・ハイコ教授（東北大学大学院 文学研究科 西洋文化学講座）に心より感謝いたします。副指導教員の小野尚之先生には、本研究を進める際の理論的な方向づけおよび妥当性に関して、貴重な御指摘をいただきました。ナロック・ハイコ先生には、常に有益なご助言、ご教示、暖かい励ましの言葉をいただきました。言語科学研究講座の上原聡教授、高橋大厚教授、江藤裕之教授、川平芳夫教授、副島健作准教授には、授業や演習発表の際に常に有益なご指摘やご意見を頂きました。学位論文審査にあたっては、岡田毅教授（東北大学大学院 国際文化研究科 応用言語研究講座）と沈力教授（同志社大学 文化情報学部 文化情報学科）に貴重かつ詳細なご指導とご助言をいただきました。沈力先生には7ページにも渡るアドバイスをくださったことに感激致しております。謹んで感謝申し上げます。

また、張麟声教授（大阪府立大学大学院 人間社会システム科学研究科）には研究を進める方法について貴重なご意見をいただきました。論文執筆中には、望月圭子教授（東京外国語大学大学院 総合国際学研究院）に心温まる励ましのお言葉をいただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

くわえて、様々な面でご協力をいただきました東北大学大学院国際文化研究科言語科学研究講座の皆様には、大変深く感謝しております。特に北京外国語大学から交換留学でいらした鄧超群さん（湖南大学 日本語学部・講師）、同期の佐川郁子さんには、たくさんのことを教えていただきました。終始励ましてくださった友人の袁青さん、陳慧萍さんに、深く感謝いたします。楽しく充実した研究室生活を過ごすことができたのは、皆さんのおかげです。

最後に、いつも変わらぬ優しさで見守り、そして辛抱強く支援してくれた家族には、感謝の言葉ありません。産後の私と娘を至れり尽くせりで世話してくださった義母と実母、元気でそばにいてくれる夫、そして笑顔の可愛い娘に、この論文を捧げます。